

宇佐浜遺跡

発掘調査報告

1989年3月

沖縄県教育委員会

宇佐浜遺跡

発掘調査報告

1989年3月

沖縄県教育委員会

序

沖縄における開発事業は復帰後に激増し、それから16年たった現在でも各地で盛んに行われ、土地に根ざした埋蔵文化財がたびたび破壊の危機に直面してきました。

本報告に収めた「宇佐浜遺跡」は、復帰の年の昭和47年5月15日に国指定史跡になり、保存策が講じられましたが、遺跡が広範囲にわたって存在していることからすべてをカバーすることはできませんでした。指定地外においては道路の拡幅工事や土地改良事業等が計画されてきました。

今回は、これらの諸開発事業に先がけて遺跡の範囲や性格等を明らかにし、保護策を講じることを目的に発掘調査と地表踏査を昭和61年度から昭和63年度にかけて実施しました。その結果、保存良好な遺物包含層と石組構造が検出され、土器や石器などの遺物も多量得られ、遺跡の範囲も明確にすることができました。

また、本遺跡は昭和42年から昭和46年にかけて4次にわたる発掘調査が行われ、沖縄で初めての竪穴住居址の検出（宇佐浜A遺跡）や当時としては数少ない弥生土器の出土（宇佐浜B貝塚）があり、多大な成果をあげることができました。

このように、学術的にも貴重な発見が相次いだ発掘調査の成果をまとめた本書が、文化財の普及・啓蒙はもとより、教育・文化および学術研究の資料として広く活用されることになれば幸いであります。

平成元年3月

沖縄県教育委員会

教育長 高良清敏

例　言

1. この報告書は「宇佐浜遺跡」範囲確認調査の成果を収録したものである。
2. 調査は沖縄県教育委員会が主体となり、1986年5月13日から同年6月6日まで実施した。
3. 「宇佐浜遺跡」は1967年から1971年にかけて4次に亘る発掘調査が実施されており、本遺跡についての理解をより深めるために、このときの出土資料も併せて紹介することにした。
4. 石質、獸・魚骨、貝類の同定は下記の方々による。記して謝意を表する次第である。

石　質　神谷厚昭氏（南風原高等学校教諭）

獸・魚骨　金子浩昌氏（早稲田大学）

貝　類　黒住耐一氏（沖縄生物学公員）

5. 本書に掲載した空中写真および国土基本図・地形図は、国土地理院発行のものを複製した。
6. 本報告書の執筆は第1章第2節に記したとおりである。
7. 出した資料については、すべて沖縄県教育庁文化課の資料室に保管している。

目 次

宇佐浜遺跡発掘調査概報

第1章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制および成果の記録	2
第2章 遺跡の環境	9
第1節 自然的環境	9
第2節 歴史的環境	10
第3章 調査区	11
第1節 宇佐浜A遺跡	11
1 調査の概要	11
2 層序と遺構	13
3 出土遺物	20
第2節 宇佐浜B貝塚	51
1 調査の概要	51
2 層序と遺構	52
3 出土遺物	55
第4章 まとめ	128

宇佐浜遺跡範囲確認調査報告

第1章 調査に至る経緯	187
第1節 調査に至る経緯	187
第2節 調査体制および成果の記録	187
第II章 調査の経過	191
第III章 調査の内容	192
第1節 層序と遺構	192
第2節 出土遺物	197
第IV章 まとめ	255

宇佐浜遺跡発掘調査概報

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

宇佐浜遺跡は、1954年6月17日に山入端清次・多和田真淳の両氏によって発見された。そのいきさつについて、発見者の一人である多和田は、「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『琉球政府文化財要覧、1956年度版』に次のように述べている。「この貝塚は1954年1月琉球大学美術学部山入端君がその付近から無文片二・三個を採集したのが発端で（此は海拔50米にある遺物包含層で宇佐浜式、面網第一式を出土する。）同年6月18日筆者らにより確認され、更に筆者により発見された海岸砂丘地、田地にある（川田原式土器を出土する）貝塚を含めての総称である。」とした。

発見当時は、海岸砂丘に立地する貝塚と丘陵上の遺跡を総称して、宇佐浜貝塚と呼ばれていたようである。しかし、発掘調査に入る時点では、両遺跡は時代を異にした別々の遺跡であることから、丘陵上の遺跡は貝類を出土しないことより宇佐浜A遺跡とし、海岸側の砂丘貝塚は宇佐浜B貝塚とした。さらに、調査中に発見された遺跡にはそれぞれ発見された順に、C地点遺跡、D地点遺跡、E地点遺跡、F地点遺跡と名付けられた。

本遺跡の重要性について、多和田は「A遺跡について一琉球貝塚土器の器形の上から、或いはその他の点でも重要な一分派を担う貝塚で……奄美大島では深道貝塚群、徳之島では喜念貝塚、喜界島では湾貝塚と関係があり……B貝塚は一川田原式土器が出土し壺形土器は宇佐浜式と一致し、九州南部の單一曲線が描かれた沈線文を有する場合もあって琉球以外との貝塚上器関係を調査する場合の一つになるであろう。」とし、九州との関連について述べている。

このような宇佐浜A遺跡と宇佐浜B貝塚に対する多和田の見解が当時あって、両遺跡を発掘調査することによって奄美諸島や九州との関係を解明するという名目で、発掘調査が実施されることになった。

本遺跡が発掘調査されることになった今一つの理由は、調査体制の問題があった。1964年から、勝連城跡の発掘調査が文化財保護委員会によって実施された。この調査では、当時の沖縄考古学研究者が一同のもとに協力して発掘調査を行った。その結果、多くの成果を上げることができた。このような、勝連城跡の発掘調査体制がそのまま引き継がれて宇佐浜遺跡の発掘調査が行われることとなった。

第2節 調査体制および成果の記録

1. 調査体制

第一次調査から第三次調査については、全体の総括を多和田真淳が行い、宇佐浜A・C・D・E・F遺跡の調査の指揮は高宮廣衛が、宇佐浜B貝塚の指揮は新田重清と玉城盛勝が行った。第四次調査は知念勇と安里嗣淳が行った。

第一次調査では宇佐浜A遺跡と宇佐浜B貝塚が発掘調査された。第二次調査では前回に引き続き宇佐浜A遺跡と宇佐浜B貝塚、新たに宇佐浜C・D・E地点遺跡が発掘調査された。第三次調査では宇佐浜A遺跡とC地点遺跡が調査された。宇佐浜A遺跡は特に住居址の形態の把握に重点がおかれた。そして、第四次調査においては、宇佐浜A遺跡の西側で検出された遺構の確認調査が実施された。

以下に調査体制を記すが、職名等は調査当時のものである。なお、調査全般をとおして宿泊など色々とお世話を頂いた岡頭村辺戸区の区長平良平信氏には記して謝意を表する次第である。

調査主体 琉球政府文化財保護委員会
調査責任者 真采田義見（琉球政府文化財保護委員会委員長）
調査総括 多和田真淳（ 同 上 調査官）

第一次発掘調査（1967年8月）

発掘調査員 多和田真淳（琉球政府文化財保護委員会調査官）
高宮 廣衛（沖縄大学学長）
新田 重清（浦添高等学校教諭）
玉城 盛勝（琉球政府立博物館学芸員）
発掘作業員 当真嗣一・安里嗣淳・高安利雄（琉球大学学生）
知念 勇・金武正紀（沖縄大学学生）
平良益宏・大城雅則・玉那賀 効・高宮廣仲（首里高等学校生）
島袋あけみ・比嘉恵子・安室 孝・新垣安弘（浦添高等学校生）

第二次発掘調査（1969年3月）

発掘調査員 多和田真淳（琉球政府文化財保護委員会調査官）
高宮 廣衛（沖縄大学学長）
新田 重清（浦添高等学校教諭）
玉城 盛勝（琉球政府立博物館学芸員）

発掘調査員 知念 勇（琉球政府文化財保護委員会専門員）
金武 正紀（沖縄高等学校教諭）
安里 剛淳（辺土名高等学校教諭）
発掘作業員 安里 進（琉球大学学生）・大浜美恵子（立正大学学生）
瀬平寛一・喜屋武元伸・津波古聰・新垣安弘・上江洲節子
金城香代子・照屋治美（浦添高等学校生）
花城清春・前田正則・平良栄太郎・宮城 昭（辺土名高等学校生）
高宮廣仲（首里高等学校生）

第三次発掘調査（1969年12月～1970年1月）

発掘調査員 多和田真淳（琉球政府文化財保護委員会調査官）
高宮 廣衛（沖縄大学学長）
新田 重清（浦添高等学校教諭）
玉城 盛勝（琉球政府立博物館学芸員）
知念 勇（琉球政府文化財保護委員会専門員）
金武 正紀（沖縄高等学校教諭）
安里 剛淳（辺土名高等学校教諭）
発掘作業員 照屋正賢・仲嶽盛彦・比嘉春美・与座清子・（浦添高等学校生）
花城清春・前田正則・平良栄太郎・宮城 昭（辺土名高等学校生）

第四次発掘調査（1971年3月）

発掘調査員 知念 勇（琉球政府文化財保護委員会専門員）
安里 剛淳（辺土名高等学校教諭）
発掘作業員 花城清春・平良栄太郎・宮城 昭・山川勝治（辺土名高等学校生）

2. 成果の記録

出土遺物の洗浄・注記・接合・実測・製図・写真撮影等は下記のメンバーで行った。

城間 千榮子・比嘉 優子・城間千鶴子・大城 勝江・大城 茂美
上原 圭了・上連大洋子・長嶽 初子・照屋 利子・岸本ひろみ
大城 秀子・黒住 耐二・島袋 洋・岸本 義彦

報告書は次のとおり分担・執筆した。なお、編集には岸本義彦と大城秀子があたった。

第1章 知念 勇

第2章 大城秀子

第3章

第1節の1 知念 勇

2 岸本義彦

3 (1) 大城秀子

3 (2) 岸本義彦

第2節の1 岸本義彦

2 岸本義彦

3 (1) 比嘉優子・岸本義彦

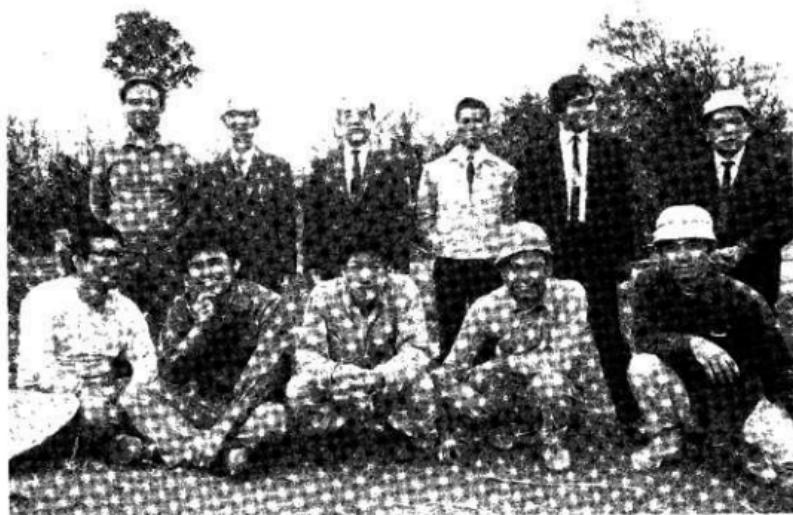
3 (2) 城間千栄子・岸本義彦

3 (3) 城間千栄子・岸本義彦

3 (4) 黒住耐二

3 (5) 金子浩昌

第4章 岸本義彦



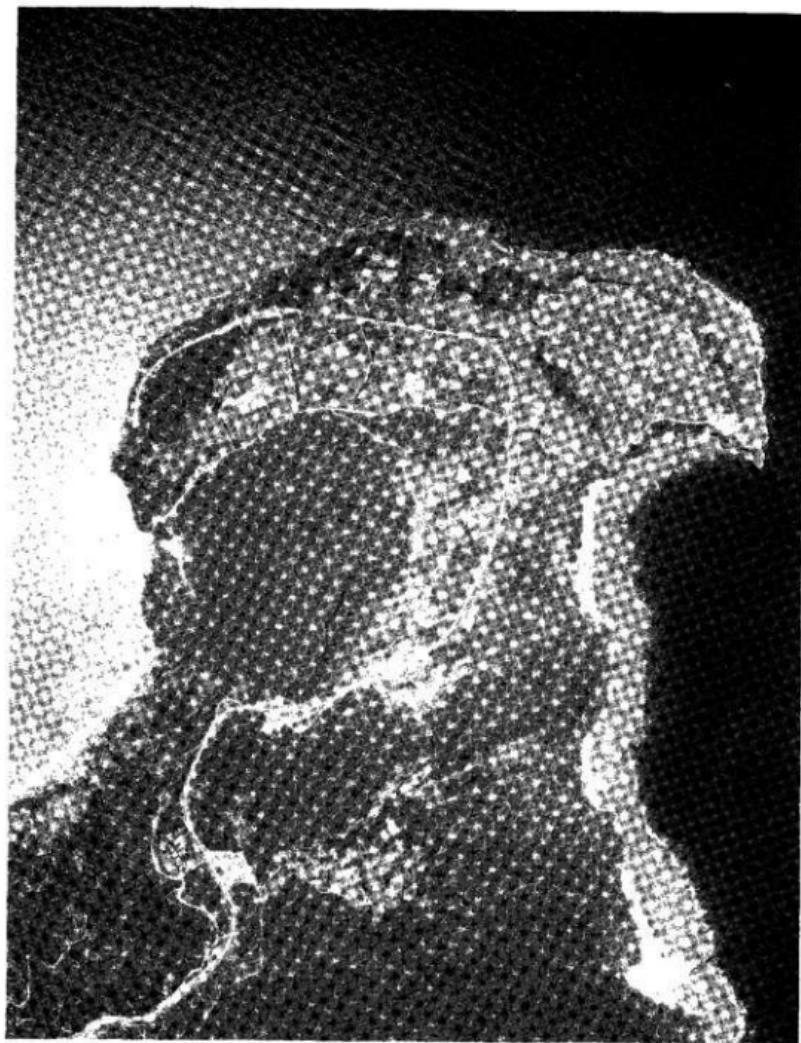
発掘調査メンバー



図1 国頭村北部の遺跡分布



図2 宇佐浜遺跡群の位置



図版1 国領村北部の空中写真

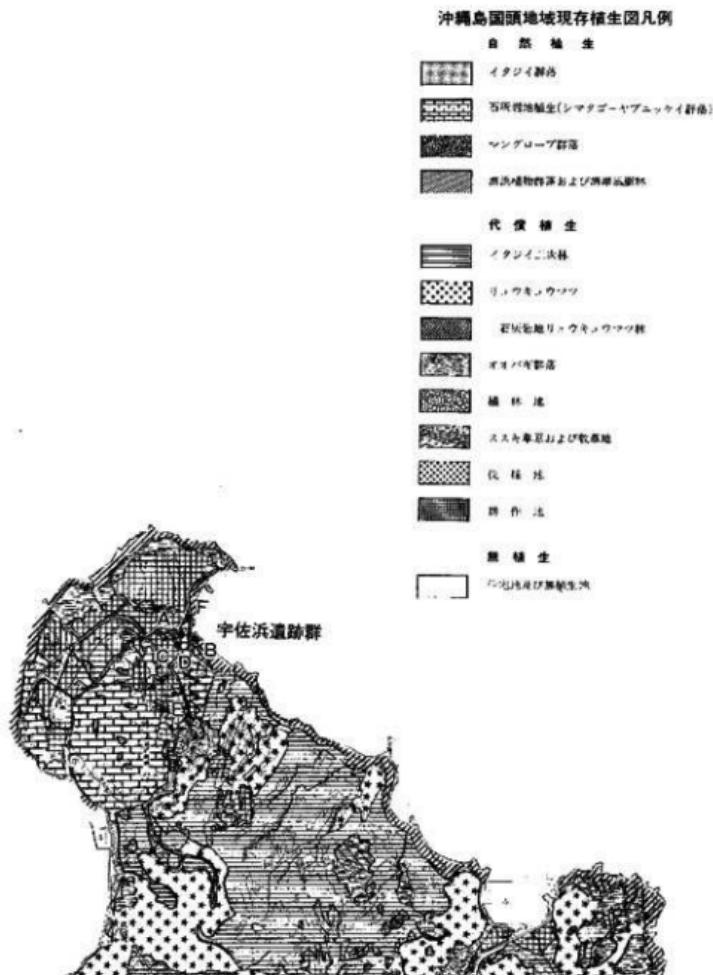


図3 国頭村の植生図

1987年 大然記念物シリーズ第28集

『沖縄島国頭地域の現存植生図』 沖縄県教育委員会

第2章 遺跡の環境

第1節 自然的環境

国頭村は沖縄本島の最北端に位置し、東海岸は太平洋、西海岸は東シナ海に面する。

面積は約194.5km²、全面積の約95%を山林や原野で占める我が県一の山岳地帯である。

宇佐浜遺跡はさらにその北端、辺土岬に隣接する沖縄本島最北端の遺跡で、昭和47年5月15日復帰に伴い国の史跡に指定された。地籍は字辺戸・中畠である。

辺土岬周辺には古期石灰岩段丘が形成され、宇佐浜遺跡もその南から北へゆるやかに傾斜する段丘上（標高約50m）に位置している。

遺跡の南方には辺戸岳があり、その中にある安須森（御嶽）は信仰の対象となっている。

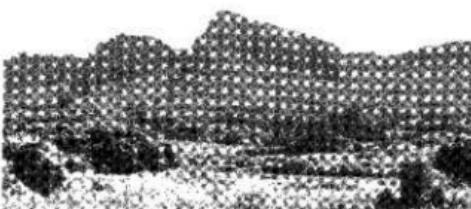
また、北方約24.5kmの海上には与論島（鹿児島県）が眺望でき、天気が良いときは沖永良部島や与論島の製糖工場の煙までみることができる。遺跡に居住していた人々にとっても手に届くようと思えたであろう。

遺跡の前面には砂丘やリーフがひらけ、近くには川がながれる。また、現在でも山ではイノシシが捕獲できるという環境である。当時の人々が生活を維持していくことは、それほど困難ではなかったものと思われる。

当時の植生をしる手掛かりの一助

として、1987年に沖縄県教育委員会
が調査した国頭村の植生についての
報告がある。これによるとイタジイ
林が鬱茂と繁っていた当時の環境を
かいしまみることが出来る。また、採
集されたドングリ類の下捨えに必要
と思われる石器類の出土も、当時の
生活をかいしまみる好材料になろう。

また、本遺跡の北東崖下には宇佐
浜B只塚が形成されており、両遺跡
間の関連性の把握も今後の課題の
一つである。



宇佐浜遺跡から安須森を望む

第2節 歴史的環境

国頭村内の遺跡の特色については、1987年度発行の国頭村文化財調査報告書第2集『国頭村の遺跡—詳細分布調査報告一』に掲載されており、また本遺跡の発見及び調査に至る経緯等も詳細に紹介されている。ここでは筆者の宮城長信氏の言葉をかりて述べてみたい。

宇佐浜遺跡は1954年（昭和29年）に多和田真淳、山之端清次の両氏によって発見された。また同じ日に発見されたカヤウチパンタ貝塚とともに、地元の人々に与えた影響は大きく宇佐浜・宜名真・辺戸一帯から次々と石斧等の遺物が北国小中学校に教材用として届けられたようである。

宇佐浜遺跡は国頭村内で初めて発見された先史遺跡であると同時に沖縄県の考古学界に極めて貴重な影響を与えた。多和田真淳氏はこの時採集した資料とともに1956年「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」を著した。この編年も後進の考古学研究者に多人な影響を及ぼし、本遺跡が標識遺跡となっている宇佐浜式土器も多和田氏の命名による。



1969年当時の調査状況

第3章 調査区

1967年から1971年にかけて、4次にわたる発掘調査を沖縄本島最北端に位置する辺上岬の近くにおいて実施した。調査対象となった遺跡は、宇佐浜A遺跡と宇佐浜B貝塚であったが、調査期間中に数ヶ所の遺跡が発見され、新たにそれらの遺跡（C地点・D地点・E地点・F地点遺跡）も発掘調査を行うことになった。

ここでは、各調査区の中でも比較的資料が多く得られた宇佐浜A遺跡と宇佐浜B貝塚について、発掘調査の成果を報告する。

第1節 宇佐浜A遺跡

1. 調査の概要

本遺跡から発見された「宇佐浜式土器」が、奄美大島笠利町の宇宿貝塚から出土した「宇宿上層式土器」と同類のものであることから、本遺跡を発掘調査することによって奄美諸島と沖縄諸島のその時期の関係が究明できると考えられるために、学術的な発掘調査が実施されることになった。

遺跡が立地している丘陵上とその北側崖の間に宇佐浜海岸へ降りる農道があり、この道路に面した丘陵の東半部を発掘調査の対象とした。遺跡は崖に平行して東西に延びており、先述の農道の部分はすでに削り取られたことがうかがえる。道路によって削り取られた断面を観察すると、厚さ30~40cmを呈する遺物包含層が東西に約50mにわたって確認された。

第一次発掘調査は1967年8月2日から開始した。アダンやソテツなどの雑木を伐採し、2m四方を単位としたグリッドを組んで発掘を行った。調査範囲は遺跡の東部の東西20m、南北10mのおよそ200m²である。表土は約20cmの厚さをなす腐食土層で、その下に茶褐色を呈する泥礫土層が約15cmの厚さで堆積している。未攪乱の遺物包含層で、上器片等を若干含んでいる。この層を第2層と称した。さらに、その下に暗褐色を呈する泥礫土層が15~20cmの厚さでみられた。未攪乱の遺物包含層で、土器片や石器などをわりと多く含み、第3層と称した。第2層と第3層は色調が若干異なる程度で、凹縫を記入していることや出土遺物のうえからもほとんど違いは見られず、基本的には同一層で同一時期のものと考えられる。

第3層下部において石組みの遺構が検出された。人頭大の石をめぐらした一边が2m余の方形ランを呈する遺構で、三基確認された。今回の調査は、これらの遺構の表面を露出させる程度で終了した。

第二次発掘調査は1969年3月18日から開始した。前回の調査で検出された石組み遺構の性格等を明らかにすることを第一の目的とした。発掘区の埋め戻した土砂を除去して前回の発掘面

を露呈させた。柱穴等の遺構確認に注意して慎重に掘り下げた。それとともに、石組み遺構のプラン等を把握するために西側へ発掘範囲を拡大していった。西側の拡大された地区においても石組み遺構が検出された。この地区的石組み遺構は一辺が5m以上もある方形プランを呈するもので、東側のものに比べて一辺の長さが2倍以上もある大型の遺構である。そのために、この地区的調査にはかなりの時間を要し、日程の都合で充分な調査ができないままに埋め戻し作業を行った。

石組み遺構が方形プランを呈することや大きさにバリエーションがあることは確かめられたが、柱穴等は確認できず、石組み遺構が住居址とみなせるかは第三次発掘調査以降に持ち越された。

第三次発掘調査は1969年12月25日から開始した。第一次・第二次調査で発掘された範囲内の再調査ということで実施された。

特に西側の大きな石組み遺構を中心的に調査が行われた。この遺構の東南隅に直径30cmほどの範囲で炉址とみられる焼上があらわれたため、この遺構が住居址としての可能性がでてきた。この遺構のほぼ中心部からは、國版にみるような石皿が発見された。また、遺構内は遺構外よりも土器などの人工遺物は少ないことが判った。ただし、本遺構でも柱穴等は確認されなかった。

第四次発掘調査は1971年3月に行った。調査員・作業員とも少ないとことから、発掘範囲を広げることが出来ず、前回に発掘した西側遺構の範囲確認調査を行った。一辺が4m余の方形の石組み遺構である。遺跡の南側には標高246mの辺戸石山(安須森)が屹立している。その麓から遺跡が立地する崖までは緩やかな傾斜をなし、大雨の時などは川手からの土砂の流出が激しかったとみられる。このような状況から、遺跡内には土砂の堆積や流出があって、遺構内がかなり乱されていると思われる。このことを裏づけるかのように、第2層と第3層に多量の円鏡が混在していることや明らかに時期の異なる土器が含まれていることによっても判る。

本遺跡から検出された石組み遺構の中で、本遺構が最も住居址である可能性は高いと考えられる。しかし、いずれも住居址と認めるには決定的な証拠が見られなかった。

その後、各地における類似遺構の検出増加により、これらの遺構が住居址に関連するものであることが判ってきた。

2. 層序と遺構

層序

今回の調査により、地山も含めて4枚の層序が確認された。右の図に標準土層の柱状図を示したが、各層の特徴については下記に述べたとおりである。

第1層 — 黒褐色を呈する腐食土で、20cm前後の厚さをなす。先史遺物はほとんど含んでない。

第2層 — 茶褐色を呈し、円礫を多く含む混疊土層である。未攪乱の遺物包含層で15~20cmの厚さをなし、土器片等を若干含んでいる。

第3層 — 暗褐色を呈する混疊土層で、第2層と同様に円礫を多く含んでいる。未攪乱の遺物包含層で、上器片や石器などを比較的多く含む。層厚は20~30cmである。

第4層 — 赤褐色を呈する国頭マージの上層でいわゆる地山である。

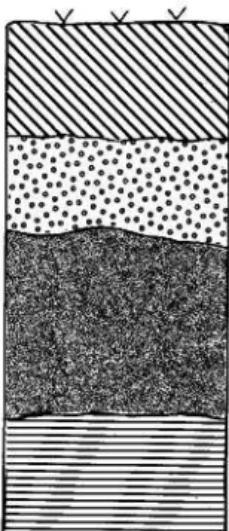


図4 標準土層柱状図

遺構

第3層下部において、石組み遺構が8基検出され、それらに付随するものとして焼土や柱穴なども確認された。

第1号石組み遺構

東壁側は未発掘で全体の形状は判然としないが、現状から平面観が隅丸方形を呈するものと思われる。主軸はほぼ南北を示し、長軸は約2.1mを測る。南東壁のコーナーより、短軸は約1.8mになると考えられる。石組みはそれほど整然としていない。炉址は検出されなかった。

第2号石組み遺構

第1号石組み遺構と同様に東壁側を発掘していないために、全体の形状は判然としない。現状から平面観は略長方形を呈すると思われる。主軸はほぼ南北を示し、南北は約2.4mを測るが、東西は不明である。石組みは整然としてなく、炉址も未検出である。

第3号石組み遺構

A-5・6グリッドにおいて検出された。東壁側は未発掘のため、全体の形状は把握できなかったが、平面観は隅丸の方形を呈すると思われる。主軸はほぼ南北方向を示し、長軸は約2.3mを測るが、短軸は不明である。石組みの形は整然としていない。炉址は検出されなかった。

第5号石組み遺構

A-4グリッドにおいて検出された。北東壁側の石組みが確認されず、全体の形状は判然としないが、平面観は隅丸の方形を呈していたと考えられる。主軸は北西-南東方向を示し、一辺は約1.5mを測るわりと小規模の遺構である。南西壁側の石組みは比較的整然としている。炉址は検出されなかった。

第6号石組み遺構

C-5グリッドにおいて検出された。石組みはかなり崩れているが、平面観は隅丸の方形を呈すると思われる。主軸は北西-南東方向を示し、長軸は約1.5m、短軸は約1.3mを測る。炉址は検出されなかった。南側には第7号石組み遺構が隣接している。

第7号石組み遺構

C-D-5・6グリッドにおいて検出された。北東壁側は未発掘のため、全体の形状は把握できなかったが、平面観は隅丸の方形を呈すると思われる。主軸は北西-南東方向を示し、長軸は約3mを測り、短軸もほぼ同じ長さと考えられる。石組みはわりと整然としている。炉址は検出されなかった。検出された石組み遺構の中では最大の規模を有している。



検出された石組み遺構



図5 第1号石組み遺構

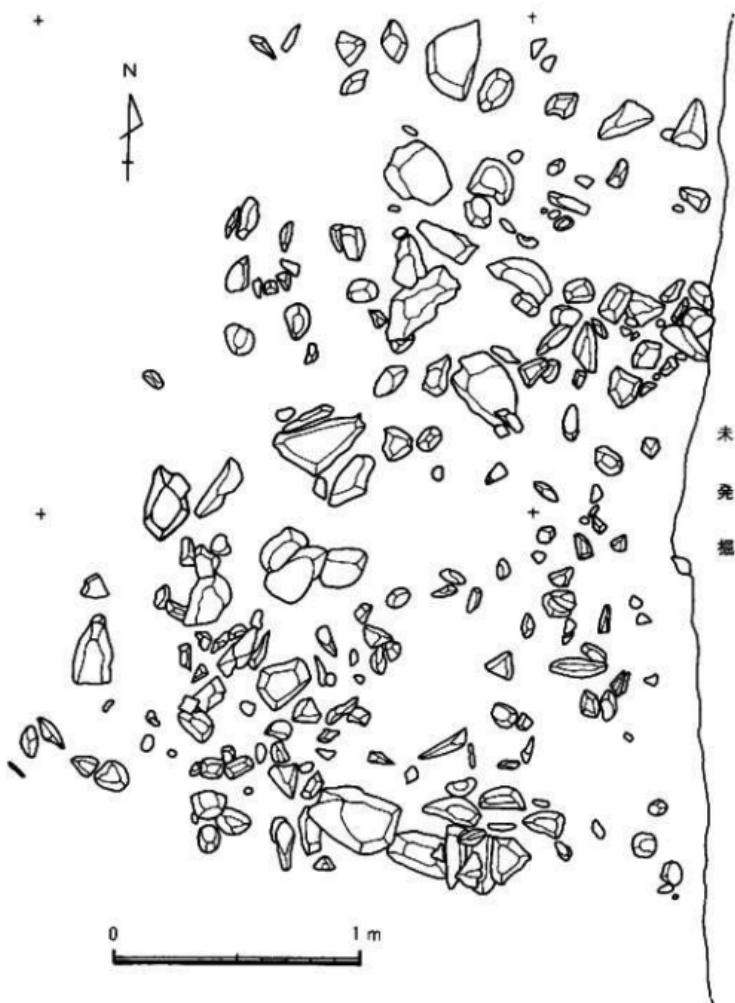


図 6 第2号石組み造構

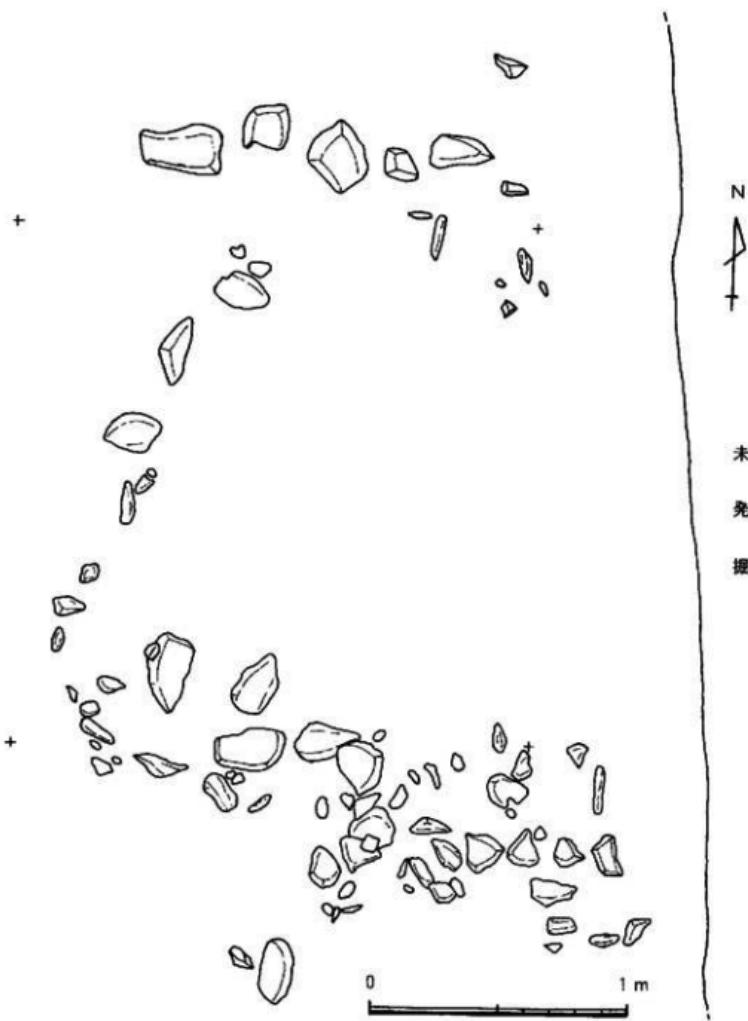
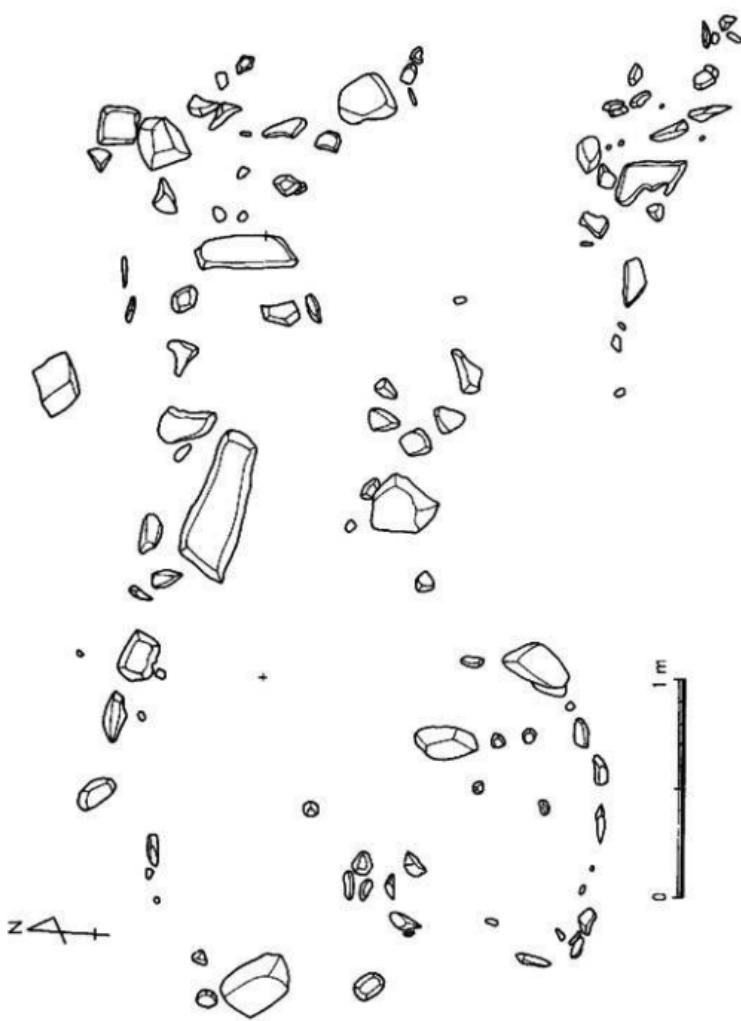


図7 第3号石組み遺構



石組み遺構
図 8



石組み遺構

図9

3. 出土遺物

今回報告する資料は、1967～71年（昭和42～46年）の間に、琉球政府文化財保護委員会（現：沖縄県教育庁文化課）によって実施された、4次にわたる発掘調査の結果得られたものである。

遺物は土器と石器が得られ、主に遺構内において集中してみられる。以下、遺物別に記述する。

(1) 土器

土器は総数8,758点得られた。量的には圧倒的に宇佐浜式土器が多く、次に奄美諸島の移入品と思われる喜念I式土器・室宿上層式土器がとくに目立つ。

本項では、これらの土器を主に口縁部の形態・文様・器形等の諸特徴により次の如く分類した（表1参照）。

カヤウチバンタ式土器

室川式土器

凸帯文土器

宇佐浜式土器

仲原式土器

喜念I式土器

室宿上層式土器（但し、記述は宇佐浜式土器にまとめた）

以下、型式別にまず概念説明を行い、各遺構・層序毎に記述する。なお、表面採集資料と層序不明のものは最後にまとめた。

第2層

最も多く遺物を出土したのがこの2層である。宇佐浜式土器が全体の50%と高い割合を占め、ついで喜念I式土器、室川式土器となっている。有文資料も得られたが、口縁部の肥厚帯に施すものや、肥厚部形態のバリエーションを示す資料も増加している。

カヤウチバンタ式土器

国頭村のカヤウチバンタ貝塚より出土する土器を標識とする。平口縁・平底の深鉢形土器で、口縁部の外段断面が花鉢状の肥厚を示す。無文が圧倒的に多いが、肥厚帯に文様を施すものや、肥厚部形態のバリエーションを示す資料も増加している。

カヤウチバンタ貝塚は、宇佐浜遺跡とも距離的に近いこともあって、両者の関係は深いもの

があったと想定できる。

図10の1～7（図版18の1～7）に示したもので出土量は少ない。すべて無文である。口唇部を平坦にととのえて断面方形状にするもの（1～3）と、口唇部が舌状もしくは丸みを帯び

表1 土器出土一覧表

	層		序									遺		著		層序不明	表面採集	合計
	第1層	第2層	第3層	第4層	1号	2号	3号	5号	6号	7号	8号	1号炉						
カヤウチバン式		8														3		11
室 内 式		29	7			2					4					6		48
凸 菱 文		3	2													1		6
字 佐 挽 式		99	32			17	1	2	1	5	18					13	6	194
仲 原 式																		0
喜 念 I 式		24	6			3	1				4					15	1	54
その他有文土器		16	4			2				1	1					4	2	30
無 外 反		19	4			1	1			1						2	3	33
肥 厚																		
直 行		2	2							1		1					1	7
口 縫																		0
内 深																		
無 文 脊 部	377	3,856	2,075	67	22	399	99			44	65	224				1,250		8,373
底																		
尖 底		12	3													1		16
丸 底																		0
平 底		5	3													1	1	10
不 明		1	2															3
合 計	377	4,074	2,140	67	22	364	102	2	47	71	254	1	1,252		12		8,758	

表2 無文脣部分類表

	1 层	2 層	3 层	4 层	1 号	2 号	3 号	6 号	7 号	8 号	小 明	合 計
非・雲母	356	3,397	1,847	60	22	317	75	24	57	186	1,152	7,493
含・蜜母	21	459	228	7	0	22	24	20	8	38	53	880
合 計	377	3,856	2,075	67	22	339	99	44	65	224	1,205	8,373

て肥厚部全体が扁平になるもの（6・7）とがある。

7は素地に雲母を含有する、焼き締めの良い土器である。また、4は器表面があばた状を呈する土器で口径18.2cm、器面調整は丁寧になされるが、焼成はやや悪い。

室川式土器

本型式土器は、沖縄市の室川貝塚より出土した上器を標識とする。平口縁・底径の小さな平底の深鉢形で、口縁部の張り出しが強く、幅広い口唇を形成する。口縁部の肥厚は疑似肥厚も含め、数種の変化が認められる。

図10の8・9、11の1・2、4~14(図版18の8・9、19の1・2、4~14)に示したもののは室川式土器の範疇に入ると思われるものであるが、口唇部を幅広く形成するものは少なく、多くは強調する程度にとどまる。

口唇部の張り出しが水平方向になるもの(図11の1・2・4・5・11)、丸みをおびるもの(6・7)、逆三角形になるもの(13)などがある。

口径のわかるものは図10の8・9の2点でそれぞれ20cm、23.8cmをはかる。

文様を有するものではなく、器形・器面調整・焼成等の諸特徴に規則性はみられない。しかし素地に雲母を含有するものは多くみられた。(2~9)。

凸帯文上器

図14の1・2(図版22の1・2)に示した2点で、どちらも肩部がくの字状を呈する。胎土はやや粗めで、成形も丁寧にはなされていない。

宇佐浜式土器

本遺跡出土の土器を標識とする。口縁部が肥厚し、肥厚部の断面が三角形またはカマボコ形を呈する。器形は壺または深鉢形、尖底および丸底器形になる。沖縄貝塚時代中期を代表する土器で、奄美諸島の宇宿上層式土器と特徴を一にする。

ここでは前記の宇宿上層式土器との区別が困難であるため、宇佐浜式土器として一括して記述する。

図11の15、図12・13(図版19の5、図版20・21)に示した。

今回得られた本型式の有文資料は僅かに5点であった。また、文様の種類は単ペラ工具による押引文・沈線文が主で、点刻文も僅かにみられる。また、それらを組み合わせた例もある。

図11の15は口径が17cm、低平な山形を示すもので、その頂部には二叉状に分岐した突起がある。この突起部分が口縁部全体で幾つものかは不明である。また、口縁部直下から単ペラのシャープな沈線文が頸部にかけて施される。上段の沈線文は文様を区画するもので、それが頸部を一周するのであれば、8個の文様区画帯ができる。下段はそのまま横位に一周する。

図12の3・5は同種の破片である。山形に肥厚する口縁部から頸部にかけて縦位に沈線紋を

施すもので、重量感のある大型土器である。胎土には大量の石灰岩・石英細片を混入する。焼きの良い堅緻な土器である。

同図1は口径9.2cmの小型の壺形上器で、頸部に二条の点刻文を羽状に施す例である。胎土には石灰岩細片が混入され、器表面からも観察できる。

4は山形口縁部の縁に沿って二叉の点刻文を施すもので、山頂の下にも文様が施されていたと思われるが、摩耗のため判然としない。素地には雲母を含有する。

6は口縁部直下に押捺刻文を横位に一条施す。頸部は空白のままであるが、その下位に施文するかは不明。素地には雲母が含有される。

その他、山形口縫を示すものは7～9がある。7は肥厚部が扁平化し、段は僅かに意識してつくられたものであろう。胎土には細砂粒が混入され、焼成の良い堅緻な土器である。

高念1式土器

奄美諸島徳之島 伊仙町高念貝塚出土を標識とする。口縁部が三角形かカマボコ状に肥厚する壺形または深鉢形の器形をもつ土器である。口縁部から頸部にかけて細い凸帯を縦・横位に貼りつけ、その両側に対称的な点刻文を施す。この凸帯文+側点の組み合わせで区画したなかを、沈線文で埋めるという構成も多くみられる。

器形的には宇佐浜式上器によく似ており、相互間の関係等、興味深いものがある。また、今回得られた資料の中でも12%と高い率を占めている。

なお、本項に含めたものには、狭義の高念1式土器の範疇には入らないが、その影響を強く受けたものと解釈できる資料もある。

今回得られた中で特徴的なものを図15(図版23)に示した。

1は口縁部から胴部まで破片であるが、この十器の底部が確認されたことから、試みに十器の全体復元図を示してみた。口径10cm、推定器高16.8cm、最大径は口縁部にあり、頸部で一旦くびれてゆるやかな膨らみをもって底部へと移行する。平口縁・尖底の華奢な土器である。

口縁部は三角形に肥厚し、凸帯文を口縁直下には縦位に(四箇所)、肩部には横位に一条めぐらす。凸帯にはさらに刻目を施文し、間には綾杉文を密に埋める。細かな素地には雲母や石英粒が混入される。焼成はあまり良くなく、色調は橙褐色を呈する。

6は口径23.4cmと大型の製品である。やや丸みをおびた三角形状の肥厚口縁部から頸部へかけて、深くて力強い斜沈線文が4条ずつ施文される。肩部には横位に凸帯+側点を一周させている。焼成は良好、暗褐色を呈する堅緻な土器である。

その他の有文土器

図16の1～9(図版24の1～9)に示した。1は山形口縁部で、瘤状突起の直下には縦長の刻文がみられる。

また、口唇部に施文するもの（2～4）、肥厚部に押捺刻文を施文するもの（5～8）等が得られた。いずれも胎土は細かく精製されている。

無肥厚口縁土器

図14の3～15（図版22の3～15）に示した。本遺跡は肥厚口縁の土器が多く、このタイプは少ない。口縁が外反するもの（3～13）。直行するもの（14・15）がある。素地には石灰岩などが多量に混和されている。

底 部

総数18点出土し、代表的なものを図16の10～22（図版24の10～22）に示した。尖底が最も多く、平底は少ない。尖底は肥厚口縁グループのもので、素地には雲母を混ずるものも多い。

平底で底径のわかるのは3点あり、それぞれ18と19が3.8cm、20が5.1cmをはかる。なお、18は15にしめした無肥厚口縁部と、22は4の有文土器と同一の個体である。

第3層

本層からは2,140点の土器が得られ、特徴的なものを図17・18（図版25・26）に示した。

室川式土器は図17の1～3に示した。2・3は張り出しが強いが1は微弱である。3は刷毛目状の器面調整痕が明瞭にのこる。

同図4～9は宇佐浜式土器である。6は口径16.4cm、胴下半部まである深鉢形土器。口縁部の肥厚は微弱で、胎土には石灰岩や石英細片を混ぜる。焼き締めの良い堅密な土器である。

5・8は素地中に雲母を混ぜる、器面調整も丁寧な土器である。

図18の1～3は再念I式土器である。1はやや大型土器で、凸帯文+側点が縦横に施され、その間を沈線でもって埋めていく文様構成である。胎土は泥質で、焼き締めは充分ではない。2・3は凸帯+側点を頸部から胴部上半に間隔をあけて横位に施文、縦位の区画も確認できるが、その他は空白のまま放置される。素地は細かく混和材はない。

その他、有文資料は6・7に示した。6は口縁部付近の資料で、上下に深い押捺刻文を施文し、その間に羽状文を施す。7は上端に浅い押引文が一条確認できる。どちらも素地は砂質で、焼き締めは弱い。

底部資料は8点得られた、尖底・平底共に3点ずつ出土した。（2点は形状不明）。8は尖底であるが全体に丸みを帯びる。粘土の接合面からの破損で製作時の痕跡をとどめる。内面は丁寧に形成される。

10は底部の先端が2cmと比較的厚いものである。11～13は平底で、底径はそれぞれ3.0cm、3.5cm、3.6cmである。13は器表面がボーラス状になっている。

第2号遺構

図19(図版27)に示した。

1は室川式土器である。口唇部が折れたように外側へ張り出す、逆L字状を示す。小破片で、器高は低いものであろう。素地には石灰岩微細片が混入される、焼き締めの良い土器である。

3～10に示したものは宇佐浜式土器である。有文は2点で、4は山形口縁直下から縦位に点刻文がみられる。3は山形口縁部の頂部から縦位に沈線文を施した例では、沈線は3本まで確認できる。

5は頸部のカーブがやや強く、胴部へと移行する壺形上器である。素地は細かく、混和材はない。

11は喜念I式土器である。口径10.6cm、肩部で細い粘土紐による貼り付け文を横位にめぐらし、その間を太く力強い沈線文が羽状に施される。胎土には石英・雲母片が多く含まれ、器表面からも容易に観察される。焼き締めは普通、色調は表面が褐色、裏面は赤褐色を呈する。

12は断面三角形の口縁部直下から羽状文を密に施す例である。素地には雲母が含有される。

13は肩部付近の破片である。凸帯+側点の組み合わせが一条認められるが、その上下は空白のまま放置される。

第5号遺構

図20の1・2(図版28の1・2)に示した。第5号遺構はこの2点のみの出土である。1は胎土に云母を含有する。いずれも宇佐浜式土器である。

第6号遺構

同図3(同図版3)に示したもの1点のみ出土。小破片で器形はわからないが、微弱な肥厚をしめすと思われる。素地には石灰岩の細片が含まれる。焼き締めの良い土器である。

第7号遺構

同図4～7(同図版4～7)に示した4点である。有文上器も1点得られた。6は口縁部直下に押引文を横位に1条、縦位に1～2条施し、その間を斜位の沈線文で埋めている。

第8号遺構

同図8～18、図21の1～5(同図版8～18、図版29の1～5)に示した。

8～18に示したものはすべて無文の宇佐浜式土器である。胎土に石灰岩細片を混入するものや、雲母を含有するものもある。

図21の1～4に示したのは喜念I式土器である。1は頸部～肩部にかけての資料である。肩

部に1条横位に凸帯+側点を施し、その上位に斜沈線文を施す。2は口縁部直下に羽状文を施したもので、沈線はシャープになされる。3は素地中に雲母を多量に含有する。いずれも焼きの良い堅敏な土器である。

1号炉付近

図21の6に示した平底が1点採集された。底径4.7cmのややシャープな立ち上がりを示す。

層序不明

ここに含めたのは包含層内からの出土ではあるが、層位が確認できなかった資料である。図21の7・8、図22・23・24の1~4(図版29の7・8、図版30・31・32の1~4)

図21の7・8に示したのは、カヤウチバンタ式上器で、図上復元を試みた。

7は口径24cm、肥厚部の貼り付け法は粘土帯を肥厚帯の幅につくり、口縁部にかぶせるよう接着したものである。口唇部はやや舌状を示し、肥厚部は扁平化する。素地中には混和材は含まれない。焼き締めが良く、褐色を呈する。

8は口径24.4cm、肥厚帯の作り方は1と同一である。素地には僅かに微砂粒が含まれ、焼成は良好、堅敏な土器である。色調は暗褐色を呈する。

図22の1は小破片であるが、素地中に雲母を多量に混入しているのが観察される。

図23の9・10に示したものは口縁部の張り出しの強い、室川式土器である。2点とも有文資料で、10は口唇・口縁部に押捺刻文と斜沈線文が施されている。9は口縁直下に幅広の点刻文が2列認められる。

宇佐浜式土器は図22の2~10に示した。2は口径18.5cmの、頸部のしまった胴部の張る器形をもつ壺形上器である。器表面はナデにより丁寧に成形がなされているが、裏面には石英、右灰岩細粒が観察できる。素地には雲母を少量含有する。焼成良好、褐色を呈する。

4・5は断面が三角形の本式の典型的な土器である。細片ではあるが、堅敏なもので、大型の製品かと思われる。どちらも素地に右英細粒を混和する。

12は器面がボーラス状になっているもので、上器自体も軽い。器厚は4mmと薄く、華奢な感がある。室川上層式土器になろう。

図23の5~8は高念I式土器である。凸帯+側点のみに終始するもの(6・7)と沈線文を施すもの(5)がある。8は細片のため文様構成は不明。

表面採集品

図24の5~15(図版32の5~15)に示した。宇佐浜式土器が多く得られ、有文も僅かに含まれる。

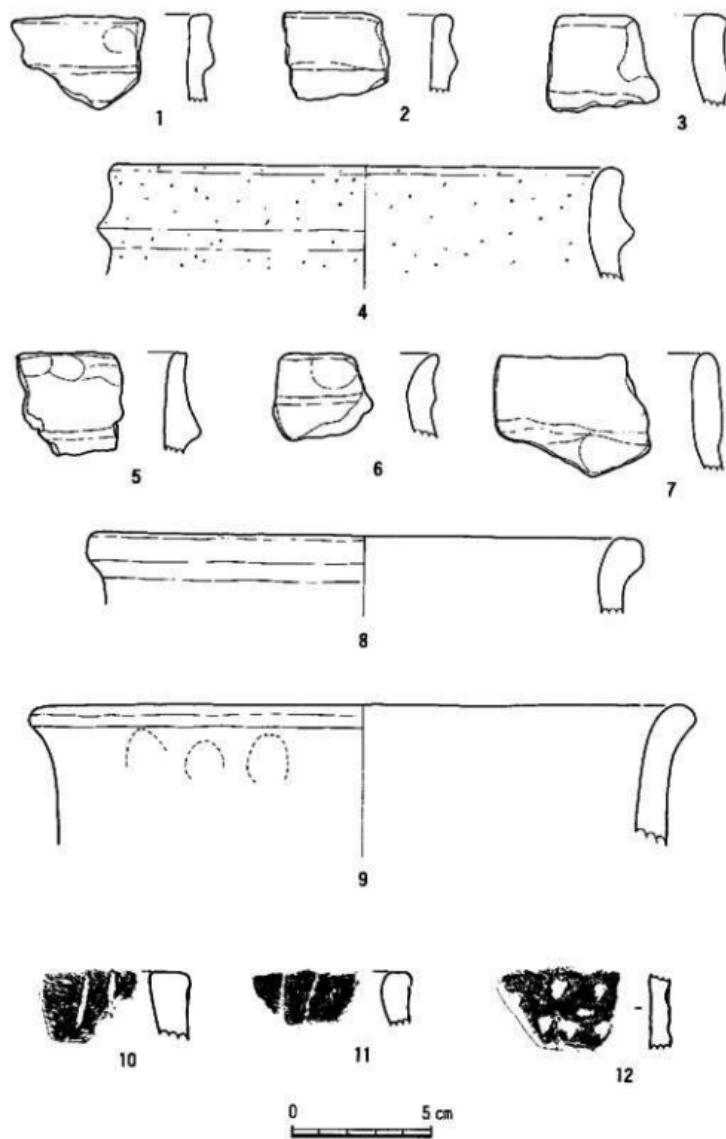


図10 第2層出土土器（カヤウチバンタ式、室川式）

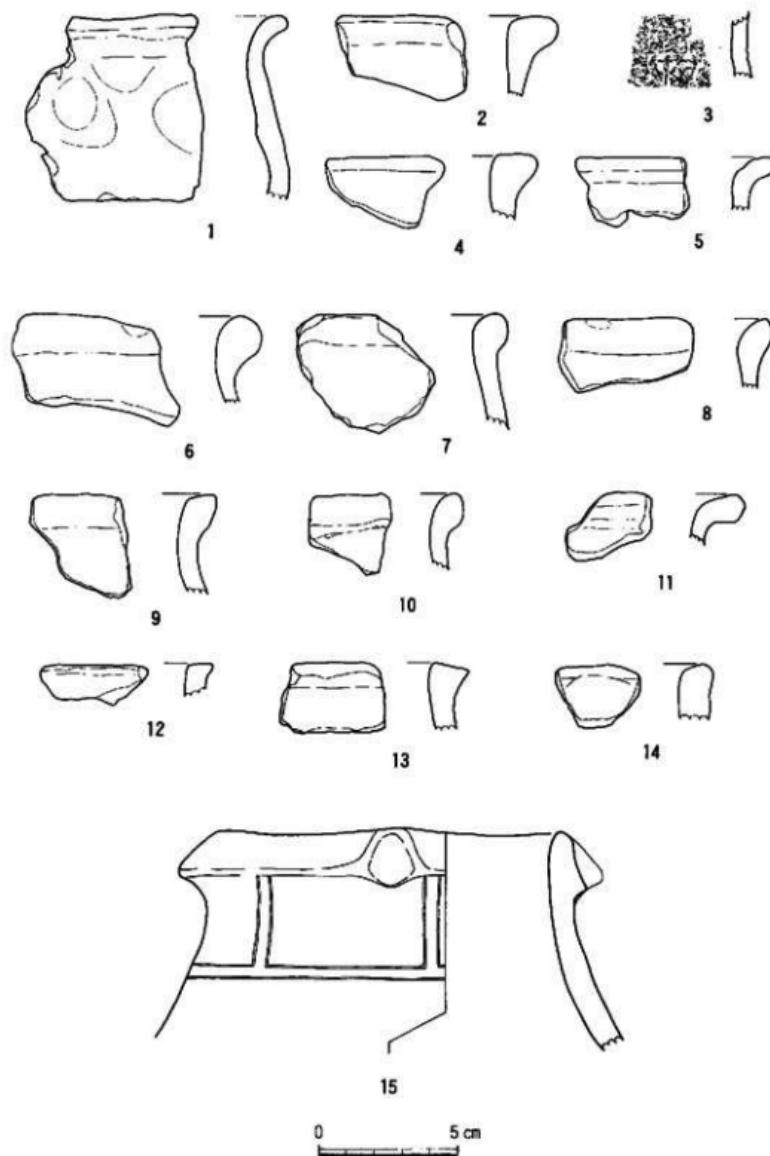


図11 第2層出土土器（室川式、宇佐浜式土器）

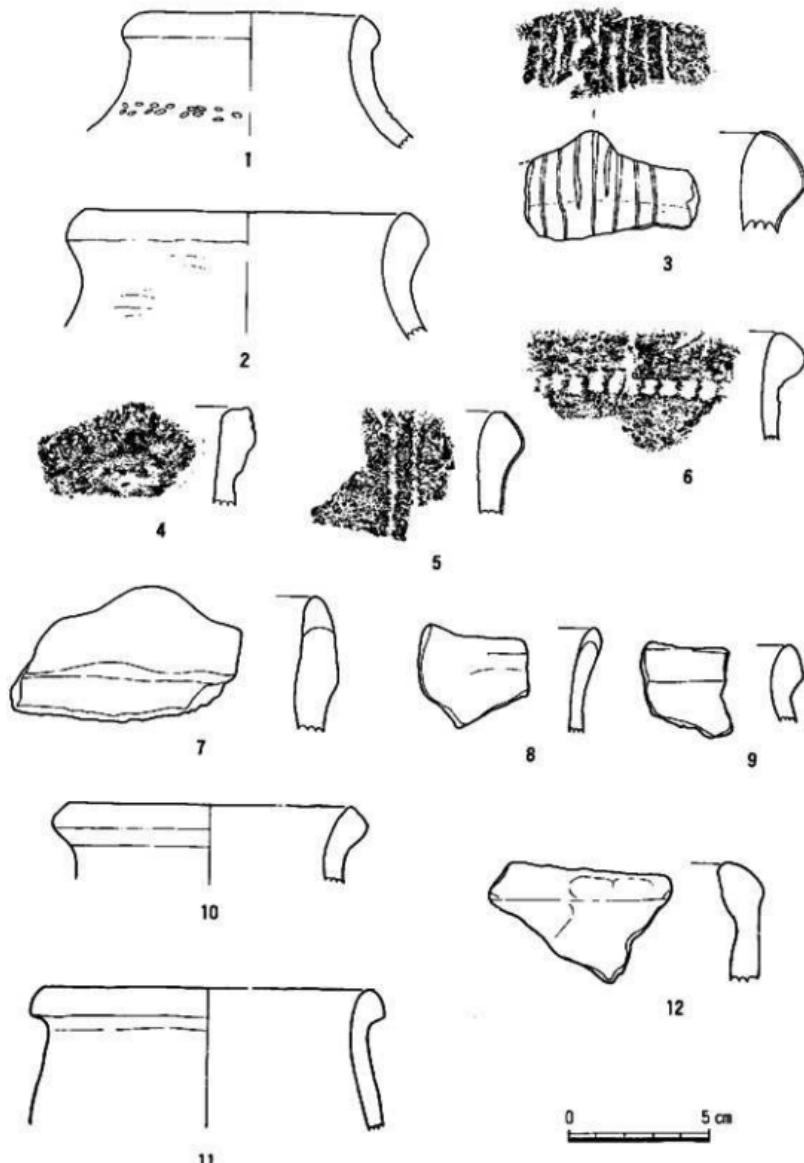


図12 第2層出土土器（宇佐浜式土器）

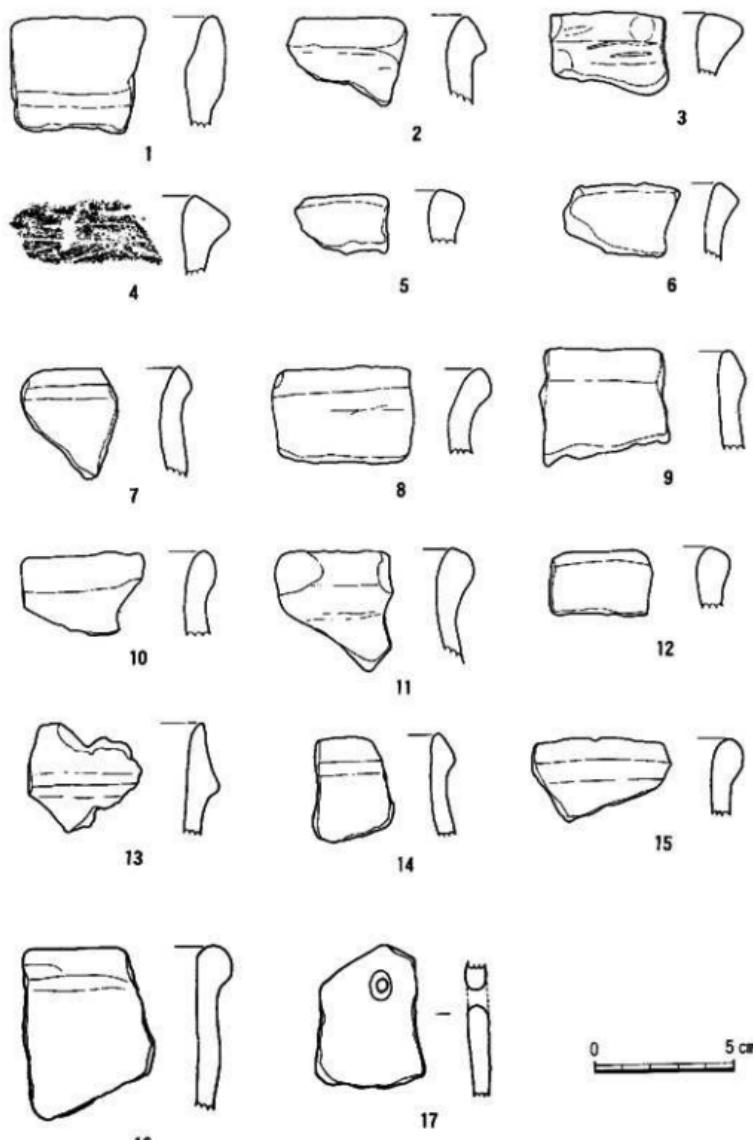


圖13 第2層出土土器（宇佐浜式土器）

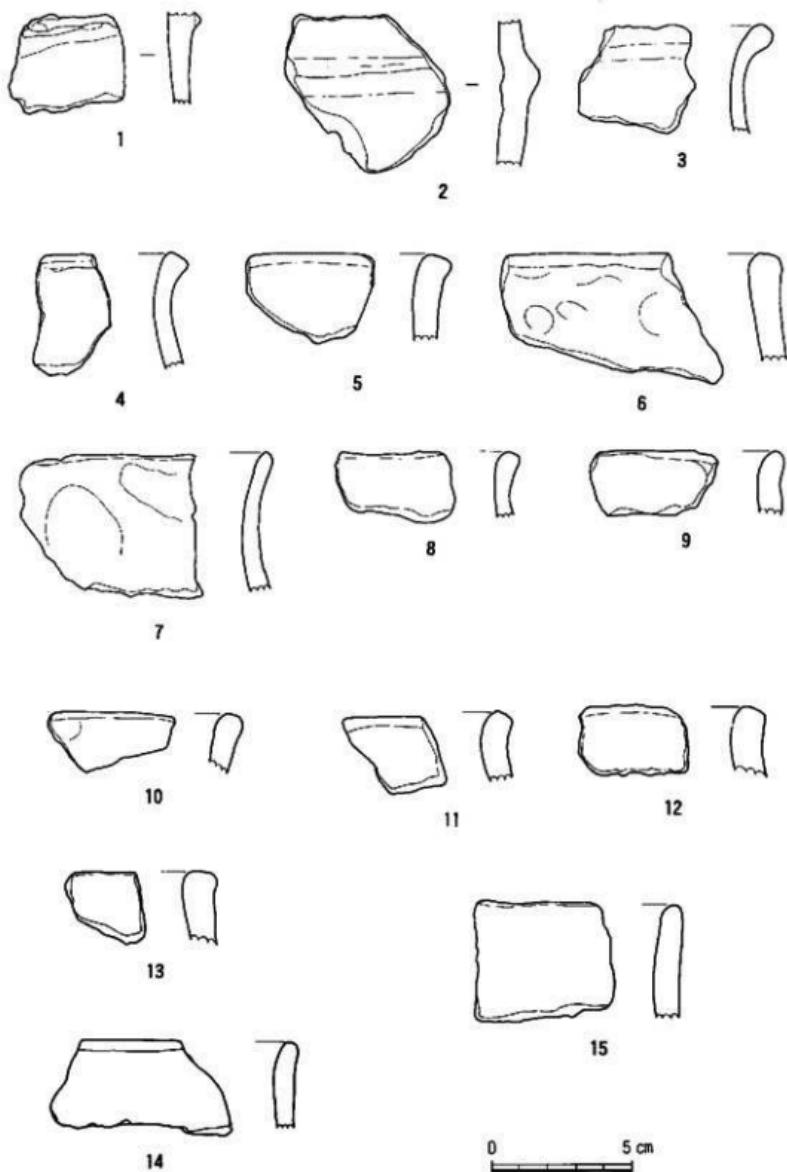
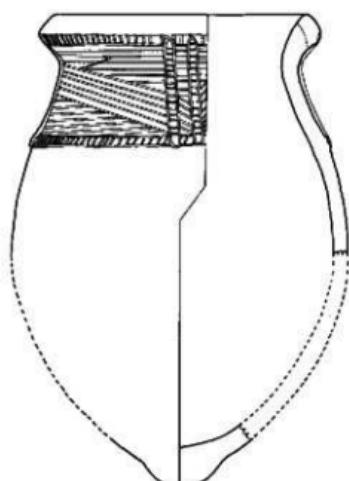
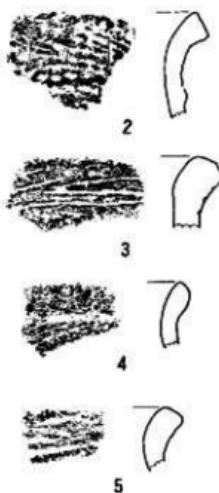


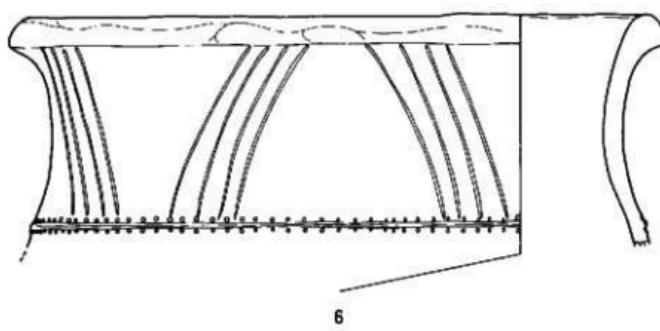
图14 第2唐出土土器（凸带文、非肥厚口缘土器）



1



5



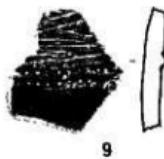
6



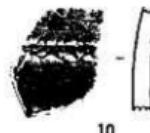
7



8



9



10

0 5 cm

圖15 第2層出土土器（喜念I式土器）

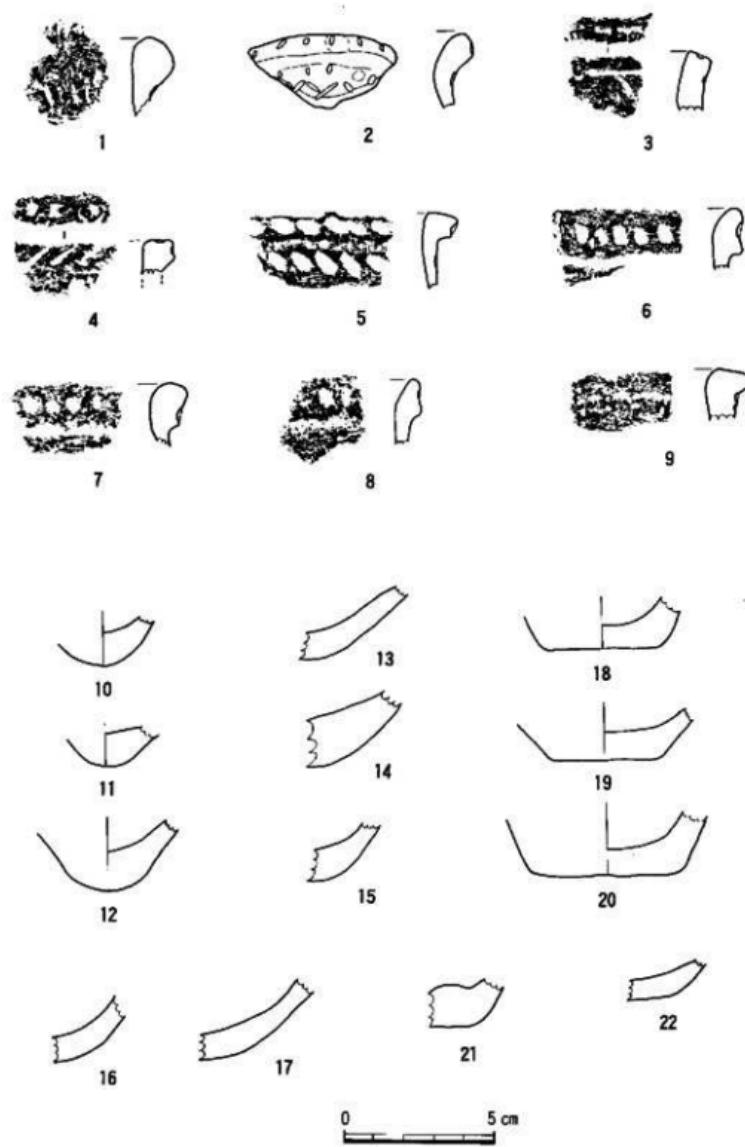


図16 第2層出土土器（その他の有文土器、底部）

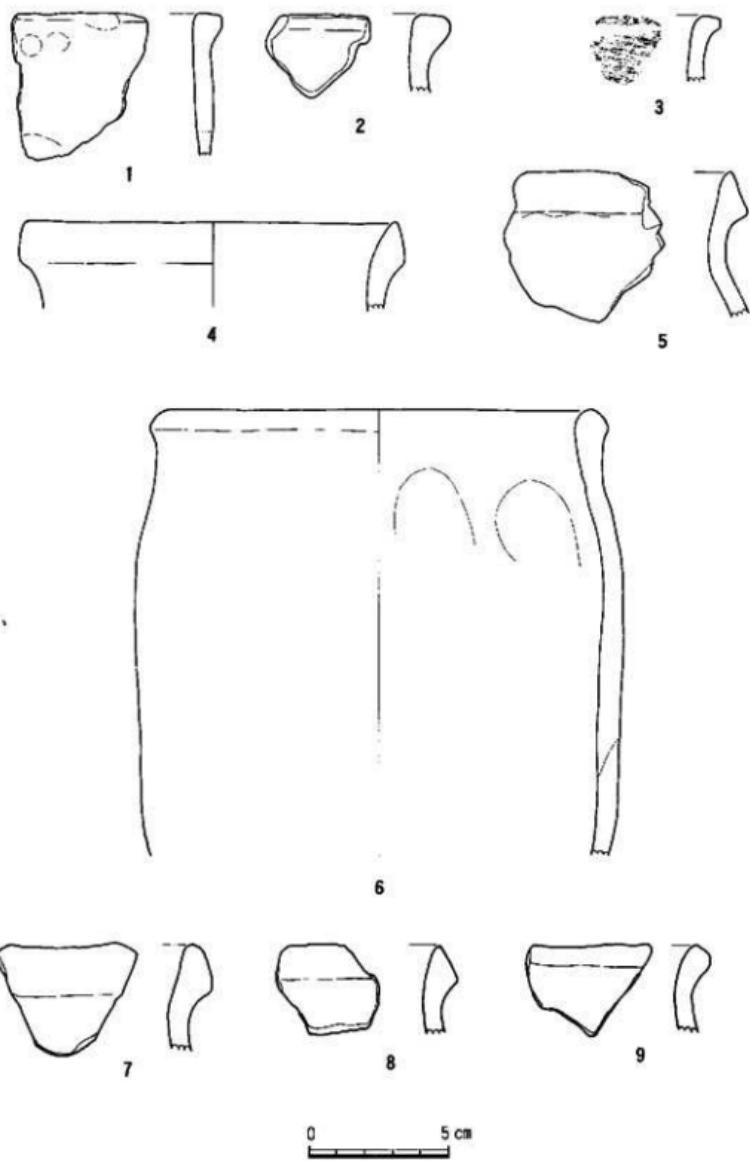


図17 第3層出土土器（室川式、宇佐浜式土器）

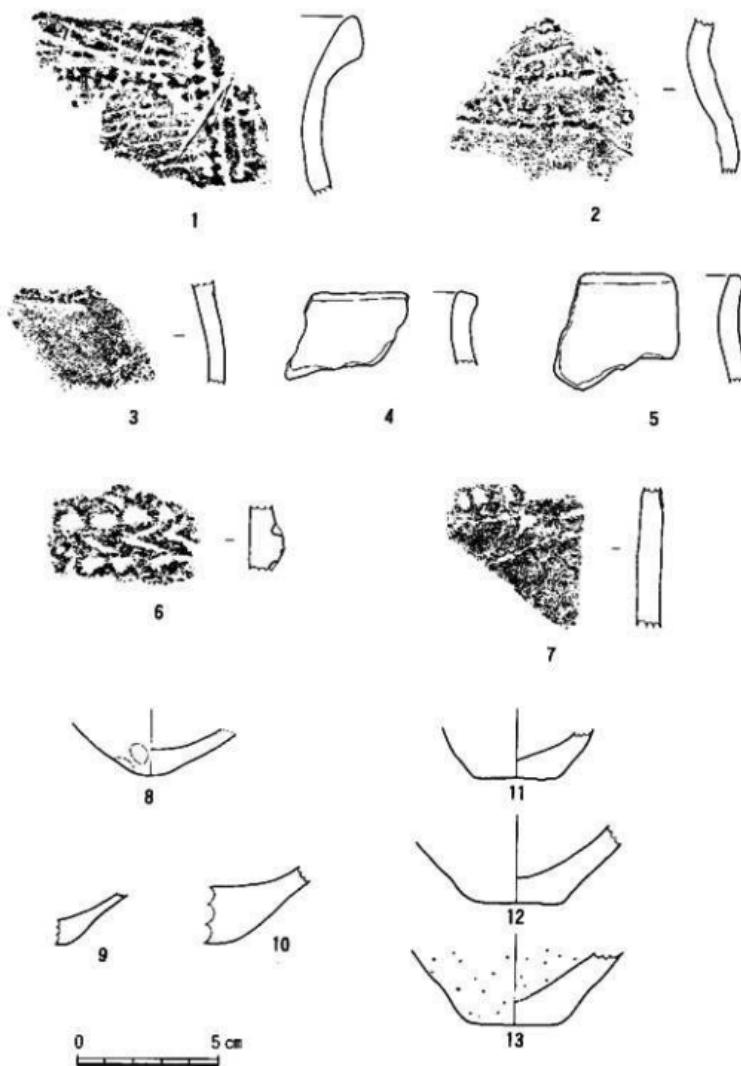


図18 第3層出土土器（裏面Ⅰ式、底部、その他）

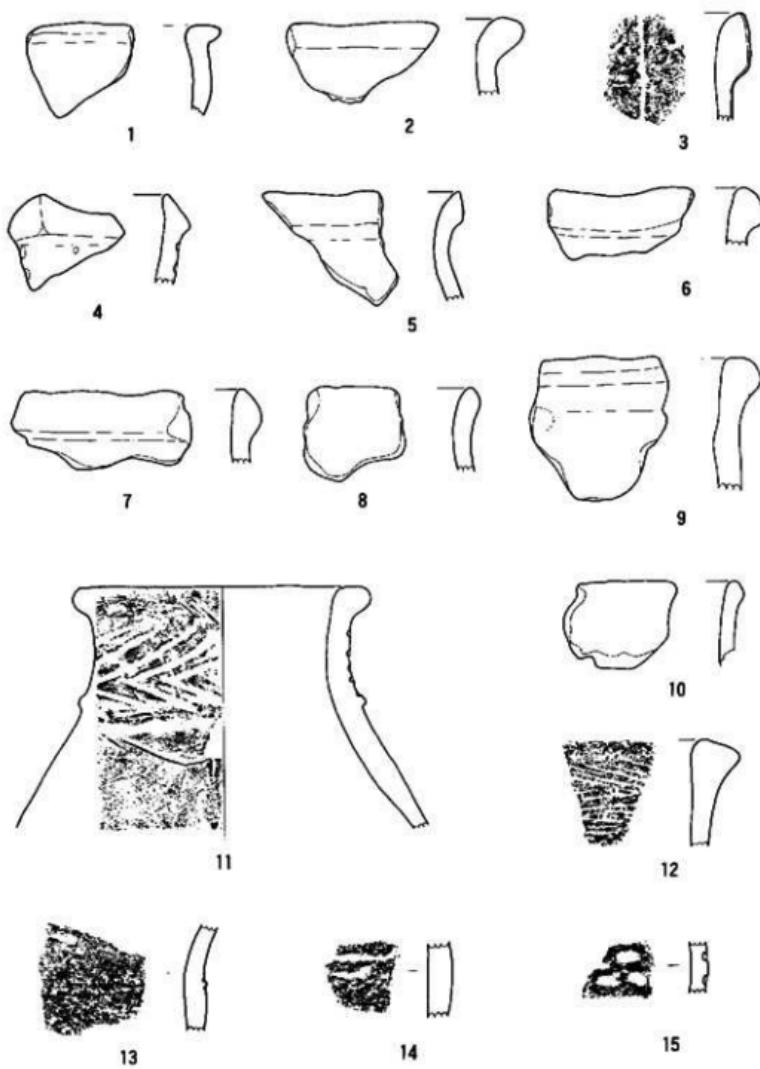


図19 第2号遺構出土土器

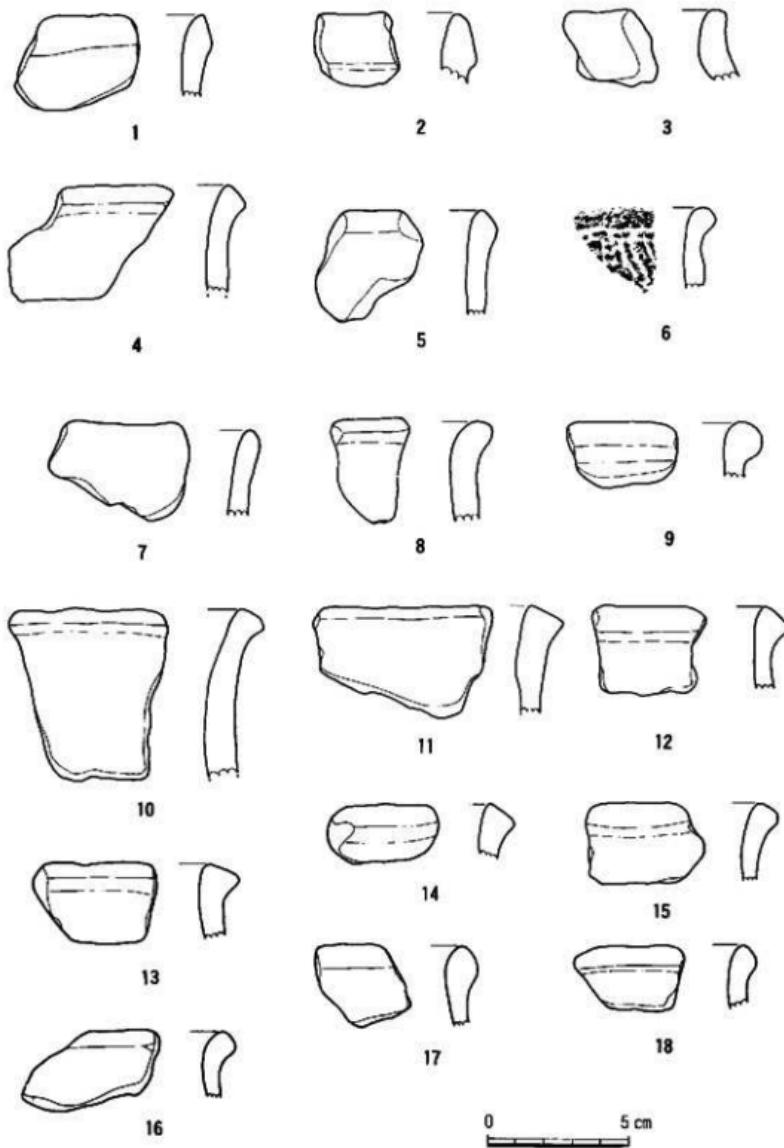


図20 第5・6・7・8号造構出土土器

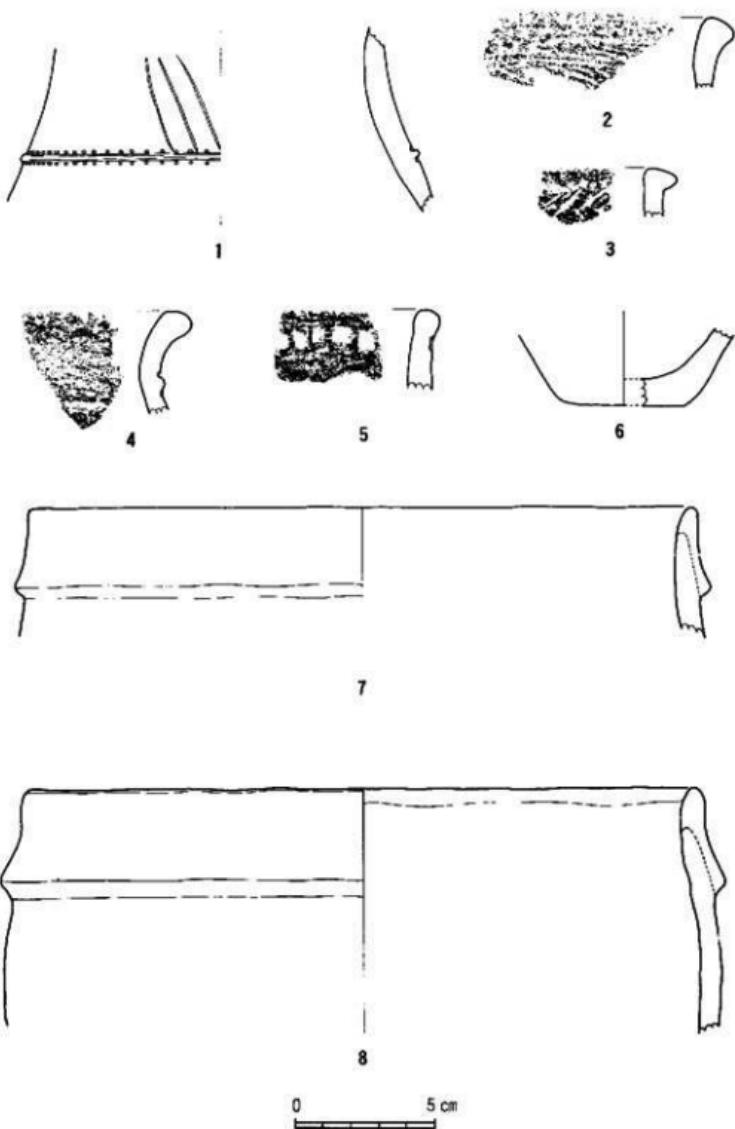


图21 第8号遗構・1号炉付近・層序不明土器

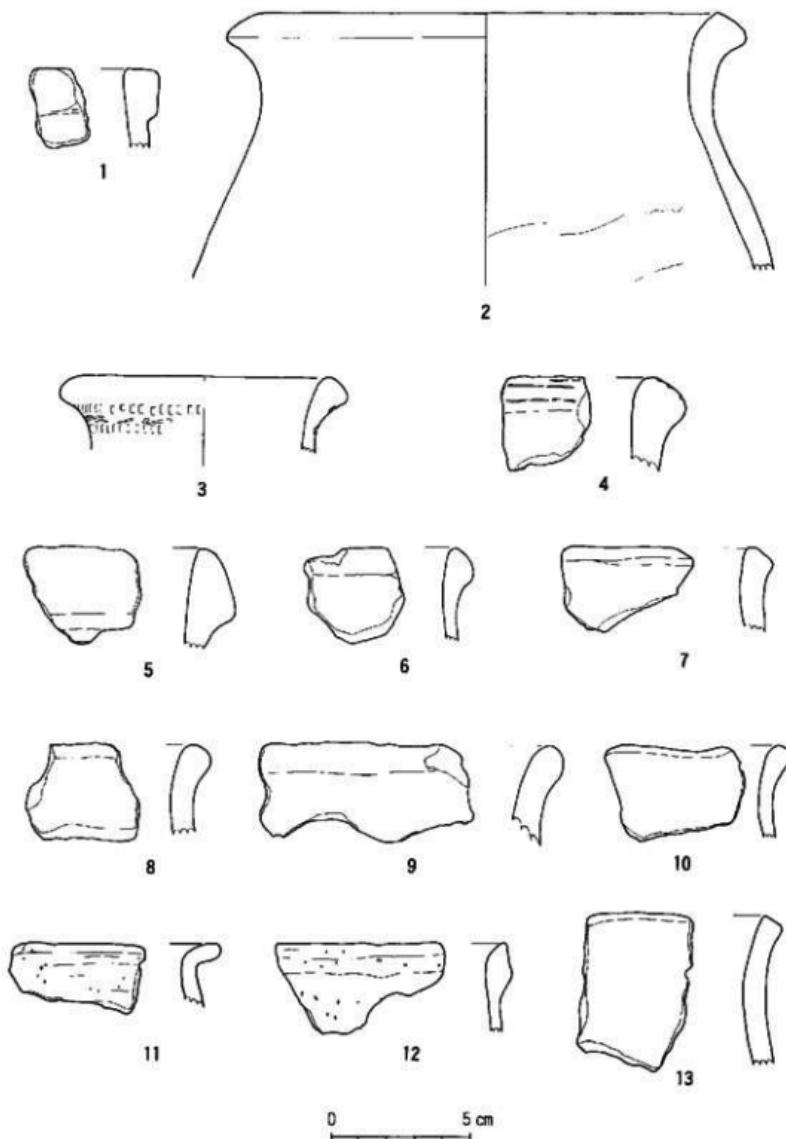


圖22 層序不明土器

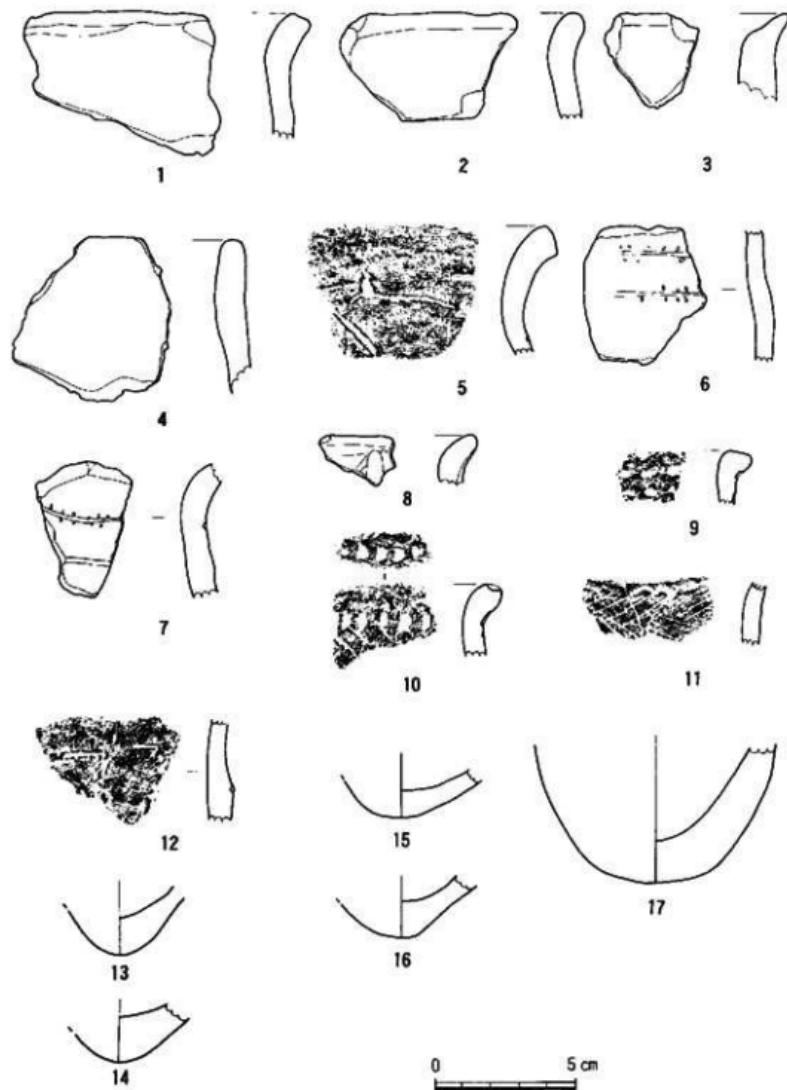


図23 層序不明土器

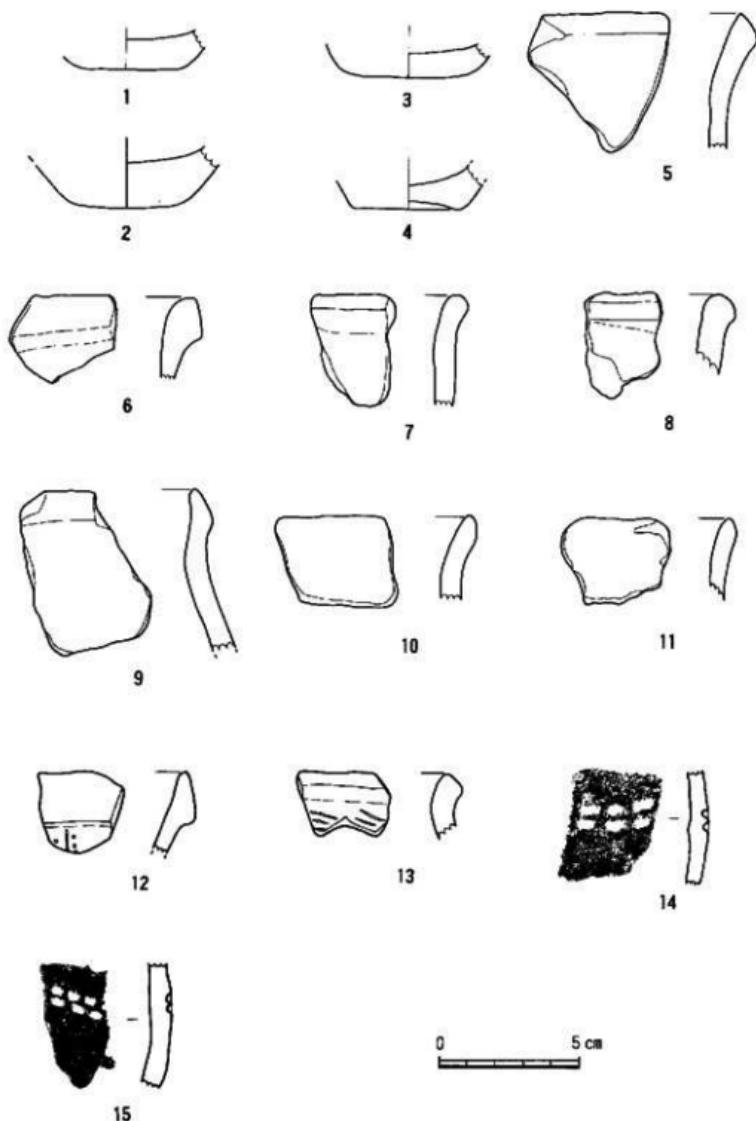


図24 層序不明・表面採集土器

(2) 石器

石器観察一覧(1)

拂団番号 図版番号	出土地区 出土層位	法 量	cm g	器 種	石 質	観察事項
25-1	表面採集		(17.0) × 6.0 × 4.7	石 千枚岩	緑色	比較的大型の棒状礫を用いている。全面とも わりと丁寧に研磨を施しているが、基部上方に 調整剥離面が消えきらずに残っている。刃部は 強い衝撃により欠失しているが、全体の形状よ り両刃になると思われる。基礎部に漸次細くな っており、いわゆる乳棒状石斧になるものと考 えられる。
			(740)			
33-1	表面採集		(16.6) × 7.0 × 4.3	石 千枚岩	緑色	かなり重厚な石斧である。研磨は全面とも丁 寧に施している。刃部はバランスが悪く、裏面 が砥ぎなおされていることがうかがえる。使用 の際の衝撃により基部中央で横折れしている。
25-2	表面採集		(360)	石 千枚岩	緑色	比較的重厚な両刃石斧である。全面とも丁寧 な研磨を施し、光沢を有している。使用的際の 衝撃により、左側辺部から斜め方向に纏割れし ている。刃先は一部刃こぼれしている。刃部の 裏面に斜位の使用線状痕がみられ、縦斧として 使われたようである。
33-2	表面採集		(265)	石 千枚岩	緑色	中型の両刃石斧である。研磨は徹底しておら ず、表裏面の一部と両側辺に調整時の剥離面が 消えきらず残っている。刃部が偏刃をなしてい ることより、縦斧として使われたようである。
25-3	C-6 第2層		(9.5) × (6.0) × (4.0)	石 千枚岩	緑色	D-6 第1層
33-3			(210)	石 千枚岩	緑色	比較的扁平な礫を用いている。表裏面に研磨 を施すが徹底はしていない。両側辺のほぼ中央 に抉りがみられるが、緊縛のためと考えられる。 刃部は敲打による潰れが著しく、たたき石に転 用されたことがうかがえる。
25-4	E-4 第2層		9.5 × 5.2 × 2.6	石 千枚岩	緑色	比較的扁平な礫を用いている。表裏面に研磨 を施すが徹底はしていない。両側辺のほぼ中央 に抉りがみられるが、緊縛のためと考えられる。 刃部は敲打による潰れが著しく、たたき石に転 用されたことがうかがえる。
33-4			190	石 千枚岩	緑色	
25-5	D-6 第1層		(8.1) × 6.0 × 2.5	石 千枚岩	緑色	比較的扁平な礫を用いている。表裏面に研磨 を施すが徹底はしていない。両側辺のほぼ中央 に抉りがみられるが、緊縛のためと考えられる。 刃部は敲打による潰れが著しく、たたき石に転 用されたことがうかがえる。
33-5			(210)	石 千枚岩	緑色	

※ () 内の数字は現存部の最大値を示す。



图25 石斧

石器観察一覧(2)

井戸番号 岡版番号	出土地区 出土層位	法量 cm g	器種	石質	観察事項
26-1	F-3	(6.8) ×	石斧	緑色 千枚岩	わりと厚みのある両刃石斧である。研磨は刃面を主体に施されているが、左側辺に調整の痕の敲打痕が残っている。裏面は使用時の打撃により、かなり剥離している。その後にも刃部を砥きなおして再利用しているが、基部中央で横折れした後に廃棄されたようである。
		(5.8) ×			
		(3.4)			
34-1		(200)			
26-2	表面採集	(5.2) ×	石斧	変輝緑岩	中型の両刃石斧である。研磨は比較的徹底しており、表面の一部に調整剝離面が残っている。刃部は敲打による潰れが著しく、たたき石として使用されていたことがうかがえる。基部中央で横折れしている。
		6.1 × 2.9			
34-2		(140)			
26-3	J-3 第2層	(9.2) ×	石斧	石 変輝緑岩	比較的重厚な石斧で、全面とも丁寧な研磨を施している。横折れにより刃部は消失しているが、形状より両刃の縦斧になると思われる。基端も若干剥離している。
		(5.9) ×			
		(3.4)			
34-3		(280)			
26-4	F-3 第1層	(7.7) ×	石斧	緑色 千枚岩	基部中央で横折れした石斧の破片で、刃部を含む全体の形状は判然としない。研磨は比較的大入念にはどこしているが、表裏面の一部に調整剝離面が消えきらざつしている。
		(5.0) ×			
		(2.3)			
34-4		(120)			
26-5	C-6	(6.3) ×	石斧	変輝緑岩	比較的幅の狭い両刃の石斧で、強い衝撃により横折れしている。表裏面ともわりと大入念に研磨を施すが、一部に調整時の敲打痕が消えきらずに残っている。刃先は剥離が著しい。
		(4.5) ×			
		(2.3)			
34-5		(65)			
26-6	F-0	(1.4) ×	石斧	緑色 片岩	扁平な頭を用いている。研磨はそれほど徹底していない。使用時の衝撃により横折れし、その後に縦割れしている。破損後も再生して利用されている。刃先はかなり潰れている。
		(4.8) ×			
		1.1			
34-6		(60)			

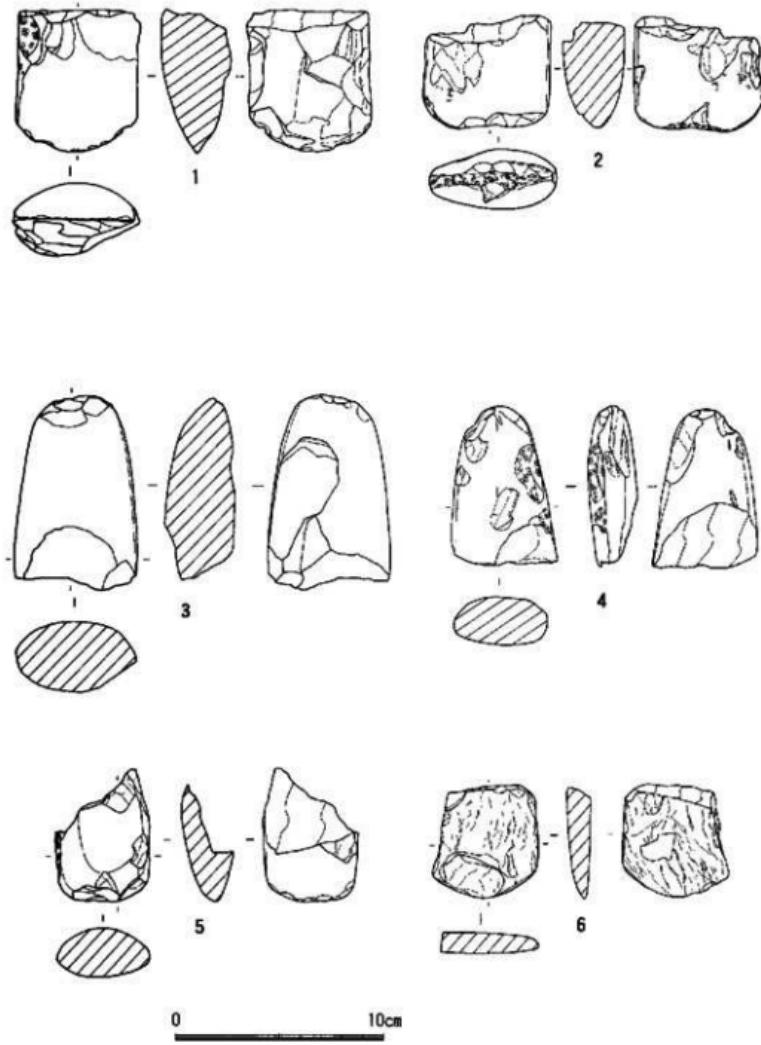


图26 石斧

石器観察一覧(3)

掲出番号 図版番号	出土地区 出土層位	法 量 cm g	器 種	石 質	観察事項
27-1	E-5 第1層	8.2 × 4.7 × 1.9	石 斧	緑色 千枚岩	基部、刃部ともにバランスのとれた片刃石斧である。研磨もかなり徹底しており、光沢を有するほどである。刃部は裏面からの延びだしが強く、片刃状を呈する。刃先に縦位の使用線状痕がみられることより、横斧として使われたことがうかがえる。
35-1		130			
27-2	A-1・2 1号遺構	8.5 × 4.3 × 1.7	石 斧	緑色 千枚岩	上記の標品同様に、比較的バランスのとれた片刃石斧である。研磨は入念に施しているが、裏面に調整敲打痕が消えきらず残っている。裏面の刃先に縦位の使用線状痕がみられることより、横斧として使われたことがうかがえる。
35-2		105			
27-3	C-1 第1層	8.5 × 4.7 × 2.5	石 斧	変 輝 緑 岩	わりと製作課程の判る資料である。打削調整を施して形を整えている。その後に刃部のみを研磨して仕上げている。刃部は裏面側からの延び出しで片刃状を呈する。刃先は若干刃こぼれしている。
35-3		155			
27-4	D-3 第2層	6.7 × 5.1 × 1.7	石 斧	緑色 千枚岩	平面観がバチ形になる、比較的小型の両刃石斧である。研磨は刃面を中心にして裏面のみ施している。両側片の刃部側に緊縛のためと考えられる抉りがみられる。刃先に縦位の使用線状痕がみられることやサイズ等から木T用の手斧であったことがうかがえる。
35-4		90			
27-5	E-5 第2層	(5.5) × 4.3 × 1.8	石 斧	緑色 千枚岩	わりとバランスのとれた小型の両刃石斧である。研磨も入念に施しており、光沢を有するほどである。若干の刃こぼれがみられるが、使用線状痕は判然としない。基礎部は欠失している。
35-5		(75)			
27-6	F-7 第3層	(5.6) × 3.9 × 1.8	石 斧	斑 柄 岩	バランスのとれた小型の両刃石斧である。全面とも入念な研磨を施している。刃先はかなり刃こぼれがみられるが、使用線状痕は判然としない。基礎部も大きく破損している。
35-6		(65)			

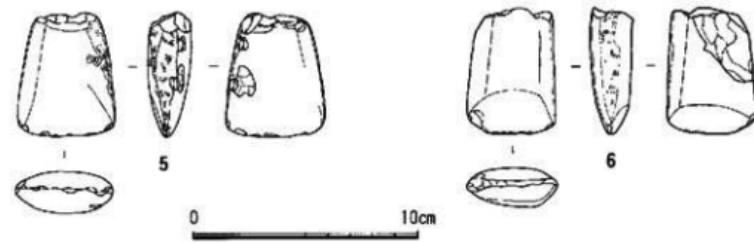
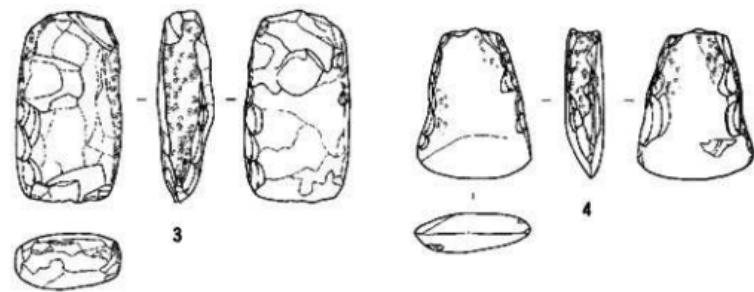
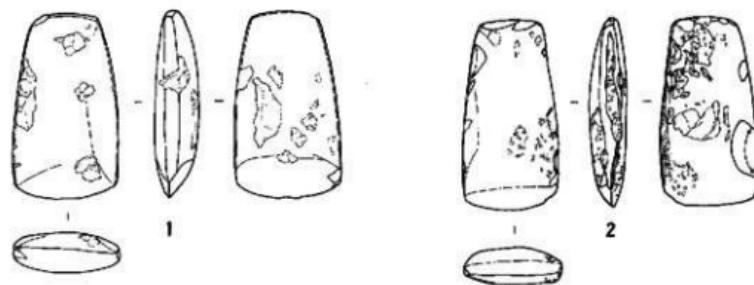


图27 石斧

石器観察一覧(4)

種別番号 図版番号	出土地区 出土層位	法 量	cm g	器 種	石 質	観察事項
28-1	D-1 第2層	15.8 × 9.5 × 6.1		た た き 石	砂 岩	比較的大型の梢円錐を用いている。加工を施さずにそのまま利用している。右側辺と下端部が使用により潰れている。表面と裏面の一部に磨り痕がみられることより、すり石としても使われたようである。
36-1		1,410				
28-2	G-7	8.7 × 7.1 × 3.1		た た き 石	砂 岩	扁平な凹縫をそのまま用いている。上端と下端部は使用による潰れが著しい。右側辺にも軽微な使用敲打痕がみられる。
36-2		270				
28-3	不明	13.5 × 7.2 × 5.3		た た き 石	砂 岩	ほぼ三角形状を呈する鍥を用いている。穂の部分をうまく活用し、表面側、左右側辺および下端部は使用時の敲打によりかなり潰れている。
36-3		665				
28-4	A地点	(13.6) × (6.3) ×		た た き 石	砂 岩	ほぼ梢円形を呈する鍥を用いていたことがうかがえる。縦割れしているが、表面の中央に敲打によるくぼみがみられ、左側辺も打剥が著しく、右側辺も同様に使われていたと思われる。
36-4	表面採集	(4.0) (410)				
29	A地点 2号遺構	(22.7) × (24.8) × 8.9 (7,200)		石 英 班 皿	石 英 班 岩	かなり大型の石皿である。半裁しているが、現状より平面觀が長方形をなすものであることがうかがえる。表面に幅12cmの凹面を有する。裏面に2個の脚をつくりだしているが、本来は4個あったものである。このような脚付きの石皿は他に出土例をみない。出土状況からすると、破損後は遺構の石組みの一部に使われたようである。
36-5						

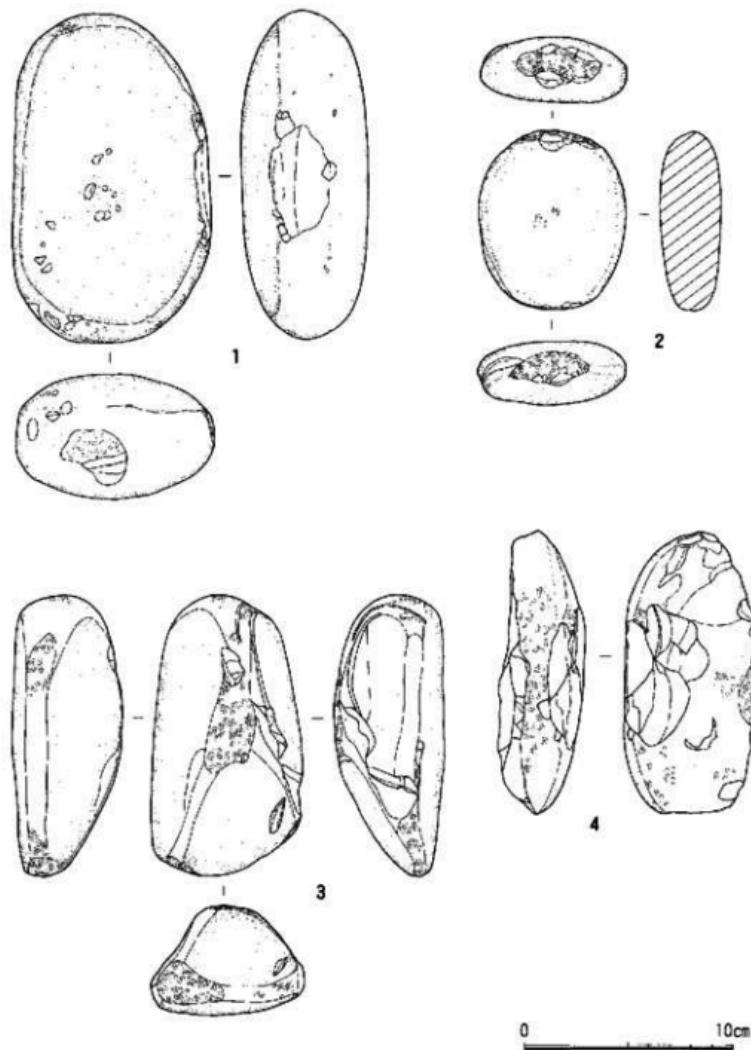


図28 たたき石

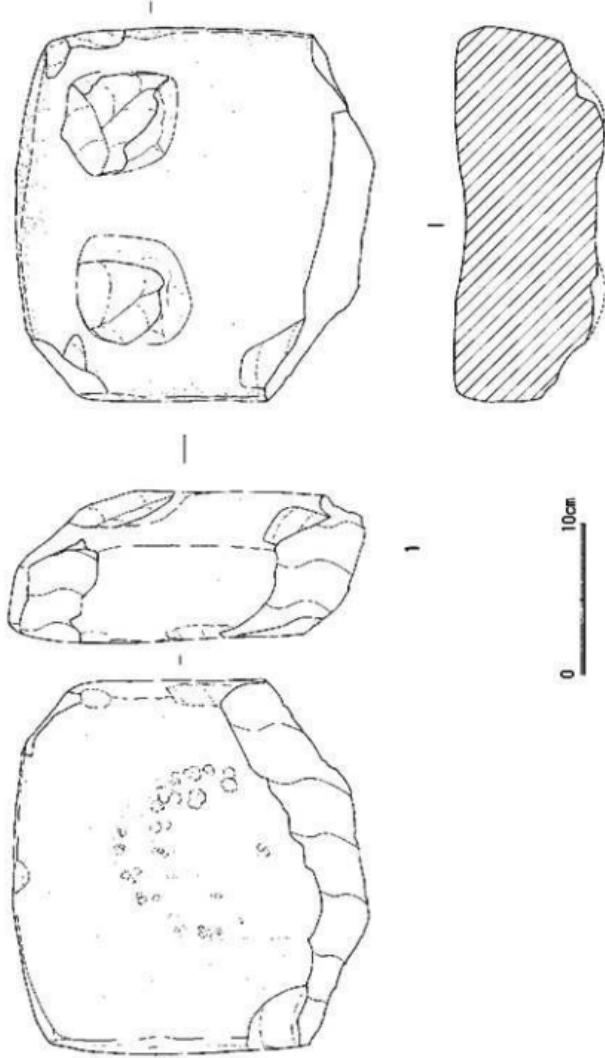


圖29 石皿

第2節 宇佐浜B貝塚

1. 調査の概要

宇佐浜B貝塚の調査は、1967年の夏と1969年の春に2度にわたって実施した。第一次調査では学生を含めて10名が本貝塚の発掘に従事した。

先ず、地表踏査により遺物の分布状況を確かめ、試掘トレンチを保安林の脇に設けて発掘調査を行った。40cm×3mのトレンチを15cm単位で掘り下げたが、遺物包含層は確認できなかった。遺物包含層を確認するために、第Ⅰトレンチの西側に第Ⅱ・第Ⅲトレンチを設定して発掘調査を行った。それぞれ、1.5m四方のグリッドを第Ⅱトレンチに3グリッド、第Ⅲトレンチに5グリッドを設けた。層序は基本的に3枚からなり、第1層Bと第2層が遺物包含層で、土器片や貝殻などを多く含んでいる。

遺物包含層の広がりの確認や遺構等の検出を目的に、第Ⅲトレンチ第2グリッドの東側に直行するかたちで新たにトレンチを設けて発掘をした。第Ⅲトレンチ第13グリッドの第2層下部において、ヤコウガイやチョウセンサザエ・シャコガイなどが散乱した状態で出土し、南壁側で板石が比較的まとまって検出されたことから、何らかの遺構と考えられたが判然としなかった。

各グリッドともほぼ発掘を終了し、側壁面の実測や写真撮影等を行ってからトレンチの埋め戻し作業を実施して全日程を完了した。

第二次調査は1969年3月18日から開始した。宇佐浜A遺跡も並行して発掘調査を実施するため、本貝塚は6名の調査員があたることになった。前回の調査トレンチ（第Ⅲトレンチ）の東側に3グリッドを設けて発掘したが、プライマリーな遺物包含層が確認されず、発掘を打ち切った。その後、第Ⅲトレンチに向けて4グリッドを延長して発掘を行った。

第7グリッドの第2層上部において、アンボンクロザメガイの人為的な集積がみられ、その広がりと黒色混縞砂層の分布を把握するため北側にトレンチを延長し、第8・9グリッドとも第2層上部まで掘り下げたが、アンボンクロザメガイの集積は他に検出されなかった。

検出されたアンボンクロザメガイの集積を写真撮影して後、上部から一段づつ取りあげた。アンボンクロザメガイの集積は上面観がほぼ円形をなし、6~7段積み上げている。いずれも加工を施してなく、そのまま埋めたようである。最下段にはゴホウラが1個据え置かれた状態にあった。アンボンクロザメガイの集積を中心に、方形状の石組み遺構かと思われるものが第7・8・11・12グリッドの第2層15cmのレベルにおいて検出され、写真撮影と実測を行った。

各グリッドとも白砂層（地山）まで掘り下げた後に土層壁面の実測を行い、トレンチを埋め戻して発掘調査を完了した。

2. 層序と遺溝

層 序

本貝塚の主体部と遺物包含層の残存状況を確かめるために、遺物の分布状態を考慮して4ヵ所にトレンチを設定して発掘調査を行った。第Ⅰトレンチにおいては遺物包含層を確認することはできなかった。第Ⅱ・第Ⅲ・第Ⅳトレンチでプライマリーな遺物包含層が確認できた。以下、各トレンチの層序について簡単に述べる。

第Ⅰトレンチ

- 第1層 一 暗褐色を呈する砂層で、耕作により擾乱を受けている。
20~30cmの厚さをなし、貝殻などを若干含む。
- 第2層 一 黄褐色を呈する混礫砂層で、軽石を比較的多く含んでいる。10~20cmの厚さで土器等の遺物はまったくない。
- 第3層 一 白色を呈する砂層で、いわゆる地山である。

第Ⅱ・第Ⅲ・第Ⅳトレンチ

- 第1層A 一 黒褐色を呈する砂層で、耕作により擾乱を受けている。
30~45cmの厚さをなし、土器片や貝殻などを若干含む。
- 第1層B 一 黒褐色を呈する砂層で、未擾乱の遺物包含層である。
20~30cmの厚さで、土器片や貝殻などを多く含む。
- 第2層 一 暗褐色を呈する混礫砂層で、径4~5cmから拳大の礫を多く含んでいる。
遺物包含層で、20~30cmの厚さをなし土器片や貝殻などを含む。
- 第3層 一 黄褐色を呈する砂層で、地山への漸移層と考えられる。
10~20cmの厚さをなし、土器片などの貯入が見られる。
- 第4層 一 白色を呈する砂層で、いわゆる地山である。

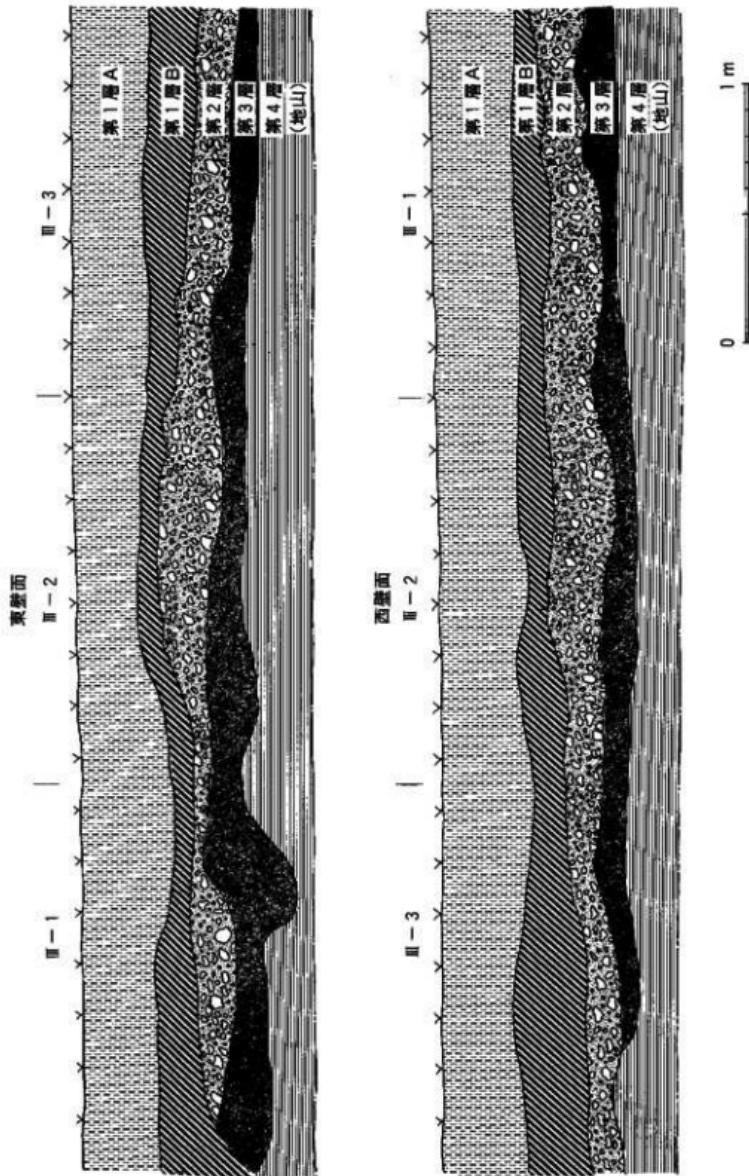


図30 第Ⅲトレンチ土層断面

遺構

発掘面積の関係で住居址などの明確な遺構は検出することができなかったが、各トレンチの第3層面で柱穴様の落ち込みが見られた。また、第2層上部において、方形状の石組み遺構と思われるものや疊敷きの床面と考えられるものが確認された。

特記すべきものとして、アンボンクロザメガイの集積遺構がある。第Ⅲトレンチ第7グリッドの第2層上部において検出され、直径約40cmの範囲にはほぼ円形状に積まれていた。蓋頂部をある一定の方向に向けるといったように、積み方にそれほどの規則性はなく、比較的雑然と積んでいる。他に同様な遺構がないか確かめるために隣接した第8・9グリッドおよび西壁に平行して設定した3グリッド(10・11・12)をそれぞれ第2層上部まで掘り下げたが、確認されなかった。ただ、集積遺構を中心に、前記した方形状の石組み遺構が検出され、住居址の可能性がでてきた。すなわち、住居址内の床面を掘り広めてアンボンクロザメガイを埋納したことが考えられる。

43点のアンボンクロザメガイを概ね6～7段に積み上げ、最下段には1点のゴホウラが据え置かれた状態にあった。それらの貝はいずれも加工を施していないことから、中身もそのまま入った状態で埋めたことがうかがえる(アンボンクロザメガイなどのイモガイ類は貝殻を割らないことには中身を取り出すことができない)。貝の大きさは、蓋頂の径が6cm、殻長9cmのものが主体をなし、アンボンクロザメガイとしてはそれほど大型の部類ではない。

このような貝の集積遺構は、発掘調査当時には他に検出事例がなく、性格等が今一つ判然としなかった。ところが、近年になって本貝塚とほぼ同時期の伊江島具志原貝塚や本部町の具志堅貝塚など10箇所の遺跡で同様な集積遺構が検出され、その性格等が判ってきた。これらの集積遺構の検出状況や伴出する遺物等から、九州の弥生時代前期後半から中期にかけて見られるゴホウラやイモガイ製の腕輪の原材料としてストックされたもので、九州地域との交易品の一つであったことがうかがえる。集積遺構が検出されたほとんどの遺跡において、九州の弥生土器が出土していることは、交易を裏付ける資料となっている。本貝塚でも弥生中期前半に位置づけられる土器が10箇点出土している。

沖縄において初めて検出された貝の集積遺構が、本貝塚のものであることは注目に値するものである。

4. 出土遺物

2次に亘る発掘調査で得られた遺物は、大きく人工遺物と食料残滓としての自然遺物に分けられる。前者は土器が最も多く、次いで貝製品・石器となっている。後者は貝類が圧倒的に多く、他に獸・魚骨等が出上しているが、植物遺存体は土壌の関係で腐食し、まったく残っていない。

以下、これらの遺物について簡単に述べる。

(1) 土 器

今回の調査で得られた土器は、総数5,609点を数える。完形品はなく、すべて破片である。わずかに口径推算可能な資料があり、それらのものは図上復元を試みた。器種は壺形、深鉢形、浅鉢形の3種類が確認できた。文様を有するものは少なく、ほとんどが無文土器である。底部の形状は尖底が主体をなし、上げ底やくびれ平底などが若干みられる。

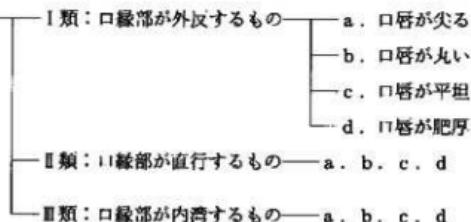
沖縄貝塚時代後期に属する土器が圧倒的多数を占めるが、他の地域から持ち込まれた移入土器（弥生土器）も出土しており、当時の文化交流の範囲がうかがい知れる資料である。

これらの土器を次のように分類した。

沖縄後期土器

1. 壺形土器

2. 深鉢形、浅鉢形土器



3. 底 部

移入土器（弥生土器）

1. 壺形土器

2. 鉢形土器、甌形土器

3. 脚 部

4. 底 部

表3 沖縄後期土器出土状況

分類 属位	壺形 土器	深鉢・浅鉢形土器																計		
		口 緑 部								胴 部				底 部						
		I 類			II 類			III 類		不 明	有 文	有 孔	無 文	ニ チ ユ ア 土 器	尖 底	底 A 類	底 B 類	く び れ 平 底	半 平 底	形 状 不 明
1 層	A	3	3	2	3	3	4	1	4	19	16		1836	3	1	1	2		1	1902
	B	2	4	2	9	8	5		2	36	18	1	1660	2	5	1				1755
2 層	1	4	5	3	4	2	7	1	1	6	10		66	4	1		1	1	2	119
3 層		1						1		1			13							16
表 採		1	2	2	4	1	5		3		2		119	1						142
層不明		2		2	5	2	3		3	15	9	1	757	1	1	3				804
計		1	13	14	11	25	16	25	2	13	77	55	24451	1	7	13	3	2	3	1 3 4738

表4 弥生土器出土状況

分類 属位	壺形 土器	甌形・钵形土器					計
		口 緑 部		胴 部		不 明	
		口	緑	部	部		
1 層	A		2		1		3
	B		3	3	1	1	8
2 層		1	11	4		1	17
3 層			1				1
表 採				1			1
層 不 明			1	4			5
計		1	17	12	2	2	35

沖縄後期土器

1. 壺形土器

図31の1に示した1例のみに得られた。推算口径が10cmを測るわりと広口の壺である。文様はなく、器表面はナデ調整を施す。裏面は口縁上部のみナデ調整により仕上げられている。胎土は粗く、石英砂粒や輝石粒などを含む。焼成は良好で、色調は橙褐色を呈する。

2. 深鉢形、浅鉢形土器

本貝塚の土器の中で最も多く得られたグループで、全体の約92%を占めている。しかし、器全体の推察できる資料は少なく、図31の2～5、図32の1～4に示したわずか8点である。残りは小破片のため識別不能な資料で、あえて細分は行わなかった。

深鉢形土器

図31の2～5、図32の1～3に示した7点である。いずれも口縁部から胴部まで残る比較的大きい資料であり、口径の推測も可能であることから図上復元を試みた。すべて無文である。

図31の2は胴部が僅かに張り、頸部で若干くびれ、口縁部は弱い外反を示し、口唇が尖るタイプである。推算口径は12cmを測るわりと小型の土器である。胎土は粘質で、混和材として石英砂粒などを含む。器面は表裏面ともナデ調整を施すが確である。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。口縁部の形状はI類aに属する。

同図3も僅かに胴が張り、肩の部分が後をなすように頸部がしまり、口縁部は弱い外反を示す。口唇は折り曲げる格好で丸く仕上げられている。推算口径は18.6cmを測る。胎土は砂質で、石英やチャートなどの砂粒を含む。器面はナデ調整を施し、色調は暗褐色を呈する。口縁部の形状はI類bに属する。

同図4は胴部から口縁にかけて漸次聞く器形をなし、口唇は平坦に仕上げている。推算口径が29.6cmを測るわりと大型の土器である。器面はナデによる入念な調整を施し、胎土に石英砂粒などを含んでいる。焼成は良く、色調は暗褐色を呈する。口縁部の形状はI類cに属する。

同図5は胴が僅かに張り、口縁が直行するタイプである。器面はナデ調整を施すが、裏面に指圧痕などが残っている。胎土は砂質で、微粒石英などを多く含む。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。口縁部の形状はII類bに属する。

図32の1～3は口縁が直行するもので、口唇はいずれも平坦に仕上げられている。推算口径は1が11.0cm、2が13.2cm、3は13.5cmを測り、三者とも比較的小型の土器である。胎土は砂質で、粗砂粒等を多く含む。器面は、裏面に僅かに指圧痕を残すもの（2・3）と入念にナデ調整を施しているもの（1）がある。焼成はすべて良好で、器色は暗褐色を呈する。口縁部の形状はII類cに属する。

浅鉢形土器

図32の4に示したもので、口縁から胴部まで残存する資料であり、岡上復元を試みた。肩の部分で内側に大きく折れ曲がり、さらに頸部から「く」の字形に外反する。推算口径は9.2cmを測り、胎土は粘質で微砂粒を含む。器表面は入念なナデ調整を施すが、裏面は積み痕がみられる。焼成は良好で、色調は橙褐色を呈する。口縁部の形状はI類aに属する。

鉢形不明

I類aに属するものを図32の5～15に示した。口縁上部から外反するタイプ（5～7・15）と頸部付近から外反するタイプ（8～14）があるが、後者が多く、外反の度合いも大きい。胎土はすべて粘質で、粗砂粒を混入するもの（10・13・15）と微砂粒を含むもの（5～7・8・9・11・12・14）がある。焼成は良好で、全体的に堅緻である。色調は橙褐色を呈するもの（6・7・8～13・14）と暗褐色を呈するもの（5・12・15）がある。

I類bに属するものを図33の1～12に示した。口縁部から外反するタイプが多い。比較的小径の小さいもの（1・2）と大きいもの（7・8）があり、小型のタイプは深鉢形のI類bに酷似し、それに属する可能性が高い。1・7は口唇部を外側に折り曲げて整形しており、その痕跡が消えきらず残っている。器面はほとんど入念なナデ調整を施すが、雑な仕上げ（7・9）もある。胎土に含まれる混和材は石英砂粒がほとんどである。

I類cに属するものを図33の13～21に示した。口縁は外反の強いタイプ（13・14・18）と弱いタイプ（15・16・19・20）がある。文様を有する資料が數点得られた。僅かなものであるが、施文部位や文様の要素にバリエーションがみられる。18は口唇に刻目を施し、口縁には曲線文を描いている。19は口唇に刻目を施し、凹線により口縁の表裏面に曲線文を描く。20は口縁部に縱位の沈線文を施している。14・21は口唇のみに施文するもので、前者は刺突文を後者は斜位の刻目をそれぞれ施している。器面は全体的にナデ調整が施されている。胎土は精選されたように細かく、微砂粒を少量混入するものが多いが、粗砂粒を含むもの（5）もある。焼成はいずれも良好である。色調は暗褐色を呈するもの（16・18）や赤褐色を呈するもの（13～15・17・19～21）がある。

II類aに属するものを図34の1～25に示した。直行口縁をなし、口唇が尖状になる一群の上器ですべて無文である。器面はナデ調整を施しているものの雑で、表裏面とも指圧痕を多く残している。胎土は粘質で、微砂粒を多く混入している。

II類bに属するものを図35の1～15に示した。口唇を丸く仕上げている以外はII類aと器面調整・胎土・焼成などが酷似している。13は唯一の有文土器で、口唇に刺突文を施している。

II類cに属するものを図35の16と図36の1～15に示した。直行口縁をなし、口唇を平坦に成形するグループである。図36の10は唯一の有文土器で、口唇に刺突文を施している。器面調整

はナデによるものが一般的で、胎土にはいずれも微砂粒を混入している。焼成は比較的良好である。色調は橙褐色を呈するものが主体をなし、他に暗褐色を呈するものである。

Ⅱ類dに属するものを図36の16・17に示した。口縁部に粘土組を貼付して肥厚帯をつくり出している。いずれも無文土器で、器面は入念にナデ調整を施している。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調はすべて橙褐色を呈している。

Ⅲ類に属するものを図36の18～21、図37の1～9に示した。口縁部が内湾するグループで、胴部から口縁部へ漸次すぼまるタイプと口縁部で急激に折れ曲がるタイプ（図36の20・図37の2）がある。器面調整は全体的に確で、指圧痕を残すものが多く、図36の18・図37の7～9は比較的良くナデ調整されているものである。胎土は粗いものと細かいものがあるが、いずれも砂粒を僅かに含む。焼成は良好で、色調は黄褐色を呈するもの図36の18、図37の1・2・5～7や暗褐色（図36の20）、橙褐色図36の19、図37の3・4・8・9などがある。図37の4は唯一の有文土器で、口唇に刺突文を施している。

その他の土器

先述した上器以外に有文胴部や有孔土器があり、ここで一括して扱うことにする。

有文胴部には「凸帯文+刻文」「刺突文+沈線文」「沈線文」などがあるが、小破片であることより全体的な文様構成は把握できない。

図37の12～20、図38の1～3は細沈線によって曲線文や綾杉文を施しているグループである。図38の4～9は巾広沈線により曲線文を施しているものである。同図10は叉状工具により鋸齒文を施し、11・13は竹管状工具によって刺突文と巾広沈線文を施している。14は刻文と斜位の沈線文を組み合わせたもので、15～21は刺突文のみを施している。図38の22・23、図39の1～6は断面が三角形を呈する凸帯と沈線文を組み合わせたものであるが、7～15は凸帯文のみ残っている。図39の10・11はいわゆる鞍状凸帯で、口唇部を挟むように凸帯を貼付している。図39の16は有孔土器で、径2mmの小孔を両面から穿っている。

図39の17は推算口径2cmを測るミニチュア土器と思われるものである。

3. 底 部

底部の形状が不明なものまで含めて32点得られた。尖底が最も多く、全体の78%を占め、次いでくびれ平底、半底となっている。いずれも焼成は良好で、比較的堅致なものが多い。

尖 底

底部の形状にいくつかのバリエーションがみられることにより、製作技法等の観点から下記のとおり分類した。

A類—底面に粘土塊を貼付し、器壁に比べてかなり厚みを有するもの。

- a - 底面が丸味、もしくは尖り気味になるもの。
- b - 底面が押し潰されて平坦になるもの。
- B類 - 底面と器壁がほとんど同じ厚みを有するもの。
 - a - A類のaに準ずる。
 - b - A類のbに準ずる。
 - c - 底面を押し上げて若干の上げ底になるもの。

A 類

図40の1～7に示した7点がA類aに属するもので、2は器壁の厚さが7mmに対し、底の厚さが24mmもあり、A類aの典型的なものである。1は僅かに粘土の貼付痕を残すもので、1は2に比べて底の厚みがなく、貼付する粘土量の少ないことがわかる。

図40の8～13、図41の1～7に示したものがA類bに属するものである。11は押川が著しく、くびれ平底のような形状を呈する。1は底面がわずかに上げ底になっている。7は立ち上がり部分の3ヶ所に抉りを入れ、底面が三つ葉のようになっているものである。

B 類

図41の8～10がB類bに属するもので、11・12がB類cに属し、上げ底になっている。

くびれ平底

図41の13・14・15に示した3点得られた。いずれも内底が尖底の内底のように、丸みをもって仕上げられている。14は13・15に比べてくびれの度合いが著しい。

平 底

図41の16に示したものである。外観が陶磁器の高台のような上げ底を呈し、立ち上がり外側に大きく開いている。高台の高さは3mmを測る。器表面は丁寧にナデ調整を施すが、内底面は雑に仕上げられている。形状から壺形上器の底部になるものと考えられる。

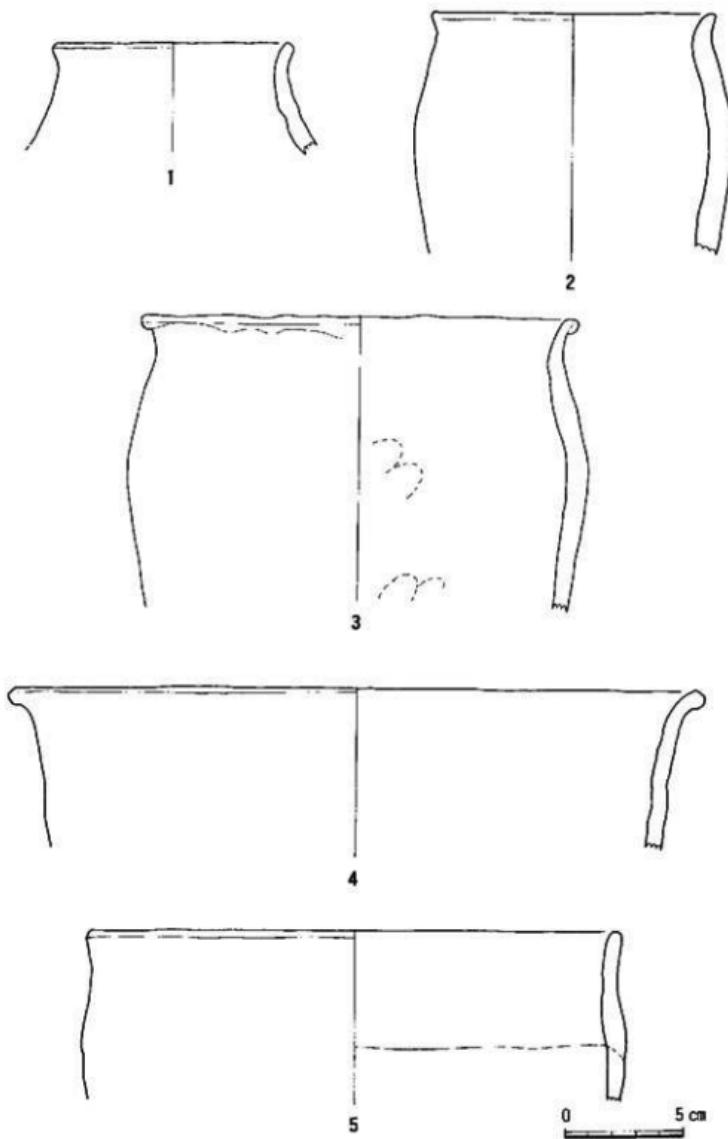


図31 沖縄後期土器(1)

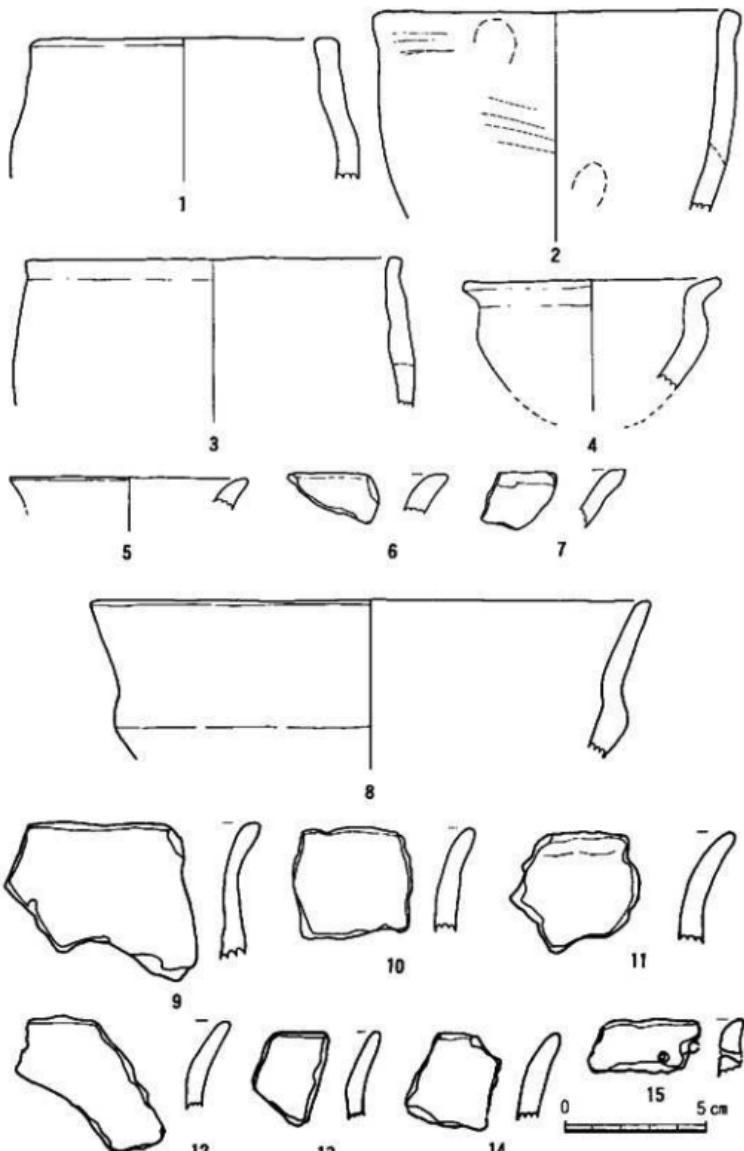


図32 沖縄後期土器(2)

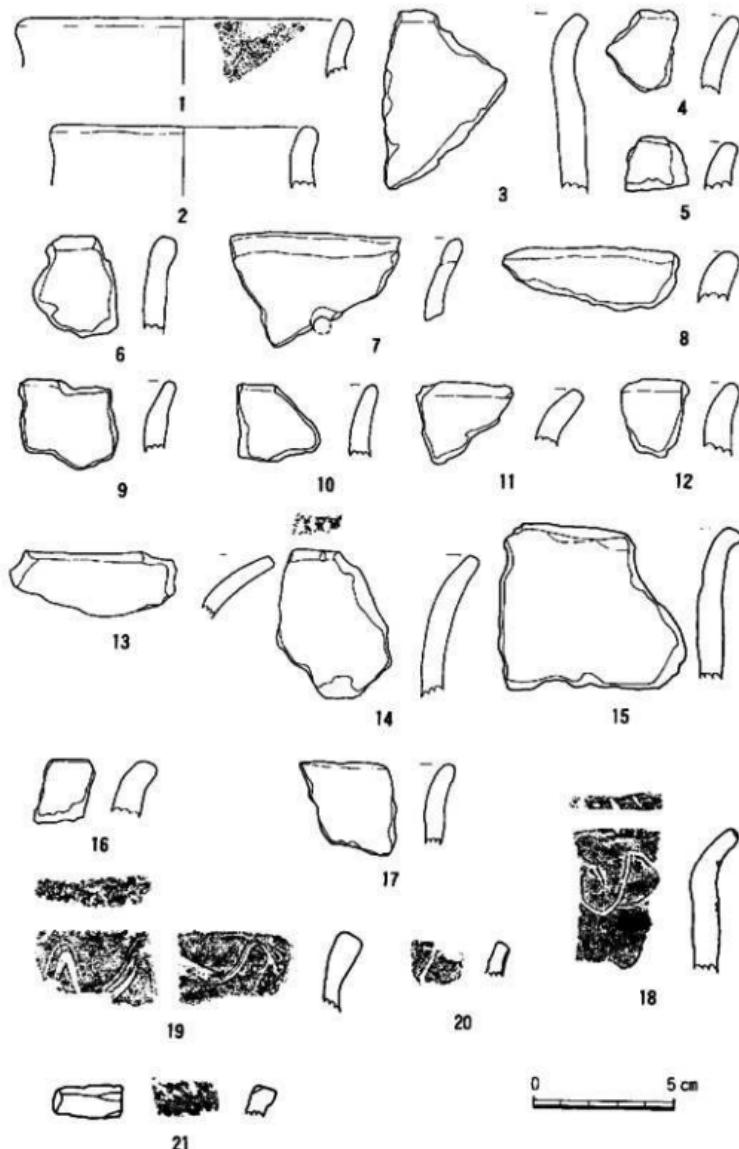


図33 沖縄後期土器(3)

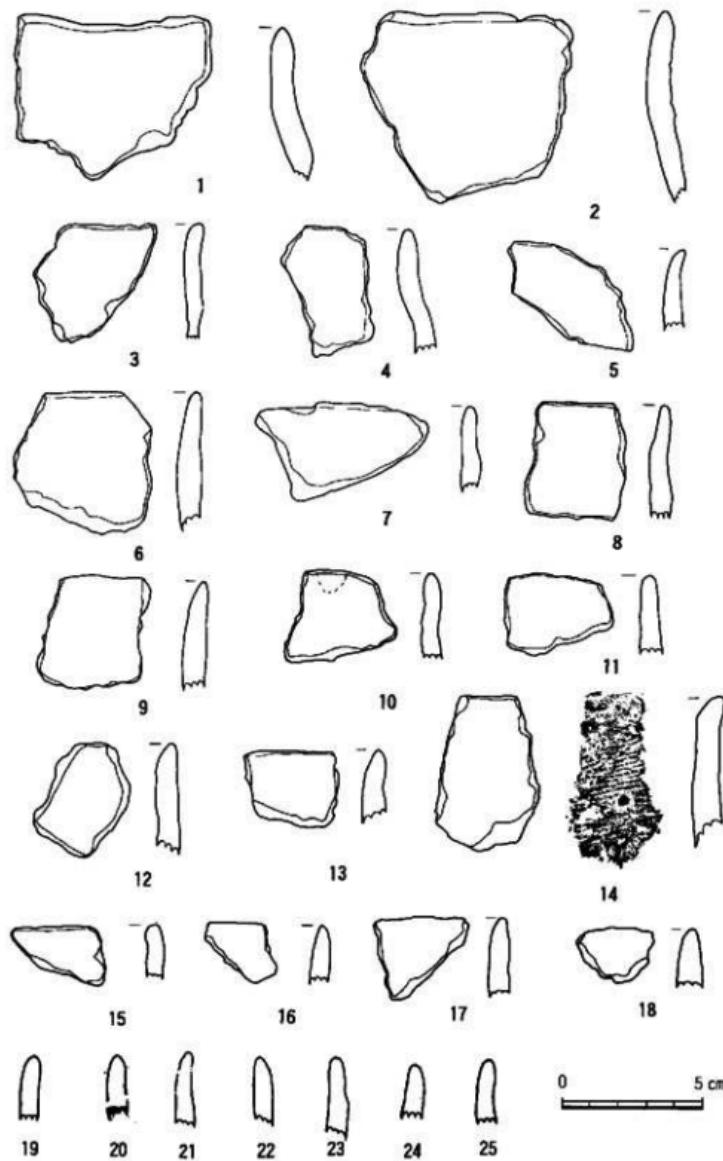


図34 沖縄後期土器(4)

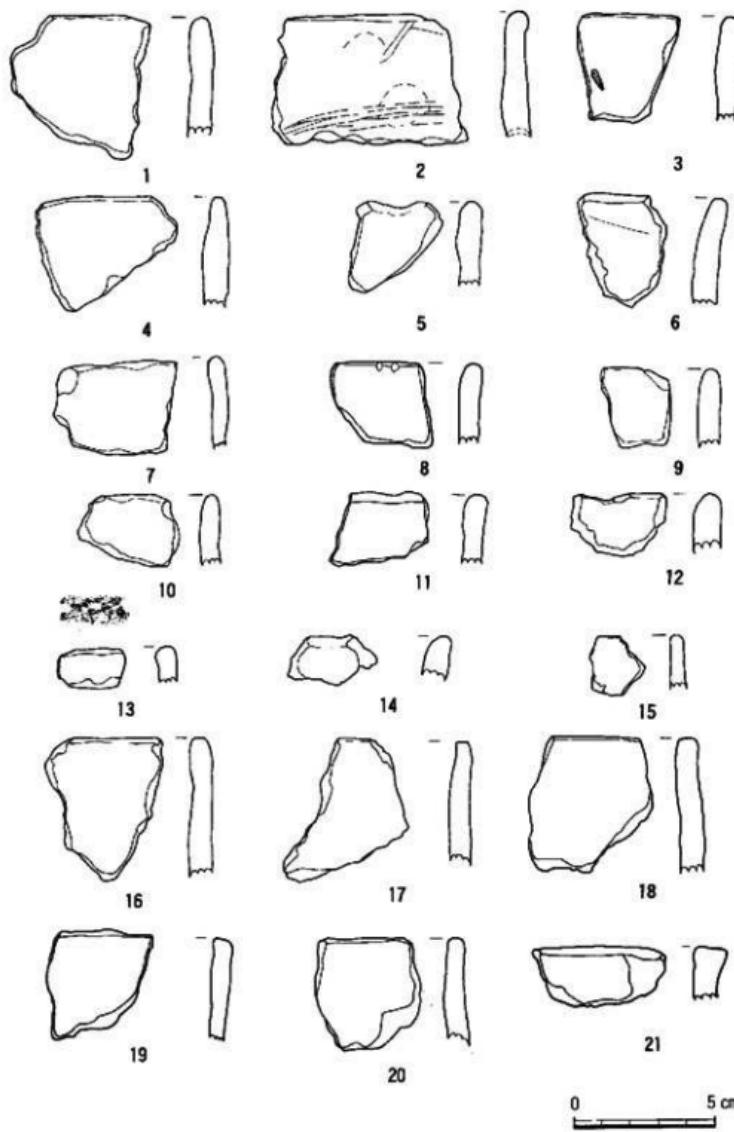


図35 沖縄後期土器(5)

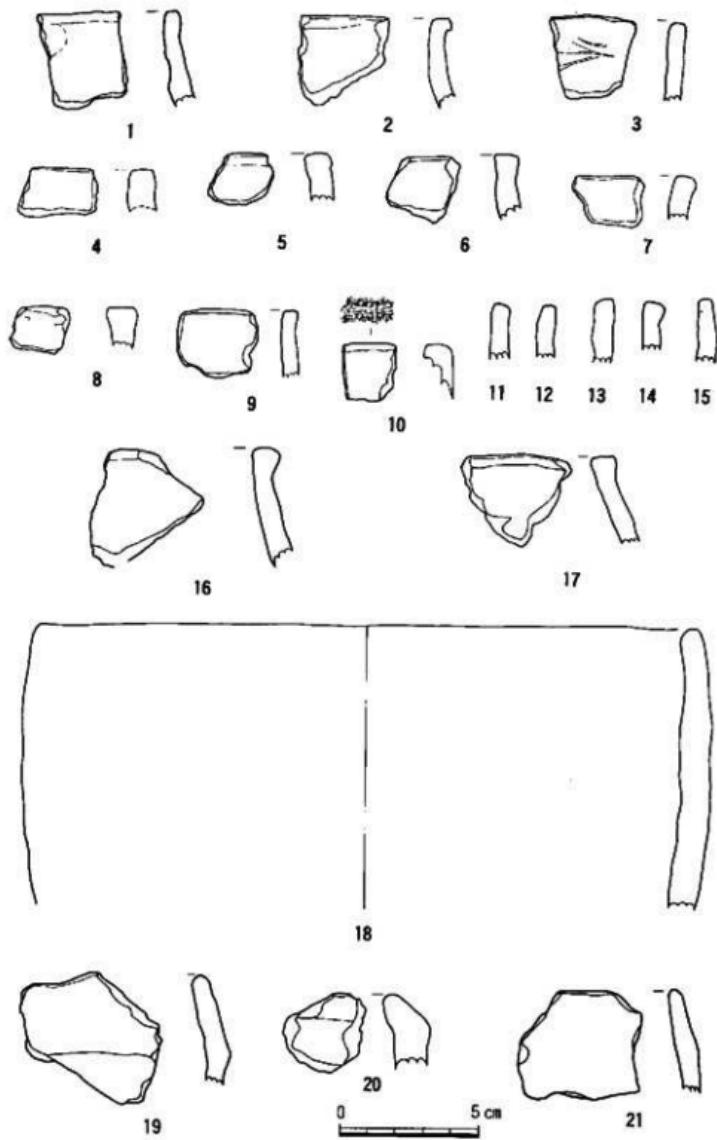


図36 沖縄後期土器(6)

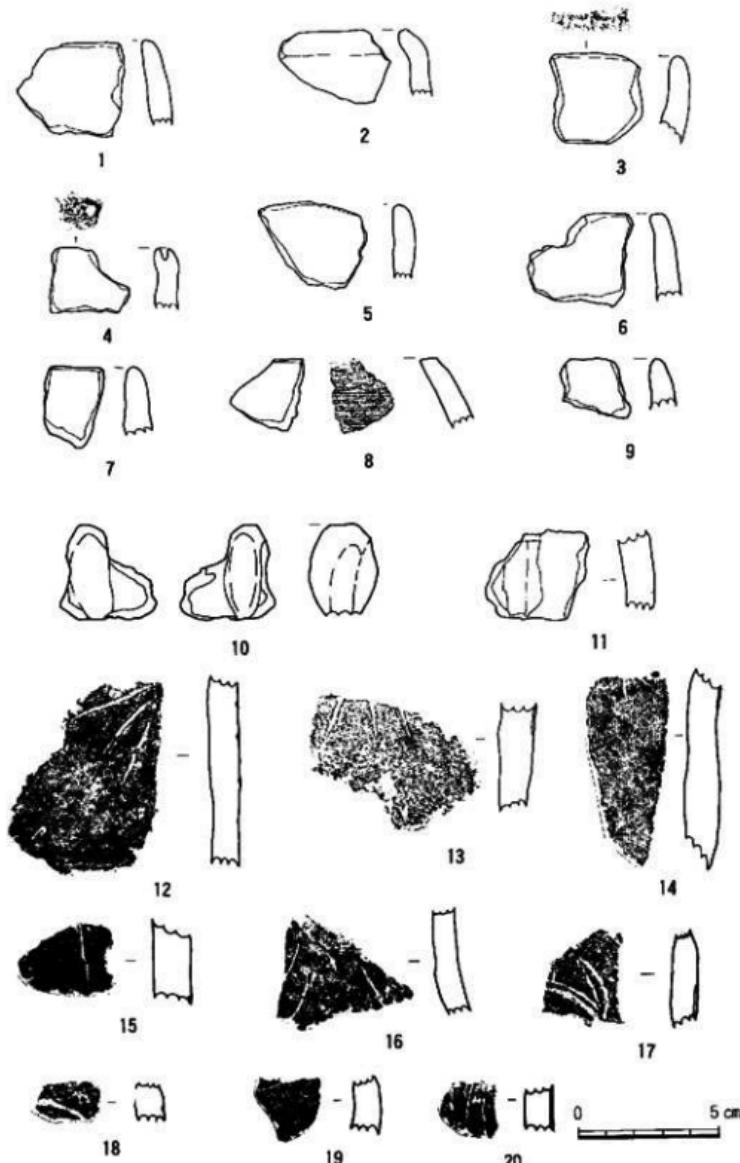


図37 沖縄後期土器(7)

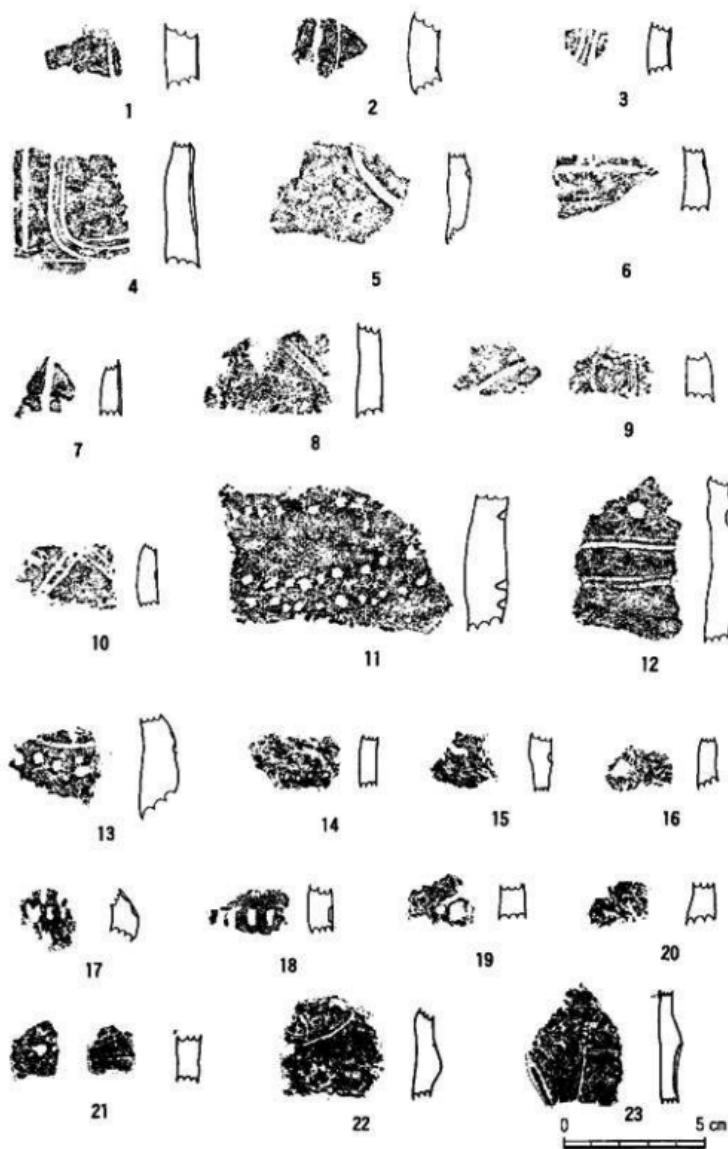


図38 沖縄後期土器 (8)

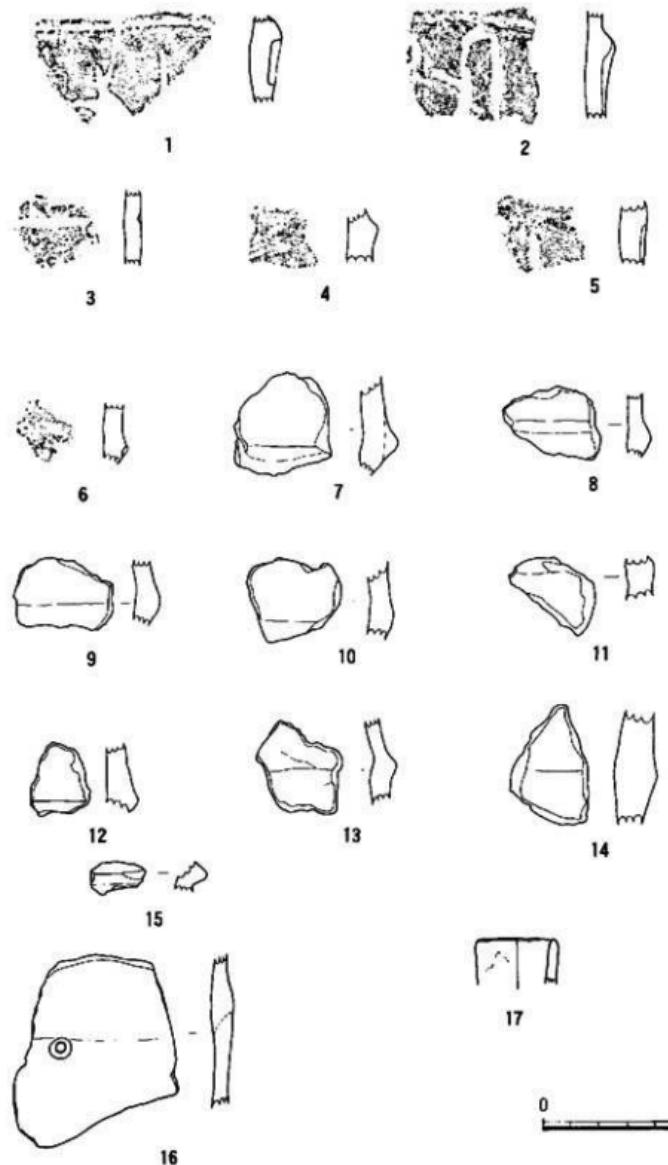


図39 沖縄後期土器(9)

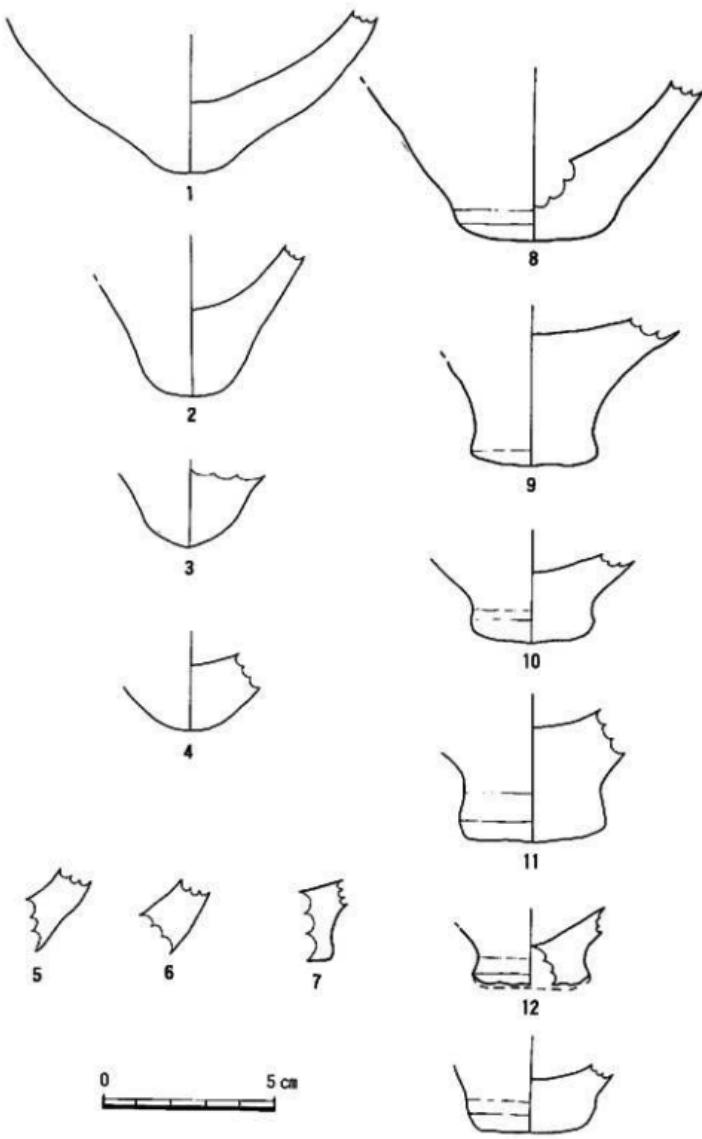


図40 沖縄後期土器(1)

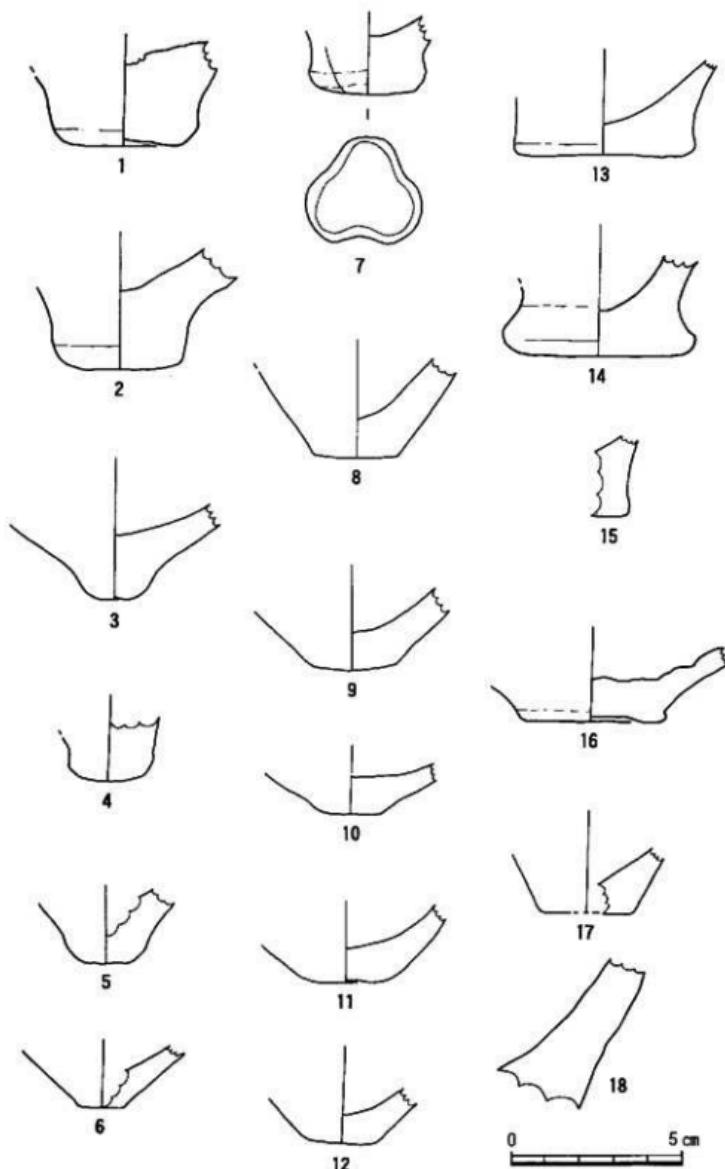


図41 沖縄後期土器(1)

移入土器（弥生土器）

本貝塚出土の沖縄後期十器に混じって、器形・胎土・器面調整・製作技術等が明らかに異なる一群の土器が得られた。いずれも弥生土器の範疇に入るものと思われるが、南島的特色のみられる資料も若干ある。

器種は壺形・甕形・鉢形が認められる。底部は平底と中空の脚台が出上している。すべて小破片で、型式名の判別できるものはないが、具志堅貝塚や宇堅貝塚、奄美のサウチ遺跡出土の弥生土器に類似しているものが多い。

1. 壺形土器

図42の1に示したもので、僅か1例のみ得られた。肩部の破片で、断面が三角形を呈する凸帯を一条にめぐらしている。胎土に石英や角セン石の細粒を多く混入している。器面は刷毛により調整されている。色調は黄褐色を呈する。

2. 甕形・鉢形土器

口縁部の形状により、次の5種に分類できた。

- A種—口縁部に長い張り出しを作り、断面が逆L状を呈するもの。
- B種—内傾する口縁上部に凸帯を貼りめぐらすもの。
- C種—口縁上部を外側に折り曲げ、断面が「く」の字状に呈するもの。
- D種—口縁部が大きく外反するもの。
- E種—口縁部が外反し、口縁端に平坦面を作るもの。

A種

図42の2～4に示した3点得られた。2は口縁部に沈線文を施し、口唇部及び口唇端に刺突文がみられる。3は口縁部に沈線による駿杉文を施し、口縁裏面及び口唇部、口唇外面に刺突文を施している。4は口縁部と口唇部に沈線文を施している。三者とも器面調整を丹念に施し、焼成は良好で、細砂粒を僅かに混入している。器色は暗褐色を呈するもの（2・4）と橙褐色を呈するもの（3）がある。具志堅貝塚や備瀬貝塚、奄美のサウチ遺跡などで類似資料が知られている。

B種

図42の5に示した1例のみ得られた。内傾する口縁部に凸帯を貼付しているもので、口唇と凸帯上に刺突文を施している。胎土には細砂粒を混入し、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。

C 種

図42の6～8に示したものである。前者は口唇部を尖状に整形し、口縁内面の上部に縱位の沈線文を放射状に施している。胎土に砂粒を混入し、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。後者は文様を施してなく、刷毛ナデによる器面調整がなされている。細砂粒を若干混入し、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。具志堅貝塚や奄美のサウチ遺跡等で類例資料が知られている。

D 種

図42の9～12に示したものである。10は口縁内面の上部に凸帯を貼付し、その凸帯の脇に刺突文を施している。9は口縁部の表裏面に縱位の沈線文を施している。他は無文である。いずれも入念なナデ調整が施され、胎土に砂粒を混入する。焼成は良好で、色調は9が黄褐色を呈し、他は暗褐色を呈している。

E 種

図42の13～16に示したもので、いずれも無文資料である。器面調整は裏面に指圧痕を残すもの（13）があるが、全体的に入念なナデ調整を施している。焼成は良好で、色調は黄褐色を呈するもの（16）、橙褐色を呈するもの（13・15）、暗褐色を呈するもの（14）がある。

器種不明

図42の17に示したもので、断面が「T」字状をなす口縁部になっているのが特徴的である。小破片のため器種は判然としない。文様は施してなく、器面は入念なナデ調整を施している。焼成は良好で、胎土は良く洗練され、配合材をほとんど含んでない。九州の須次式土器（弥生中期）の口縁形態に類似している。

3. 脚部資料

主要なものを図43の1～13に示した。1～12は凸帯を貼付しているもので、いずれも一条のみ認められる。1～8・11は断面が三角形を呈する凸帯をめぐらしており、1・2・12は凸帯上に刻目を施している。13は脚部から口縁部にかけて内側にかなり屈曲した器形をなし表面に沈線文を施している。

4. 底部資料

図43の14・15に示した2点得られた。前者は充実した平底で、底の厚さは3.5cmを測る。後者は小破片で判然としないが、中空の脚台になるものと思われる。いずれも焼成は良好で、胎土に粗砂粒を混入している。

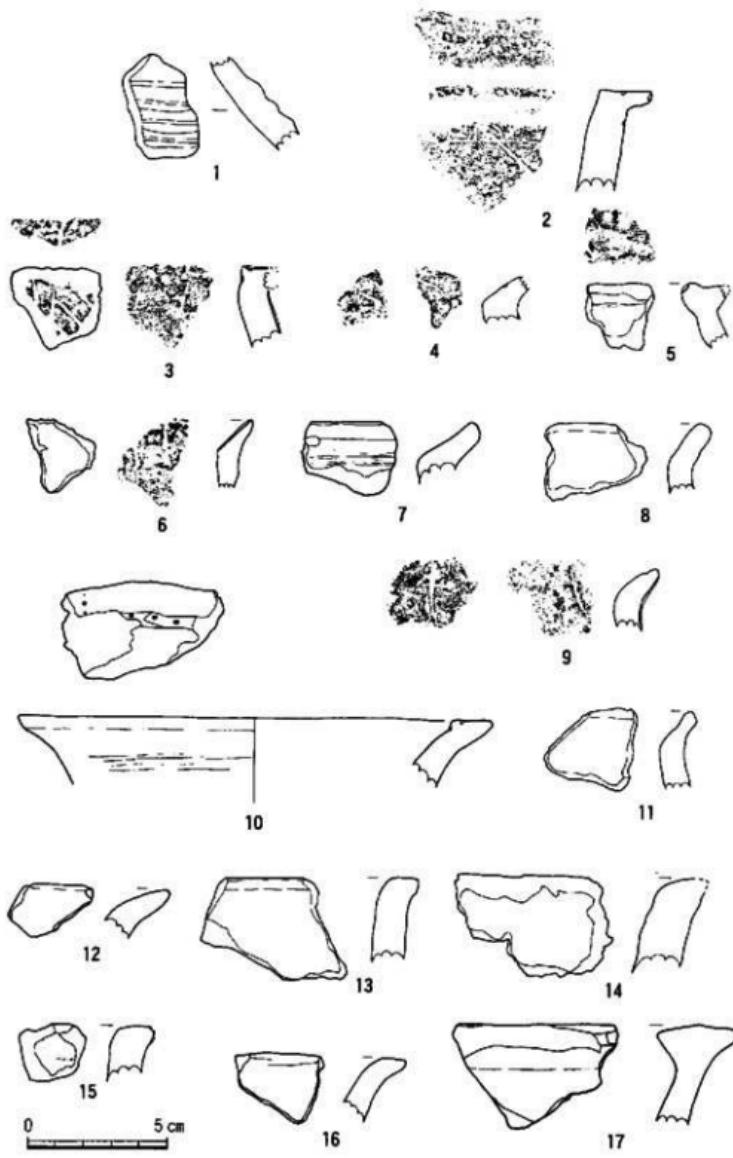


図42 弥生土器(1)

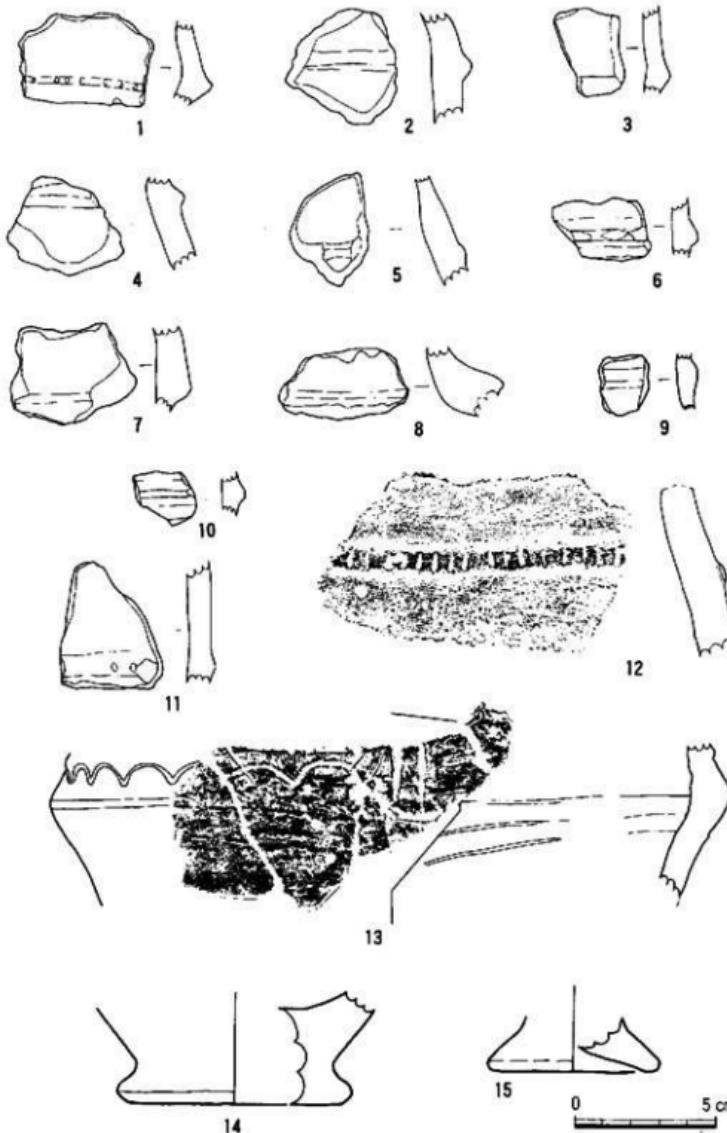


図43 弥生土器(2)

(2) 石 器

石器観察一覧(1)

捕図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量	cm g	器種	石質	観察事項
44-1	III-11 第2層	(11.3) × 6.3 × 1.9		石 斧	緑色 千枚岩	わりと扁平な礫を用いている。研磨は徹底しておらず、表裏面及び右側辺に自然面が残っている。刃部はバランスが悪く、砥ぎ直されたことがうかがえる。刃先は刃こぼれが著しく、基端も一部欠失している。
54-1		(230)				
44-2	表面採集	11.6 × 6.8 × 3.0	440	石 斧	変輝緑岩	比較的重厚な両刃石斧である。表裏面および刃部は人念な研磨を施すが、両側辺部は調整時の敲打痕が消えきらざる残っている。刃面は裏面に比べて表面が広く砥ぎ直されたことがうかがえる。基端は敲打により潰れている。若干偏刃になっていることより、縦斧として使用されていたことが考えられる。
54-2						
44-3	第1トレ ンチ	10.4 × 8.7 × (6.1)		た た き 石	砂 岩	ほぼ橢円形を呈する河原礫を用いている。表面の中央部に敲打による浅いくぼみを有する。
54-3	表面採集	(839)				左右側辺、上下端とも敲打により潰れ、裏面は強い打撃により剥離している。
44-4	表面採集	7.2 × 9.4 × 4.5	440	た た き 石	砂	断面が三角形を呈する河原礫を用いている。下端の後の部分のみ利用され、強い打撃により裏面側に大きく剥離している。
54-4						
44-5	第1トレ ンチ	10.3 × 9.5 × 6.4	920	た た き 石	砂	わりと厚味のある河原礫を用いている。表面のほぼ中央部に敲打による浅いくぼみを有する。
54-5	表面採集					上下端も敲打により若干潰れている。

※ ()内の数字は現存部の最大値を示す。

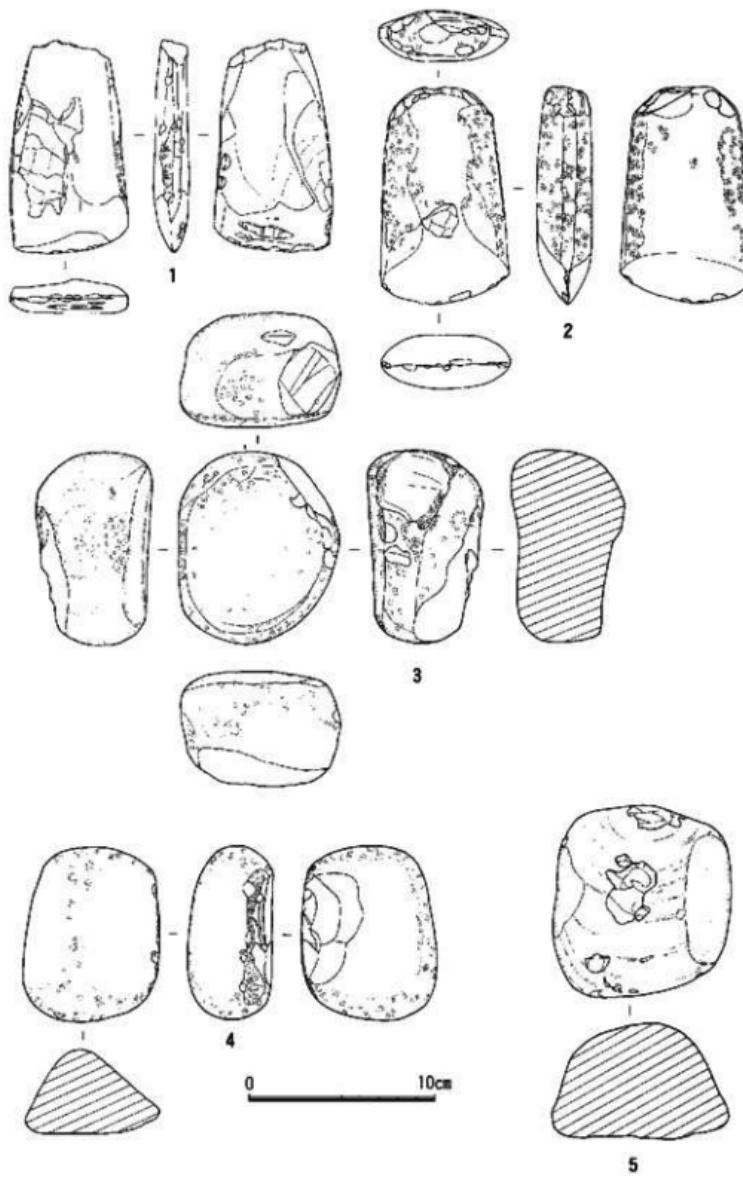


図44 石器 (1)

石器観察一覧(2)

擇岡番号 岡版番号	出土地区 出土層位	法量	cm g	器種	石質	観察事項
45-1	表面採集	9.7 × 8.0 × 4.5	540	た た き 石	砂 た き 石 岩	自然の円錐を加工せずにそのまま用いている。 表裏面のほぼ中央部に敲打による凹みがみられる。周縁部はフルに活用され、敲打による潰れが著しい。
55-1						
45-2	表面採集	10.0 × 6.4 × 4.9	530	た た き 石	砂 た き 石 岩	分飼形の河原礫を用いている。表裏面および左側辺の中央部は敲打により潰れ、凹面をなしている。上下端も敲打痕が著しい。全体に手馴れ様の磨滅がみられ、かなり使用されたことがうかがえる。
55-2						
45-3	III-4 第2層	8.5 × 5.8 × 3.4	280	た た き 石	砂 た き 石 岩	長方形を呈する自然礫を用いている。上端と下端の稜の部分が使われており、わりと強い打撃により剥離している。右側辺に軽微な使用敲打がみられる。
55-3						
45-4	III-7 第1層B	11.9 × 6.2 × 4.8	460	た た き 石	砂 た き 石 岩	三角柱状の自然礫を用いている。3カ所の稜の部分と上下端を利用して、各々使用敲打痕がみられる。右側辺は左側辺に比べてかなり使用頻度が高く、打撃による剥離が著しい。
55-4						
45-5	II-2 第1層A	12.7 × 9.4 × 5.8	(980)	た た き 石	砂 た き 石 岩	わりと大型の河原礫を用いている。表面の中央部に使用敲打による浅いくぼみを有する。左右側辺と上下端はかなり激しく使われ、大きく剥離し、原形をほとんど留めてない。
55-5						
45-6	III-4 第1層B	16.5 × 9.2 × 7.3	1,530	た た き 石	砂 た き 石 岩	横断面が三角形を呈する比較的大型の自然礫を用いている。左側辺と右側辺の稜の部分を使っており、右側辺は稜全体が平坦になるまで敲打により潰れている。
55-6						



図45 石器 (2)

石器観察一覧(3)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法 量	cm g	器 種	石 質	観 察 事 項
46-1	III-6 第3層	16.7×9.3 ×7.0	た た き 石	砂 岩	三角柱状を呈するわりと大型の河原石を用いている。表面のはば中央部に浅い敲打痕を有する。左右側辺の稜の部分はかなり使用され、平坦になるまで潰されている。上下端も若干の敲打痕がみられる。	
56-1		1,670				
46-2	IV-7 第2層	(17.1)× 10.0×7.4 (1.577)	た た き 石	砂 岩	三角柱状を呈する比較的大型の河原石を用いている。右側辺の稜の部分はかなり使用され、敲打により潰されている。下端部は強い打撃により大きく剥離している。	
56-2						
46-3	IV-5 第1層	13.3×6.8 ×4.7	た た き 石	砂 岩	三角柱状を呈する小型の河原石を用いている。3カ所の稜と下端部を使用しているが、右側辺の稜の部分の使用頻度が最も高く、打撃によりかなり剥離している。	
56-3		590				
—	IV-7 第2層	15.1×9.5 ×8.0 1,533	た た き 石	砂 岩	三角柱状を呈するわりと大型の河原石を用いている。稜の部分と上下端が使われているが、いずれも微弱な敲打痕が認められるだけで、それほど使用されてないことがうかがえる。	
—						
46-4	III-4 第2層	16.3×14.0 ×7.2	す り 石	砂 岩	略三角形を呈するわりと大型の河原石を用いている。最も薄い稜の部分を使用しており、磨り痕が認められる。他の部分はほとんど使われていない。	
56-4		2,000				
46-5	III-10 第2層	22.0×11.5 ×7.7	す り 石	砂 岩	かなり大型の河原石を用いている。左側辺の稜の部分が使用され、磨り痕が認められる。表面の下端側に微弱な敲打痕を有する。	
56-5		2,100				

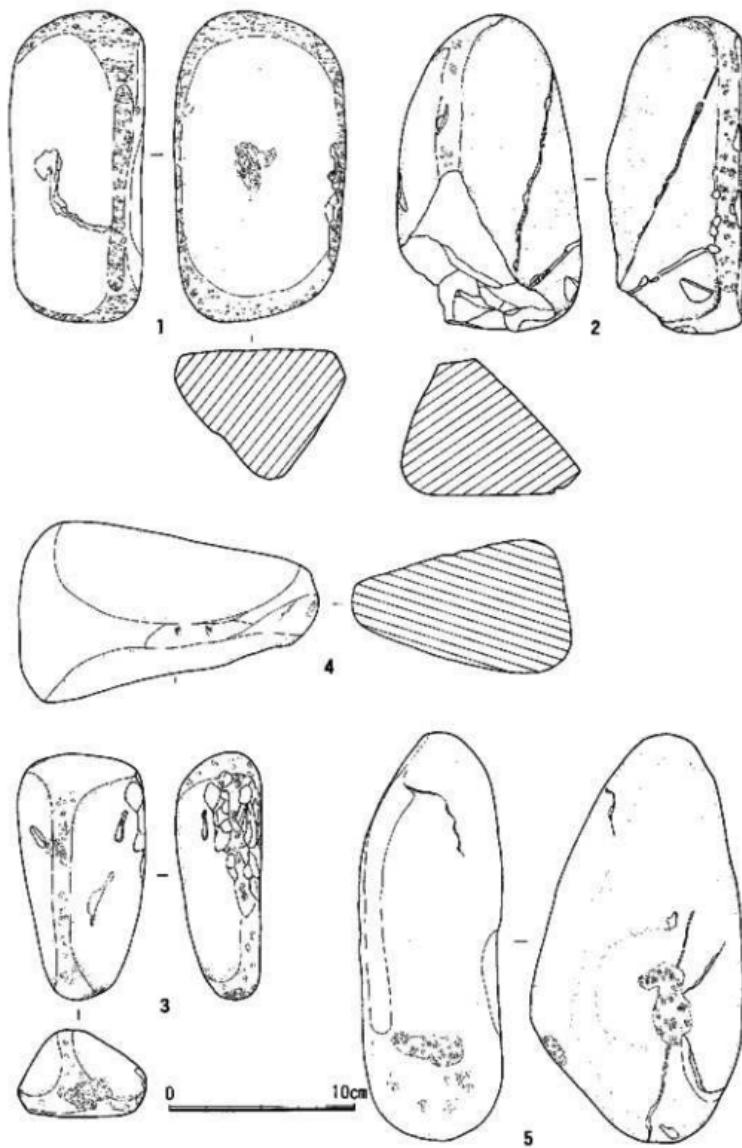


図46 石器 (3)

(3) 貝製品

今回の調査で得られた貝製品は、機能的な面から大きく尖用品と装飾品に分けられる。これらの出土状況は表5に示したとおりである。前者にはヤコウガイの蓋を利用した敲打器、ヤコウガイ製匙、二枚貝有孔製品、ホラガイ有孔製品、スイジガイ製利器の5種類。後者には貝輪、貝札、貝玉の3種類が認められた。その他に両者のいずれに属するか判然としないものが2種類ある。

以下、種類別に略述する。

蝶蓋製敲打器

ここで扱う資料は、これまで「貝斧」「貝刀」「ヤコウガイの蓋製貝斧」「ヤコウガイの蓋製スケイバー」などと称して報告されたものと同種の製品である。これら多様な名称は機能的な観点から名付けられたもので、実際「利器」としての用途を想定しているのがほとんどである。それに対して、剝離を付刃のためではなく、使用に拘るものとして一種の「敲打器」と解釈しているものもあり、その性格づけについて様々な見解がある。

具志堅貝塚においては、尖端顕微鏡等で観察した結果、縫状痕や磨滅などの使用痕が認められなかったことにより、本標品の剝離は製作時（付刃のため）のものではなく、使用による痕跡であると判断している。

ここでも具志堅貝塚の例に習って、それらを破損形態、すなわち使用の度合いにより下記の5段階の状態が観察できた。

第1段階 —— 1回ないし2回程度の打撃による剝離が認められるだけで、
ほとんど原形を保持している。

第2段階 —— 数回の打撃が加わり、周縁部の3分の1程度に剝離が及んでいる。

第3段階 —— 使用の度合いが進行し、一部を残して周縁のはとんどの部分
に剝離が及んでいる。

第4段階 —— さらに使用の度合いが進み、下端部が潰れたり、著しく剝離
している。

第5段階 —— 使用の際の衝撃が強く、下端部が大きく破損したり縦割れが
生じ、原形を保っていない。

今回得られた51点の資料の出土区、層位、使用段階、法量等を表6に示した。段階別についてみると、第1段階（2点）、第2段階（11点）、第3段階（15点）、第4段階（11点）、第5段階（12点）となっている。第3・4・5段階が多いのは、該製品の使用状況を如実に物語っていると考えられる。すなわち、使用の度合いが著しく、大きく剝離したり、潰れたりしている

表5 貝製品出土状況

製品名	尖用品			装飾品			不明					
	螺	ヤ	ニ	ホ	ス	貝	輪	貝札	玉	ハ	ウ	合
出土区	蓋	コ	枚	ラ	イ	イ	オ	オ	サ	ア	ナ	ミ
	製	ウ	貝	ガ	ジ	オ	オベ	ラ	ンボ	マ	マ	ウ
	ガ	有	有	イ	ガ	モ	ツ	サ	ンク	ガ	ル	サ
	敵	イ	孔	孔	製	ガ	タ	コウ	バ	キ	ユ	ギ
	打	製	製	製	利	ガ	ノ	ガ	ザメ	ガ	キ	ガ
						イ	ハ	サ	ガイ	イ	イ	計
トレンチ	層	器	匙	品	品	器	製	製	製	製	製	
I	1層	3										3
II	1層	3	13	2			1	1		1		21
	1層A	5	1				1		1			8
	1層B	12	3	1	1		1					18
III	2層	1	2				1	1	1			6
	3層	1								1		2
小計		19	6	1	1		2	2	1	1	1	34
	1層	7	1						1			8
IV	2層	7	1							1		9
	3層	2	1									3
小計		16	3						1	1		20
表採		9	1				1			1	1	13
不明		1	2	1	1							5
合計		51	25	4	1	1	2	4	1	1	2	97

ものが多い。最終段階（第5段階）の形態は破損した後に破棄されたものとみることができる。

表 6 蝶蓋製敲打器計測値一覧

単位：cm, g

標図番号 図版番号	出土区	層位	段 法 量			標図番号 図版番号	出土区	層位	段 法 量				
			階	縦	横				縦	横	重さ		
47-1 57-1	IV - 1	1層	1	7.3	6.8	156	48-4 58-4	III - 5	1層B	3	7.6	8.8	220
47-2 57-7	不 明	-	1	8.6	8.3	185	47-14 57-14	III - 8	1層A	3	7.2	7.9	160
47-3 57-3	IV - 7.8	3層	2	7.3	7.2	168	-	IV - 8	2層	4	7.8	8.6	190
-	IV - 7	2層	2	7.6	7.5	202	48-1 58-1	不 明	-	4	7.2	8.1	155
47-8 57-8	不 明	-	2	7.6	7.3	182	48-2 58-2	表 採	-	4	7.1	8.2	170
47-5 57-5	III - 1	1層	2	7.4	7.2	180	48-11 58-11	III - 12	1層B	4	6.8	7.5	140
-	不 明	-	2	7.3	7.1	160	-	IV - 11	2層	4	7.6	8.0	188
47-6 57-6	III - 11	1層B	2	7.5	7.3	180	48-10 58-10	表 採	-	4	6.9	8.0	165
47-2 57-2	III - 12	1層	2	7.1	6.9	145	48-7 58-7	I - I	1層	4	7.2	8.5	185
-	III - 2	3層	2	7.3	8.4	165	48-8 58-8	表 採	-	4	5.8	7.5	113
47-4 57-4	I - 1	1層	2	6.9	7.8	145	48-9 58-9	表 採	-	4	5.9	7.4	115
-	IV - 5	2層	2	6.3	7.4	120	48-6 58-6	不 明	-	4	5.8	7.8	125
47-10 57-10	IV - 7.8	3層	2	7.3	8.0	158	48-12 58-12	不 明	-	4	7.1	8.2	171
-	IV - 8	2層	3	7.6	8.5	178	48-15 58-15	III - 1	1層	5	4.4	8.2	70
-	IV - 1	1層	3	6.9	7.5	130	48-13 58-13	表 採	-	5	5.6	8.0	135
47-11 57-11	表 採	-	3	7.5	8.6	193	-	IV - 6	1層	5	3.4	7.2	50
48-3 58-3	III - 10	1層	3	7.6	8.2	175	48-16 58-16	IV - 9	2層	5	4.3	4.8	49
47-13 57-13	II - 0	1層	3	7.3	8.6	195	-	III - 12	1層	5	3.7	7.0	46
47-9 57-9	不 明	-	3	6.3	6.9	110	-	C - 1	-	5	3.9	6.8	48
47-15 57-15	III - 5	1層B	3	7.1	7.8	150	-	C - 1	-	5	4.1	7.8	56
48-14 58-14	表 採	-	3	6.7	7.6	138	-	IV - 7	2層	5	5.2	6.6	102
47-16 57-16	表 採	-	3	7.2	8.3	165	-	C - 1	-	5	4.2	7.8	95
-	IV - 6	1層	3	7.5	8.2	182	-	IV - 7.8	-	5	5.0	7.8	123
47-12 57-12	IV - 12	2層	3	7.2	8.0	160	-	IV - 7	2層	5	4.8	7.5	112
47-17 57-17	IV-F地点	1層	3	6.6	7.4	126	48-17 58-17	不 明	-	5	4.1	7.4	81
48-5 58-5	表 採	-	3	7.5	8.2	170							

以上のことから、該製品の機能的な面について、従来考えられてきた「利器」としての用途を具備しているものではなく、一種の「敲打器」として使われていたことがうかがえる。大きさや重さが手頃なことにより、貝製品や石器製作の細部調整用のハンマーとして用いられていた蓋然性が高い。

ヤコウガイ製匙（未製品）

ヤコウガイの体層部を切り取ったもので、破片も含めて25点得られたが、完成品は1点もない。それらの主要なものを図49～51に示した。

大型の資料は貝の外唇部を取り込んで作っており、平均9.1cm×11.5cmの略長方形をなすが深さはそれほどない。体層部のカーブをうまく利用しているものも6点あるが、いずれも研磨を施してなく、粗く切り取った段階で終わっている。図49の2と3の2点のみは結節部を打ち欠いてある程度の調整を行っているが、他のものは結節部もそのままの状態にあり、粗削りを行っているだけである。

図49の1は唯一研磨をほどこしているもので、比較的小型の貝を用いている。破損品で、上端と左側辺に微弱な抉りがみられることから、柄の部分の破片と思われる。

二枚貝有孔製品

図52の1はシラナミガイ製。2はヒメジャコガイ製である。両者とも裏面からの打撃により殻頂付近に粗孔を穿っている。腹縫部は水磨を受けていることから海浜に打ち上げられた貝殻を利用したものと思われる。

図52の3はクロチョウガイ製の半欠品である。殻頂部の近くに内側から粗孔を穿っている以外は自然のままである。素材自体もろい貝なので、火用品の可能性は薄いと思われるが、便宜上ここに含めた。同様の資料が備瀬貝塚において、集積された状態で35点も出土している。

各標品の法量等は下表に示したとおりである。

表7 二枚貝有孔製品計測値一覧

貝種 \ 法量	殻高×殻長	孔 径 cm	重さ g	出 土 区
シラナミガイ	6.4×8.8	1.0×1.0	70	II-0 1
ヒメジャコガイ	5.1×8.9	0.9×1.5	44	第2試掘溝
クロチョウガイ	(9.7×5.9)	(1.4×1.2)	(42)	III-5 1

（注1）黒住氏の御教示により、これまでにアコヤガイとして報告されてきた大部分のものが、クロチョウガイであることが判明した。アコヤガイは沖縄にはほとんど産しないということである。

ホラガイ有孔製品

図52の4に示した1点のみ得られた。体層部の腹面に1.9cm×2.0cmの粗孔を穿っている。背面は大きき破損している。この種の製品は民具事例などから湯沸かし器として考えられているが、本標品は火を受けた痕跡も認められることより、別の機能を具備していた可能性がある。
第Ⅲトレンチ グリッド1層Bの出土である。

スイジガイ製利器

図52の5に示した1点が得られた。スイジガイは6本の突起を有しているのが特徴的な貝であるが、本標品はこれらの突起のうち、殻頂部右側（第1突起）と尾部（第5突起）以外は折り取られている。第1突起を表面側から研ぎ出して付刃しており、片刃状を呈する。体層部の腹面に3.3cm×1.6cmの粗孔を穿っている。出土区不明である。

貝 輪

破片も含めて8点得られ、うち貝種が判別できたものは一枚貝のオオツタノハ・オオベッコウガサガイと巻貝のアンボンクロザメガイ・サラサバティの4種類である。それらを図53の1～8に示した。

1はイモガイ（種不明）の肩部を横切りにしたものである。破損しており、3分の1程度しか残っていない。全面とも丁寧に研磨を施し、左側面の右縫線部に微弱な切り込みがみられる。
第Ⅲトレンチ11グリッド2層の出土である。

2はアンボンクロザメガイ製で、1と同じ部位を利用した横切りの貝輪である。本標品も破損品で、4分の1程度しか残っていない。比較的薄手で、かなり徹底した研磨を施し、地文が消えて見えなくなっている。第Ⅲトレンチ10グリッド1層Bの出土である。

3～6に示した4点はオオツタノハ製である。6は完形品で、放射肋のみ若干の研磨を施しており、殻頂部は打ち欠いたまま放置していることから製作途中のものであることが考えられる。表面採集品である。3は破損品で、半分程度しか残っていない。研磨は比較的徹底しており自然面をほとんど残していない。第Ⅲトレンチ5グリッド1層Bからの出土である。4・5も破損品で一部しか残っていない。前者は縫の部分も入念な研磨を施し、自然面はほとんど残っていない。第Ⅰトレンチ0グリッド2層の出土である。後者は放射肋のみ若干の研磨を施している。第Ⅲトレンチ2グリッド1層Aの出土である。

7はオオベッコウガサガイを用いたもので、殻頂部を除去して、環状に外縫部を残している研磨を施していないことから、製作途中のものと思われる。第Ⅱトレンチ1グリッド1層の出土である。

8はサラサバティを利用したもので、周縁の部分を横切りによって素材を作り出し、切断面は磨いて仕上げている。半円状を呈し、上端部に抉りが入っている。表面には地文をそのまま

残している。第Ⅲトレンチ1グリッド2層の出土である。

貝札

図53の9・10に示したもので、いずれもアンボンクロザメガイを用いている。前者は肩部を3cm角に切り取り、ほぼ正方形を呈している。縁辺部は切り取った後に研磨を施しているが、下端部は徹底してなく、切断の痕跡が残っている。表裏面は加工を施していないことから製作途中のものであることがうかがえる。第Ⅳトレンチ7グリッド1層の出土である。

後者は体層の下端部を切り取ったものである。右側辺は一部研磨を施しているが、左側辺が欠失していることから製作中に破損したものと思われる。第Ⅳトレンチ8グリッド1層の出土である。

貝玉(ビード)

図53の11・12に示した2点で、いずれもマガキガイを用いている。前者は人型のマガキガイの螺塔部を利用しているが風化が著しく、研磨痕等は判然としない。殻頂部に1.3cm×1.2cmの孔を穿っている。表面採集品である。

後者はわりと小型で、3と同様に螺塔部を利用している。磨滅が著しく、研磨等の加工痕は判然としない。殻頂部に0.4cm×0.4cmの孔を穿っている。第Ⅳトレンチ8グリッド1層の出土である。

タカラガイ製品

図53の13・14に示した2点で、両方ともハナマルユキガイを用いている。前者は背面を除去した後に研磨を施している。第Ⅲトレンチ1グリッド1層の出土である。後者も同様に背面を除去して部分的に磨いている。第2トレンチ1層の出土である。

この種の製品は、民俗事例等から網の錘り(貝錘)として扱われているのが多いが、本標品は研磨を施しており、これまでの資料と様相を異にすることより一種の装飾品と思われる。

ウミウサギガイ製品

図53の15に示したものである。かなり破損しているが、前端と後端に研磨を施していることから製品として扱った。出土例がほとんどなく、性格等は判然としない。表面採集資料である。

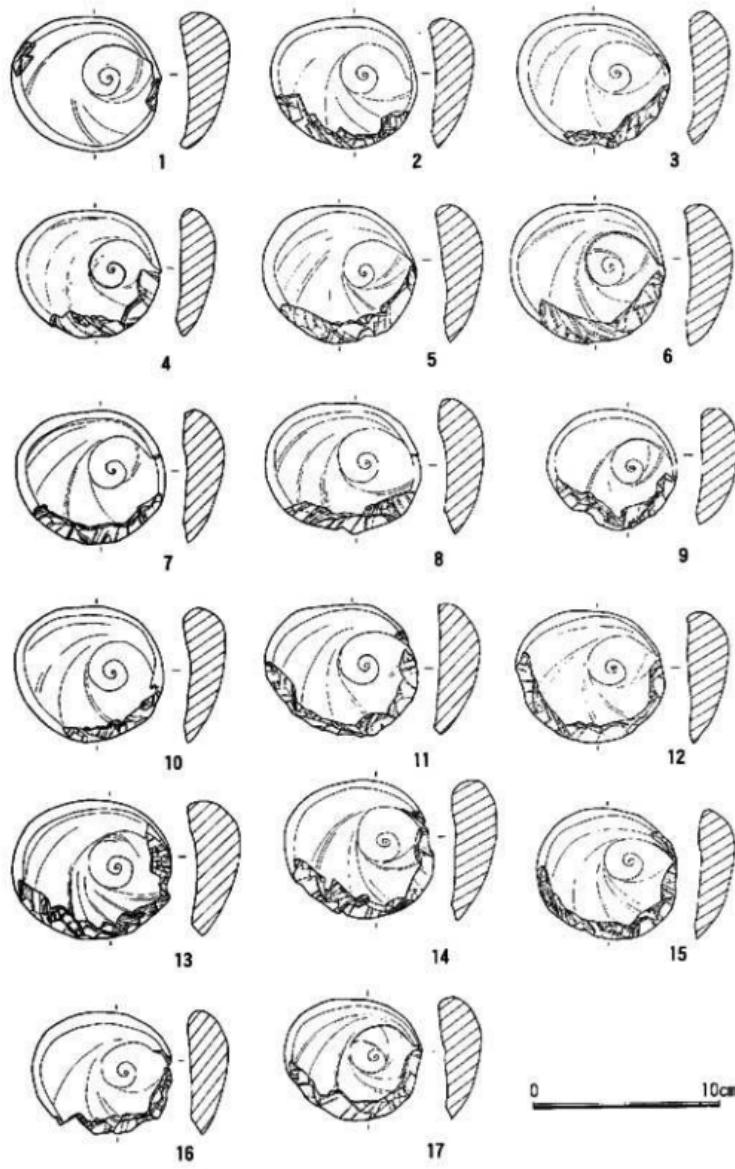


图47 螺盖敲打器(1)

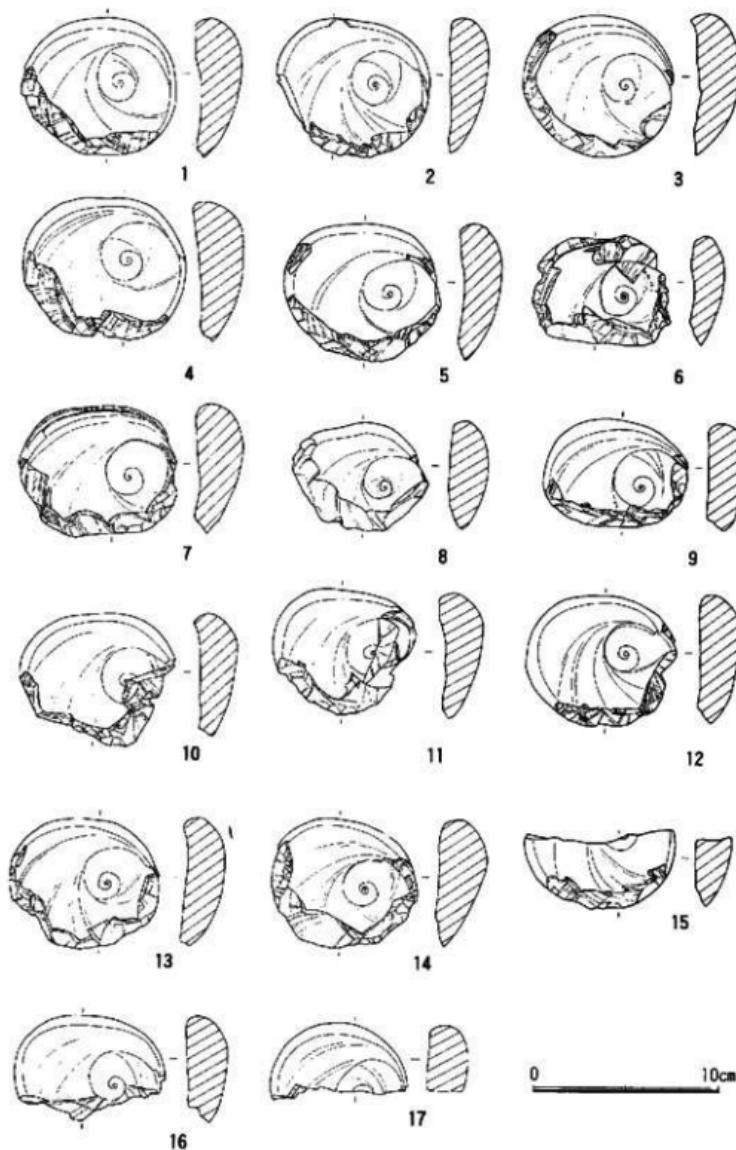


图48 螺盖製敲器(2)

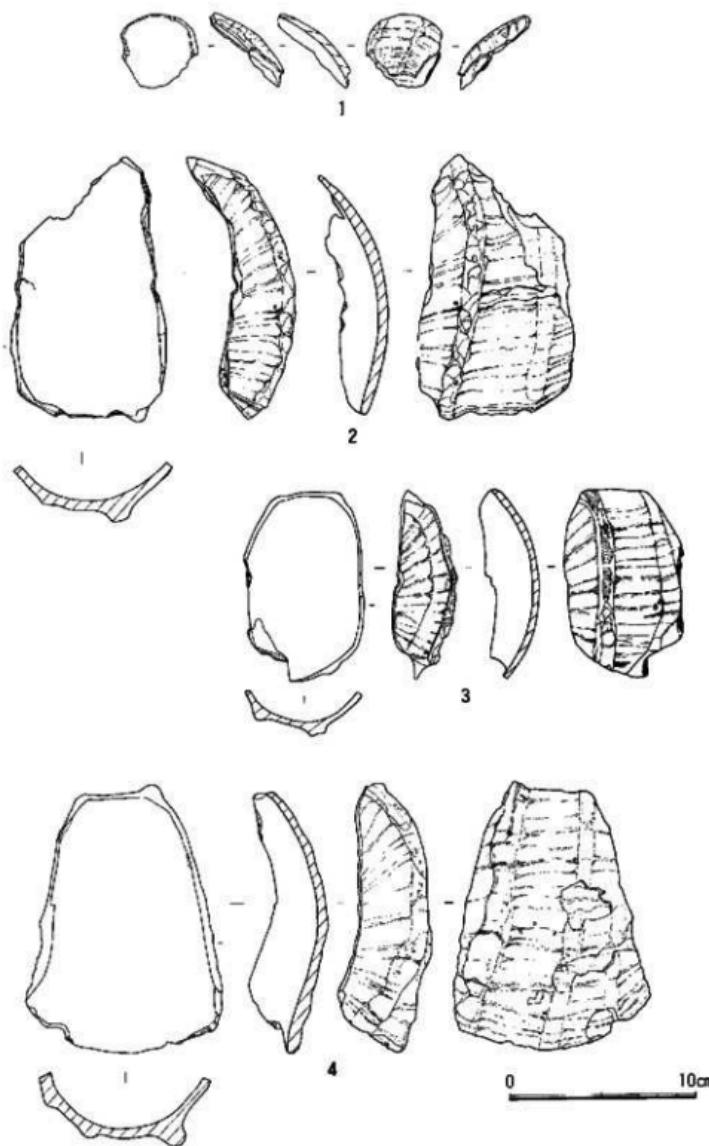


図49 ヤコウガイ製匙(1)

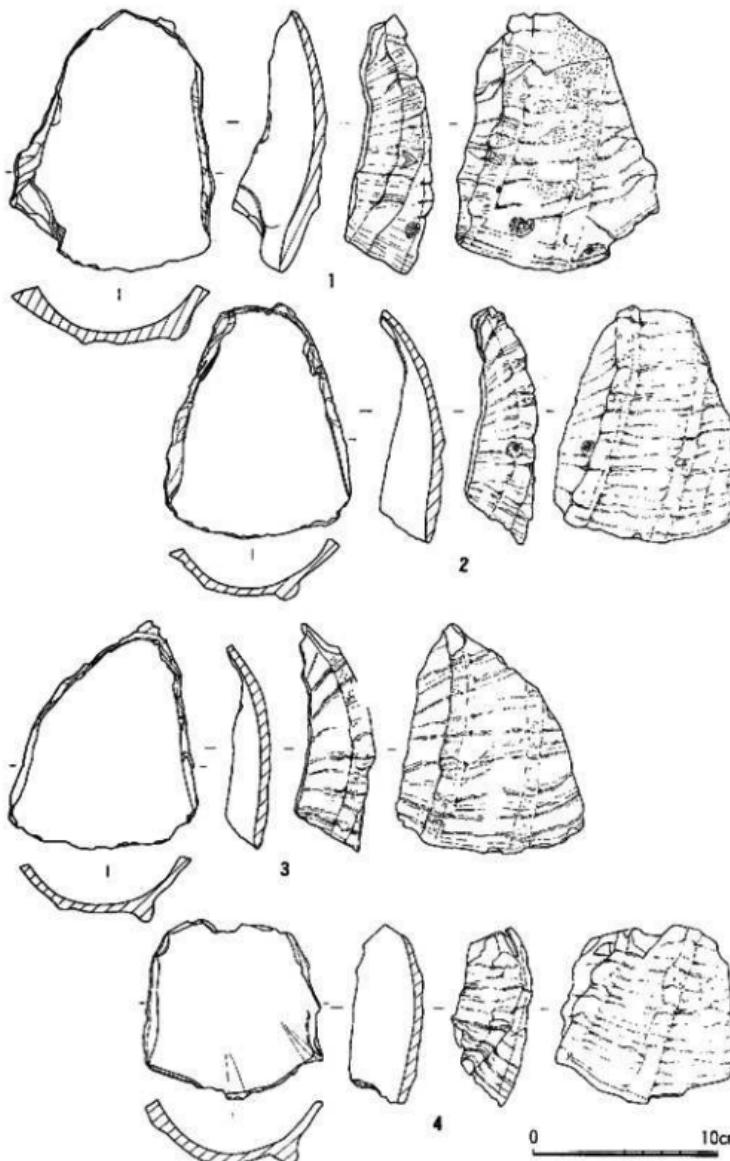


図50 ヤコウガイ製匙(2)

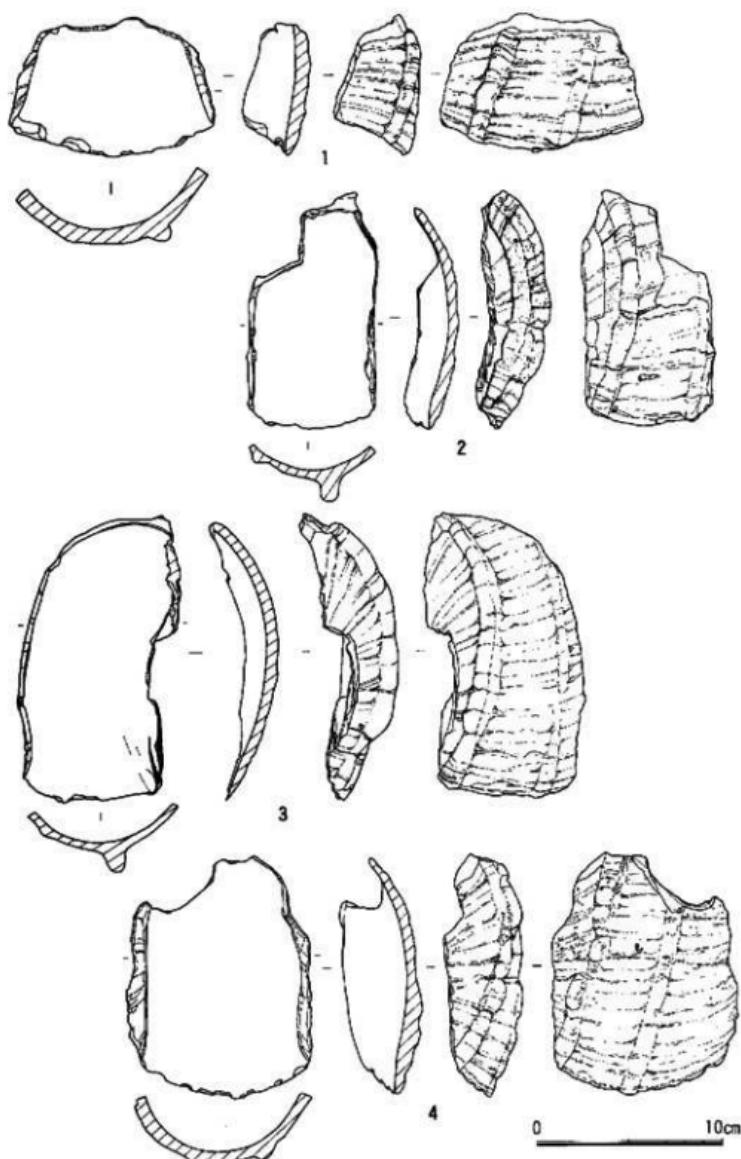


図51 ヤコウガイ製匙(3)

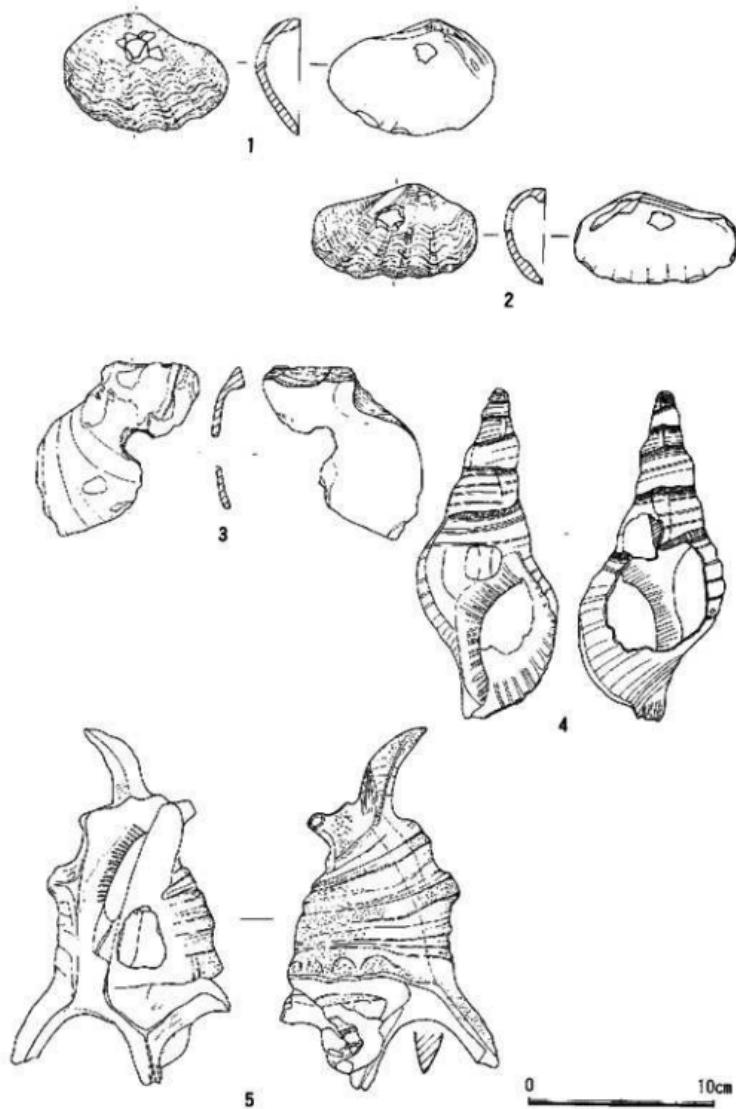


図52 二枚貝有孔製品（1～3）、ホラガイ有孔製品（4）、スイジガイ製利器（5）

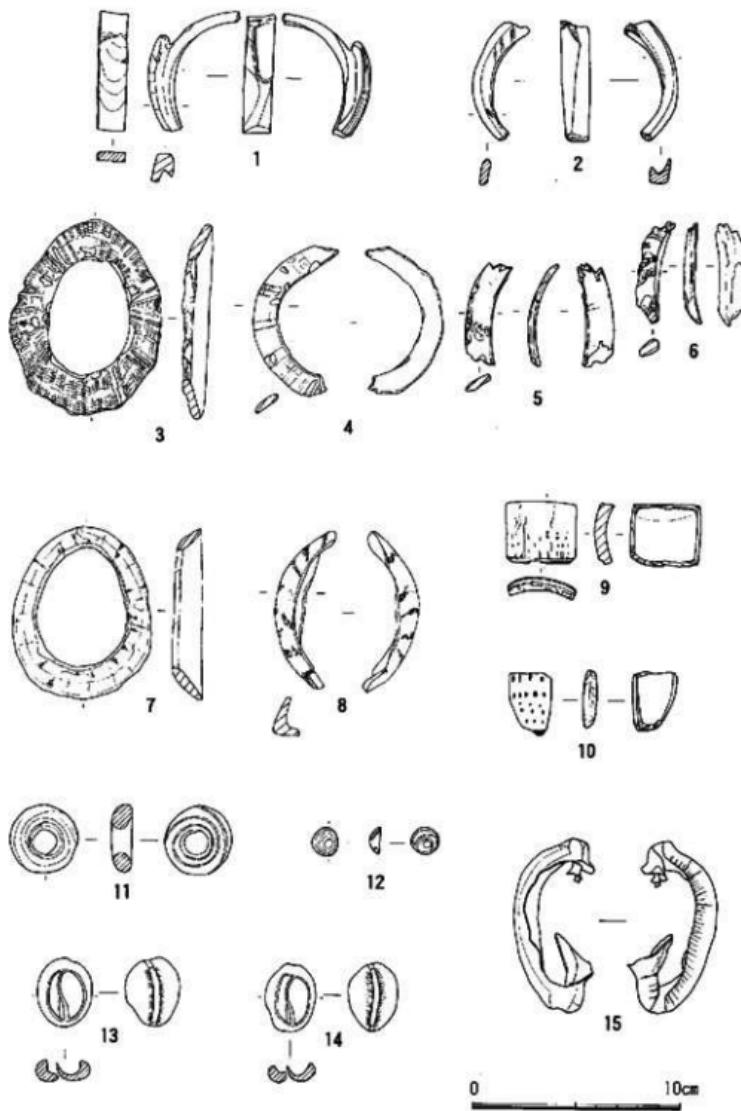


図53 貝輪（1～8）、貝札（9・10）、貝玉（11・12）
タカラガイ製品（13・14）、ウミウサギガイ製品（15）

(4) 軟体動物遺存体

黒 住 耐 二*

今回の報告では、宇佐浜B貝塚から出土した自然遺物のうち、軟体動物、節足動物および棘皮動物を取り扱った。報告の対象としたサンプルは、1967年から1971年の1次～4次調査によって得られたものである。しかし、貝製品のみ取り上げられたグリッドも存化する可能性があった（表8参照）。そのため、今回の結果が、宇佐浜B貝塚の軟体動物遺存体の復元を完全に表していないことも考えられるが、大把みの傾向は示しているものと思われる。人把みであろうとも、各遺跡ごとの傾向を提示しておくことは、今後の遺跡間の比較に有効であろう。

1) 出土遺存体

表8に出土状況を示した。この表には、貝製品等も含めた。以下の解析は、全てこの表を元に行った。

2) 食料残滓でないと推定されるもの

a. 鰓皮の残っているもの

オキナワウスカワマイマイ1個体は鰓皮の残る現生個体であり、調査中の混入物と考えて除外した。

b. 水磨を受けているもの

フタモチヘビガイ、カニモリガイ類、タカラガイ類、イモガイ類、シャコガイ類等に、明瞭に水磨を受けている個体が存在した。砂丘上に立地する遺跡の場合、本来の堆積層中に水磨を受けた貝殻が含まれることも考えられるが、そのような状況でないならば、何らかの意図の元に持ち込まれたと思われる。これらは貝製品の素材となる種であることが多い。その例として、シャコガイ類での結果について後述した。このような検討は今後の課題と考えよう。

ここでは、水磨を受けた個体を全て食料残滓から除外した。またサヤガタイモは、小型で食用に適さず、水磨を受けている個体が多かった。それゆえ、本種は全て死殻を持ち込んだものと考えて、同様に除いた。

c. 死殻であるもの

水磨以外の死殻では、ゴホウラの殻口内にヘビガイ類やウズマキゴカイ類が付着していた例とハナマルエキの殻表に小穴が多數あいた例があった。両種とも生きているときには、殻口内、殻表は外殻膜の伸展により、前述のような状態になることはない。また、同様に出土した棘状突起部のみのスイジガイの内面にもヘビガイ類の付着が見られた。これらの種は、製品や利器として利用されるものであり、そのために貝殻のみを採集したものと考えられる。ゆえに食料残滓から除いた。

* 沖縄生物学会会員

表 8 軟体動物遺存体出土状況

No.	種名	クリッド		B-U	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	B-9	B-10	B-11	B-12	B-13
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
1	イギアチゾウ																
2	ツタノハ																
3	ミツクシラノハ																
4	オベックリガサ	4	3A	4	12	15	2										4
5	ベッコウガサ							1	1								
6	モシガカイ																
7	イシグク																
8	マコガイ																
9	シオウズ			2	2			1									
10	ツサオウズ					1		2									1
11	シントカヘビ																
12	サザバティラ		1	2	3	3		7	2	2	3						212
13	シグクラサギ			1				1									
14	テコランダギ			①	2			③									6
15	カコラグ			1	1	14		5	11	2							29
16	— (フタ)																2
17	— (フタ)																1
18	ニシダカヒカイ																
19	エトスシヤカガミ																
20	アメオブネ																
21	リコカイ																
22	フタミナヘビゴイ						1D										
23	オセジマカニモリ																
24	ツブリミミニモリ							②									
25	メトウガタカニモリ																
26	メオヌフノ																
27	ホノフノガイ																
28	タカラガイ		1	1B		4											2
29	トリセガイ																
30	イヌゾガイ																
31	ゴボウ	9															
32	クモガタ																
33	メイシガタ																
34	ウミロマギ																
35	ハナボラダカラ																
36	セイココタコ																
37	ハナカルコ			1	4B	2	1B	3									2
38	ホンキヌタ																
39	ヤクソマダガケ																
40	ホレダカラ																
41	ハカリコウタカウ																
42	シヌボウ																
43	ホラガイ		1A	1													
44	イカウミギ																
45	オキハジ																
46	ムクミウズ																
47	カンサイオボウ																
48	シラクヨガイ																
49	クノレイシ						④										
50	クノナツレイシ						⑤										
51	アフルシイシ						2	1									
52	コイボクタレイシ																
53	シマクタクタレイシ																
54	ヒカクタイカレイシ						③										
55	ヤマツカイカレイシ																
56	アツボウ																
57	ヒシコラク																
58	カムラクタキワトリ																

No	W-2	W-3	W-4	W-5	W-6	W-7	W-8	W-9	W-10	W-11	W-12	W-13	W-14	W-15	不 規 則 部 位 1	不 規 則 部 位 2	不 規 則 部 位 3	不 規 則 部 位 4	不 規 則 部 位 5	
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	6	8	1-2-a		
2															1	3	8	1-3-a		
3															1A	W	1-1-a			
4	4	2	5	1	3	3	5	2	4	7	1	4	7	1	2	2	8	2	4	
5		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	12	H	1-1-a	
6															1	2	1	1-1-a		
7															6①	1	1-1-b			
8															②		1-1-b			
9		1					1	2							3	16	1	1-2-a		
10		1	1		1	2			1	1	2	2	1		3	20	1	1-3-a		
11						1	1	1							1	8	1	1-4-a		
12	5	2	3	3	1	2	4	6	3	9	3	1	2	11	5	4	22	131①	1-4-a	
13															3	1	1-2-a			
14	6	③	5	1	1	2	1	1	5	5	5	5	5	2	③	2	5	26	1-5-a	
15	19	22	1	1	8	1	69	26	55	10	3	2	11	17	14	2	12	8	90	
16	15	11	1	2	4	③	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	27④	V	1-4-a
17	15	12	2	2	A	IA	2A	1	2	3	3	2A	1	2	1A	6	IA	1	87(43A)	
18															1	4	1	1-2-a		
19															③	1	1-1-b			
20															2	1	1-1-a			
21															3	120	1	1-1-c		
22															23⑥	1	1-1-b			
23															1	1	1-1-c			
24															1D	1	1-2-a			
25															④	1	1-1-b			
26															⑤	1	1-1-a			
27															4⑧	1	1-2-c			
28															1	2	1	1-2-c		
29															⑨	1	1-2-c			
30															12⑩	1	1-2-c			
31															13⑪	1	1-2-c			
32	1	1	1	2	2	2	2	3	1	2	2	1	1	1	1	1	1	20	1-4-a	
33															43⑫	1	1-2-c			
34															IA	1A	V	1-2-a		
35															2	1	1-1-a			
36															1	1	1-1-c			
37	1	2	2	2	1	5			1	1E	3				IA	12⑬	1D	1-3-a		
38															1	1	1-2-a			
39		1	1	1	3										19⑭	1	1-2-a			
40															1	2	1	1-2-c		
41	1														2	14	1	1-1-a		
42															⑤	1	1-2-a			
43															2⑯A	1	1-4-a			
44															⑦	1	1-2-a			
45		⑨	2	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	22⑮A	1	1-2-a			
46															⑫	1	1-2-a			
47															1	1	1-2-a			
48	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	⑳	⑳	⑳	⑳	35⑳	1	1-2-a		
49	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑳	⑳	⑳	⑳	⑳	⑳	⑳	19⑳	1-3-a	
50															5⑩	1	1-3-a			
51															5⑪	1	1-1-a			
52															⑫	1	1-3-a			
53															2⑭	1	1-3-a			
54															8⑭	1	1-3-a			
55															1	1	1	1-3-a		
56															1	1	1	1-1-a		
57	④														⑫	⑩	1	1-2-a		
58															1	1	1	1-2-a		

No.	種名	ダマフ		ヒメ		ヒメ		ヒメ		ヒメ		ヒメ		ヒメ		ヒメ		ヒメ		
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
59	ナガイトシケボウ			1																
60	コオニハラブシ	1			3															2-1
61	オニコラブシ																			
62	ウライコラブシ																			
63	テマカラブシ																			
64	ヤヌカラブシ																			
53	イゼンツイモ																			
56	アンサンブルサメ																			
57	ナツメガイ																			
58	カツリハナ																			
66	オキナシヤマタケシ																			
70	ツヤギヤハル																			
71	シエリマイマイ																			
72	バンダナマイマイ																			
73	エキクラクスカツマイ																			
74	ヘリトリケンマイ																			
75	エダガイ																			
76	ベニエガイ																			
77	リュウキュウガルハワ																			
78	リュウキュウヒカリ																			
79	カイシアエリ?																			
80	イドリニアオシ																			
81	クロチャウガイ																			
82	メンガイ																			
83	シレナシヅミ																			
84	シリザル?																			
85	キタザル?																			
86	キタザル?																			
87	ジクラナ?	1																		
88	ヒメジヤハ																			
89	ヒメジヤハ																			
90	シヤゴウ																			
91	カツラガイ																			
92	キヌジイナミ																			
93	アカシジケン																			
94	スノメガメ																			
95	ヤヌメガメ																			
96	リュウキュウマヌカ																			
97	リュウキュウラトリ																			
98	シザラガイ類																			
99	コウガイ																			
100	カメノチ?																			
101	ナガウニ(種)																			

括弧の数字は種出か本山のもの。括号等は以下の通り。A: 母貝、C: 色彩の残っている壳貝の個体、D: 死殻、E: 本體を受けているもの。

母貝: 1 個体のみが母貝を受けている個体があることを示す。+ : 残留部を有さない殻片のみ出土した標本。ア: W, 10, 16, pH

1. 最少密度数の検出は下記のよう行った。

板塊を有する個体と殻頂を欠いているが全体の8割以上を占めている個体を1個体とした。表中の二枚目のノホ左殻／右殻を対。各グリッドごとに左右それぞれの殻頂のうち、多い方を標準数とした。ユウゲン科では、殻とフタのうち多い方を標準数とした。殻頂部を有さない殻片のみ出土した標本は1個体とした。

2. ライズは以下のようにある。

1: 1~2cm 2: 2~4cm 3: 4~6cm 4: 6~8cm 5: 8~10cm 6: 10~12cm 7: 12~14cm

號	R-2	R-3	R-4	R-5	R-6	R-7	R-8	R-9	R-10	R-11	R-12	R-13	R-14	C-1	C-2	表	不	金	21	生	皇	文	昌	
59	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	試	明	8	③	N	1-2-3			
60	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	5	46	4	1-2-a		N	1-3-2			
61																		1		N	1-2-2			
62																		1F						
63																		6	1A	1	1-1-8			
64																		4 (3E)	N	1-2-3				
65																		3	F	1-2-8				
66																		22 (3E)	N	1-2-C				
67																		②	H	1-2-C				
68	2																	3	H	V-5				
69	66	2	1	2	3		8	19		1	37		1					185	④	H	V-5			
70																		2	H	V-8				
71																		8	H	V-8				
72	2																	25	H	V-8				
73	2	1C																9 (1C)	H	V-9				
74																		1	H	V-7				
75																		1		1-2-a				
76																		2 (1B)	H	1-2-a				
77																		6	3	H	B-3			
78																		51	1	#	1-1-a			
79																		2	H	1-1-a				
80																		3	H	I-1-a				
81																		2 (1A)	H	I-4-a				
82																		3 (2E)	H	I-2-a				
83																		6	H	K-3-0				
84																		1	H	I-1-2-a				
85																		1E		H	I-2-a			
86																		1F		H	I-2-a			
87	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	31	32	33	34	35	36	37	38	39	30	31
88																		6 (2E)	H	I-2-a				
89																		4	H	K-3-0				
90																		12	H	I-2-c				
91																		5	L	(2E)	V	I-2-c		
92																		2	H	B-2-c				
93																		5	H	P-1-c				
94																		1	H	B-1-0				
95																		2	H	B-2-c				
96																		1	H	I-3-0				
97																		15	H	B-1-c				
98																		5		H	B-1-c			
99																		1						
100																		4						

3. 生じ場所は、以下の歌詞によって表わした。

- | | | |
|--------------------|------------------------|--------------|
| I: 外部・サンド壁 | 0: 海綿状に刷り（ではメタ、日ではサンダ） | a: 砂 壁 |
| II: 内部・丸太床 | 1: 麻縺状下凹 | b: 木 石 |
| III: 河口「島・サンゴローラ」城 | 2: 土ぬれ斜面（メトー型） | c: 土 壁 |
| | 3: 子土工（じのう）内面 | d: マングローブ植物上 |
| | 4: 海底泥 | e: 植物被覆 |

晋·侯承城

五三七

卷之三

四
三

C : 30

d. マンダロ・ブリ

• 203

Digitized by srujanika@gmail.com

6 : 漢書

10

三、兩門子集

—100001-100000000000000000000000

10 - 2000

d. 製品であるもの

各種の貝製品には、食用後に殻が利用されたものとそうでないものの2つが考えられる。例えば、トゥグル浜遺跡等でも指摘されているようにヤコウガイのフタの製品の場合、肉は食用にしたと考えられる。今回、食用後の製品として取り扱った種はスイジガイ、ホラガイである。逆に製品としてのみ用いられたと考えた種はウミウサギ、オオツタノへの2種である。前種は、生時には黒い粘液質の外殻膜で包まれており（例えば生体参照¹¹）、食欲がわきそうにない。

後者のオオツタノハは、波当たりの強い岩礁に生息する種である。沖縄各地の遺跡から出土しているが、未加工の状態で貝殻が多量に出土した例は知られていないようである。宇佐浜貝塚は、沖縄島で最も波当たりの強いと思われる場所の一つである辺戸岬に隣接している。このような場所でもオオツタノハの未加工貝殻は出土せず、出土したツタノハは殻長35.3mm（3個体の平均）と小型個体のみであった。これらのことから、この貝塚の本種は製品用として他地域から持ち込まれたものと思われる。

e. オカヤドカリ類の使用痕を有するもの

本貝塚からも、オカヤドカリ類の使用痕を持つ貝殻が多数出土した。この中にはオキニシ、ツノレイシ等の出土量が多く、オカヤドカリ類の使用痕率の高い中型のグループがある。これらの貝種では、食用後の貝殻へのオカヤドカリ類の使用があった後に、オカヤドカリ類の再度の殻交換による元の貝殻の貝塚内への堆積という現象も考えられる。この現象が生じた場合、真の採集個体数は分からることになる。同様な現象は、アマオブネ類でも生じていることが想定される。そのため、今回は単純にオカヤドカリ類の使用痕を有する個数を、食用でなかったものとして取り扱った。

ただ、中・小型で食用に適さないと考えられるカノコガイ、スクミウズラ、クチムラサキサンゴヤドリは、オカヤドカリ由来の貝殻と考え、食料残滓から除いた。

以上の食料残滓から除いた貝類は、50種227個体であった。このうち、食料以外の種は、17種存在した。これは、総出土種数100種のうち17%を占めている。この結果は、食用としての貝類採集が特定の種を意識して選択していたことを示唆するものと思われる。

3) 食料残滓貝類

a. 種組成と採集場所

2) で示した以外の貝類を食料残滓として取り扱った。出土した貝類は、31科77種1810個体であった。主体貝としては、ショウセンザザエ、マガキガイ、オキナワヤマタニシ、サラサバティラ等が挙げられる（図54）。それぞれの種の割合は、22.5%，16.1%，10.0%，および7.2%であった。その他にも、オオベッコウガサ（5.6%）、ヤコウガイ（4.8%）、シラナミ（4.4%）等も出土量が多かった。本貝塚の主体貝の特徴として、中・大形種が優占することと、1種の優占する割合が低いことの2点が指摘できる。

貝類の生息場所を探集場所と見なし、各生息場所類系ごとの頻度を示したのが図54である。類系は占我地原貝塚に基づいた。外洋-サンゴ礁域（I）が著しく高く、85%を越えていた。他では陸域（V）が12.5%であり、前者と合わせて、ほぼ全ての貝類がこの2つの場所から得られていた。これは、貝塚の立地がサンゴ礁に面して、両側が急崖に取り囲まれた地形上の制約であろう。シレナシジミ等マングローブに生息する貝類も出土するが著しく少なく、この地に生息しないこのような貝類の採集に行くことの必要性が、それ程高くなかったものと思われる。

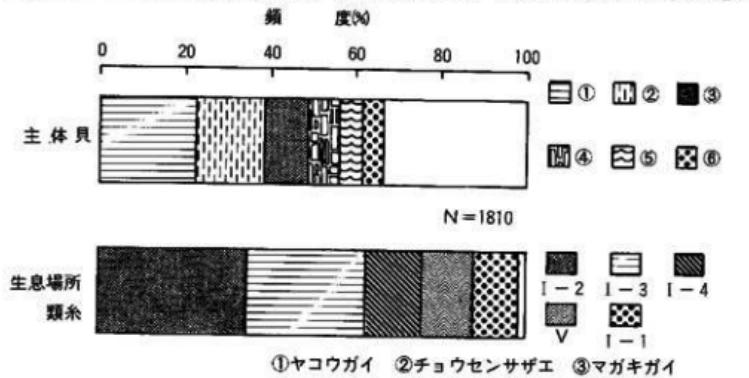


図54 宮佐近日貝塚より出土した食料堆溝目型の相成

外洋・サンゴ礁域の小区分では、イノー内（1-2）が食料残滓全体の約35%を占めていた。干瀬（1-3）も28.1%と高い割合であり、礁船面（1-4）と潮間帶山・下瀬（1-1）が

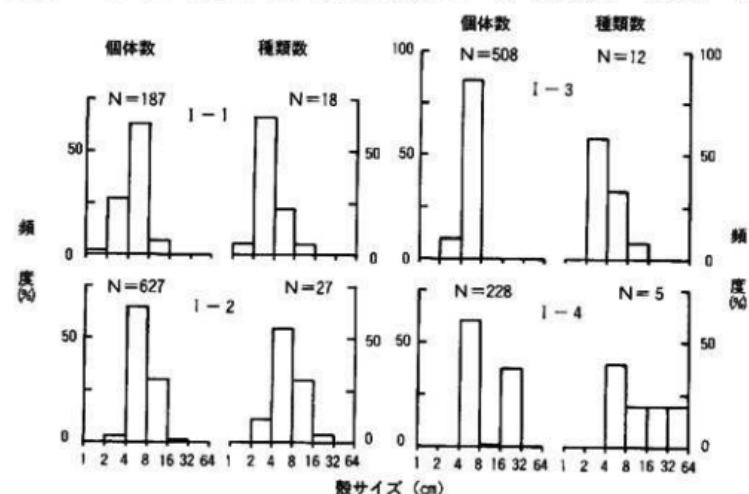


図55 外洋・サンゴ礁域の各生息場所での採集見類のサイズ

それぞれ10%強であった。前の2つの場所が貝類採集に大きな位置を有していたと考えられる。各生息場所ごとに採集貝類のサイズを図55に示した。サイズは、最大長を等比級数で区切って表した。それぞれの生息場所類系に属する種類を個体数(出土数)と種類数の2つで示した。このように示すと、各生息場所での主な採集貝類サイズとどの程度の大きさの種を対象としているか理解できる。まず、それぞれの生息場所で採集された種類では、イノー内が27種と最も多く、潮間帯中・下部、干瀬と続く。礁斜面では5種と著しく少なくなっている。例えば、礁斜面ではその種類は少ないにもかかわらず個体数が多いことから、対象種が絞られ、それのみを採集していたことが分かる。木貝塚では、個体数は4cmから8cmのものに集中しており、中型種が中心といえよう。一方、種類では2cmから4cmの小形のものも多い。これら小型種を採集の中心とはしなかった要因があるともいえよう。

b. 生息場所類系ごとの特徴

I. 潮間帯中・下部、この場所では、オオベッコウガサが多く、約半数を占めており。ハチジョウダカラやアマオブネも多かった。前2種は、主に非石灰岩の岩礁に生息する種である。他遺跡でのこれらの種の出土量はそれ程多くなく、両種の多いことは本貝塚の特徴の一つと言えよう。オオベッコウガサの近似種マツバガイでは、主に夜間に活動することが知られている。また筆者の慶良間諸島慶留間島での観察でも、オオベッコウガサは夜間の干瀬時にはい出しており、その採集は容易であった。奄美大島でも本種の方言に“夜”の意味を含むものがあり、このような本種の採集活動に起因するものと思われる。これからのことから、本種の採集は夜間であった可能性が高く、「イザリ」的な貝類採集のあったことが想定される。このような推定は、広島県の帝釈猿馬渡岩陰遺跡から出土したマツバガイについても行われている。

II. イノー内、ここではマガキガイが約半分を占めており、シラナミ、アンボンクロザメ

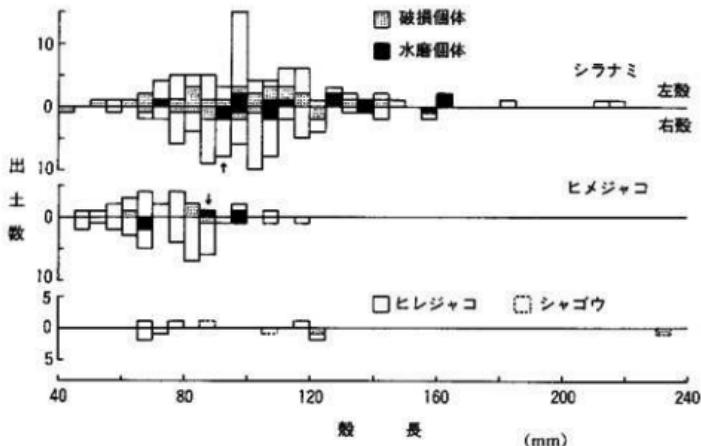


図56 出土したシャコガイ類の殻長分布 矢印は貝長の殻長を示す

も比較的多い。個体数、種類数とも最も多い生息場所であり、中型のものが採集の対象となっている。

シャコガイ類は多く出土しており、シラナミ、ヒメ、ヒレ、シャゴウの順に出土数が減少した。その中でシラナミが約60%と高い割合を占めていた。沖縄各地の遺跡ではヒメジャコの出土量がシラナミのそれを上回っていることが多い。本貝塚でのシラナミの優勢が、単に生息数の多寡に基づくのか、他の嗜好性等により起因しているのか等も、他遺跡との比較が必要と思われる。ここでは、本貝塚の前面の海岸がイノの発達が悪く、ヒメジャコの生息個体数が少なかったのではないかという可能性を指摘しておきたい。

本貝塚から出土したシャコガイ類のサイズ組成を殻長で表し、図56に示した。この時に水磨を受けた個体と破損した個体を区別した。破損したものは、殻頂部を有し前・後端のどちらか一方が残っているもので、欠損している端部の位置を推定して測定を行った。

シラナミは4cm以上で、7cmから12cmの個体が多く、15cm以上の個体も比較的多く見られた。ヒメジャコは、4cmから11cmとシラナミに比べて小型であり、12cmを越えるものはなかった。ヒレジャコとシャゴウは、計測可能な個体が著しく少なかった。ヒレジャコは7cmから12cmとシラナミとほぼ同じサイズのものが出土している。シャゴウも同様であった。しかし、両種とも殻頂部の厚みから殻長30cmを越えると推測される個体も出土していた。

これらのサイズを同じく後期の備瀬貝塚から報告されたものと比較してみると、いずれの種においても中心的なサイズに相違は認められなかった。ただ、備瀬貝塚から出土したシャゴウは、5cmから35cmまで中心的なサイズがなく採集されているといえよう。これら2つの貝塚の状況が類似していることから、後期の海況の元で生息しているシャコガイ類の普通に見られるサイズ分布を反映している可能性も多い。ここで示したような殻長分布のパターンから相違する遺跡があるとすれば、その意義に興味が持たれる。例えば、伊原遺跡出土シラナミは小形であることが指摘されている。

破損個体は殻長が推定であることの表示の他にも、破損させることの意図が考えられる。ただし、今回の結果では、破損があるサイズに集中するような明瞭な傾向は認められなかった。このような破損の意味も、シャコガイ類が多数出土する遺跡で検討してもらいたい課題の一つである。

また水磨を受けたシャコガイ類も、比較的多く出土している。今回出土したものは、殻長により3つのグループに区分可能ではないかと思われる。すなわち、6cmから11cm、12cmから14cmおよび15cmから16cmである。これらには貝皿として利用されたものも含まれると思われる。また、後期の遺跡から多数出土するというシャコガイ貝錘も水磨をうけた個体を用いることも指摘されている。本貝塚からは2個のシャコガイ貝錘が出土しており、そのサイズを矢印で示したが、8~9cmのサイズに見られた。そして、大城氏がまとめた後期のシャコガイ貝錘の殻長も、8~9cmにある。このように考えると、6cmから11cmのグループの一部は貝錘の原料

として持ち込まれた可能性も想定される。第2, 第3のグループでも、それぞれの意図をもって持ち込まれたとすれば、それぞれの使用様式の推定も一つの課題といえよう。

本貝塚ではアンボンクロザメの集積遺構が検出されている。⁸¹² 対測図、写真等がなく、その詳細は不明であるが、出土した貝について観察を記して今後の資料としたい。

まず集積遺構は、少なくとも45個体以上で成立しており、従来の同様な遺構と比べて個体数が多いのではないだろうか。⁸¹³

種類は、一応アンボンクロザメと同定されるものが41個体、クロフモドキが4個体であった。しかし、現生のアンボンクロザメで明瞭な3本の黄色色帯が、遺跡出土の個体では不明瞭となり、クロフモドキと区別が難しい。この両種ともイノー内の砂底に生息する種であり、採集場所も同様と思われる所以、あえて2種に区別する必要はないものと考えたい。

今回出土した個体は全て、斑文の明瞭なものであった。そして、集貝のサイズは良く揃っており、平均殻長99.84mm（標準偏差11.79）であった。ただし、水磨をうけた大型のクロフモドキが2個体ふくまれていた。そのサイズと水磨を受けていることから、他の集貝とは異質な感じを与え、集積されていた時にも配慮されていた可能性も考えられる。

集積以外に本貝塚から出土したアンボンクロザメは（出土不明などを除いて）、Ⅲ-2とⅢ-11で2個、Ⅳ-7第1層30~45cmで1個であった。前述の水磨を受けた2個体を除いて、集積・グリッド出土いずれの個体も破損の認められない完全なものであった。他遺跡では集貝以外にも本種の破損した殻頂部等が出土するが、本貝塚では完全なもの以外に破片が僅かにみられただけであった。本種の軟体部は煮沸して取り出すことは可能である。本貝塚などの場合、イモガイより容易に軟体部を取り出せるチョウセンザザエやシラクモガイでも破損した殻が多いことから、アンボンクロザメの軟体部をうまく取り出せたことは考えにくい。それゆえ、この貝殻は食用のためなく、別な意図のもとに採集されたと思われる。採集後、肉を腐らせ水洗いした後に集積されたものであろう。

Ⅲ、下瀬、いわゆるリーフと呼ばれる白波の立っている部分である。ここではチョウセンザザエの採集量が著しく多く、全体の80%を越えていた。土種類頻度は12種と比較的少なく、2cmから4cmの小型の種が多い。しかしながら、小型種の出土は10%程度と少なく、採集時の主目標が明確になっていく場所といえよう。

干瀬に多いチョウセンザザエは、殻よりもフタの方が約4.5倍も多く出土

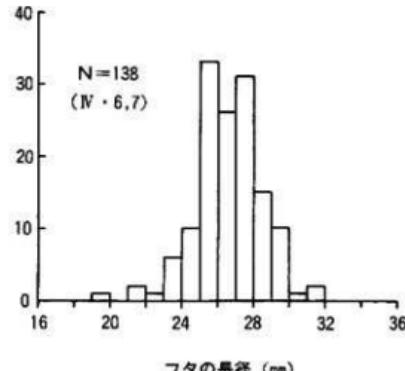


図57 チョウセンザザエのフタ長径の頻度分布

した。この傾向は従来から指摘されている。本貝塚の場合、88個の殻のうち35個にオカヤドリ類の使用痕が認められた（約40%）。チョウセンザザエは、大型オカヤドカリ類に最も良く利用される宿貝であり、本貝塚での使用痕の率の高いことからオカヤドカリ類による殻の持ち去りが生じた結果、フタが著しく多くなっていると考えておきたい。

また、採集されたチョウセンザザエのサイズを伊原遺跡の例に従い、フタの最大径を用いて表わした（図57）。計測に用いたサンプルは、N=6, 7出上の138個体である。25mmから27mmのものが多い単峰型の分布を示した。前述のグスク時代の伊原遺跡では、23mmから25mmにピークが存在する様子が示されている。本貝塚で採集された個体は、伊原遺跡に比べて大型であったと指摘できよう。

iv. 雌斜面、サラサバティラ57%と優占し、ヤコウガイも約40%と多数出土していた。ただし、ヤコウガイはフタの製品も含めて個体数を算出したので、製品のみ取り上げたグリッドが存在する可能性もあり、その出土量は過大評価になっていることが想定される。

ここでは、採集の対象種が著しく限定されていること（5種）が特徴である。

雌斜面での優占種であるサラサバティラの殻径分布を図58に示した。ただし、本種の外唇は破損している個体が多かったので、殻径は元の殻口を推定して求めた。6cmから7cmにピークを有する山が明らかであった。さらに大型の11cmから12cmに小さなピークが存在するようであった。本種は、幼生の定着がイノー内や下瀬上で行われ、殻径6cm程度の幼貝までは主にイノー内で成長し、その後礁斜面を降りながら成長・成熟することが知られている。本貝塚から出土した6cmから8cmサイズクラスの個体は、主に干瀬上のサイズに相当する。このことから、11-12cmの小ピークの少數個体のみが礁斜面で採集されたものかもしれない。本種の大部分は、干瀬で得られた可能性が高いが、今回の類系では、取り敢えず礁斜面に区分しておいた。

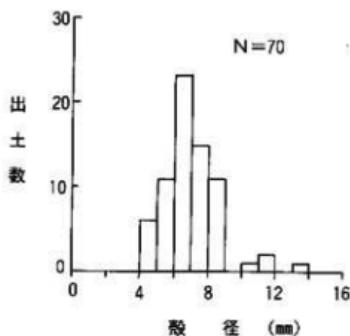


図58 サラサバティラの殻径分布

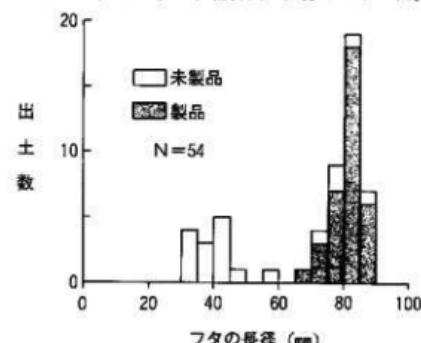


図59 ヤコウガイのフタ直徑の頻度分布

チョウセンザザエと同様に、ヤコウガイもフタの最大径により採集サイズの推定を試みた。この時に製品も含めて計測を行った。その結果が、図59である。まず30mmから50mmの破損のない小形のものも出土していた。これらは、チョウセンザザエと同様な牛島場所で採集された可

能性が高く、70mm以上の大型個体とは採集の方法も異なることが想定される。大型のフタは、測定できたものの大部分が製品であった。ただ、破損したフタもあり、ここで示した値がすぐにフタの製品の率とはならない。

v. 陸域、本貝塚でも陣差貝類が比較的多く出土した（全体の12.5%：図54）。種類ではオキナワヤマタニシが著しく多く、陸産貝類の80.8%を占めていた。オキナワヤマタニシの成長段階の組成をN-2第1層45~60cmのサンプルで調査した（表9）。その結果、成貝が90%を占めていた。また幼貝も成貝に近いサイズの大型個体であった。このような状況は、知場塚原遺跡や平良グスクの結果と同様である。本種の食料残滓としての可否は知場塚原遺跡で検討した結果、否定的なものであつた。本貝塚では検討できる要因がなく食料残滓として取り扱った。

成長段階の組成も、今後の食料残滓を考えるときの資料として提示しておきたい。

表9 オキナワヤマタニシの成長段階組成

	出土数(%)	殻径(平均士標準偏差)
成貝	65 (89.1)	19.04±1.03
幼貝	6 (8.2)	16.15±1.16
不明	2 (2.7)	—

4) 小結

本貝塚の貝類採集活動の特徴としてまず挙げられる点は、ほとんど外洋・サンゴ礁海域の種を利用していることである。これは貝塚の立地状態から容易に考えられるが、他の生息場所の貝類は極度に少ない。他地域へ採集のために活動する必要がなかったのであろうか。

i) 本貝塚はチョウセンザザエ・マガキガイを中心にサラサベティラ・オオベッコウガサ・ヤコウガイ等であった。これらの種は、現在も食用に良く利用されており、“味”的な良い貝である。このように沖縄においては、貝類に対する嗜好性は今まで大きな変化を受けてないようである。

また本貝塚の貝類組成に比較的近いものは、与那国島トゥグル浜遺跡であろう。トゥグル浜遺跡ではヤコウガイが著しく多く、チョウセンザザエ・シラナミの出土も目立っている。これらは、イノ一部の発達が悪く、干瀬部が良く発達した海岸という両遺跡の前面の海岸形態の類似に基づくものであろう。

最後に貝類の採集活動として興味深い問題を指摘しておきたい。まず第1は、夜間の干瀬時に活動するオオベッコウガサが比較的多く出土することから、「イザリ」的な夜間の採集の存在の可能性である。ただしオオベッコウガサは潮間帯中・下部に生息する種であり、マガキガイ等のイノ内に生息する種に対しても「イザリ」が行われたかどうかは即断できない。

第2はヤコウガイの問題である。出土した個体のサイズから、サラサベティラは主に干瀬上で採集されたのだろうということは指摘した。もし本種が干瀬で採集されたとすると、礁斜面で採集されたと考えられる種は極めて少くなり、ヤコウガイの役割が著しく大きくなる。むしろ、ヤコウガイを得るためにのみ礁斜面での活動を行った、と言えるのではないだろうか。本

貝塚では、ヤコウガイのフタ製品の他にも、貝匙状製品も多数出土しておりね本種の重要性の高かったことがうかがえる。本種を得るために危険度の高いリーフ外での潜水採集が必要であり、何らかの特殊化した集団（採集集団）の存在も想定されるものかもしれない。

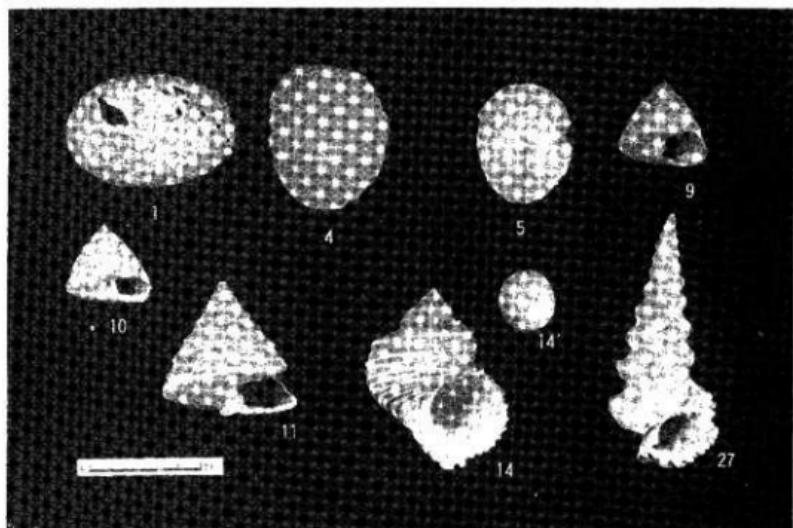
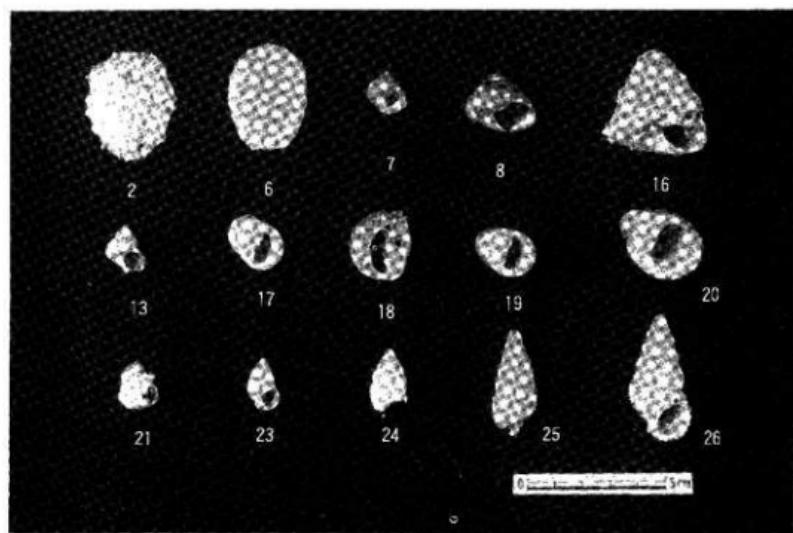
注 文 献

- 注1. 沖縄県教育委員会 「トゥグル浜遺跡」『沖縄県文化財調査報告書第66集』1985年3月。
- 注2. 白井祥平 『原色沖縄海中動物生態図鑑』 新星図書 1977年。
- 注3. 沖縄県教育委員会 「古我地原貝塚」『沖縄県文化財調査報告書第84集』1987年12月。
- 注4. Hirano Y. Activity of the limpet, *Cellana nigrolineata*,
Venus, 38:35-47. 1978年。
- 注5. 熊本人文学部考古学研究室 「手広遺跡（概報）」
『研究室活動報告 20』1986年3月。
- 注6. 稲葉明彦・河瀬正利 「帝釈馬渡岩陰遺跡出土の貝製品」『広島大学文学部帝釈跡遺跡
群発掘調査年報 II』1979年。
- 注7. 本部町教育委員会 「備瀬貝塚」『本部町文化財調査報告書第4集』1986年3月。
- 注8. 沖縄県教育委員会 「伊原遺跡」『沖縄県文化財調査報告書第73集』1986年3月。
- 注9. 家田淳一 「しやこがい科貝鍤の機能」『琉大史学』13号 1983年3月。
- 注10. 盛本 熊 「琉球列島の貝製漁網鍤」『季刊 考古学』第25号 1988年10月。
- 注11. 大城 慧 「貝鍤についての- 考察- 後期貝塚出土資料の場合-」『紀要』第4号
沖縄県教育委員会文化課 1987年3月。
- 注12. 新山重清 「宇佐浜B貝塚」『沖縄大百科』1983年。
- 注13. 岸本義彦・島 弘「沖縄における貝の集積遺構- :ホウラ・イモガイを中心とした-」
『紀要』第2号 沖縄県教育委員会文化課 1987年3月。
- 注14. 例えば、沖縄県教育委員会「シメグ堂遺跡」『沖縄県文化財調査報告書第67集』
1985年3月。
- 注15. 沖縄県教育委員会 「あまん」『沖縄県天然記念物調査シリーズ第29集』1987年3月。
- 注16. 久保弘文 「タカセガイ・ヤコウガイ・ナヨウセンサザエ」『サンゴ礁海域の増養殖』
みどり書房 1988年。
- 注17. 本部町教育委員会 「知場塚原遺跡」『本部町文化財調査報告書第5集』1988年3月。
- 注18. 黒住耐一・金城龟信 「豊見城村の長崎、保栄茂および平良グスク試掘調査により出土
した貝類」『豊見城村の遺跡分布- 豊見城村文化財調査報告書第3集』1988年3月。

軟体動物遺存体(1)

- 2 : ツタノハガイ
6 : ヨメガカサガイ
7 : イシダタミガイ
8 : クマノコガイ
16 : オオウラウズガイ
13 : コシダカサザエ
17 : コシダカアマガイ
18 : フトスジアマガイ
19 : ニシキアマオブネガイ
20 : アマオブネガイ
21 : カノコガイ
23 : オオシマカニモリガイ
24 : クワノミカニモリガイ
25 : ヒメトウガタカニモリガイ
26 : オニノツメガイ

- 1 : イボアナゴ
4 : オオベッコウカサガイ
5 : ベッコウカサガイ
9 : ニシキウズガイ
10 : ムラサキウズガイ
11 : ギンタカハマガイ
14 : チョウセンサザニ
14 : チョウセンサザニ (フタ)
27 : オニノツメガイ



図版 軟体動物遺存体(1)

軟体動物遺存体(2)

12 : サラサベティラ

31 : ゴホウラ

15' : ヤコウガイ (フタ)

15 : ヤコウガイ

43 : ホラガイ

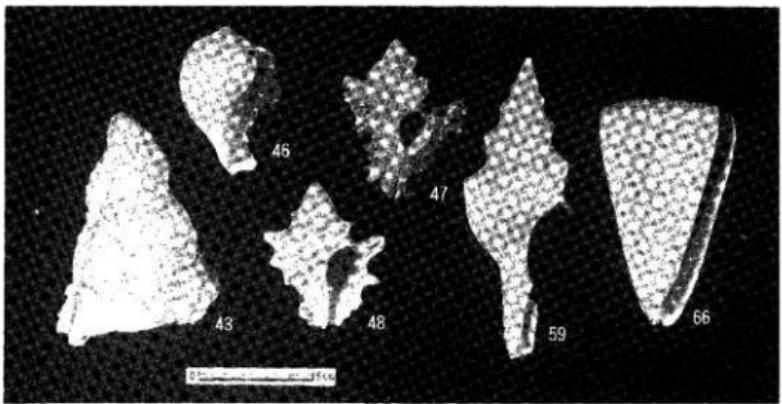
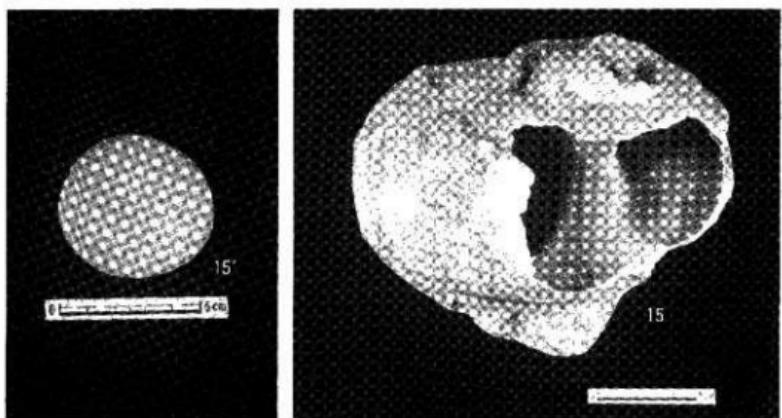
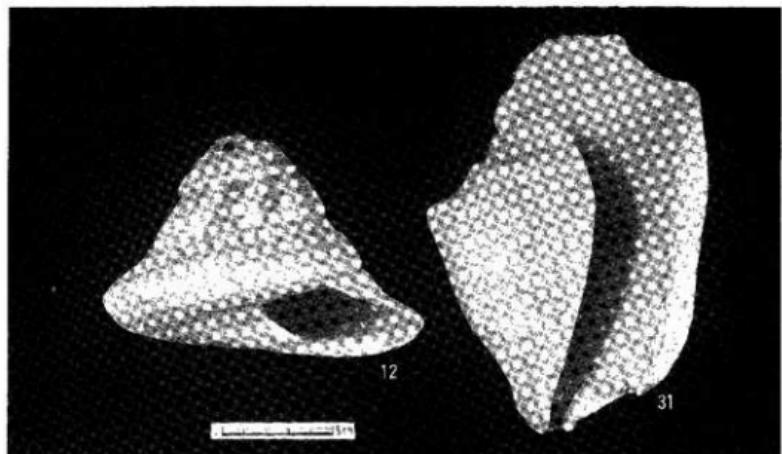
46 : スタミウズラガイ

48 : シラクモガイ

47 : ガンゼキボラ

59 : ナガイトマキボラ

66 : アンボンクロザメガイ

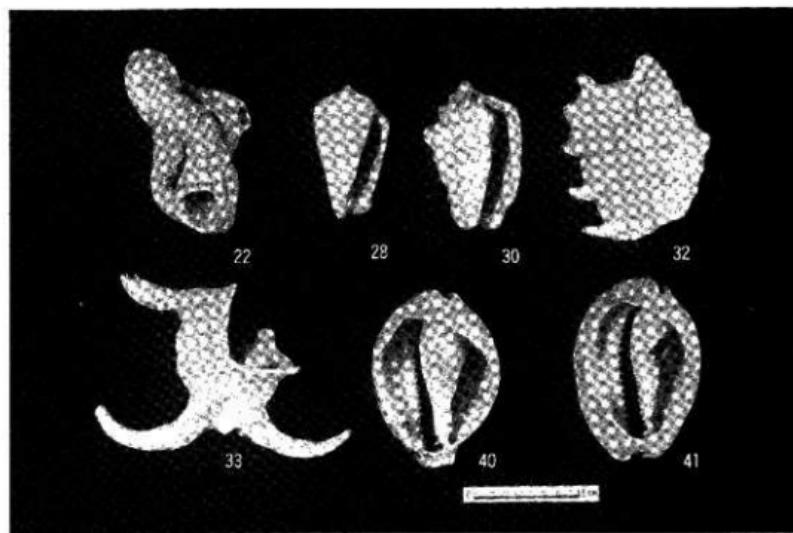
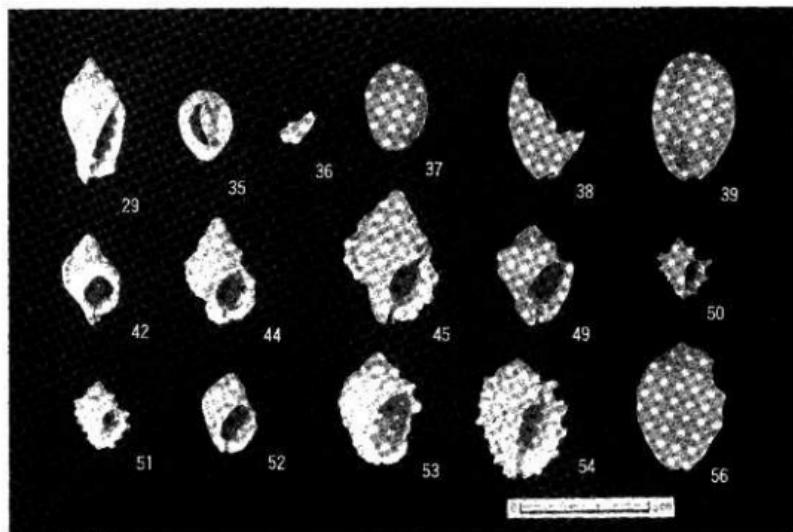


図版 軟体動物遺存体 (2)

軟体動物遺存体(3)

- 29：ネジマガキガイ
35：ハナビラダカラガイ
36：キイロダカラガイ
37：ハナマルユキガイ
38：ホシキヌタガイ
39：ヤクシマタガラガイ
42：シオボラ
44：イワカワウネボラ
45：オキニシ
49：ツノレイシガイ
50：ツノテツンイシガイ
51：テツレイシガイ
52：コイボテツレイシガイ
53：シロクチキナレイシガイ
54：ヒロクライガンイシガイ
56：テツボラ

- 22：フタモチヘビガイ
28：マガキガイ
30：イボソデガイ
32：クモガイ
33：スイジガイ
40：ホシダカラガイ
41：ハチジョウダカラガイ

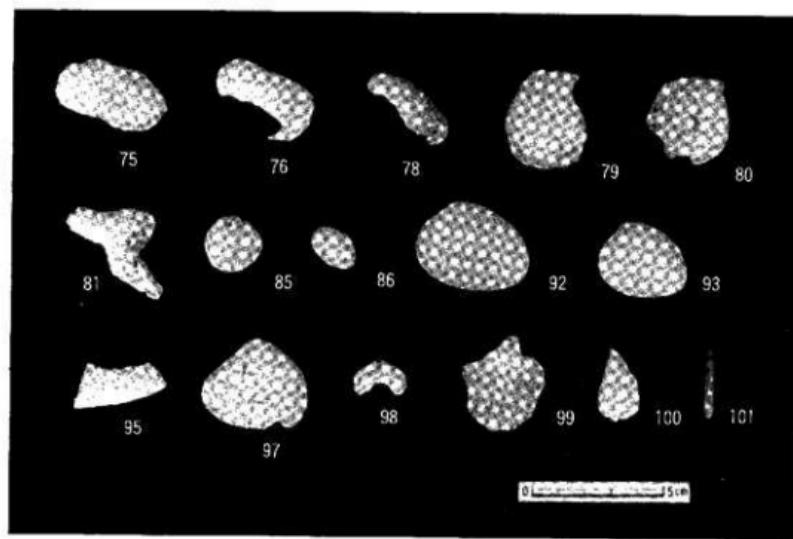
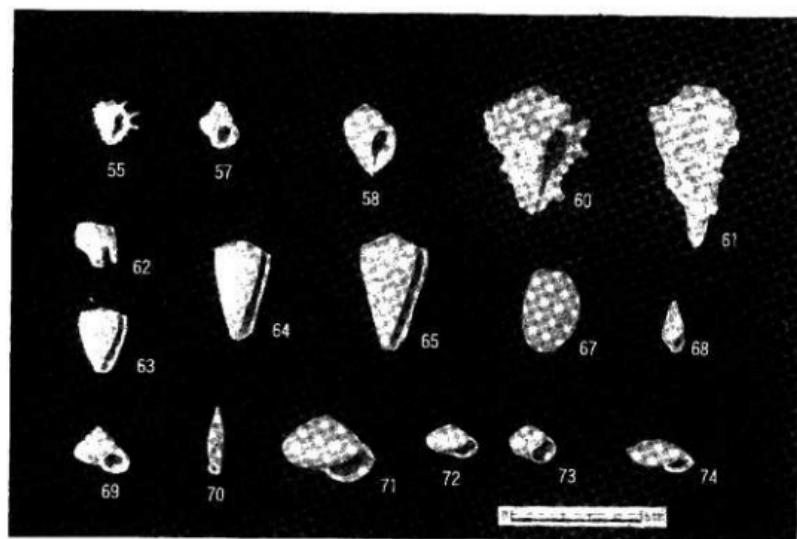


図版 軟体動物遺存体(3)

軟体動物遺存体(4)

- 55：キマダライガレイシガイ
57：ヒショウラクガイ
58：クチムラサキサンゴヤドリガイ
60：コオニコブシガイ
61：オニコブシガイ
62：クリイロフデガイ
63：サヤガタイモガイ
64：キヌカツギイモガイ
65：イボシマイモガイ
67：ナツメガイ
68：カフニナ
69：オキナワヤマタニシ
70：ツヤギセルガイ
71：シュリマイマイ
72：パンダナマイマイ
73：オキナワスカワマイマイ
74：ヘリトリケマイマイ

- 75：エガイ
76：ベニエガイ
78：リュウキュウヒバリガイ
79：カイシアオリガイ？
80：ミドリアオリガイ
81：クロチョウガイ
85：キクザルガイ？
86：キクザルガイ類
92：ホソスジイナミガイ
93：アラスジケマンガイ
95：アラヌノメガイ
97：リュウキュウシラトリガイ
98：ヒザラガイ類
99：コウイカ
100：カメノテ？
101：ナガウニ（棘）



図版 軟体動物遺存体(4)

軟体動物遺存体(5)

77：リュウキュウサルボウガイ

82：メンガイ類

83：シレナシジミガイ

84：シロザルガイ？

91：カワラガイ

94：ヌメガイ

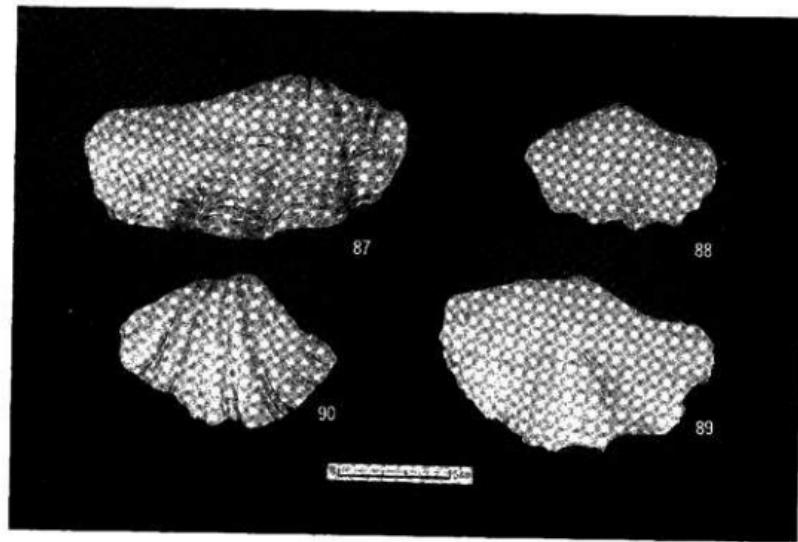
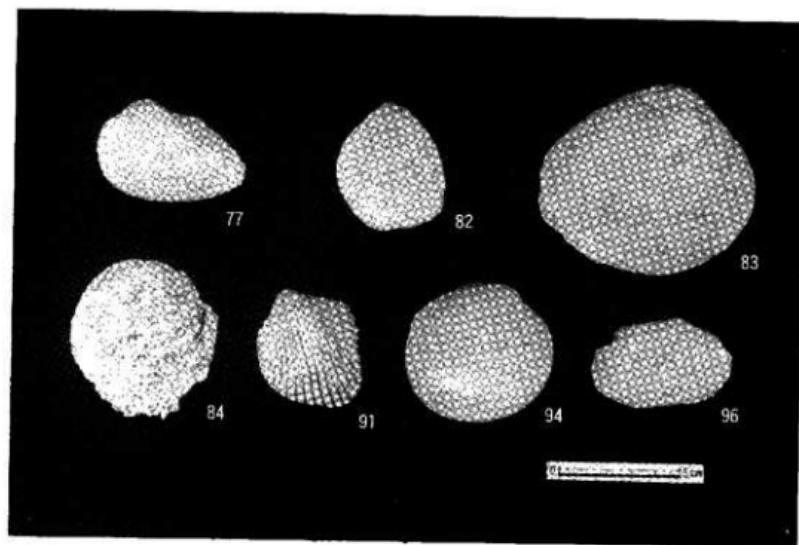
96：リュウキュウマスオガイ

87：シラナミガイ

88：ヒメジャコガイ

90：シャゴウ

89：ヒレジャコガイ



図版 軟体動物遺存体(5)

宇佐浜B貝塚の動物遺体については、これまでその報告がおくれていたこともあるって明らかにされることがなかった。検出される骨の量が少なかったために、当時の動物の処理をめぐつていくつかの推測も行われてきた。これらについてはなお問題のあることが指摘されるであろうが、一応、全資料の報告を果たす必要もあり、今回その内容を明らかにするものである。

検出された脊椎動物種名表

脊椎動物門	Phylum VERTEBRATA
I. 硬骨魚綱	I. Class Osteichthyes
スズキ目	Order Perciformes
ハタ科	Family Serranidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
タイ科	Family Sparidae
ミナミクロダイ	<i>Acanthopagrus siuicolus</i>
フエフキダイ科	Family Lethrinidae
ヨコシマクロダイ	<i>Monotaxis grandoculis</i>
ベラ科	Family Labridae
カンムリベラ属	<i>Coris sp.</i>
ブダイ科	Family Scaridae
ナガブダイ	<i>Scarops rubrouiolaceus</i>
ナンヨウブダイ	<i>Scarus gibbus</i>
フグ目	Order Tetraodontiformes
カワハギ科	Family Aluteridae
モンガラカワハギ属	<i>Balistes sp.</i>
ハリセンボン科	Family Diodontidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
II. 爬虫綱	II. Class Reptilia
カメ目	Order Chelonia
リクガメ科	Family Testudinidae
リュウキュウヤマガメ	<i>Geomysa spengleri japonica</i>

* 早稲田大学考古学研究室

ウミガメ科

オオウミガメ

Family Chelonidae

Chelonia mydas

III. 哺乳綱

クジラ目

科・属不明

イルカ科

属・種不明

食肉目

イヌ科

イヌ

海牛目

ジュゴン科

ジュゴン

偶蹄目

イノシシ科

リュウキュウイノシシ

以下、動物各種の概要を述べる。

魚類

ミナミクロダイ、フエダイ科のヨコシマクロダイ、ベラ科のカンムリベラ属はそれぞれ1点ずつの頸骨、咽頭骨を検出したのに対して、ブダイ科のナガブダイ、ナンヨウブダイが咽頭骨でそれぞれ9~10個体分があり、モンガラカワハギが1個体分、ハリセンボン科が2個体分検出された。ブダイ科の主体は明らかである。しかし、この中にもクロダイの含まれていることも注意しておかなければなるまい。岩礁の海岸の間に河口に出来た入江もあったことを推測させるからである。

爬虫綱

リクガメ、ウミガメともに出上量は少ないけれどもオオウミガメの歯骨などを確認し得る程度の出上量はある。貝塚付近は本島の一部とはいえ、ほとんど島嶼的な条件のところである。このような場所でウミガメは重要な資源になっていたはずである。

哺乳綱

極めて少ないが、クジラ類、イルカ科、ジュゴン、イヌの歯・骨を検出しており、この時期の動物相を整えている。イノシシもまた四肢骨、歯牙の出土をみる。歯は頸骨にあるものと遊離歯を加えて10点があり、1才と2才の歯を比定できたのは2点、それに近いものが2点、2点が歯をはずれていた。これについては数が少ないので問題がのこる。

III. Class Mammalia

Order Cetacea

Fam. et gen. indet.

Family Delphinidae

Gen. et sp. indet.

Order Carnivora

Family Canidae

Canis familiaris

Order Sirennia

Family Dugongidae

Dugong dugong

Order Artiodactyla

Family Suidae

Sus leucomystax riukiuanus

宇佐浜B貝塚の動物遺体

宇佐浜B貝塚は沖縄本島の最北端に位置する辺戸岬の南東崖下の海岸砂丘上に立地する沖縄貝塚時代後期の遺跡である。貝塚西方の台地上にある5ヶ所の遺跡からは一般に動物遺骸の出土は少ないとされ、B貝塚での出土は比較的目立った方であったという。本島の北端というきびしい自然的な環境にあたるために遺跡の規模も小さく、動物骨の出土も少ないのであろうか。しかし、魚類、爬虫類、獸類などは基本的には本島の他の後期貝塚のそれと共通する内容を持つもので、特にこの地域での特殊な状態がみられたわけではなかった。したがって、やはり遺跡全体の規模の小さいことによるのであろう。

表10 魚骨の出土状況

	種類	部位	B II - 0 第1層15~30	B IV - 5 第2層0~15	B IV - 9 第2層15~24	B IV - 10 第2層	不明	合計
スズキ科	ハタ類	R+L		+1			+1	
	ミナミクロダイ	R+L					+1	+1
	ヨコシマダイ	R+L					+1	+1
タケノコダイ科	カムムリ	R+L					+1	+1
	ベラ属	R+L					+1	+1
	ブダイ	R+L	2 1 1			1+	10 8 5 4	13 9 5 5
ナシヨウブダイ科	ナシヨウブダイ	R+L	2 2 1				10 2 2	12 4 3
	ナガブダイ	R+L	1		1		1 9 11	1 11
	小計	R+L	2 2 2		1		11 2 11	13 4 14
フグ目	モンガラカワハギ	背第 鱗 棘					1	1
	ハリセンボン科	R-L					1/2	1/2

R+L: 右左前上顎・歯骨、R-L: 右左の上下咽頭骨

表11 アオウミガメ・ウミガメ科・リクガメ科の出土状況

部位	層位	BIV-4 2層0-15		不 明	合 計
		アオウミ ガメ	下 頸 骨		
ウ ミ ガ メ 科 類	ウ	頂 骨 板	—	1	1
	ミ	縁 骨 板	3	7	10
	ガ	背 甲 板	—	19	19
	メ	肋 骨 板	6	—	6
		計	9	28	37
		背 甲 板	—	1	1
リ ク ガ メ 科		腹 甲 板	—	1	1
		計	—	2	2

表12 クジラ目の出土状況

科 名	種 名	不 明
クジラ類	部位 不明	1
イルカ類	尺 骨	1

表13 ジュゴンの出土状況

部 位	不 明
肋 骨	1

表14 イヌ歯牙の出土状況

部 位	上 頸 歯	
	R	C
不 明	1	

C = 犬歯

表15 イノシシの出土状況

部位	B IV - 1 第1層 0~15		B IV - 4 第2層 0~15		B IV - 10 第1層 30~40		不 明		合 計				
	R	N	L	R	N	L	R	N	L	R	N	L	
頸骨突起側頭骨			1						1				
下 頚 骨							(1)		(1)				
胸 棘							1		1				
肩 甲 骨	S							1		1			
	d							2		2			
上 腕 骨	S							2		2			
桡 骨	P							1		1			
	S							2		1			
尺 骨	S							1		1			
大 股 骨	S							2		2			
脛 骨	S							1		1			
	d							1		2			
距 骨						1				1			
踵 骨	d							1		1			
合 計		1		1		1		13	1	9	16	1	9

()—破片

表16 イノシシ歯牙の出土状況

部位	上 號												小計	合計		
	R				L											
層位	I	1	2	3	C	P	1	2	3	M	1	2	3			
B IV - 1 第1層45~60									1					1		
B IV - 4 第2層 0~15								1						1		
不 明					1	2	1	1	1/		2	3	2	1	14	16

部位	下 號												小計	合計	
	R				L										
層位	I	1	2	3	C	P	1	2	3	M	1	2	3		
B IV - 1 第1層45~60		1/												1	
不 明	1	3	2/		1	1	1	2	1/		1	2		15	16

表17 イノシシ苗咬耗度分布

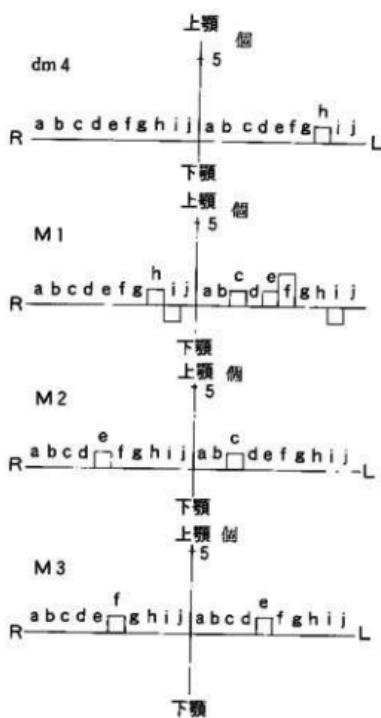
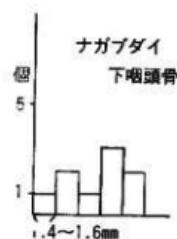
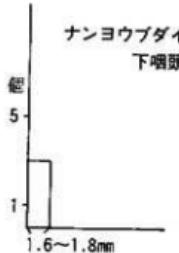


表18 魚苗計測表



ナンヨウブダイ
下咽頭骨



3 午カリ。 田舎者
半死半生。

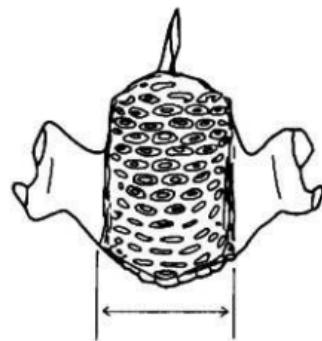


圖60 下眼窩骨計測部位

魚類遺存体

ナンヨウブダイ (1~5)

L 下咽頭骨 (1)

L 上咽頭骨 (2・3)

R 下咽頭骨 (4・5)

ナガブダイ (6~8)

L 下咽頭骨 (6・7)

R 下咽頭骨 (8)

ブダイ頬歯骨 (9)

ミナミクロダイ (10)

L 耳骨

ハタ類 (11)

L 耳骨

ヨコシマクロダイ (12)

L 前上顎骨

カムムリベラ属 (13)

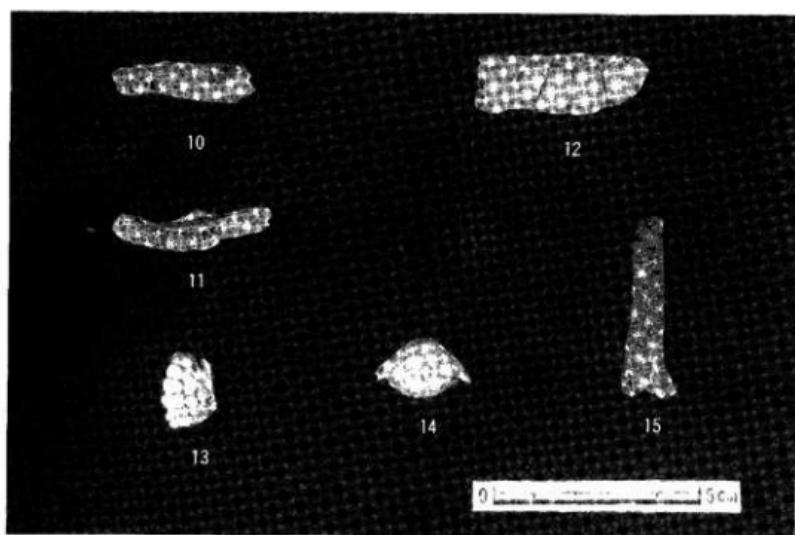
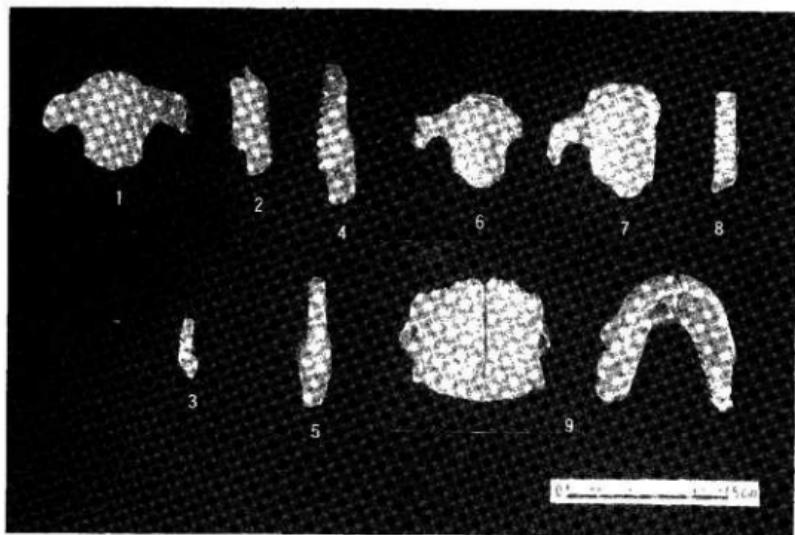
L 上咽頭骨

ハリセンボン (14)

前上顎骨

モンガラカワハギ (15)

背鰭棘



図版 7 魚類遺存体

爬虫類・獸類遺存体

アオウミガメ (1~8)

歯骨 (1)

頂骨板 (2)

肋骨板 (3・4)

縦骨板 (5・6)

L上腕骨片 (7)

肢骨片 (8)

クジラ類 (9)

骨 片

ジュゴン (10)

骨 片

イヌ (11)

R上顎犬齒

イノシシ (12~25)

胸 椎 (12)

肋骨片 (13)

L c ♀ (14)

L c ♂ (15)

R c ♂ (16)

R (P⁴~M²) (17)

L (P⁴~M²) (18)

R下頸骨片 (19)

L肩甲骨 (20)

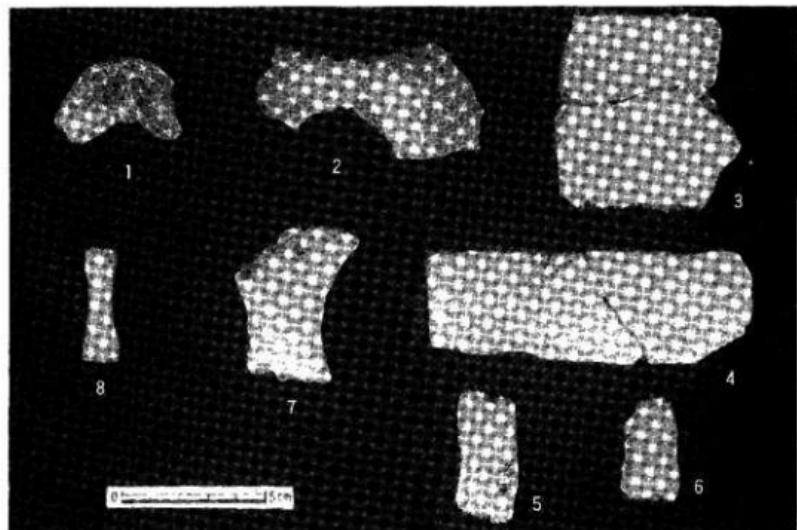
R上腕骨 (21)

L桡骨 (22)

L尺骨 (23)

L股骨 (24)

L踵骨 (25)



図版 8 蝌蚪類、獸類遺存体

第4章 まとめ

以上、宇佐浜A遺跡と宇佐浜B貝塚の発掘調査の内容について述べてきた。最後に若干の考察を加えてまとめとしたい。

宇佐浜A遺跡について

本遺跡は沖縄本島の最北端、国頭村字辺戸に所在し、標高50m前後の台地上に立地している。一帯は5~6段の段丘地形をなし、遺跡はその段丘上に点在（宇佐浜A遺跡・C地点遺跡・D地点遺跡・E地点遺跡・F地点遺跡）して遺跡群を形成している。それらの遺跡はほぼ同時期（沖縄貝塚時代中期）のもので、その時期に人々が台地上で生活を営んでたことがうかがえる。また、遺跡の南側に屹立した安須森の反対側の台地にはカヤウチバンタ貝塚があり、そことも何らかの関係があったと思われる。

遺跡地一体は国頭疊層の風化土（国頭マージ）からなる台地を形成し、現況はサトウキビ畑や荒地になっている。遺跡はそこに立地し、層序は地山も含めて基本的に4枚からなり、第1層は表土の腐食土層で、黒褐色を呈し、20cm前後の厚さをなす。先史遺物はほとんど含んでない。第2層は茶褐色を呈する遺物包含層で、円礫を含む混疊上層となっている。層厚は15~20cmで、土器片等を若干含んでいる。第3層は暗褐色を呈する遺物包含層で、第2層と同様に円礫を多く含んでいる。層の厚さは20~30cmをなし、土器片や石器などをわりと含んでいる。第2層と第3層は色調が若干異なる程度で、円礫を含んでいることや遺物に時期的な差がみられないことより、基本的には同一の層として考えることができる。第4層は赤褐色を呈する国頭疊層の風化土（国頭マージ）で、いわゆる地川である。

遺構は第3層下部において石組み遺構や焼上面、柱穴様の落ち込みなどが検出された。石組み遺構は8基確認され、平面プランが判るものはすべて隅丸方形をなす。大きさは、一辺が2m前後の比較的小さいものと、一辺が5m前後の人きいものがある。明確な竪穴を呈するものはない。それらの遺構は、調査当時には他の遺跡における検出事例がなく、比較検討することが困難であった。1976・1977年に調査された今帰仁村の西長浜原遺跡において、数10軒の竪穴住居址が検出され、その後、1980年に伊計島仲原遺跡で石組みの竪穴住居址が見つかり、該遺構が住居址であることが判明した。これらの遺構は、さらに沖縄各地で検出が相次ぎ、沖縄貝塚時代中期の集落址の研究がかなり前進した。この意味においても、沖縄で最初の検出例となった本遺跡の石組み遺構は特記すべきものである。

出土遺物は土器が圧倒的に多く、次いで石器がある。貝製品や骨製品は1点も得られなかつた。また、食糧残滓としての獸・魚骨や貝殻もほとんど出土していない。このことは台地に形成された沖縄貝塚時代中期の遺跡の一般的な特徴であり、貝塚部は集落と異なる場所に形成さ

れでいると考えられている。

上器は本遺跡が標識遺跡となっている宇佐浜式土器が主体をなしている。他に奄美諸島でよく見うけられる喜念I式土器や宇宿上層式土器が比較的多く、中には奄美諸島から持ち込まれたものと考えられる資料もある。そのことは、与論島・沖永良部島が指呼の間に見えることからも、奄美地域と頻繁に交流を行っていたことが窺える。

他の土器としては、カヤウチベンタ式土器・室川式土器・凸帶文土器などが若干出土している。これらの土器から本遺跡の時期的なことについてみると、沖縄貝塚時代前期後半から同中期に位置づけられ、特に宇佐浜式土器を用いていた頃が主体時期となっている。

石器では石斧が目立ち、形態的にも大・中・小とひととおり揃っており伐採から木工の細部調整までこなしていたことがうかがえる。石質は1例を除いてすべて緑色岩類（緑色千枚岩・緑色片岩・変輝綠岩）を用いており、この岩石の有する特質（硬度・粘り強さなど）を経験的に知っていたと思われる。

特記すべきものとして石皿がある。半蔵した破片であるが、支脚を有している点である。本来は長方形を呈し、表に凹面がみられ、裏面に4個の支脚を有していたことがうかがえる。この種の石皿はこれまでに沖縄において出土が知られてない。

宇佐浜B貝塚について

本貝塚は、先述した宇佐浜A遺跡の東側崖下に形成された砂丘に立地している。この砂丘は辺戸岬のつけねのくびれた場所に風成作用によりできた独立小砂丘である。貝塚は砂丘の奥まった所にあり、砂丘形成後まもない頃に生活の場として利用したことがうかがえる。地形的にも北・西側は高い崖に閉まれ、冬場の季節風から寒さをうまく防いでいたことがわかる。また南東方は開かれ、海にはリーフが発達し、格好の漁場となっていたことがうかがえる。

遺跡地一帯は畠地・荒蕪地からなり、耕作によって只殻などが地表面にかなり散乱している。発掘調査は遺物の分布状況を考慮してトレンチを設定した。その結果、3ヵ所において保存良好な遺物包含層が確認でき、多くの遺物が出土した。

層序は地山も含めて4枚認められた。第1層Aは黒褐色を呈する砂層で、耕作により擾乱を受けている。土器片や貝殻などを若干含んでいる。第1層Bは黒褐色を呈する砂層で、木擾乱の遺物包含層である。第2層は暗褐色を呈する混疊砂層で、直径4~5cmから拳大の礫を多く含んでいる。遺物包含層で、土器片や貝殻などを含む。第3層は黄褐色を呈する砂層で、地山への漸移層と考えられる。第4層は白砂のいわゆる地山である。

遺構は調査範囲との関わりから、明確な住居址等は確認されなかったが、第IIIトレンチにおいて興味深い遺構が検出された。それはイセガイ（アンボンクロザメガイ）の集積遺構である。第7グリッドの第2層上部で検出され、直径約40cmの範囲にはぼ円形状に積まれていた。45点のアンボンクロザメガイを概ね6~7段に積上げ、最下段には1点のゴホウラが据え置かれていた。

た状態にあった。

このような貝の集積遺構は、発掘調査当時には他に検出事例がなく、性格等が今一つ判然としなかった。ところが、近年になって本貝塚とはほぼ同時期の伊江島具志原貝塚や本部町の具志堅貝塚など10数ヶ所の遺跡で同様な集積遺構が検出され¹⁾、その性格が判ってきた。検出する遺物等から九州の弥生前期後半～中期に見られるゴホウラやイモガイ製の腕輪の原材料としてストックされたもので、九州地域との交易品の一つであったことがうかがえる。集積遺構が検出されたほとんどの遺跡において、九州の弥生土器が出上しておらず、本貝塚も例にもれず弥生中期前半に位置づけられる土器が出土している。

遺物は土器、石器、貝製品などが得られた。土器は沖縄貝塚時代後期を代表するものの一つで尖底の無文深鉢形が圧倒的に多く、他に有文土器やくびれ平底が若干出土している。これらの沖縄の土器に混じって弥生土器が出土していることは注目に値する。いずれも小破片であり、型式名の判別できるものはないが、口縁部の形態や凸縁の形状より、弥生中期前半に位置づけられるものと考えられる。この時期に、北の地域と文化的・経済的交流があったことを物語る資料の一つである。

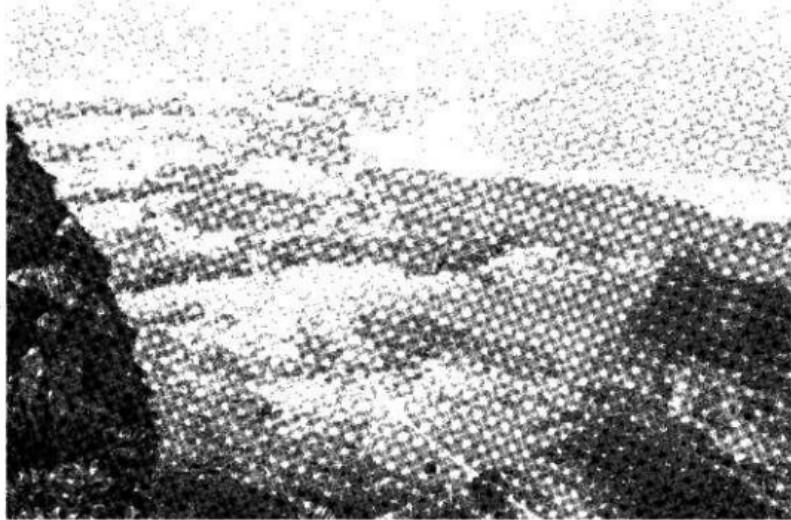
石器は石斧、たたき石、すり石が得られた。石斧は緑色岩類を用いており、遺跡地近辺に産しない岩石であることより他所から持ち込まれたものである。たたき石とすり石はすべて砂岩を利用してある。この石は海岸に転石として見られることより、それを用いたと考えられる。

貝製品は尖用品と装飾品があり、前者に含められるものには螺旋製敲打器、ヤコウガイ製匙、一枚貝有孔製品、ホラガイ有孔製品、スイジガイ製利器の5種類、後者には貝輪、貝札、貝土の3種類がある。特に、ヤコウガイの殻を利用した匙の未製品が著しく、それと同じよう顕著な出土をみせるヤコウガイの蓋製敲打器は関連する道具と考えられる。

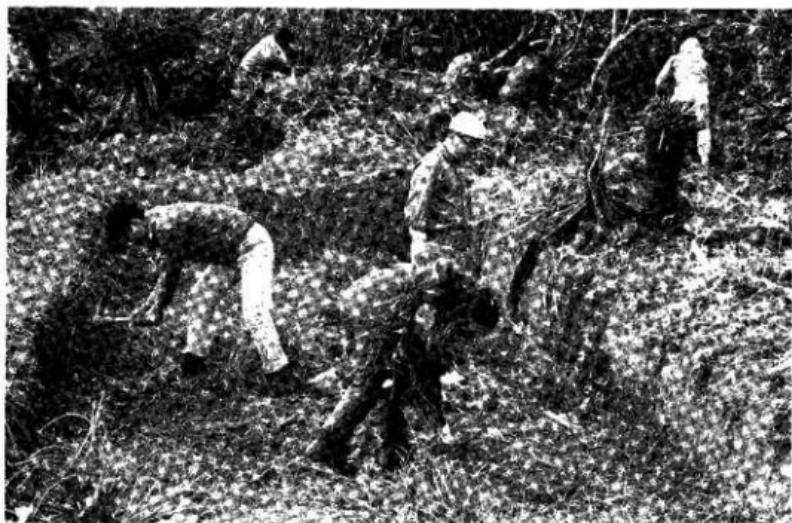
【参考文献】

1. 宮城長信ほか『西長浜原遺跡』発掘調査ニーズ第4号 西長浜原遺跡調査会 1977.10
2. 当真嗣一・上原静『伊計島の遺跡』一串山遺跡・仲原遺跡・確認調査概報 沖縄県教育委員会 1981.3
3. 安里嗣淳ほか『伊江島具志原貝塚の概要』沖縄県教育委員会 1985.2
4. 岸本義彦ほか『具志堅貝塚』発掘調査報告 本部町教育委員会 1986.3
5. 岸本義彦・島 弘『沖縄における貝の集積遺構—ゴホウラ・イモガイを中心に—』『紀要』第2号 沖縄県教育委員会文化課 1985.3

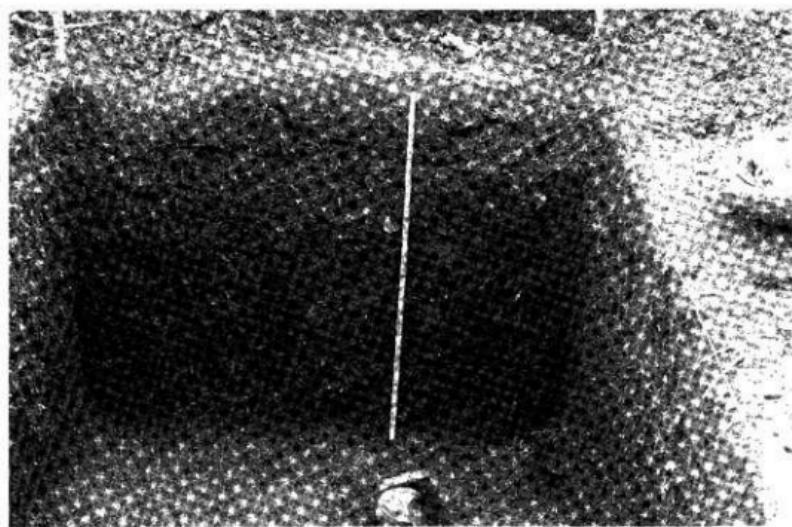
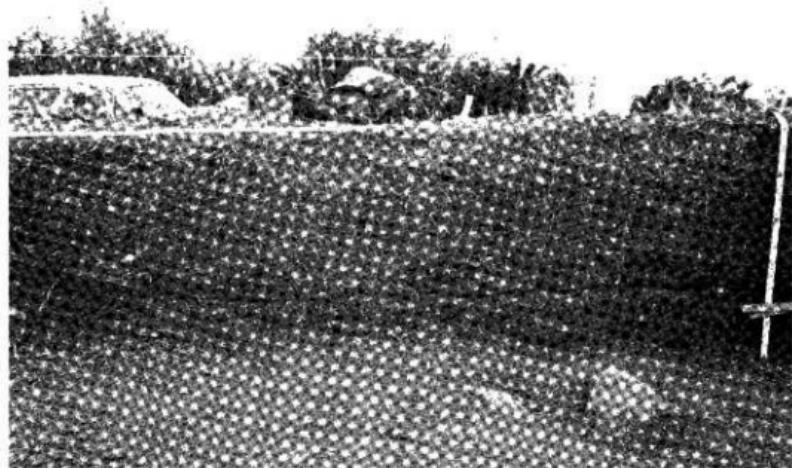
図 版



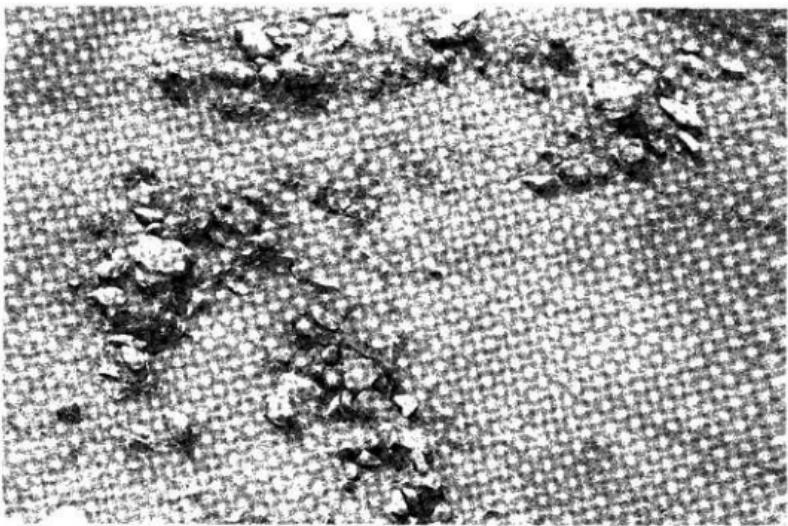
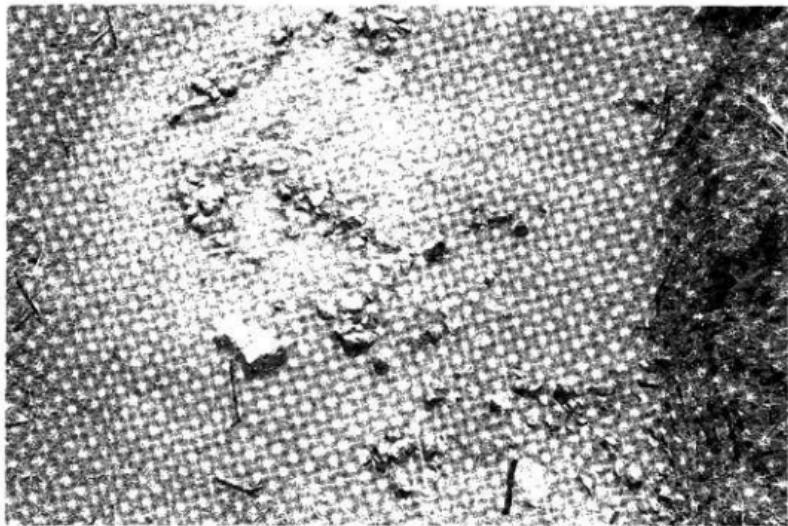
図版9 安須森の頂上から（上：1969年、下：1987年）



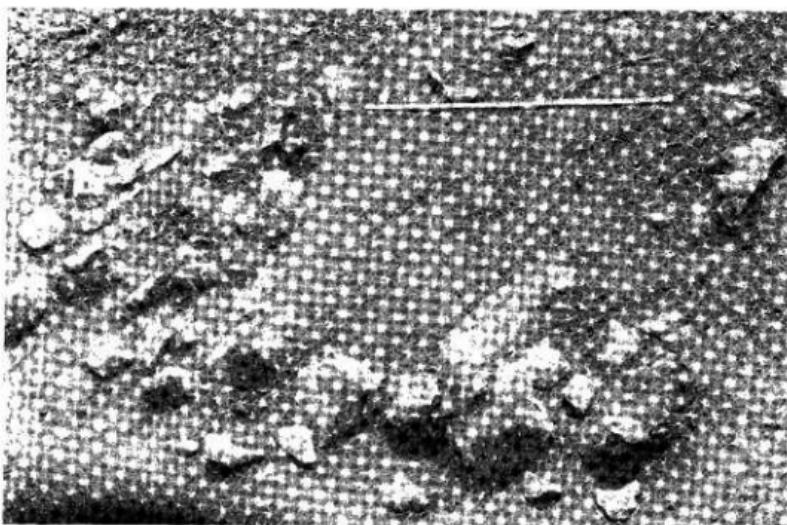
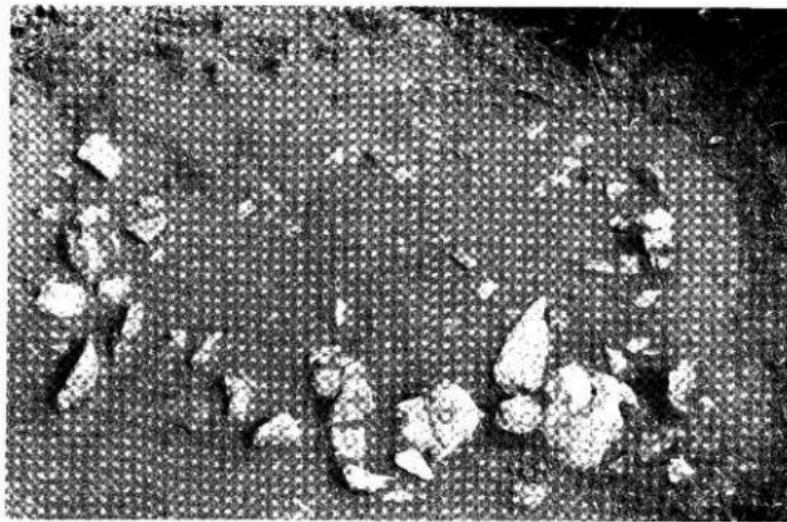
图版10 先掘状况



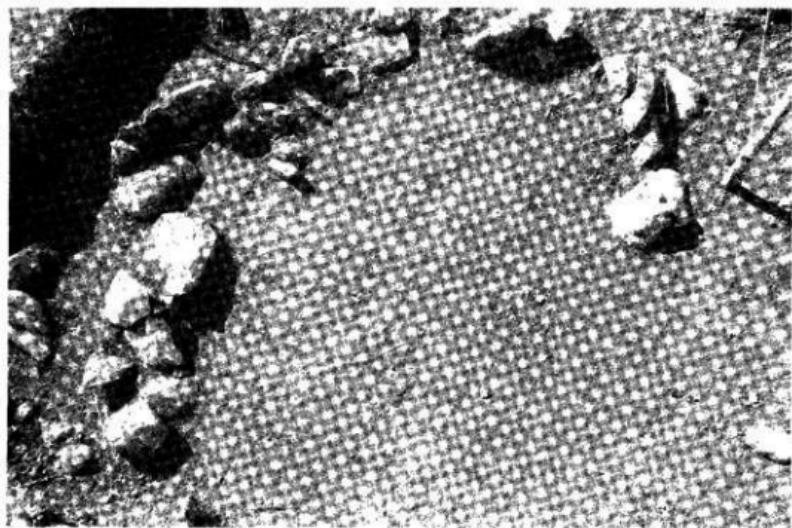
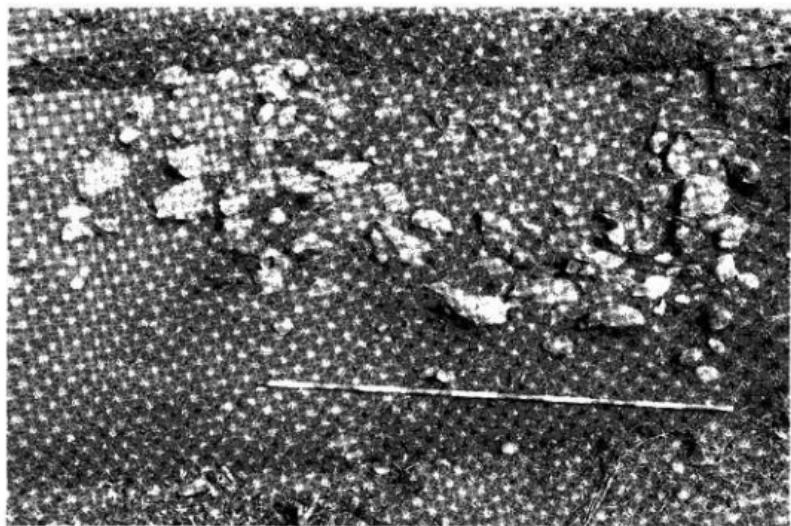
図版11 層序



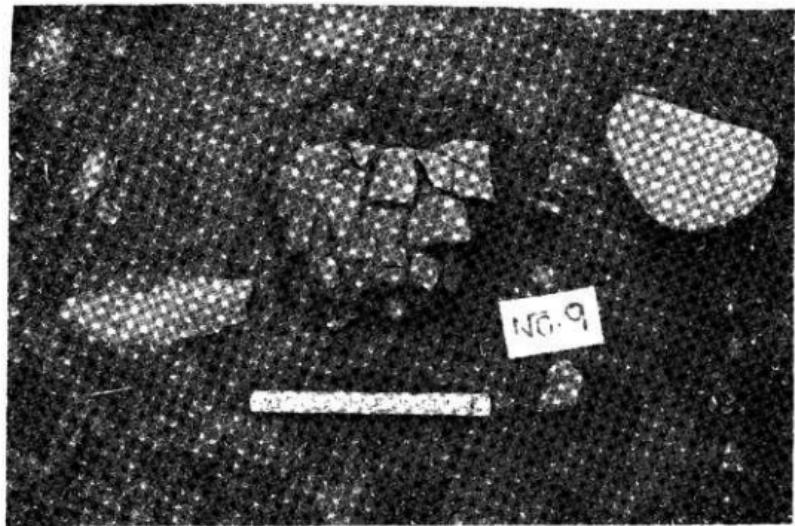
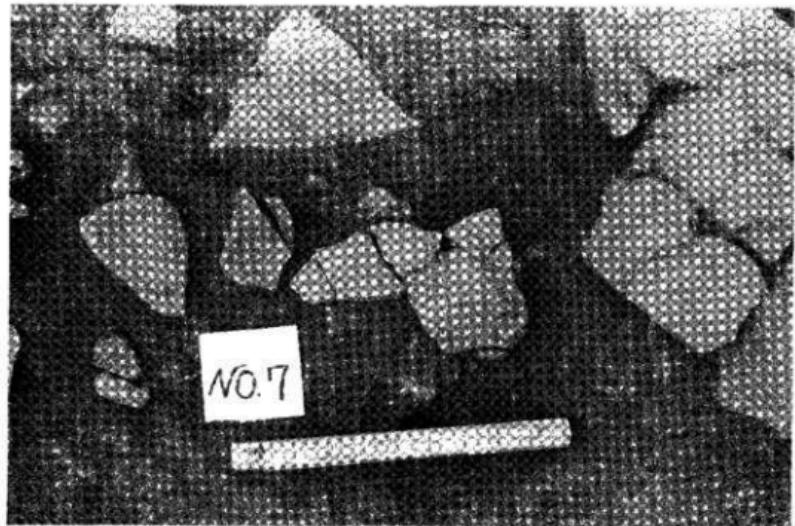
図版12 石組み遺構



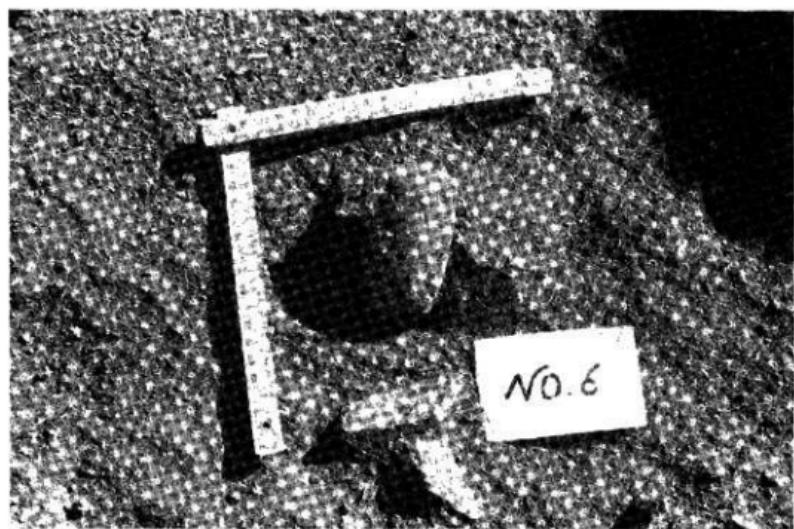
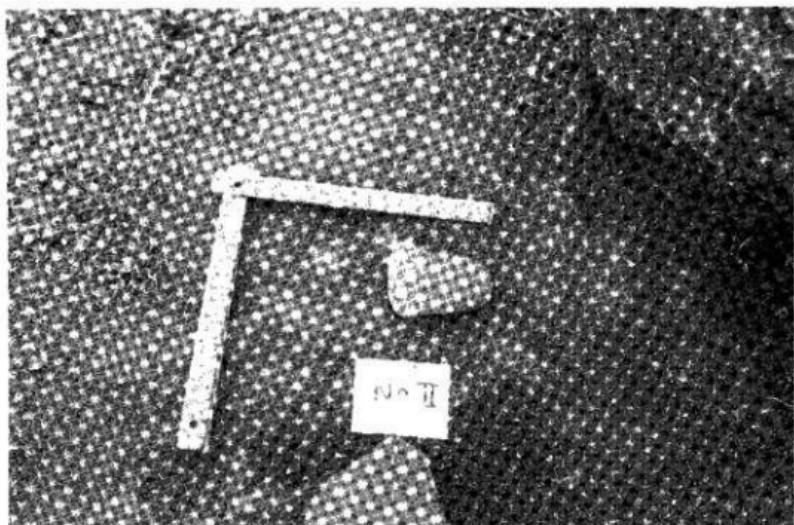
図版13 石組み遺構



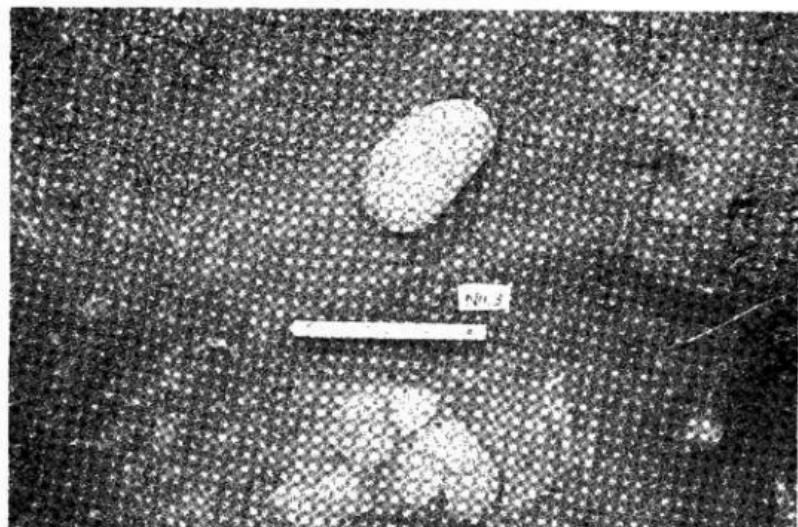
図版14 石組み遺構



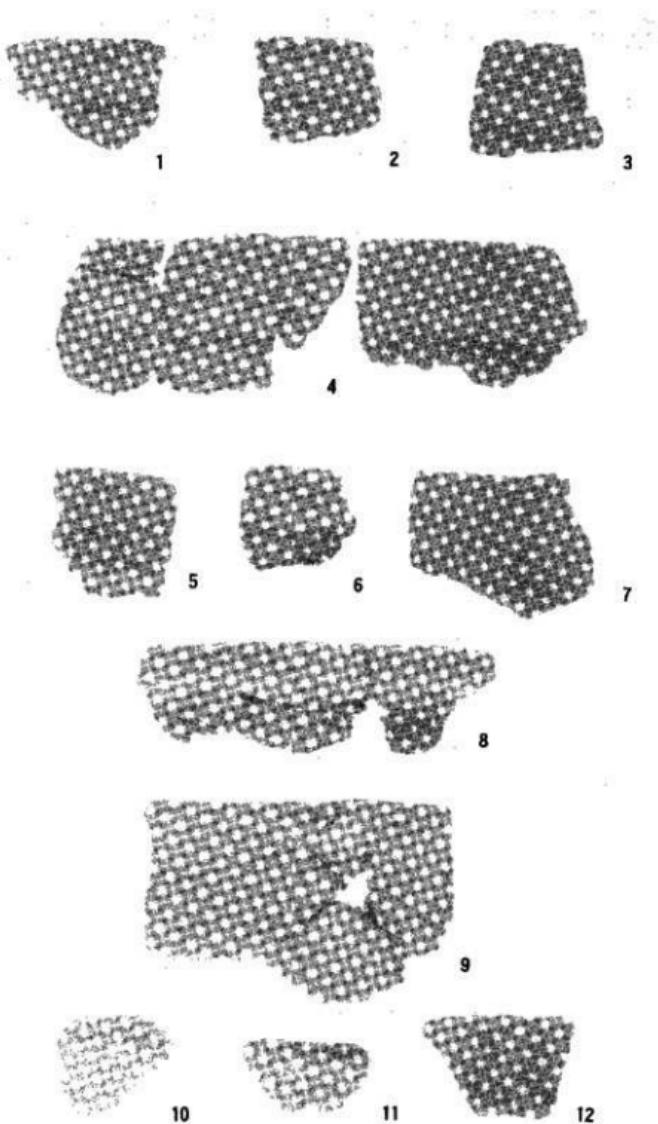
図版15 土器の出土状況



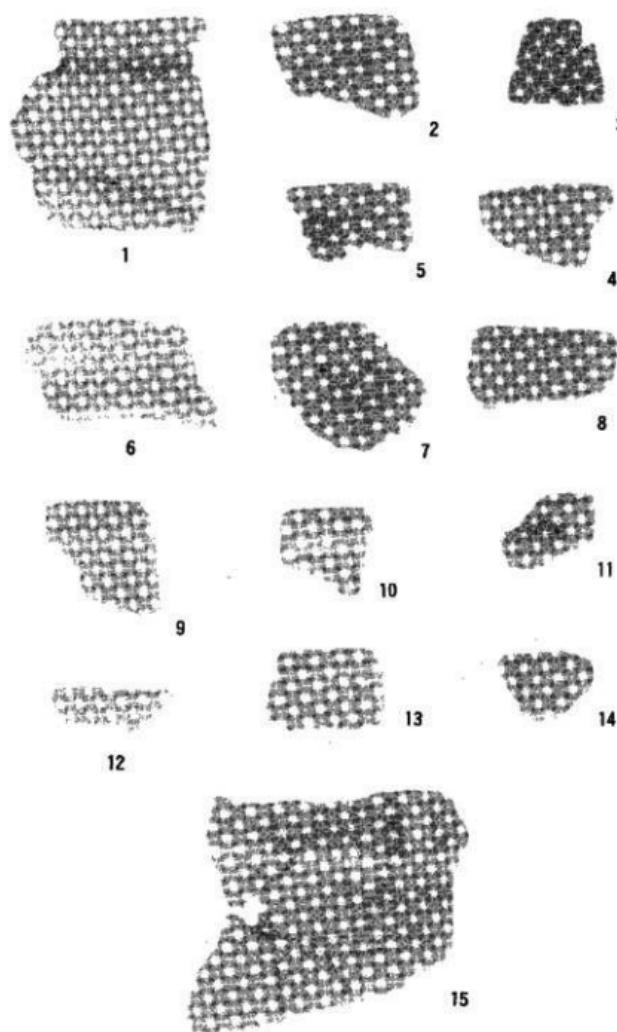
図版16 石斧の出土状況



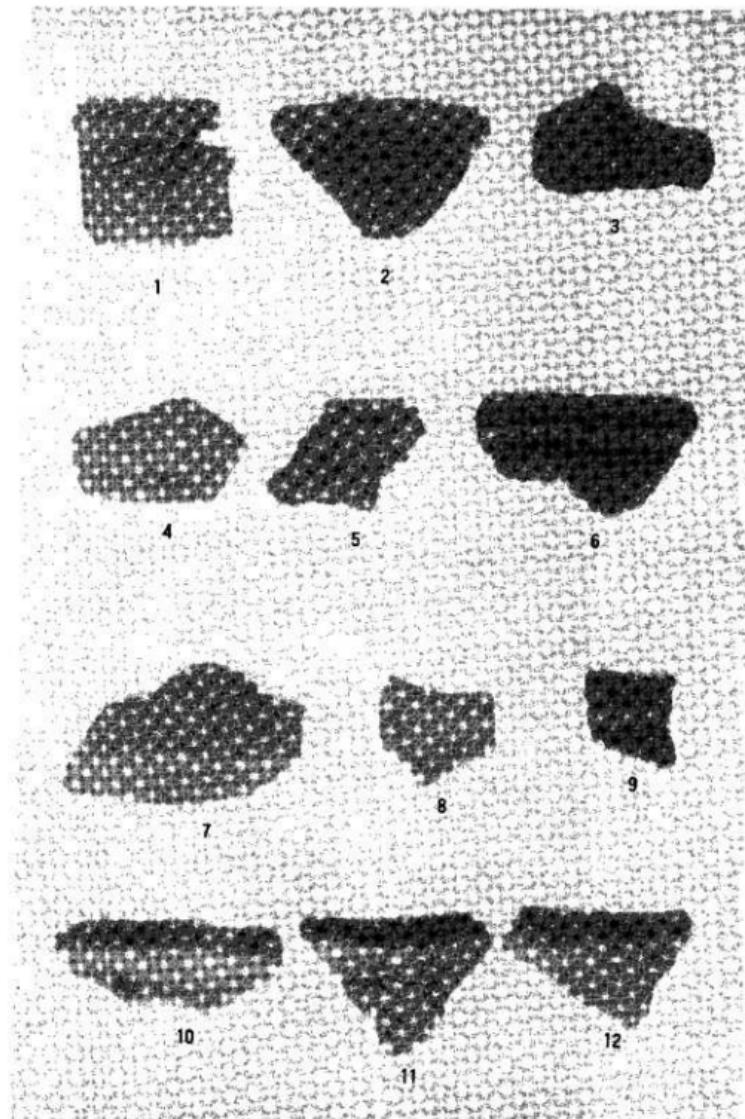
図版17 たたき石、石皿の出土状況



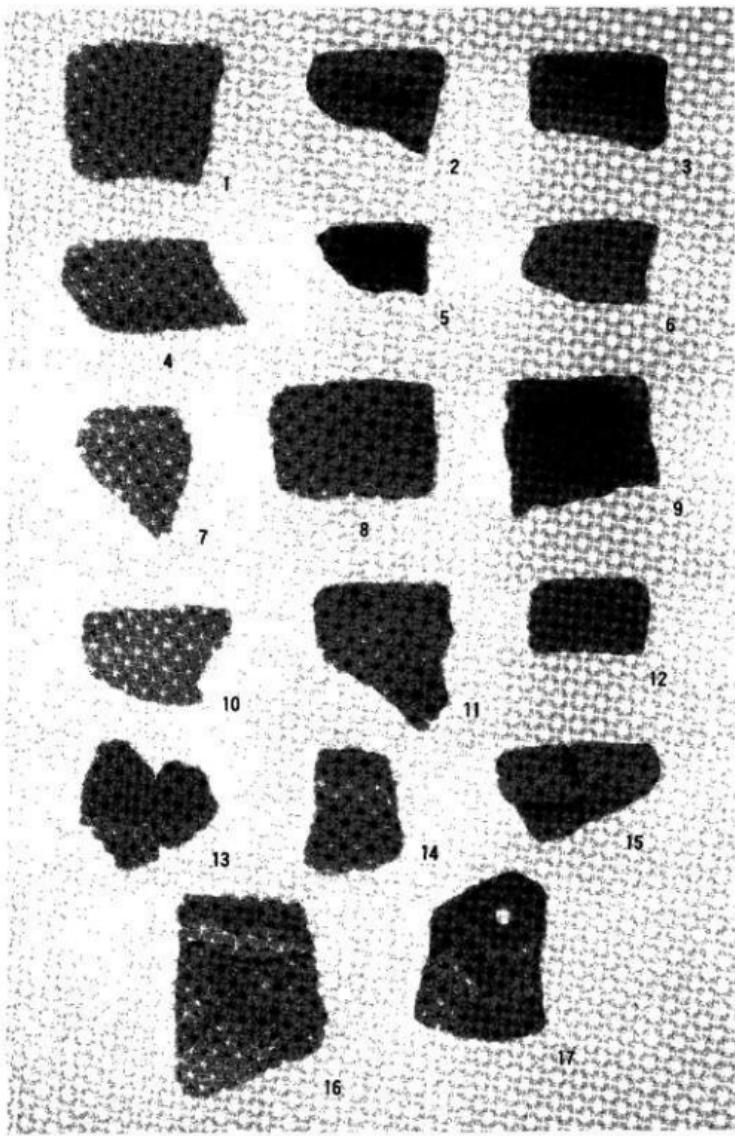
圖版18 第2層出土土器



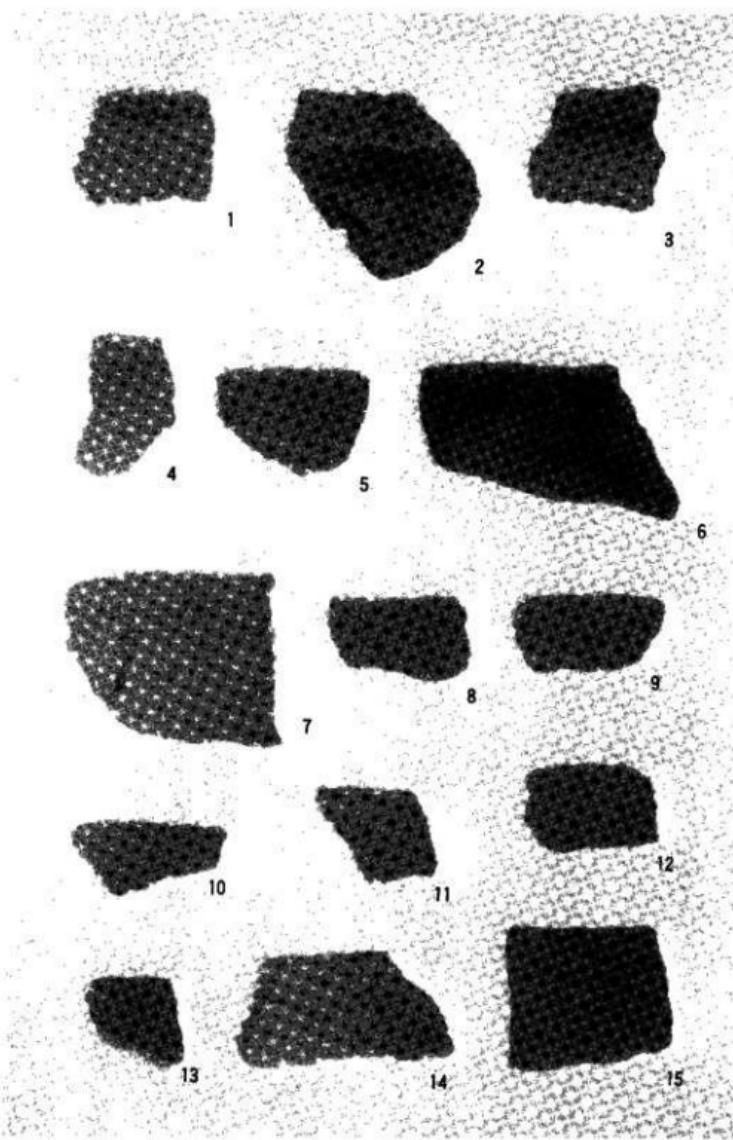
图版19 第2层出土土器



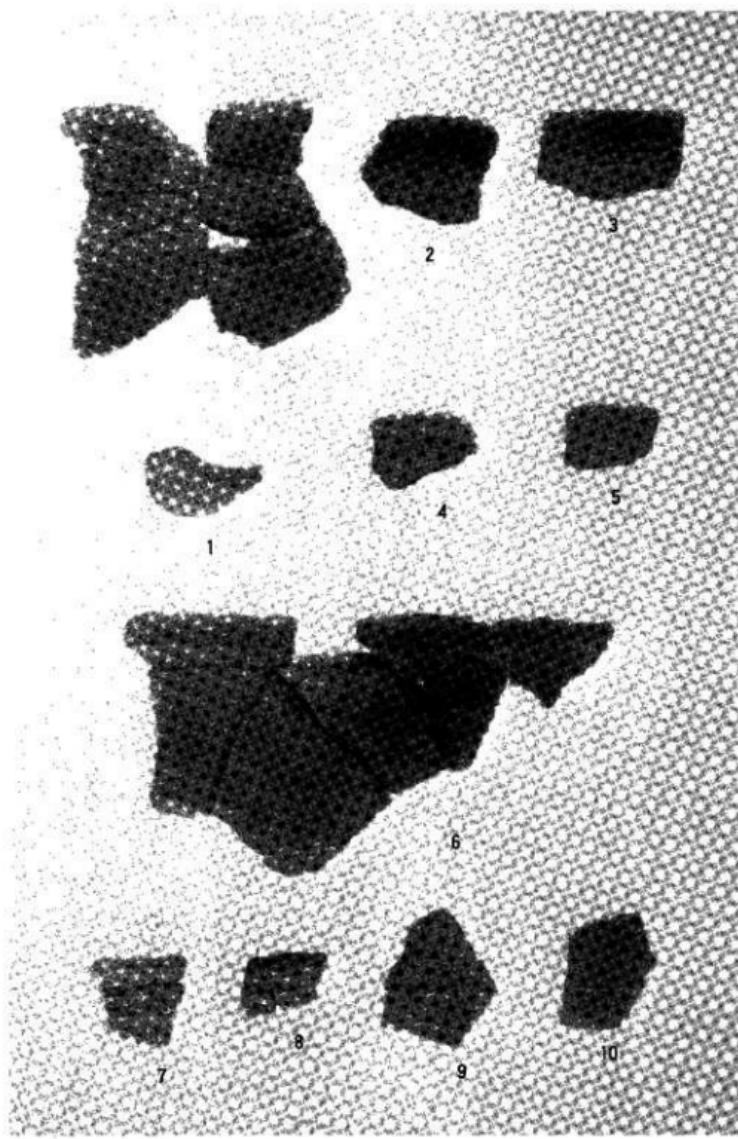
図版20 第2層出土土器



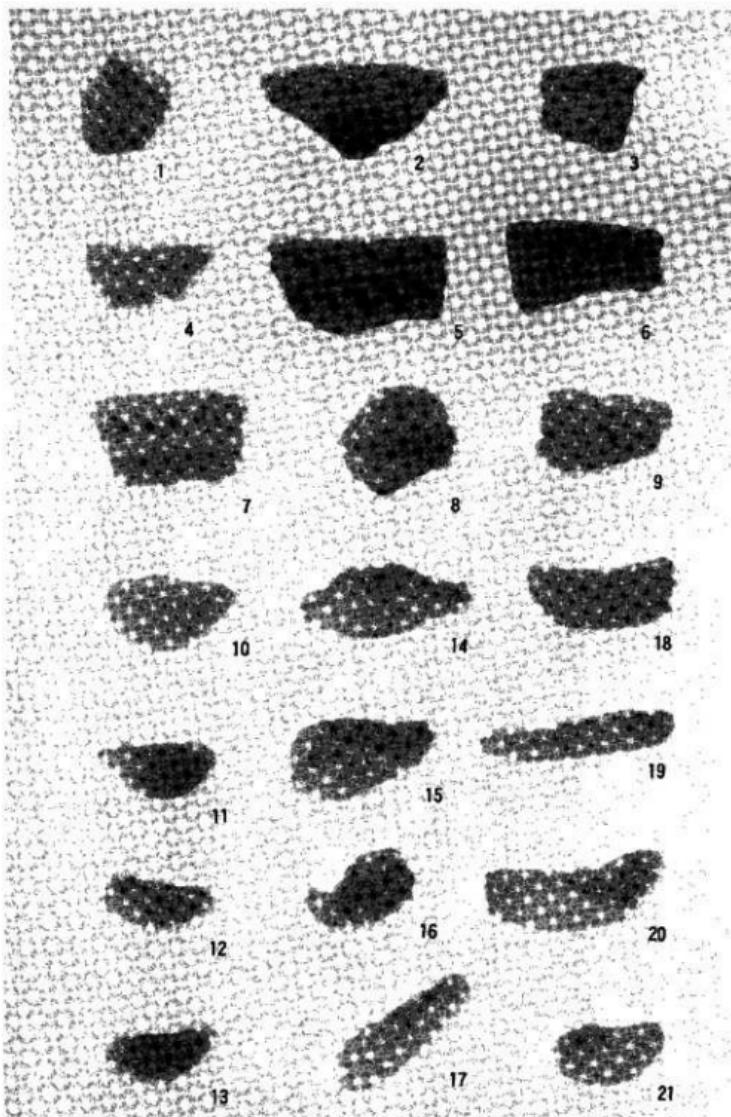
図版21 第2層出土土器



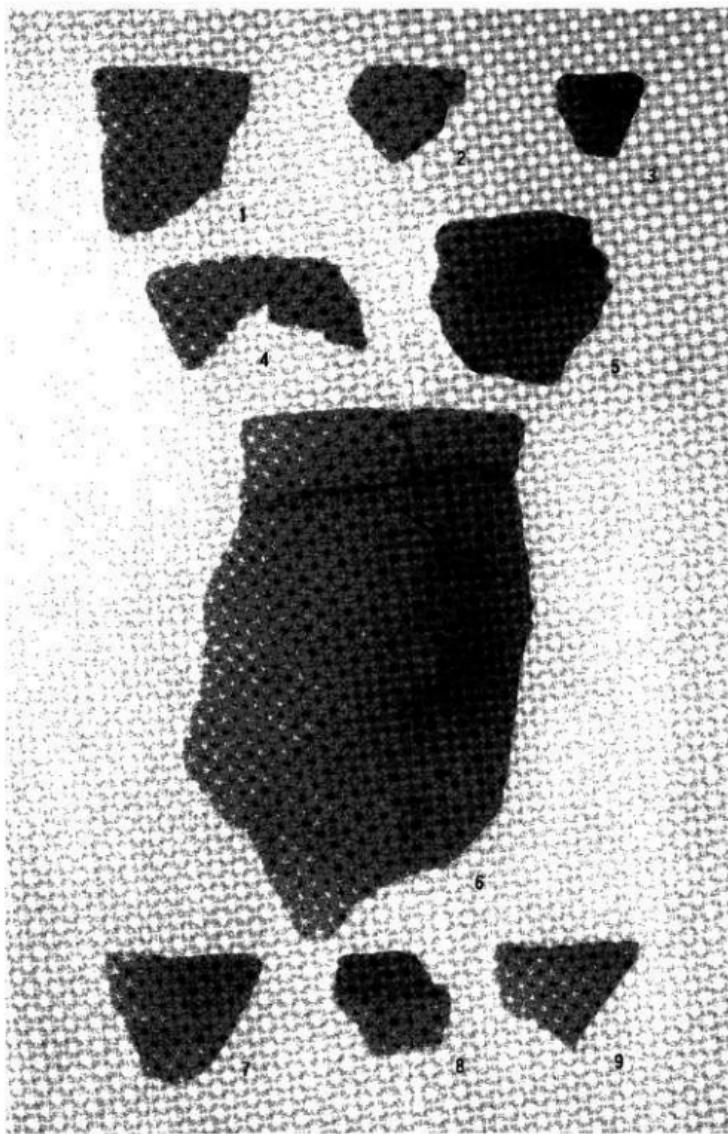
図版22 第2層出土土器



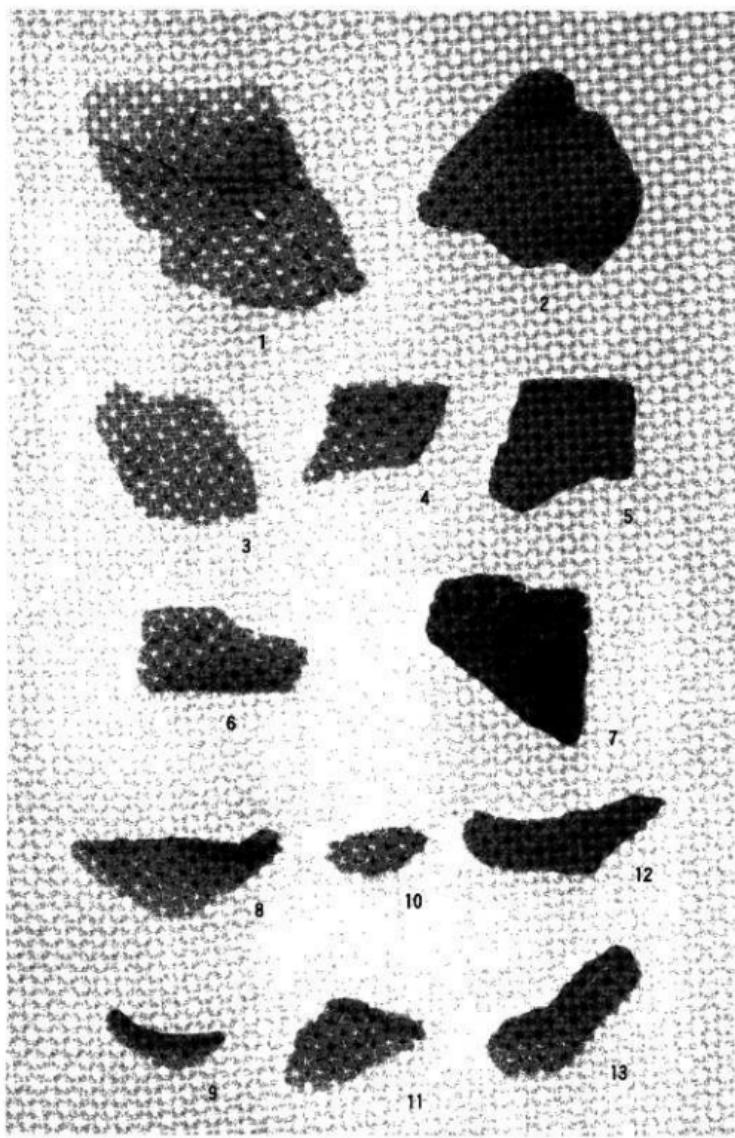
圖版23 第2層出土土器



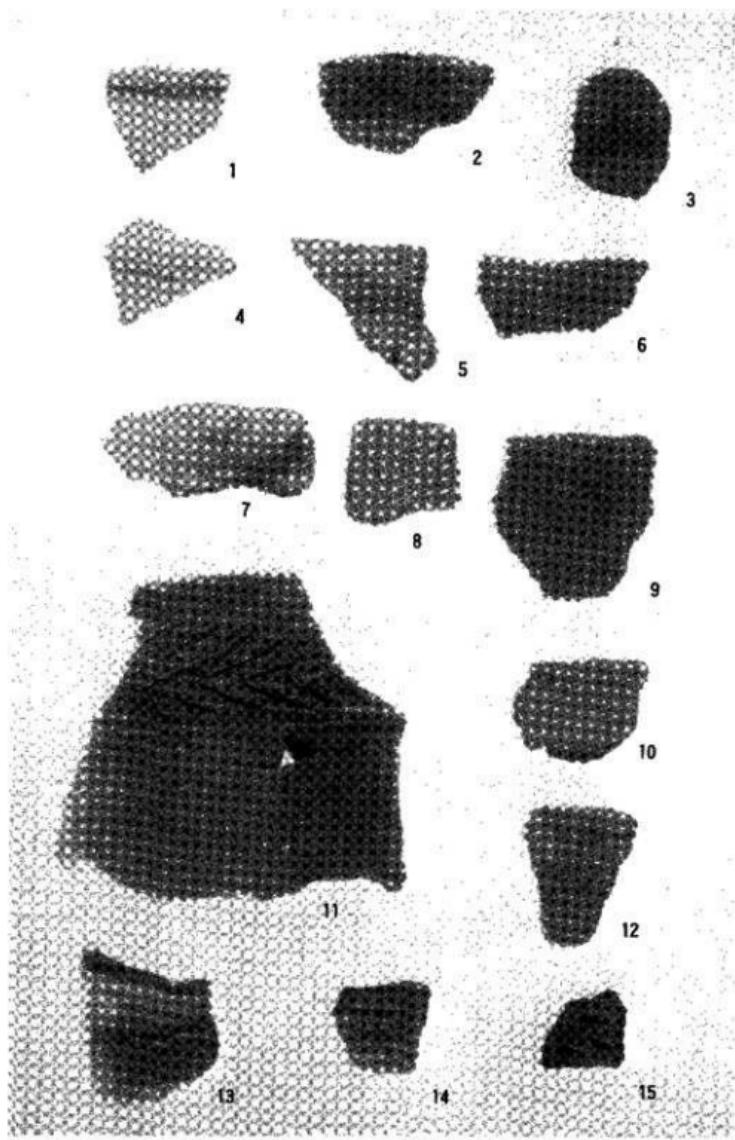
圖版24 第2層出土土器



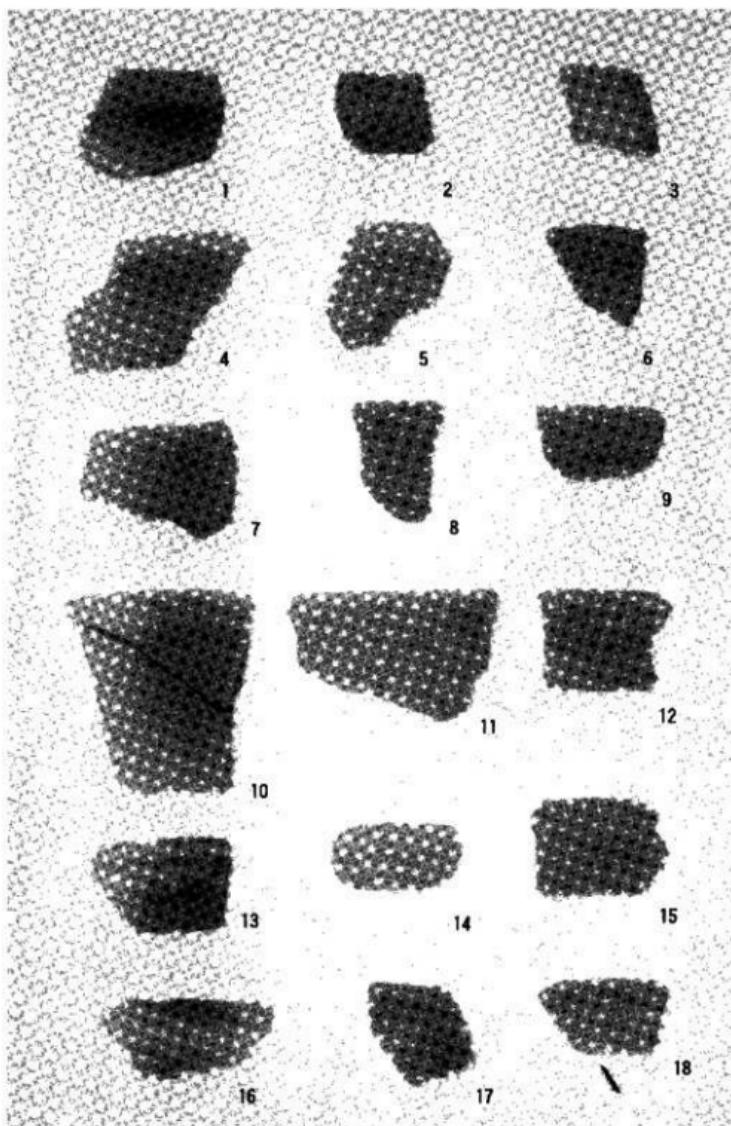
図版25 第3層出土土器



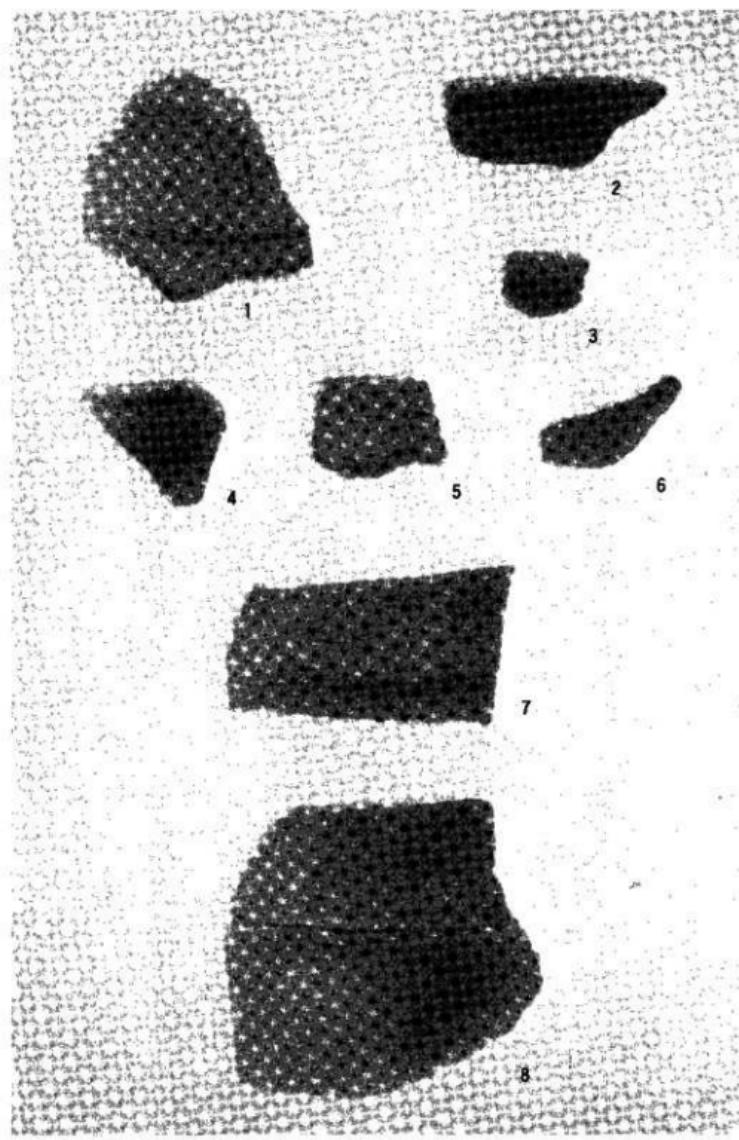
図版26 第3層出土土器



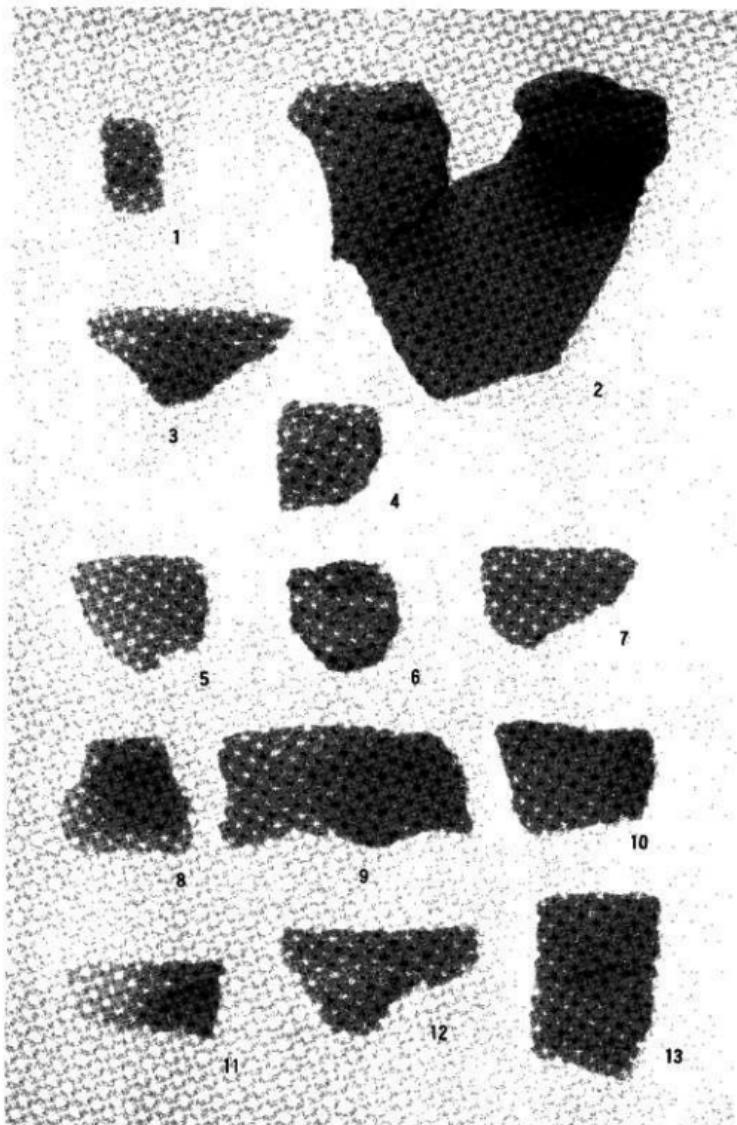
図版27 第2号遺構出土土器



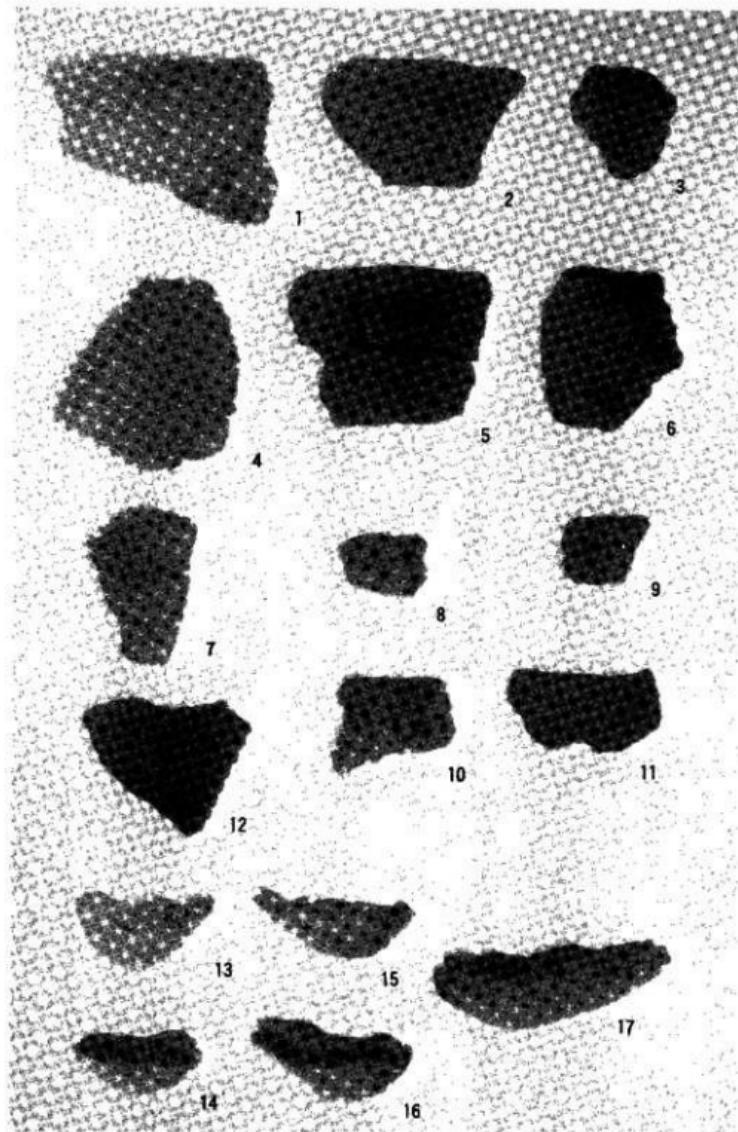
國版28 第5・6・7・8号遺構出土土器



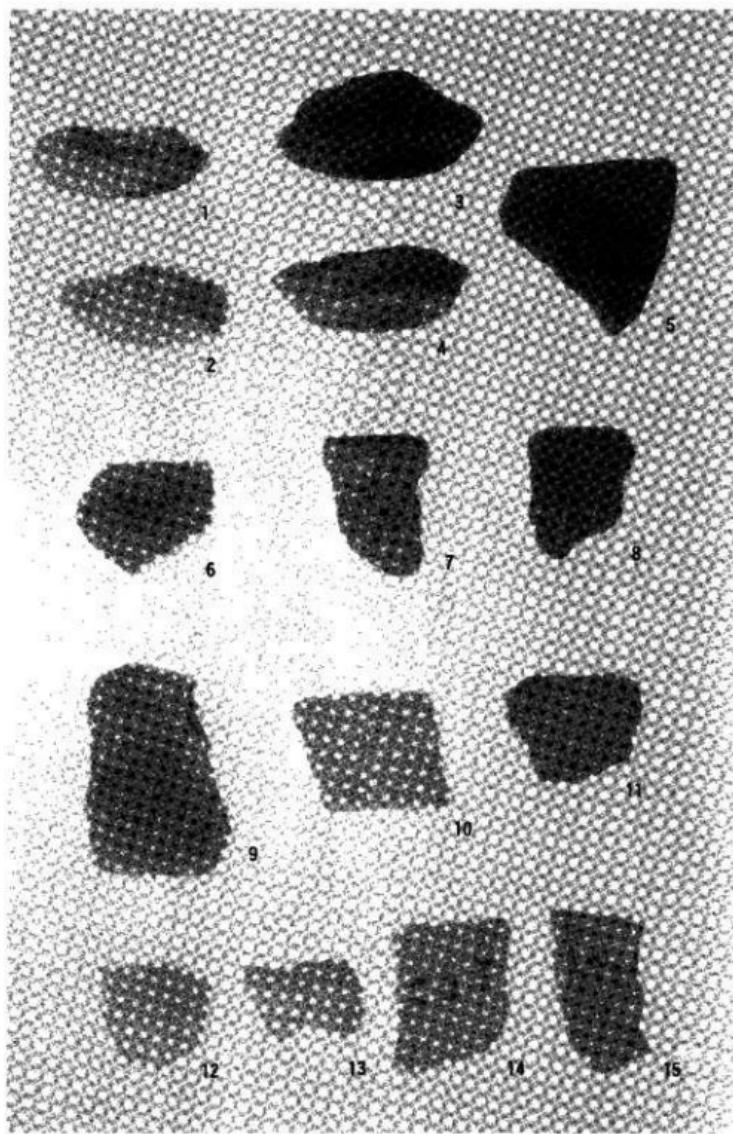
图版29 第8号遗構・1号炉付近・層序不明土器



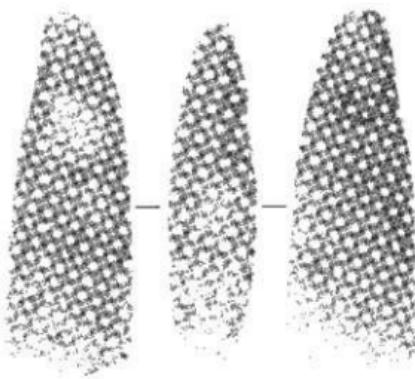
図版30 層序不明土器



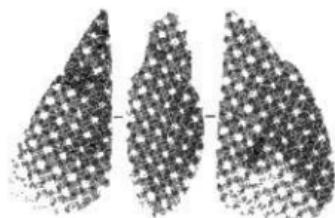
图版31 层序不明土器



圖版32 層序不明、表面採集土器



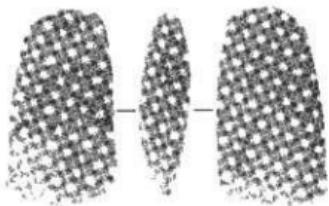
1



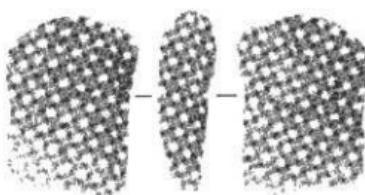
3



2

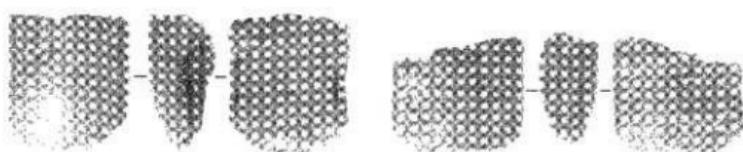


4



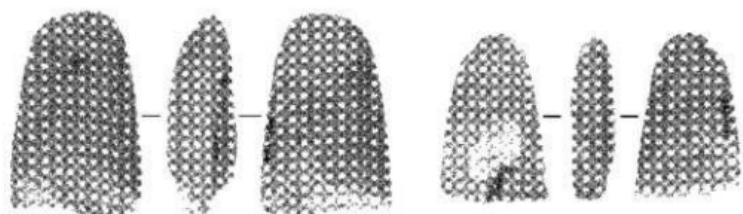
5

圖版33 石器 (1)



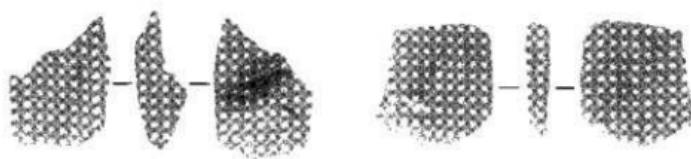
1

2



3

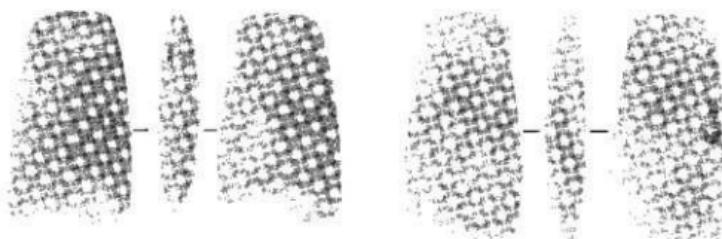
4



5

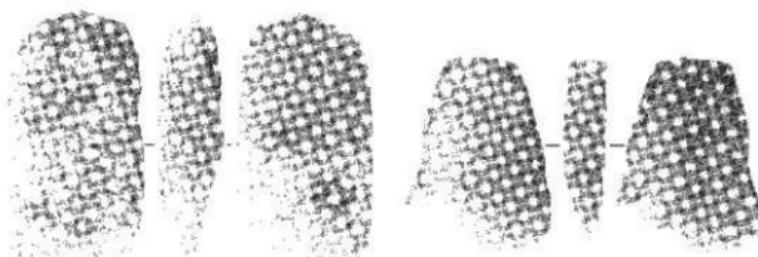
6

図版34 石器 (2)



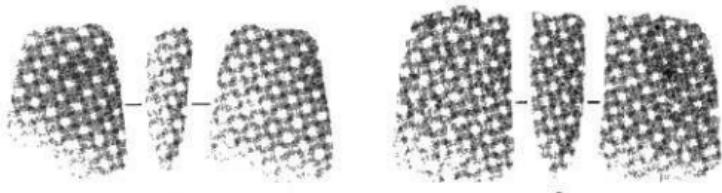
1

2



3

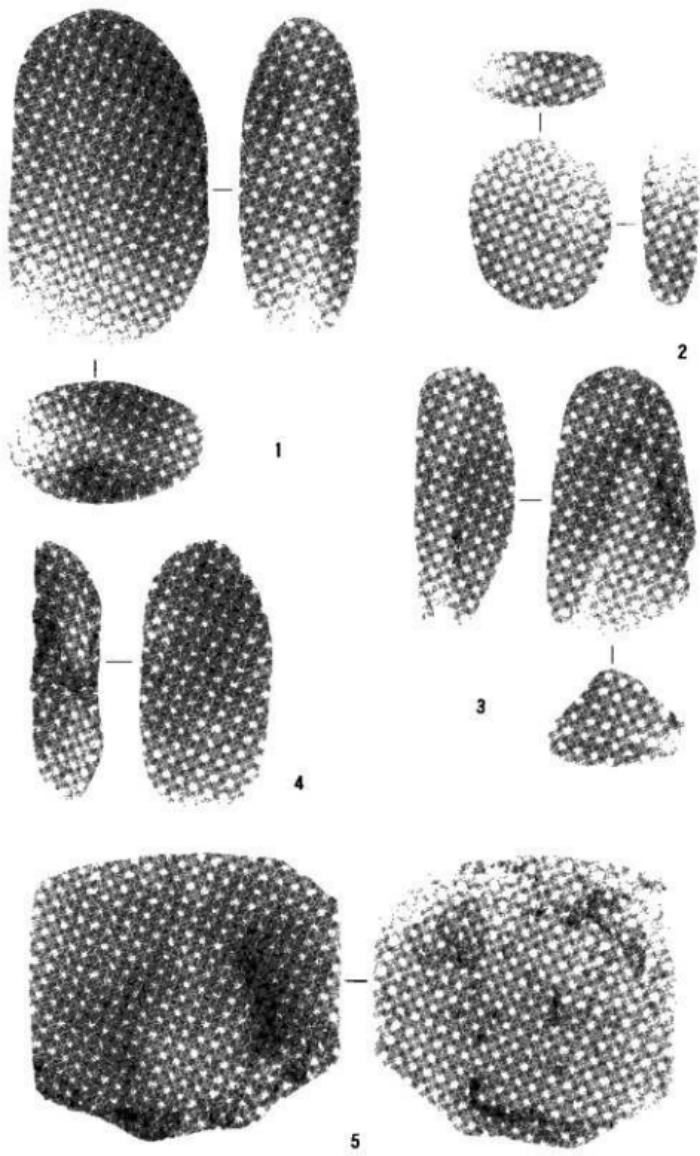
4



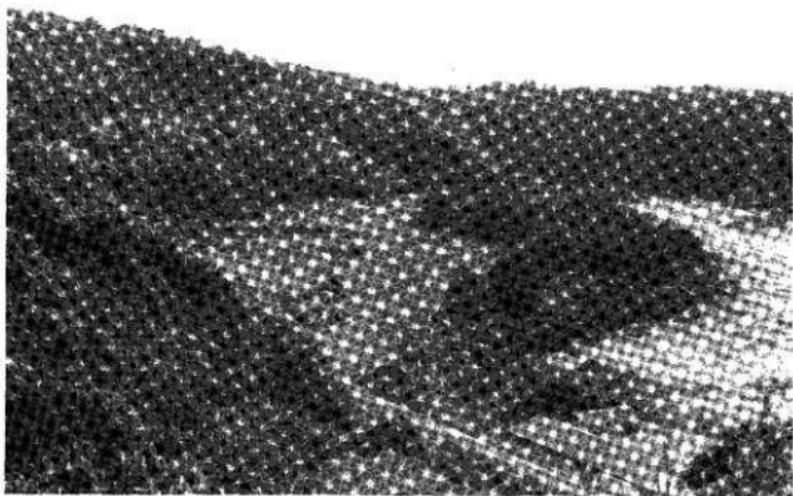
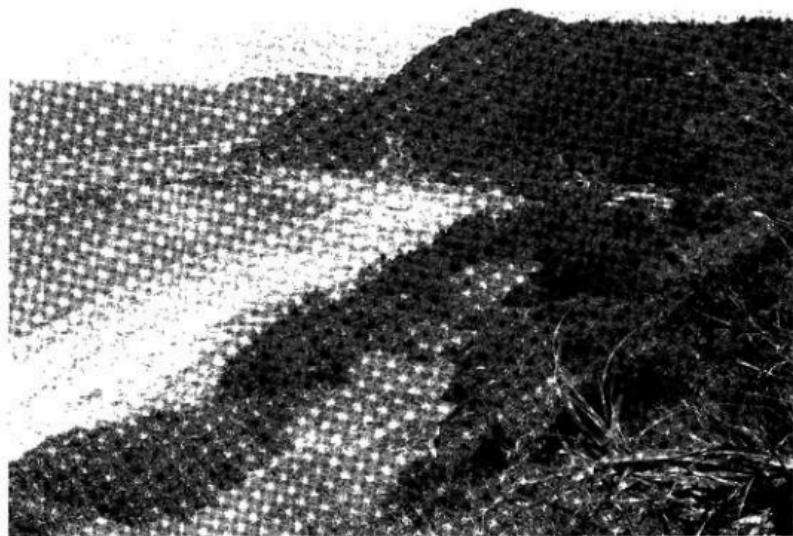
5

6

圖版35 石器 (3)



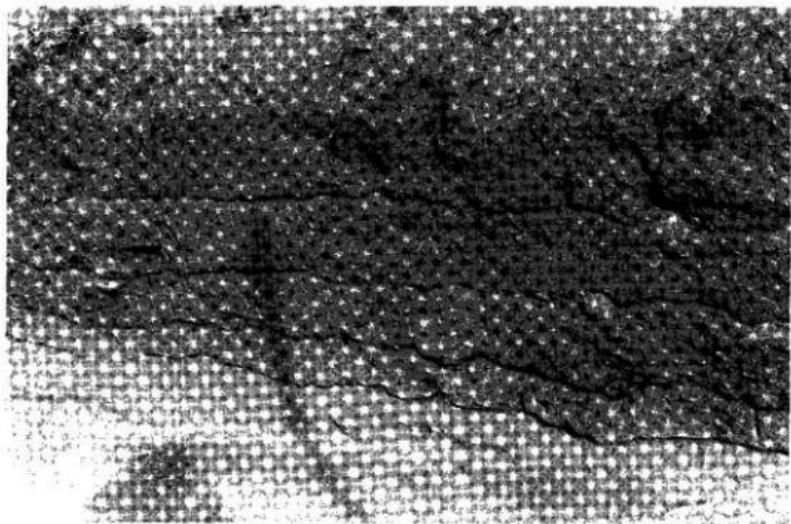
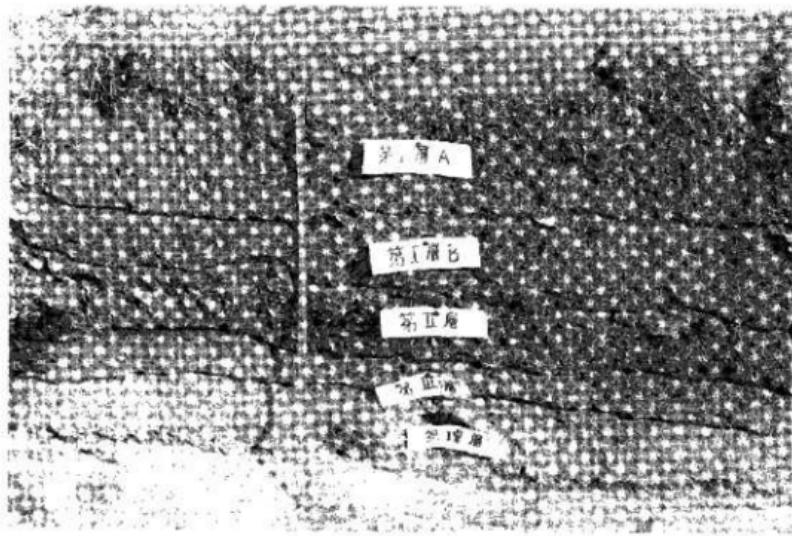
図版36 石器 (4)



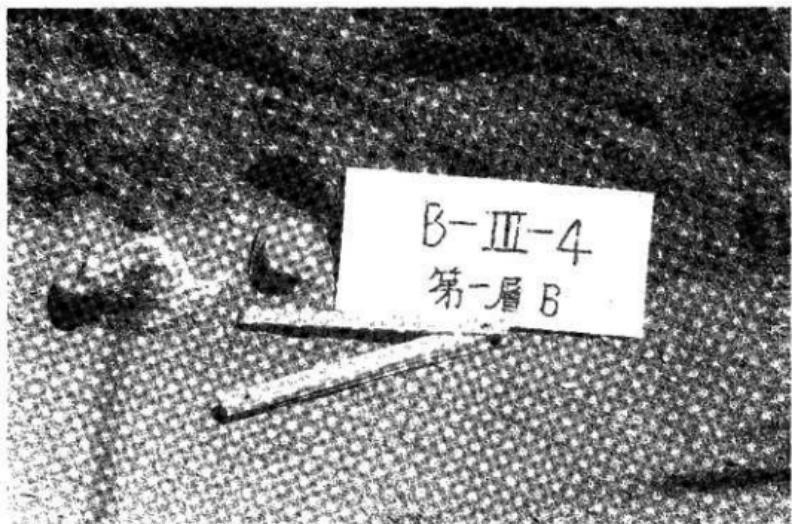
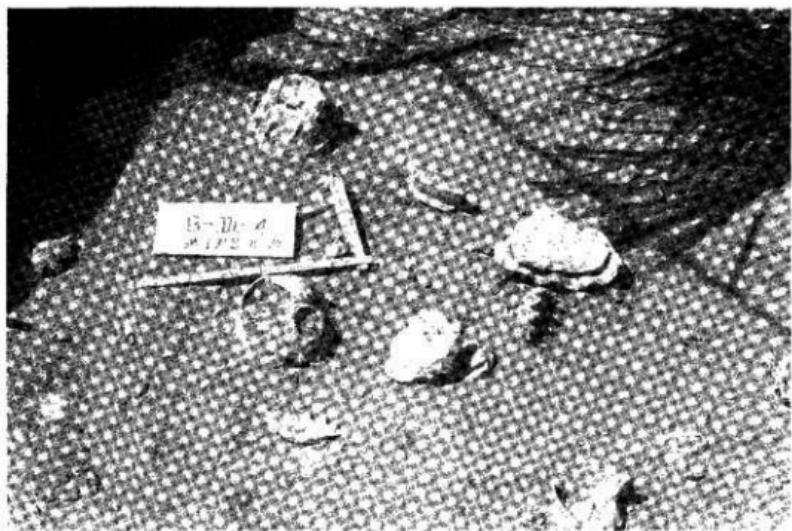
図版37 宇佐浜日貝塚遠景（上：北側から、下：南側から）



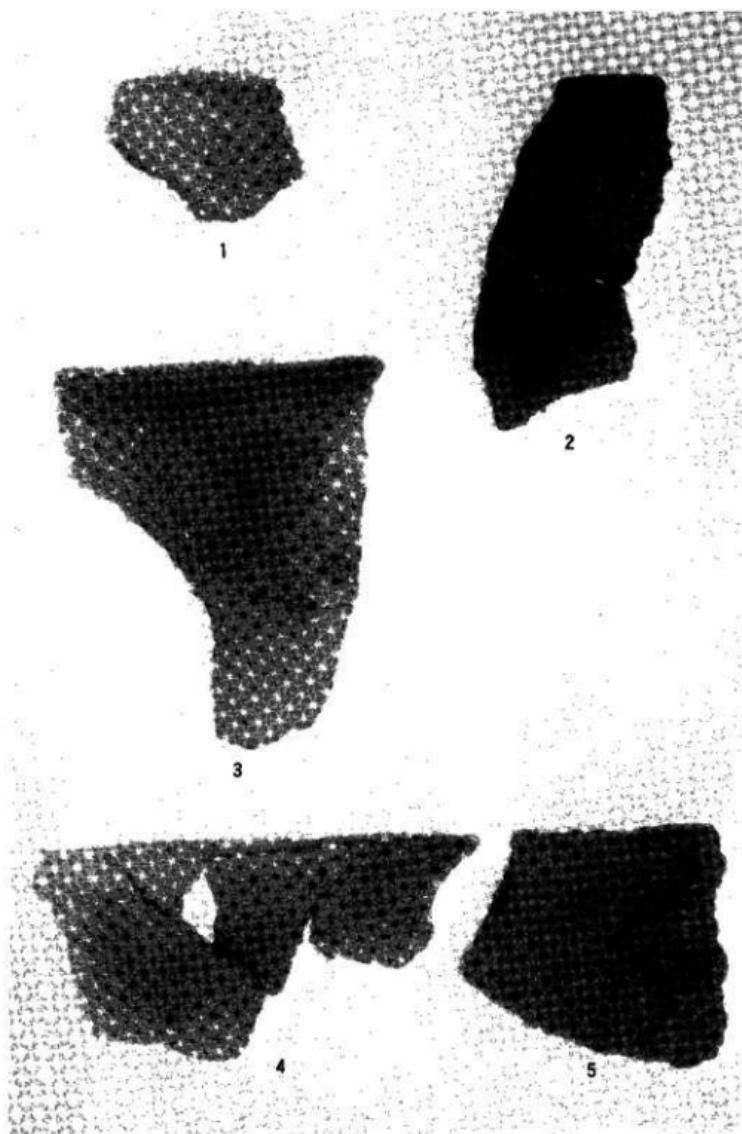
図版38 発掘状況



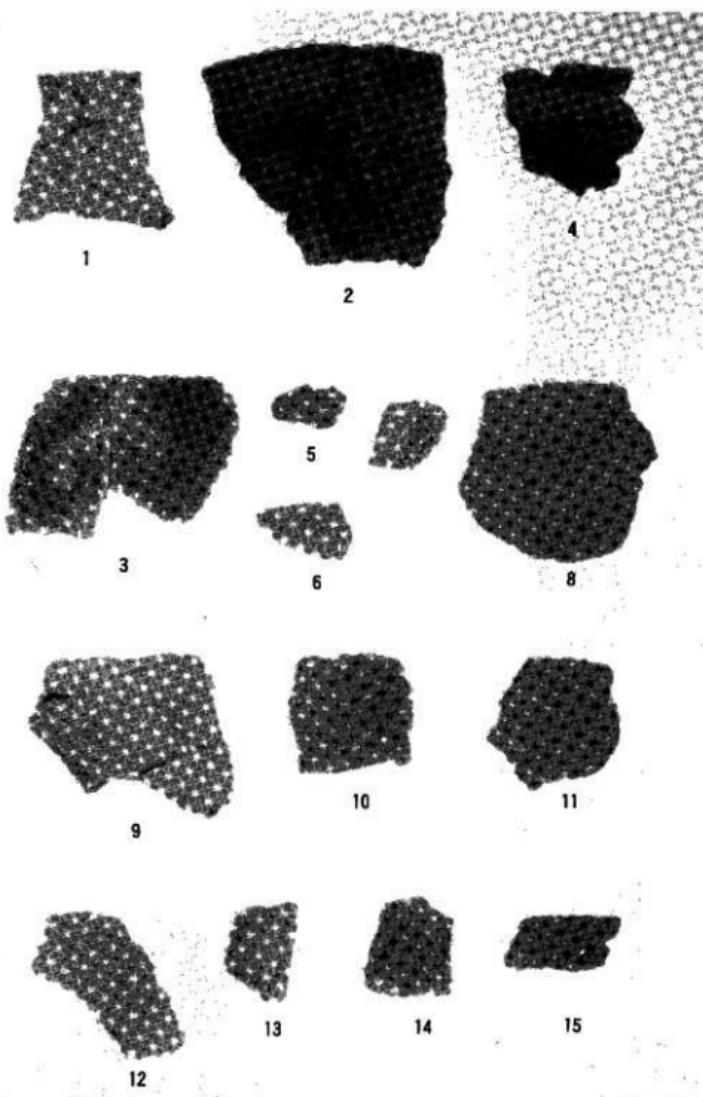
圖版39 層序



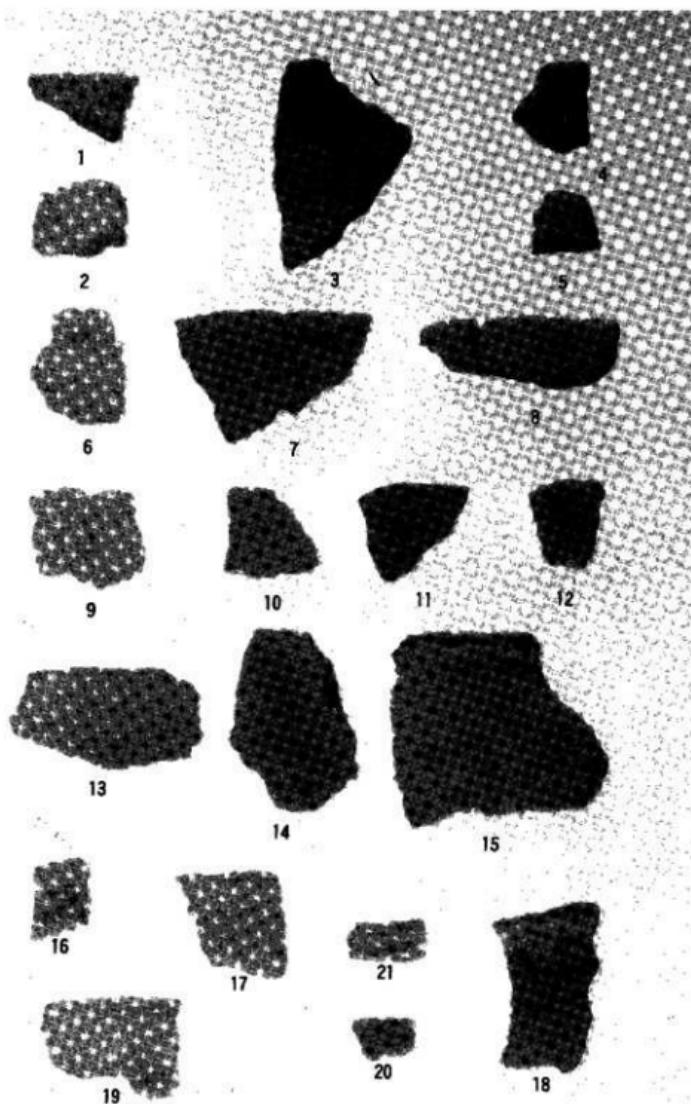
図版40 遺物の出土状況



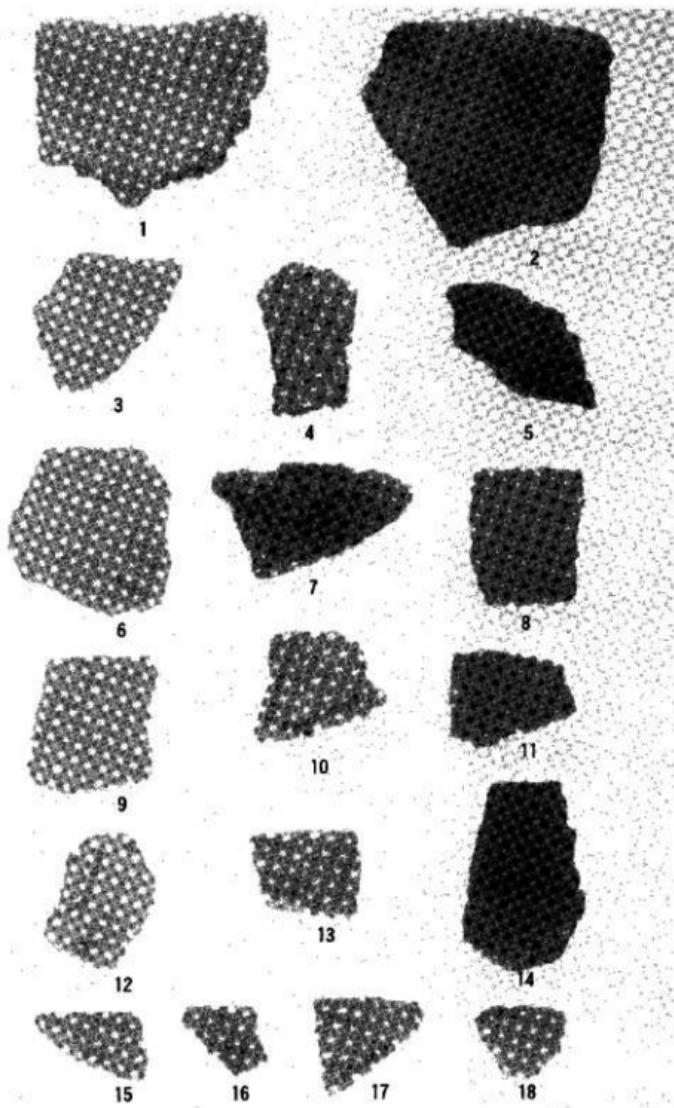
図版41 沖縄後期土器(1)



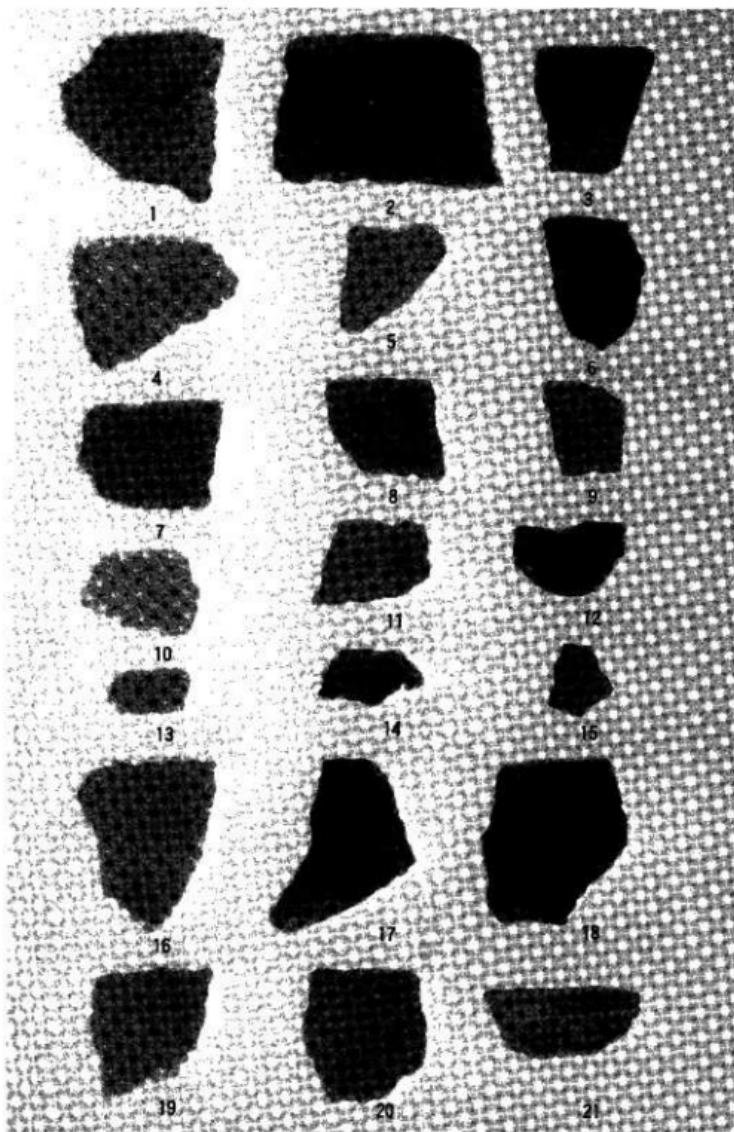
図版42 沖縄後期土器(2)



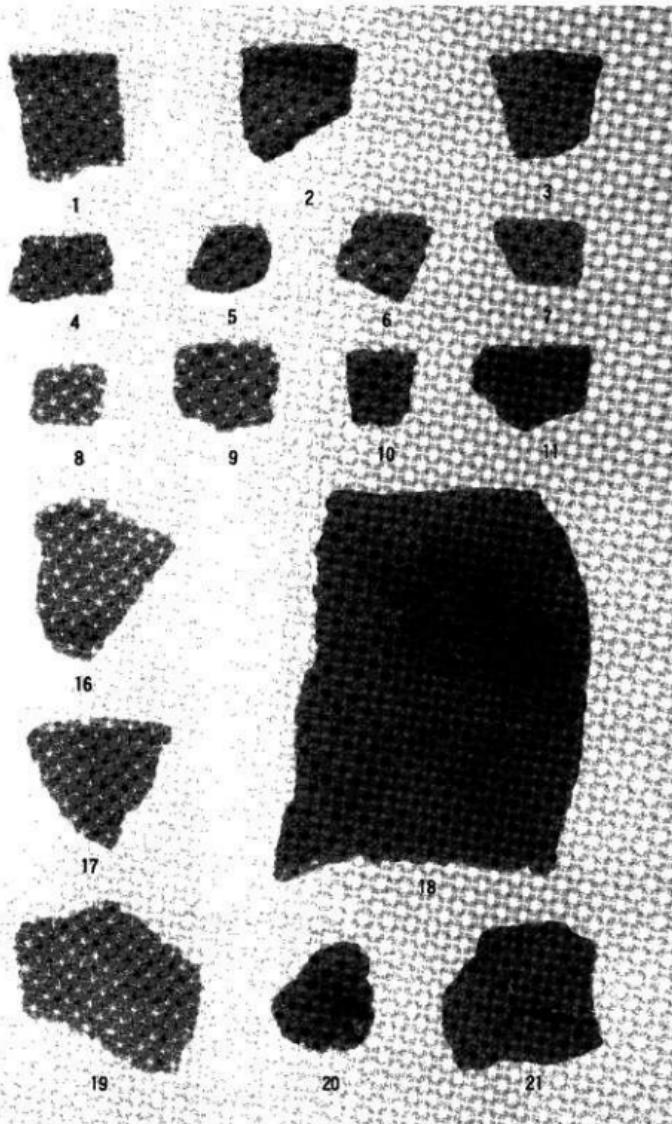
図版43 沖縄後期土器(3)



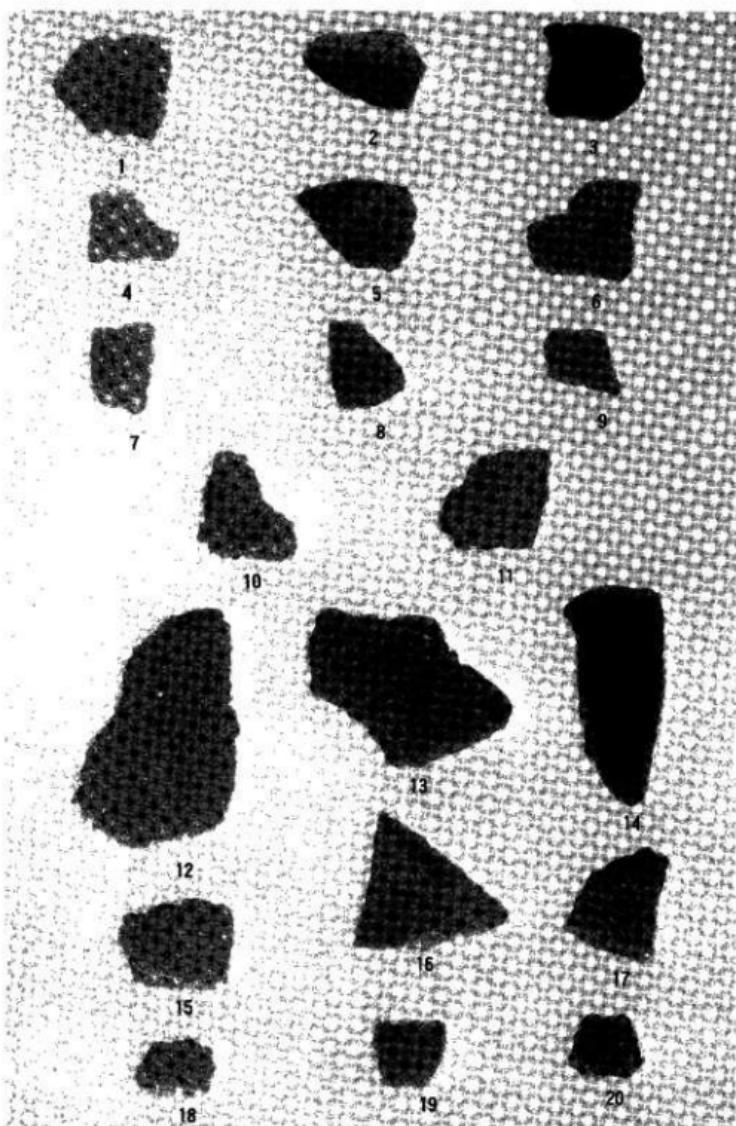
図版44 沖縄後期土器(4)



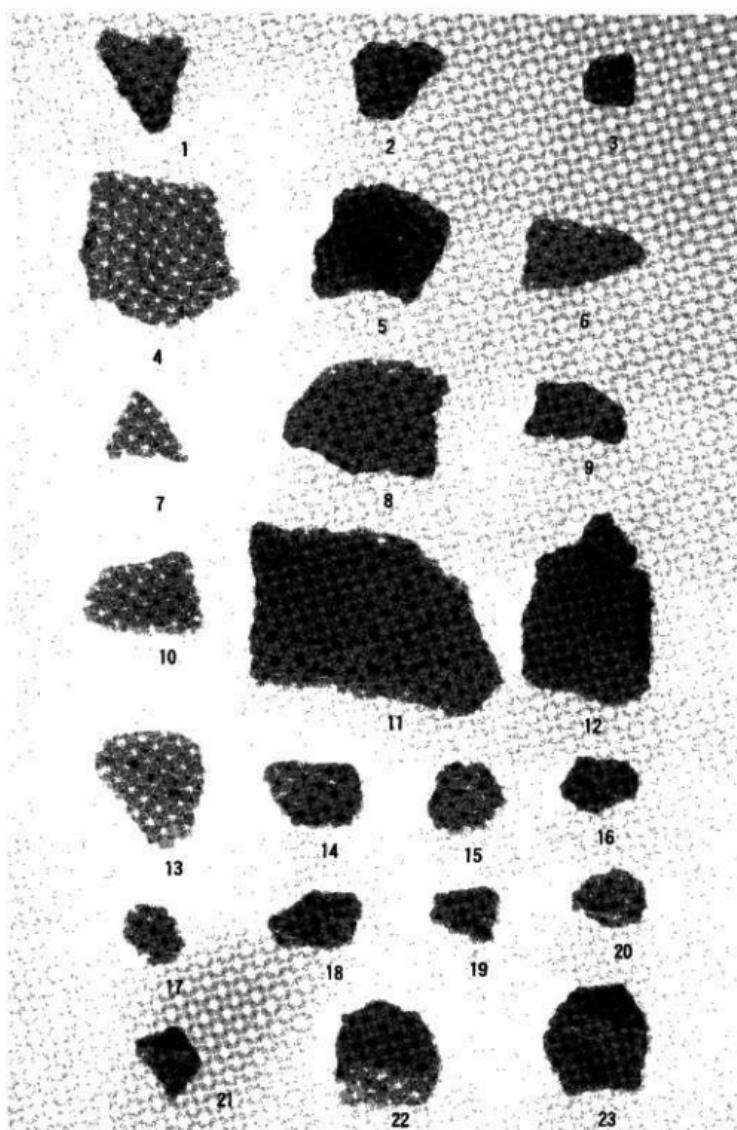
図版45 沖縄後期土器(5)



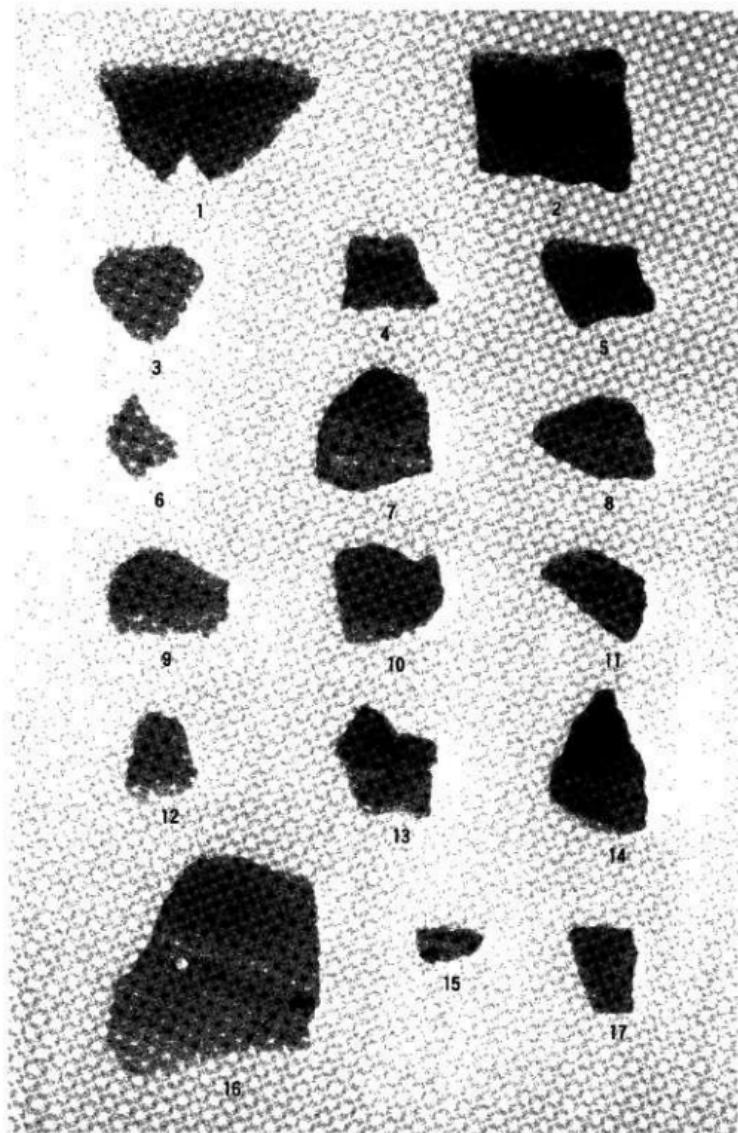
図版46 沖縄後期土器(6)



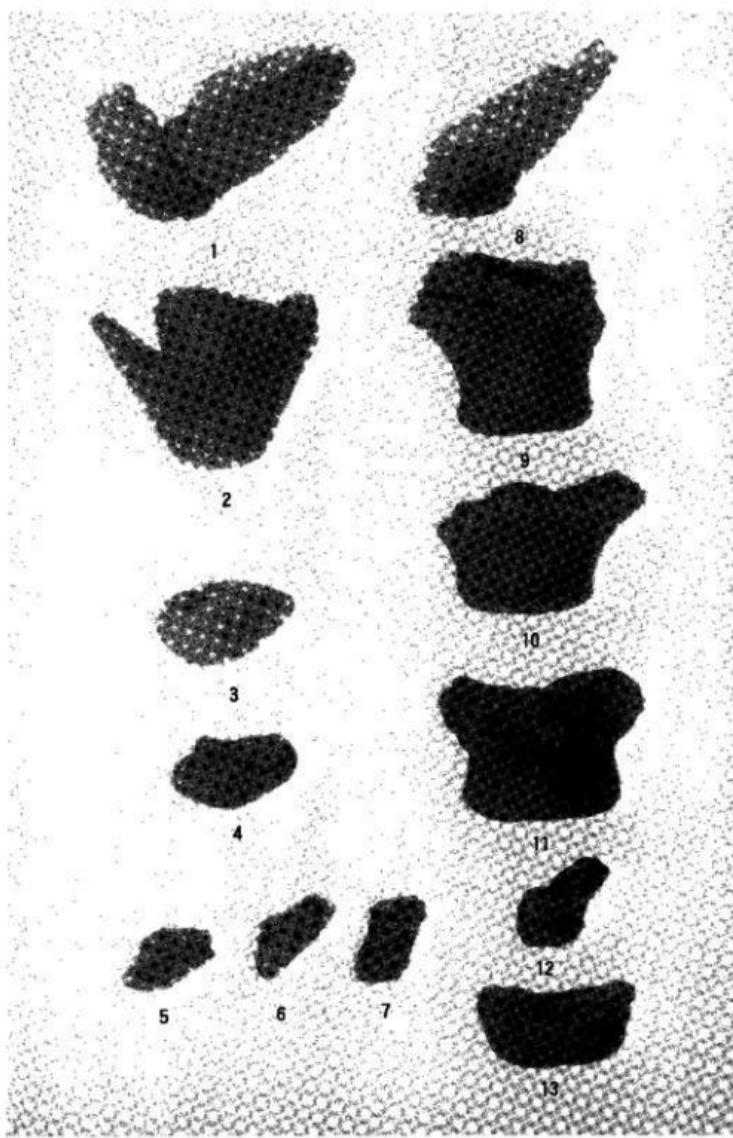
図版47 沖縄後期土器(7)



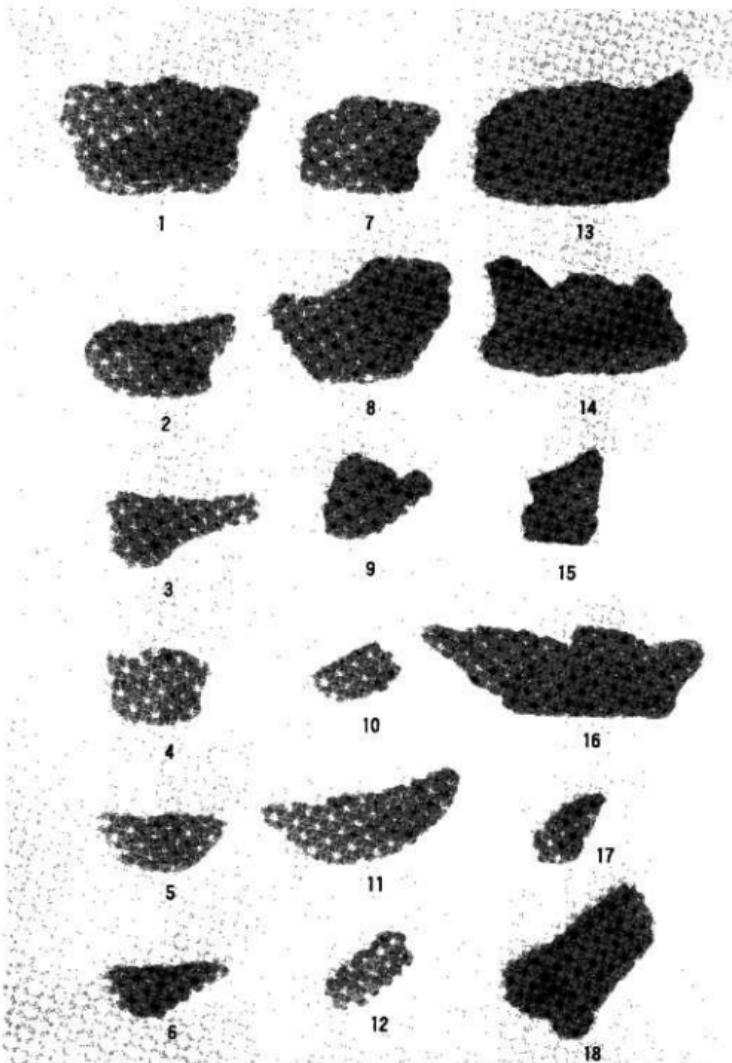
國版48 沖繩後期土器(8)



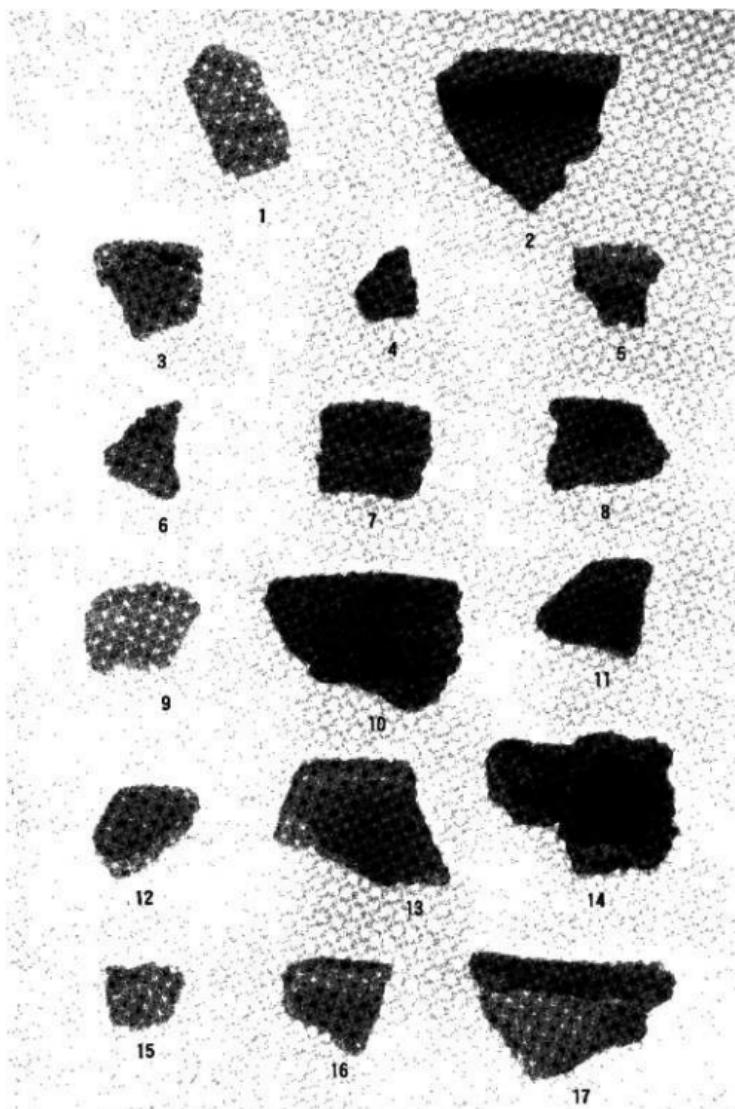
図版49 沖縄後期土器(9)



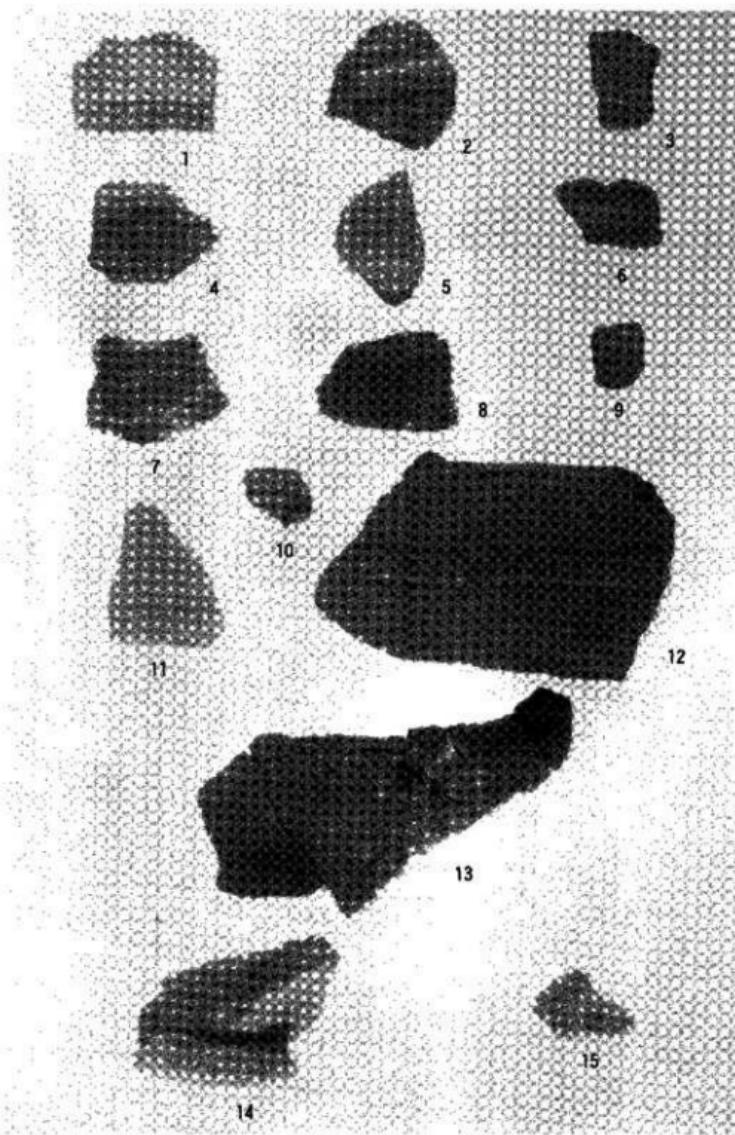
図版50 沖縄後期土器 00



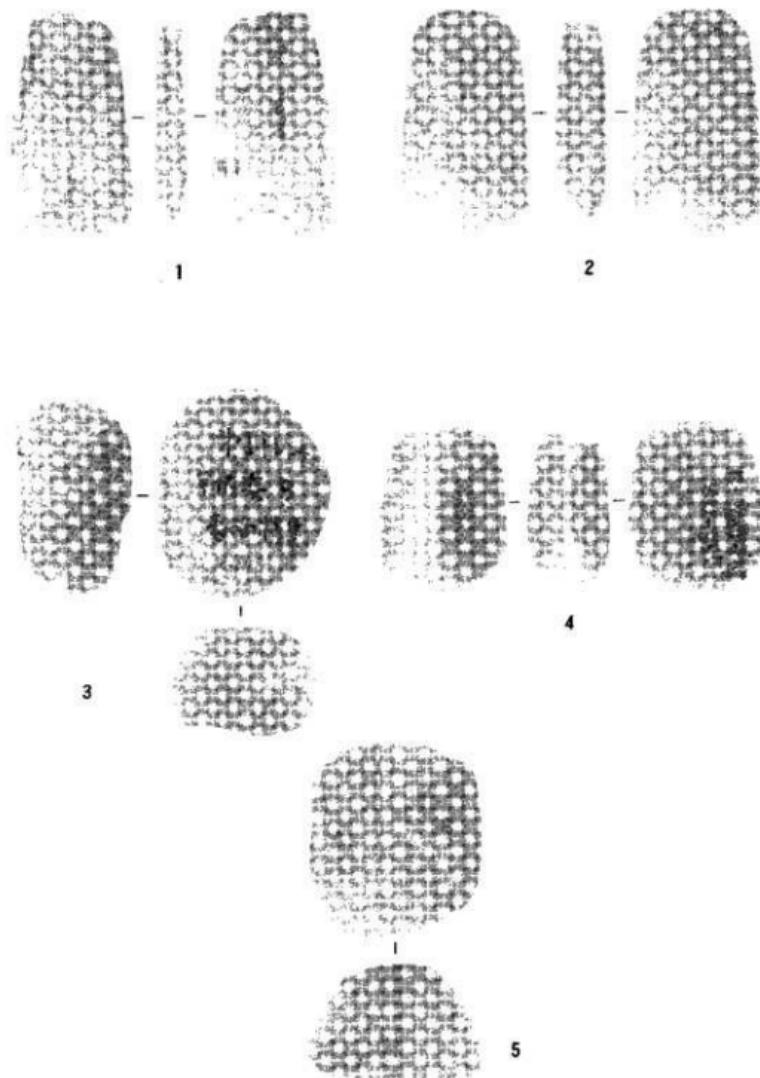
図版51 沖縄後期土器 (1)



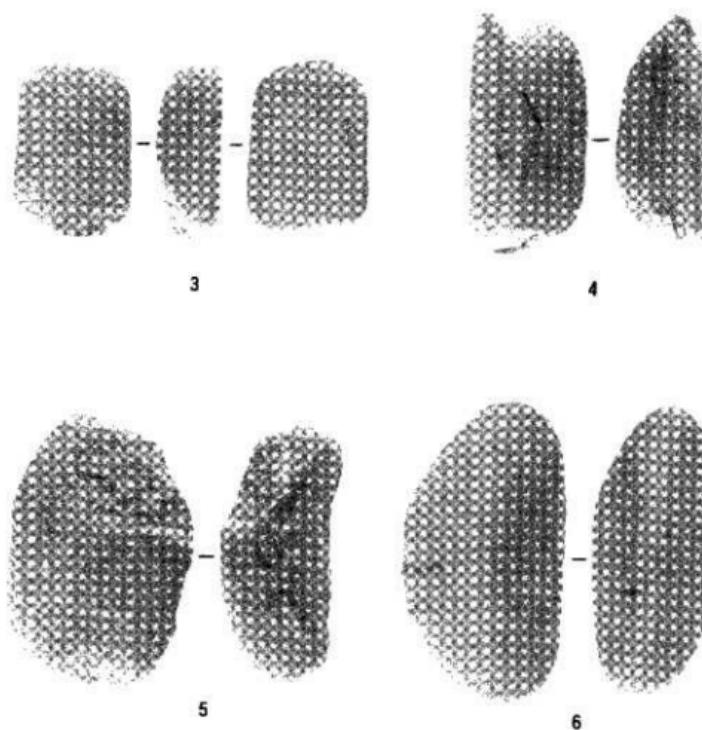
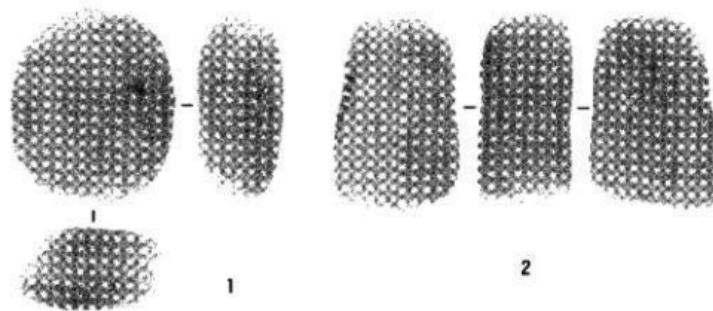
図版52 弥生土器(1)



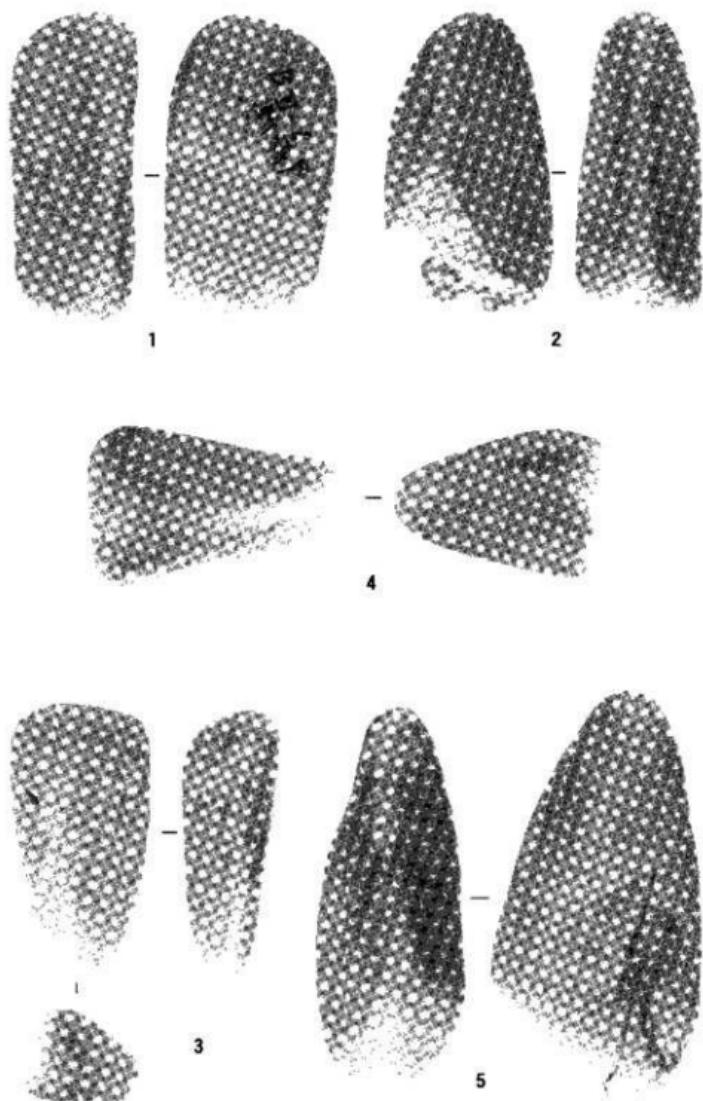
圖版53 弥生土器 (2)



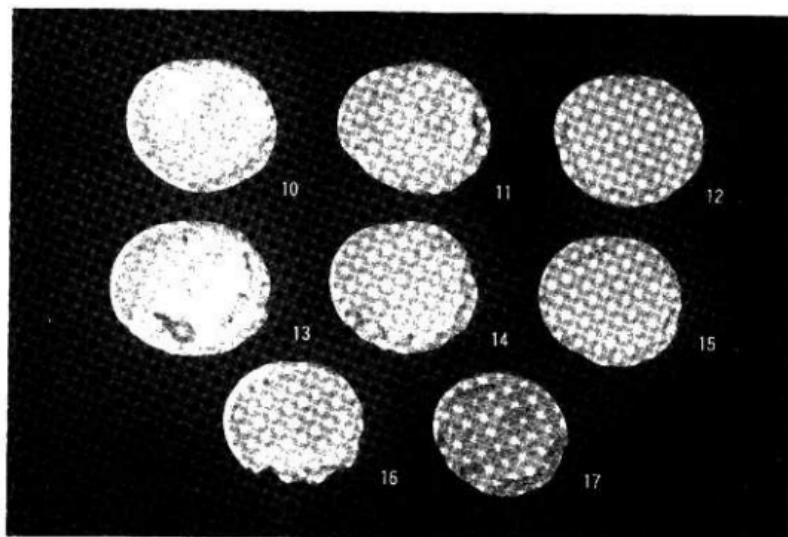
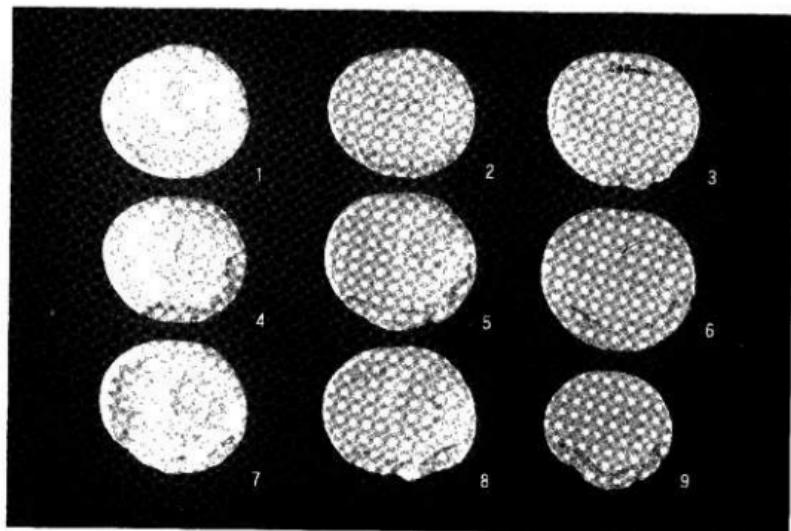
図版54 石 器 (1)



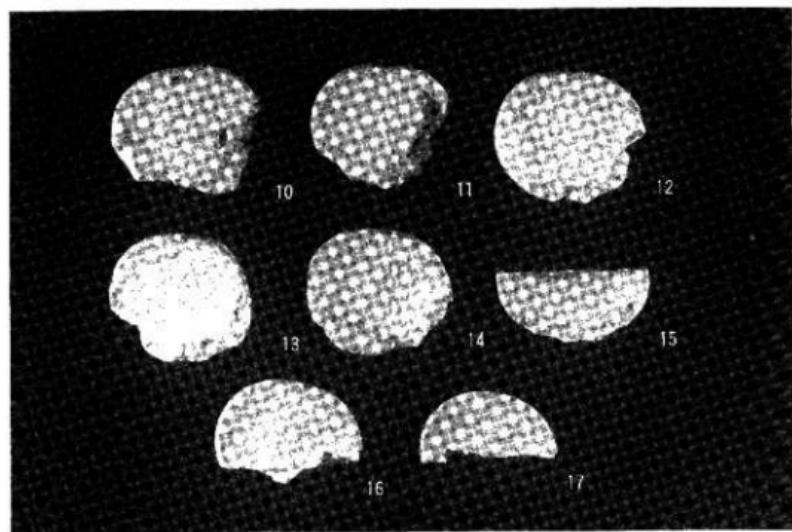
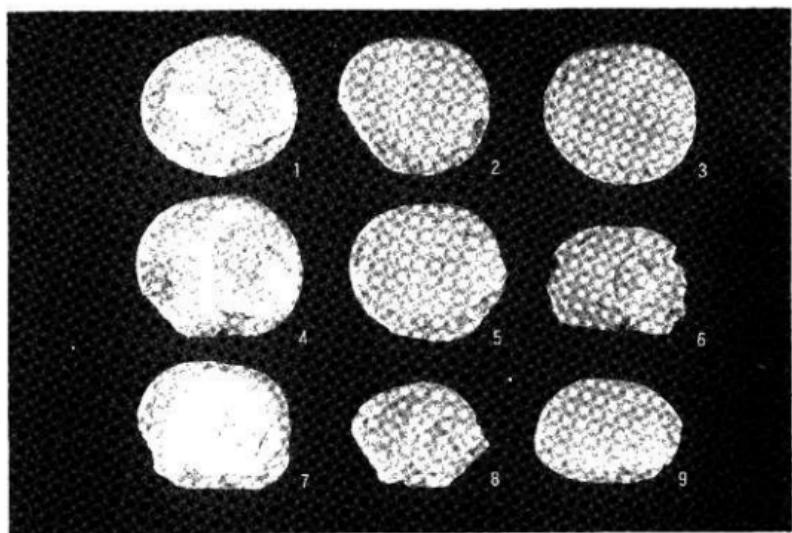
図版55 石器 (2)



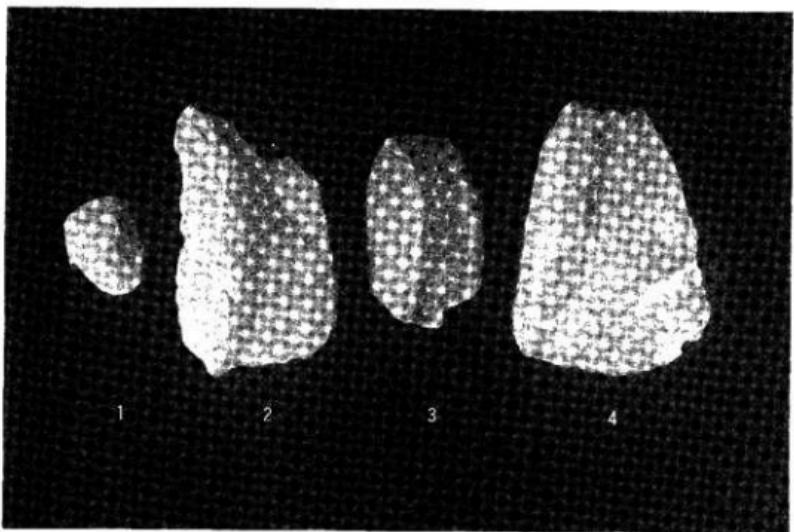
図版56 石器 (3)



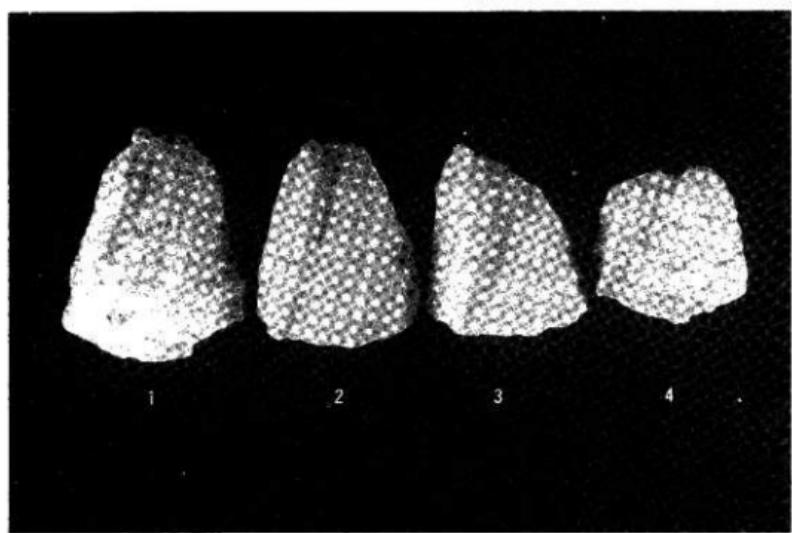
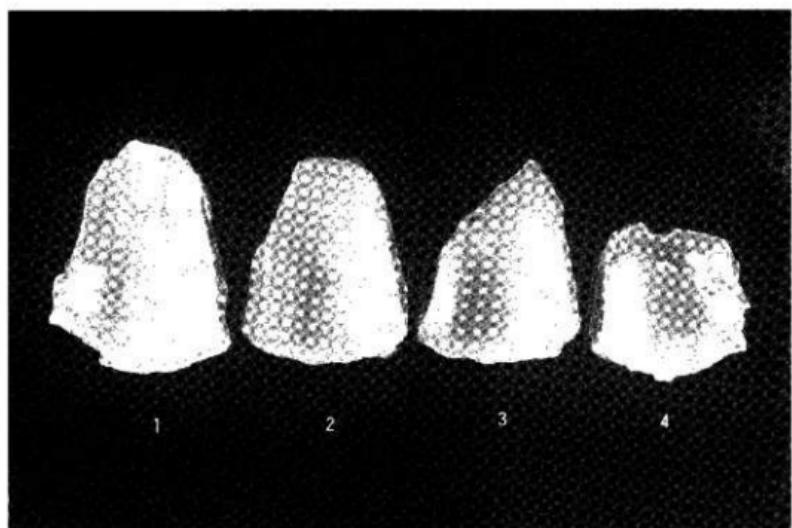
図版57 螺蓋製敲打器(1)



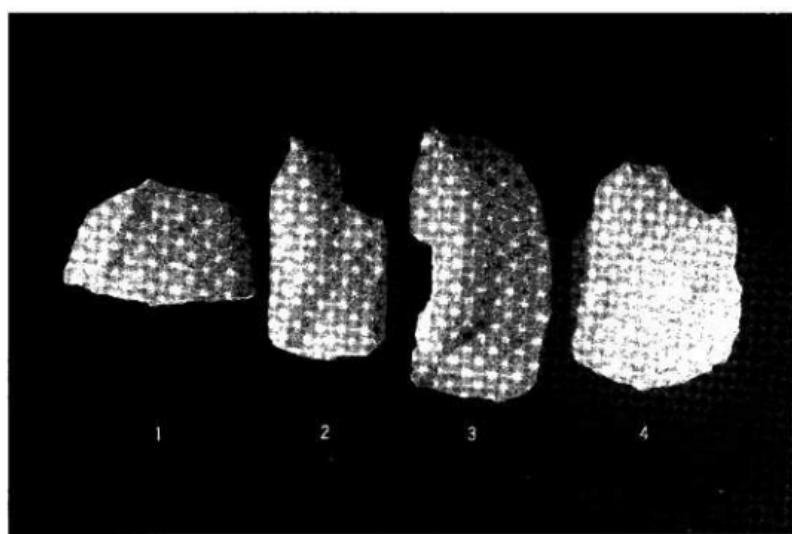
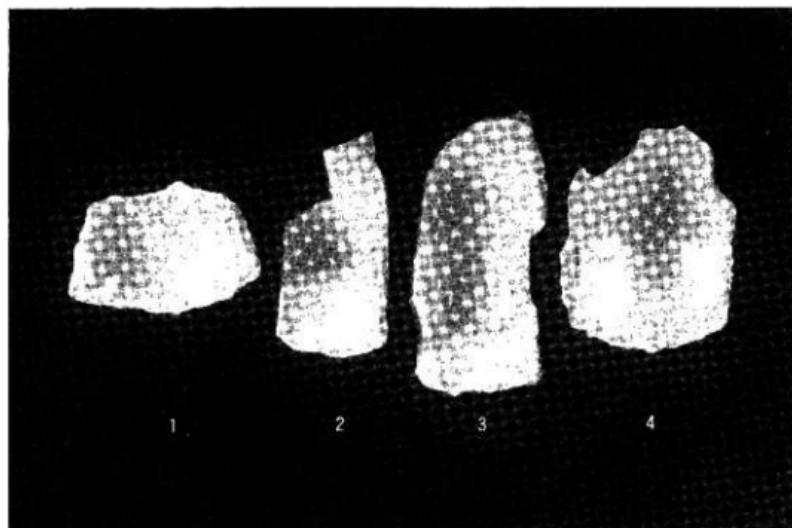
圖版58 螺蓋製敲打器(2)



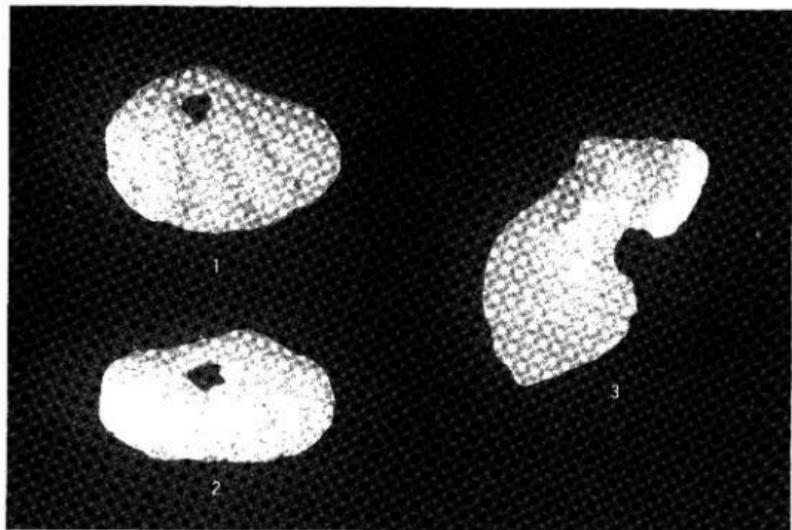
図版59 ヤコウガイ製匙(1)



図版60 ヤコウガイ製匙(2)



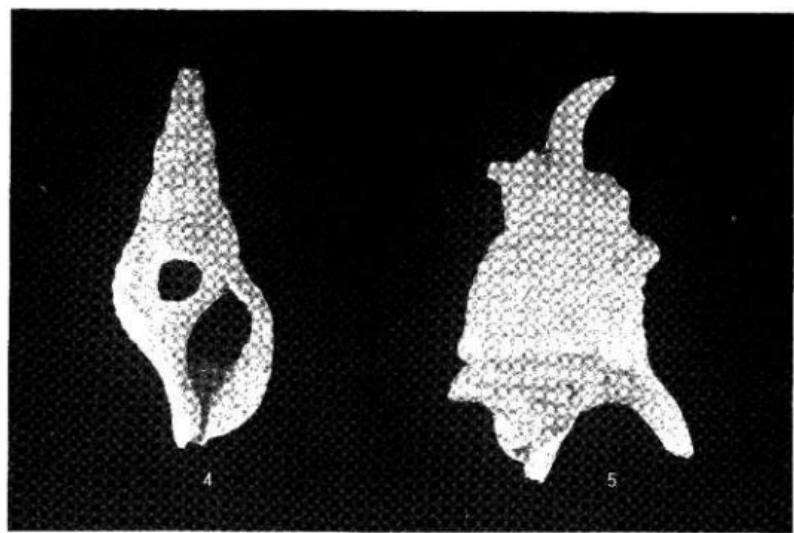
図版61 ヤコウガイ製匙 (3)



1

3

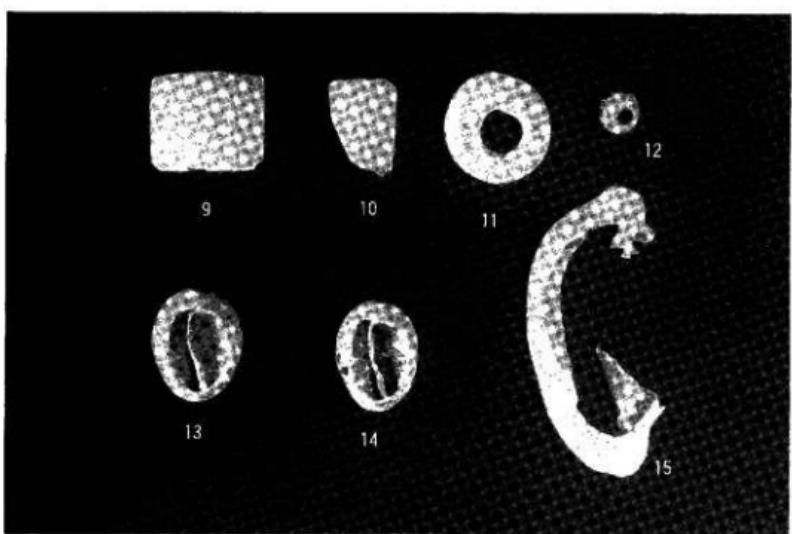
2



4

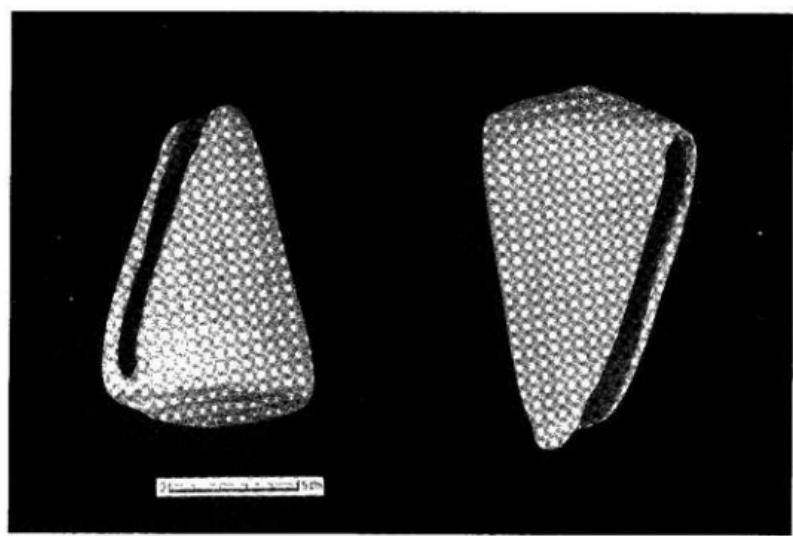
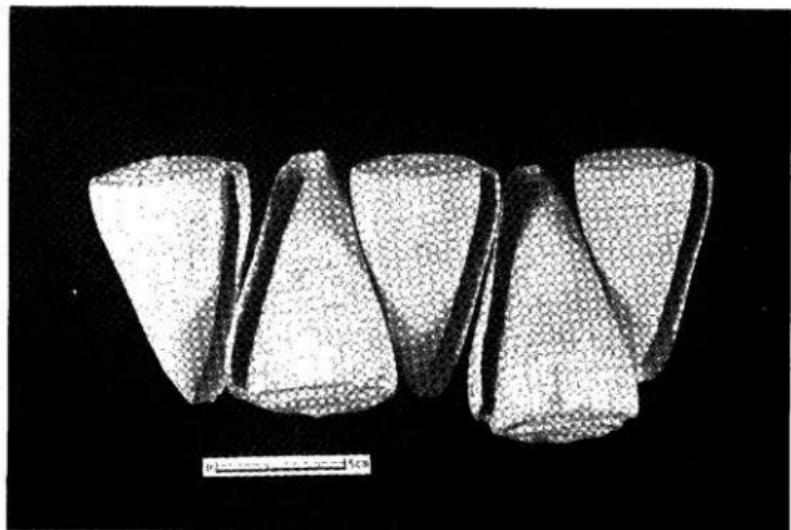
5

図版62 二枚貝有孔製品（1～3）、ホラガイ有孔製品（4）、スイジガイ製利器（5）



図版63 貝輪（1～8）、貝札（9・10）、貝玉（11・12）

タカラガイ製品（13・14）、ウミウサギガイ製品（15）



図版64 貝の集積遺構から出土したアンボンクロザメガイ

宇佐浜遺跡範囲確認調査報告

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

宇佐浜遺跡は1954年、多和田真淳・山入端清次の両氏によって発見された遺跡で、沖縄本島の最北端、辺戸岬の南側に位置している。本遺跡は1967～1971年にかけて、琉球政府文化財保護委員会（県教育庁文化課の前身）主体による発掘調査が4次に亘って実施された。その時の調査成果は「宇佐浜遺跡発掘調査概報」で述べたとおりである。また、「宇佐浜式土器」の標識遺跡としても著名で、1972年には国指定の史跡として保存されることになった。

一帯は屹立した古生層の石灰岩からなる辺戸岳（安須森）を頂点に、その裾部か国頭マージの台地が広がり、海岸部に至るまでに5～6段の段丘を形成している。遺跡はその段丘上に立地し、付近はサトウキビ畑になっている。

沖縄の農業の基幹作物でもあるサトウキビは、近年、大規模な農地改良事業などにより、機械化等かなりの変化がみられる。宇佐浜遺跡周辺でもそのような動きがあり、指定地以外においても事前に確認調査を実施し、遺跡の広がりと性格を明らかにする必要があることにより、沖縄県教育庁文化課では、文化庁の補助を受けて、1986年5月13日から範囲確認調査を開始した。

第2節 調査体制および成果の記録

1. 調査体制

調査 主体 沖縄県教育委員会

調査責任者 米村 幸政（沖縄県教育委員会教育長 昭和61年度）

池田 光男（同 上 昭和62・63年度）

高良 清敏（同 上 昭和63年度）

調査 所管 沖縄県教育庁文化課

比嘉 貢幸（沖縄県教育庁文化課長 昭和61・62年度）

宣保榮治郎（同 上 昭和63年度）

調査 総括 安里 利淳（沖縄県教育庁文化課 主幹兼埋蔵文化財係長）

発掘調査員 岸本 義彦（同 上 専門員）

大城 秀子（同 上 専門員）

発掘作業員 山城 信子、玉城ハル子、上原 春子

玉村 礼子、新垣チヨ子、平良 キヨ（辺戸在）

調査 協力 国頭村教育委員会

2. 成果の記録

出土遺物の洗浄・注記・接合・実測・製図・写真撮影等は下記のメンバーで行った。

城間千栄子・比嘉 優子・城間千鶴子・大城 勝江・人城 茂美

上原 圓子・上遠天洋子・長嶽 初子・照屋 利子・大城 秀子

報告書は次のとおり分担執筆した。なお、編集は岸本義彦・大城秀子が行った。

第Ⅰ章 岸本義彦

第Ⅱ章 大城秀子

第Ⅲ章 人城秀子

第Ⅳ章 大城秀子・片岡義彦



発掘調査メンバー

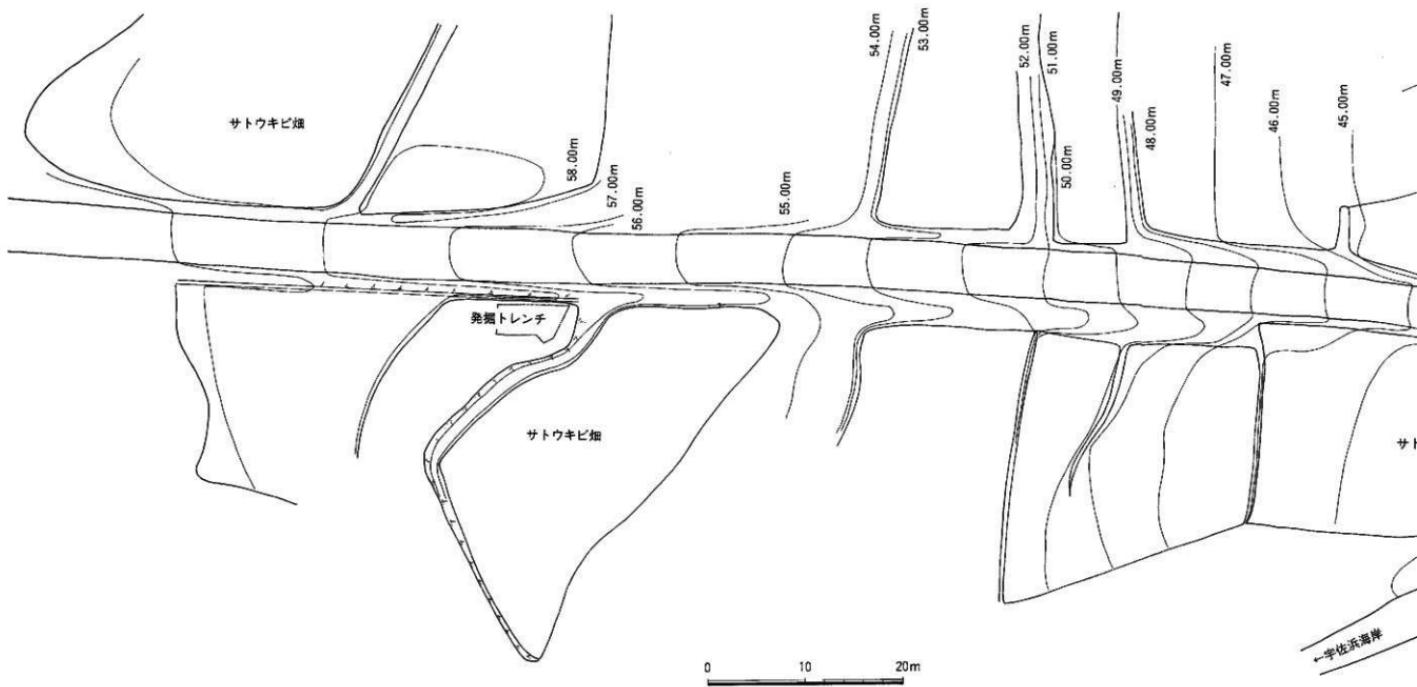


図1 調査区と周辺の地形

第Ⅱ章 調査の経過

宇佐浜遺跡の第五次調査は、遺跡一帯に道路及び上地改良事業計画があるため、予め遺跡の範囲と性格を把握しておく必要を認めたために実施された。

調査は昭和61年5月13日から同年6月6日にかけて行われた。調査区域は国道沿いにある辺戸岬ドライブインから農道を北へ50m程に宇佐浜遺跡の標柱が建っている南側のキビ畑内にある。

宇佐浜遺跡は南から北に向けて全体で4つの段丘上に形成されているが、今回調査したのはその3段目の北西側にあたる。

調査を始める前に周辺踏査を実施した。その結果、図に示すとおりの範囲に石器や土器等が採集された。また調査に参加している作業員（辺戸区在住）や遺跡一帯に畑を所有する方々に聞き込みをすると、現在でも耕作時に石器を採集することがあるようである。現に調査期間中にも表面採集2点、畑から採集されたからと1点の石斧が寄贈された。

調査は次のとおりに行われた。

1. グリッド設定は農道を挟んで東側のキビ畑（約24m）を北からA・Bとした。
調査範囲が小さく限られていることでもあり、4m×4mを1単位とした。
2. まず、北側の1グリッドを包含層の堆積状況を見るために第1層（客土層）と第2層（旧表土層）を除去し、第一～四次の調査結果をも参考にしながら手掘りで第3層を露出させた。
3. 層は遺物包含層については5cm単位で掘り下げた。
4. 第一～四次の調査の際に確認されたといわれる2枚の遺物包含層については、今回は1枚のみの確認にとどまった。
5. 遺物包含層からは殆ど土器や石器の人工遺物のみ出土し、自然遺物としては獸骨が僅かに採集できた程度である。
6. 出土遺物は全て収納し、土壤サンプリングも各遺構別に行ったが、植物遺体等の資料は得られなかった。

第Ⅲ章 調査の内容

第1節 層序と遺構

1. 層序

全体で3枚確認された。遺物は各層に含まれるが厳密な意味での遺物包含層は第3層のみである。以下、その特徴を述べる。

第1層

厚さ22~40cmで、畠地用の客土層である。

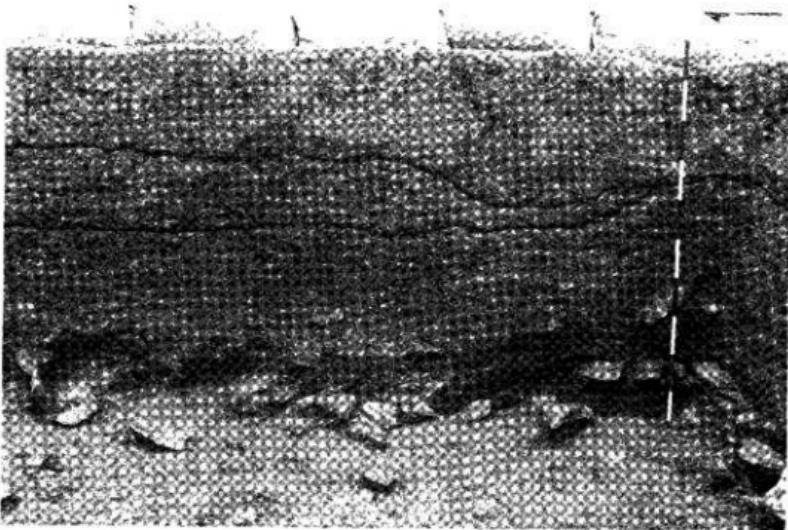
第2層

客土以前の表土層。20~25cmの厚さをもつ疊起じりの暗褐色土層で、砂質である。

自然の擾乱を受けていて、南から北に傾斜していく途中で一旦消えることもある。

第3層

宇佐浜遺跡本来の遺物包含層である。黒褐色を呈する上層で、やや粘質である。厚さは47~62cm、土器や石器が多く含まれる。遺構は本層の20cmのレベルから露出しはじめ、また、遺構内での遺物量は顯著である。



層序

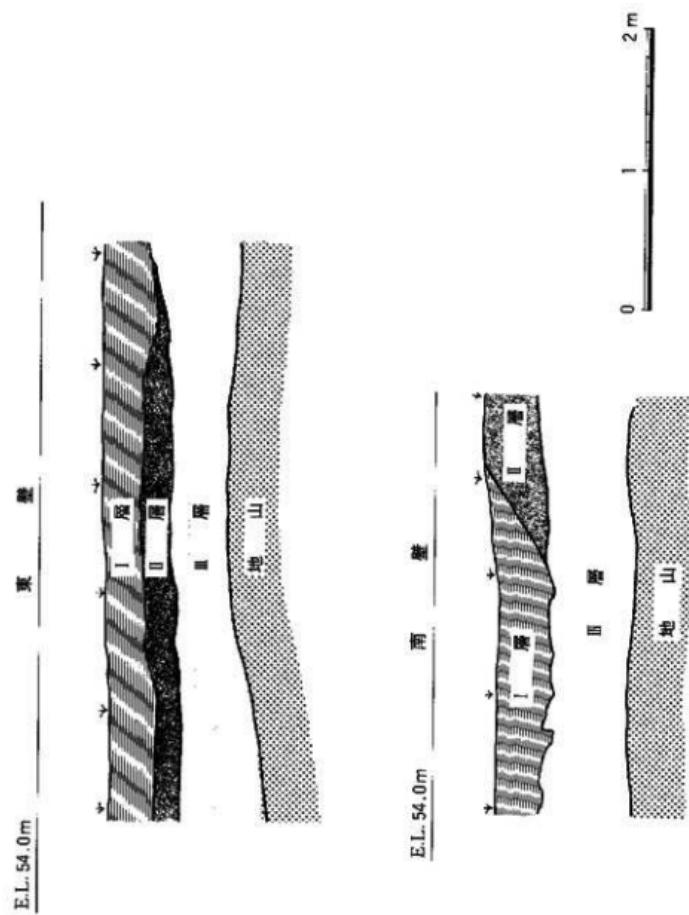


圖 2 積 序

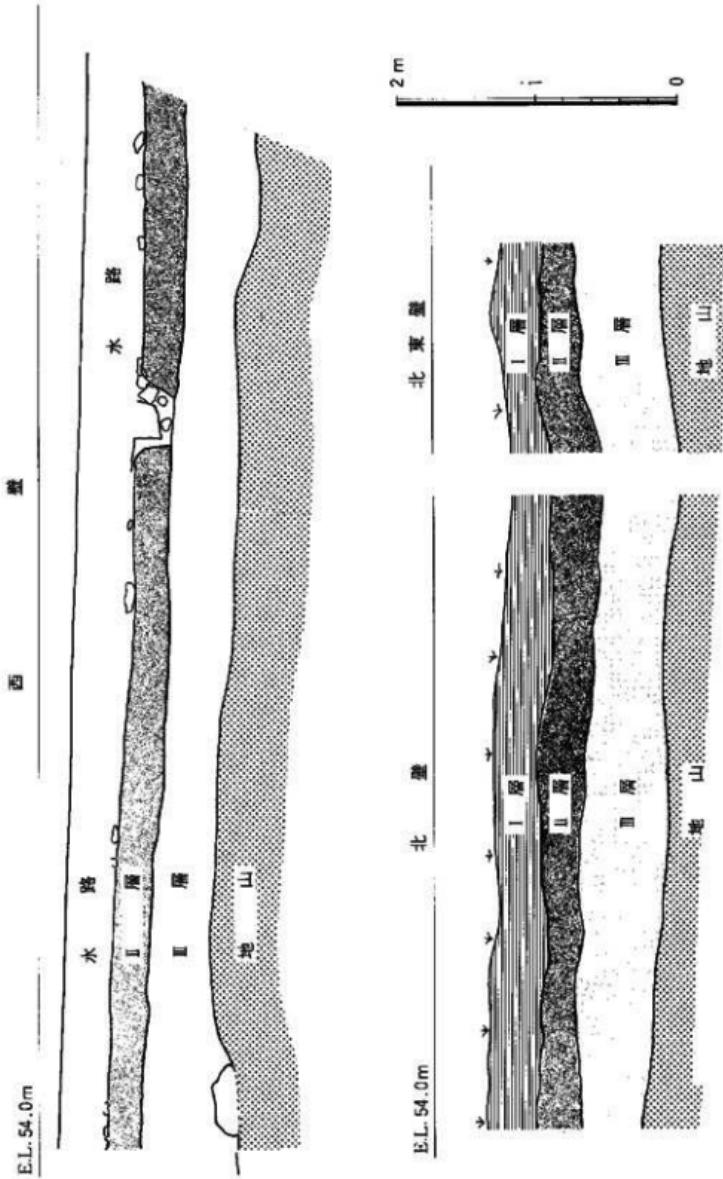


圖 3 檢序

2. 遺構

第1号遺構

グリッドの北西隅にあらわれた遺構である。第3層の10~20cmレベルになると遺物の出土量が極めて多くなる傾向にあり、特に土器の集中がみられ、遺構近しの感触がえられた。

また、レベルを掘り下げるにつれ、こぶし人の跡も散見でき、遺構に伴うものと考えられた。その他、立位状態のものも含まれており、山手から流出する土砂が堆積したものと、遺構をかたづくる疊の混在がみられる。

遺構の掘り込みはほとんど確認できず、焼石や焼土、柱穴の確認はできたが、自然の風雨や災害等により遺構を形成する鉢石等がくずれ、プランの確認にはいたらなかった。

第2号遺構との遺物間に時間的な差異はみられないが、構造は第2号遺構とのかかわりからみて、隅丸方形ではないかと考えられる。

共伴遺物は石皿と磨石のセットや、土器の大型片等みられた。

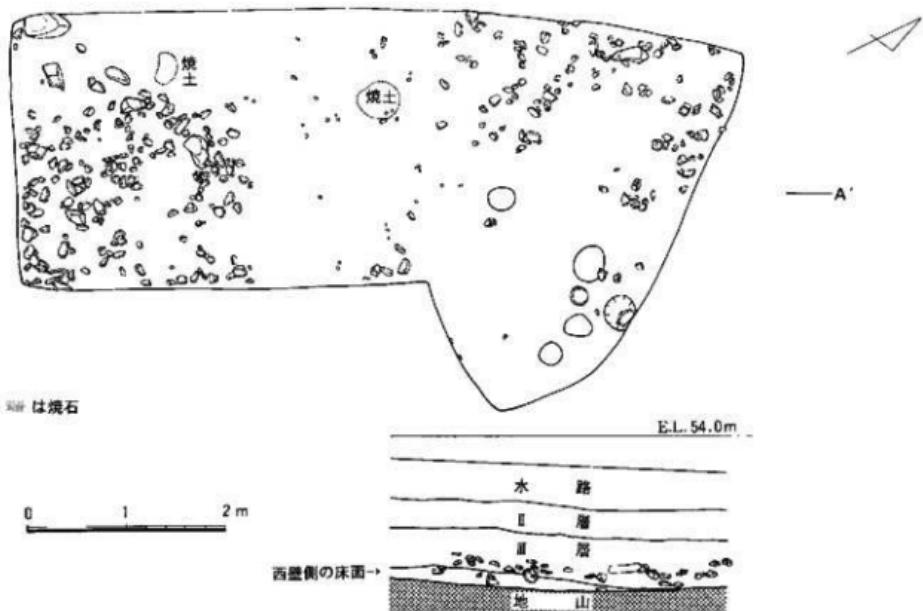


図4 第1・2号遺構

第2号遺構

グリッドの南側に露出したもので、プランの確認ができた唯一の隅丸方形遺構である。掘りこみはゆるやかな傾斜で12~20cmの深さをもつ。規模は一边が3m前後（南北）になる。

遺構内には焼土が90×60cm, 108×32cm, 43×75cmの範囲で中央部よりやや外側に見られる。僅かに炭と灰の広がりがみられるが層をなす程ではなく、焼石も焼土の周間に散在している状況である。炉跡と思われる。

床面は地山を平坦に削って仕上げられている。柱穴は一基のみみられた。なお、この柱穴は傾斜角度が 15° で、遺構中央部に傾斜しているのがわかる。

遺構内からの出土遺物は特に多く、土器や石器が大部分であるが、ブダイ科の骨も少量得られた。

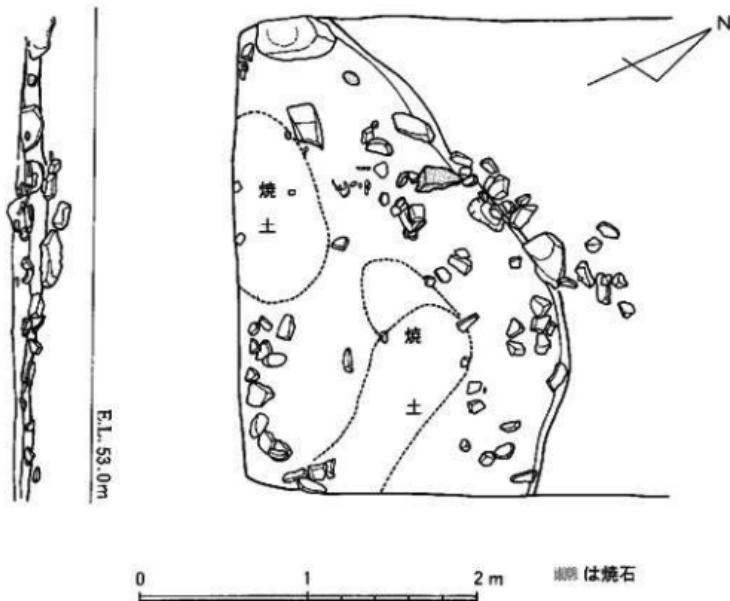


図5 第2号遺構

第2節 出土遺物

今回の調査において得られた人工遺物は土器と石器だけである。自然遺物は動物遺存体が僅かにみられたのみである。また、石器の材料となる石材も多量に出土した。

1. 土器

今回の調査で得られた土器は総数8,240点で、その分類基準は一～四次調査の項で示したとおりである。分類は口縁部・有文土器等、特徴的なものを用いて行った。結果は第1表に示し、下記の如く解説できる。記述は各遺構・層序ごとに行った。

第1号遺構

総数655点の出土で、最も多いのは宇佐浜式土器である。口縁部の断面が三角形やカマボコ状を示す一般的なものが多い。また、肥厚部が長大・扁平化する、いわゆる仲原式の特徴をもつタイプも顕著にみられ、この土器が宇佐浜式土器の後続形式になるとする見方（注1）もあり、今後注目される。その他、カヤウチバンタ式土器・沈線文土器等が得られたが、層位・レベルの差はみられず、宇佐浜式と同一レベルで出土した。以下、それぞれの特徴を略述していく。

カヤウチバンタ式土器は図7の1・2（図版6の1・2）に示した。いずれも小破片であるが、本式土器の特徴である外面ハブラシ状に肥厚するのがよく把握できる。1は胎上に雲母が含まれ、成形も丁寧になされている。2は器面に細かい器孔が観察される。どちらも口唇部は平坦に整えられている。

図7の3～7（図版6の3～7）は口縁部の張出しが強いグループである。しかし、室川式のような逆L字状のものではなく、土器自体の特徴（胎土・混入物・焼成等）は宇佐浜式と同一である。

宇佐浜式土器は同図8～11、図8の1～12（図版6・7）に示した。図上復元ができたのは4点ある。それぞれの口径は8が10cm、9は17.8cm、10は22.6cm、11は25cmであった。

文様は沈線文のみが得られた。図8の1は縦位の沈線文が2列残る。同図2は砂質の胎土には雲母が含まれ、鋸歯文を施している。

8は小型の壺形土器で口縁から頸部にかけてのカーブが大きく、胸部は張り出すものであろう。9・10は胎土に雲母を大量に含有する点で注目される。特に10は頸部から胸部への移行が急

な、甕形に近い器形をもつ。胸部の直径は本遺跡最大になろう。11の製品とともに成形・焼成ともに良好で、堅緻な土器である。

図8の2は器面があばた状を呈する、いわゆる室川上層式上器と呼称されているものである。斜沈線文が2本みられ、本遺跡からの出土は僅少である。

図8の13~18は(図版7の13~18)に示したものは、肥厚部が長大・扁平化するグループである。口唇部は丸みを帯びるか舌状になり、前述したように仲原式の特徴をもつ。胎土や混入物・器面調整等に宇佐浜式との差異はみられない。

図9(図版8)は口縁部が肥厚しないグループである。そのうち1~7は外反するタイプ、8~13は直行するタイプを示した。前者の口縁部の外反は微弱で、直線的に胸部へと移行する。器形は深鉢形になるものと思われる。

8は口径10.4cmの壺形上器である。口縁部がほぼ垂直におりて胸部への張出しが強いものがある。

これらの無肥厚口縁部グループの素地はやや粗く、焼き締めの悪い、硬度の劣るものである。器面調整はやや良いものと難になされるものがある。多くは混和材がみられないが、僅かに石英を混ぜるものもある。

文様を有するものは図10の1~8(図版9の1~8)に示した。

3・4は喜念工式土器である。いずれも口縁部が欠落しているが、3は残存部より推すと壺形を示すと思われる。喜念工式特有の凸唇・側点が認められる。2点ともに素地は細かく、雲母を含有する。器面調整はやや難になされ、焼成は悪く、硬度は劣る。

1は口縁部が方形に肥厚し、この肥厚部に横捺刻文が一列に施されている。胎土は細かく、雲母を多量に含有する。一見面鏡西洞式に類似するが、有文の室川式の可能性も残る。

2・5~8に示すのは、沈線文を斜位ないし幾何学的に施文する例である。胎土は細かく、精製され、焼き締めの利いている上器である。

底部は5点出土した。尖底が3点、半底が2点の出土である。9は底径が1.8cmと小さく、尖底状を示す。室川式によくみられる底部である。10は底部の先端が突出し、乳房状を呈する。11・12はゆるやかな丸みをもつ。

注1. 上原静・当間嗣一「仲原式土器の提唱について」『紀要』第1号沖縄県教育委員会文化課 1984年

第2号遺構

図11の1～7（図版10の1～7）はカヤウチバンタ式土器である。肥厚部は、口唇部が平坦になるもの（1～3）と、丸みをもつもの（7）とがある。文様はなく、素地には雲母や長石を含有するもの（3・7）がある。焼き締めのきいた硬度の優る土器である。

同図の9～13、図12の1・2（図版10・11）は口縁部の張出しの強いグループである。1点（図12の1）は、図上にて底部付近まで復元できた。泥質の深鉢形土器で、推定口径19.7cm、器表面はポーラス状になっている。肥厚部直下には器面調整時につけた指痕もみられる。やや硬度の劣る土器である。その他の土器も器形は深鉢形、素地には石灰岩細片を混入するものが目立つ。有文資料はない。

同図の3～9、図13・14、（図版11の3～9、図版12・13）に示したものは宇佐浜式土器である。口縁部を山形に肥厚するもの、その肥厚部に押引文（図12の3）や貼り付け文（図13の1）を施す例がある。

肥厚部の断面は三角形状・かまぼこ状があり、それが長大・扁平化するものもある。素地は、精製されたものと、粗製のものがある。混和材は概ね用いられないが、石英や石灰岩細片を混入するものもある。焼成は概ね良好、堅緻な土器が多い。

器面がポーラス状になる例もある。

図15の3は肥厚が微弱であるが、段は十分に意識して作られたと思われる。カヤウチバンタ式土器のくずれたものと理解できよう。

無肥厚口縁土器は図15の4・6～12（図版14）に示した。

無肥厚で外反するグループは12点のみの出土をみた。図15の4は口径20cmの、頸部から胴部にかけほぼ垂直になる深鉢形土器である。7は外反が微弱で、精製された素地を使用、器面は灰褐色を呈する。8は2号遺構の床面採集のもので、素地はやや細かく、石英の微細片を混入する。3点ともに焼成は良好。

無肥厚で直行するグループは全体で12点得られ、うち3点を9～11に示した。口唇部は丸みを持ち、胎土に雲母を混入する。焼成は良好。

無肥厚で内湾するグループは1点のみ（12）出土した。口縁部が乳鉢状にふくらみをもって内湾する。胴上部で一旦くびれ、胴下部へと移行する。胎土には石灰岩細片が観察できる。

図16の1～5は喜念I式の小破片である。凸帯+側点が施され、いずれも素地には雲母を多量に含有する。

6に示したものは二叉状の施文具によって沈線紋を2cm幅で施文している資料である。このような文様は前期の伊波式によくみられる。素地は細かく、器表面に雲母や長石が容易に観察できる。

7～10はシャープな沈線で羽状文を構成している。このような有軸の羽状文を施す例は、熱田第二貝塚や大原貝塚等、本遺跡と同時期の遺跡でも散見できる。いずれも素地は精製されており、特に7には雲母が多量に含まれる。

その他沈線文(11・13)、沈線+点刻文(14)、横捺刻文(12)を施すものがある。

底 部

2号遺構では3点のみ出土した。16は底径の小さな(3.0cm)平底で比較的保存のよい資料である。内面には成形時の擦痕も残る。素地には雲母の微粒子が含有され、焼成は普通、橙褐色を呈する。

15は底面の厚い(2.1cm)尖底で、混和材として石英の微細粒が認められる。焼成は良好、赤褐色を呈する。

17は平底片で黒褐色を呈し、固く焼き締まっている。混和材としては石英の微細粒が認められる。

第3層

カヤウチバンタ式土器

図17（図版16）に示した。

本型式土器は口縁部の肥厚帯の形状にバリエーションがあり、更に細分も可能かと思われたが、量的に少ないこともあって、ここでは一括して紹介したい。

有文資料は一点も得られなかった。すべて最大径を口縁にもつ無文の深鉢形土器である。

口唇部は平坦なものと丸みをもつものがある。後者は肥厚部が方形より長大・扁平化する傾向がある。

3・4・6は厚みのある典型的な口縁部肥厚帯をもつ。

胎土は細かく、混和材を用いないものが多いが、素地中に雲母を含有するもの（2・7）や石灰岩の細片を混和材として用いるもの（1・17）もある。

器面調整も概ね丁寧になされており、焼成も良好である。器色は赤褐色を呈するものが多い。

室川式土器

図18の1～5（図版17の1～5）に示したものである。無文の平口縁で壺形と深鉢形土器がある。

1は暗黒褐色を呈する、焼き締めの良い堅緻な壺形土器である。器表面はナデにより丁寧に成形がなされ、光沢もある。素地には石灰岩細片を混入する。

2は器表面がさらさらした感触の、木タイプの典型的な深鉢形土器である。素地は精製されており、混和材は混入されない。口縁部の肥厚部に対して、器厚が6～7mmと薄手である。焼成はやや悪く、赤褐色を呈する。

また、素地に石灰岩細粒を混入し、器表面でも容易に観察できる資料も多い。

凸帯文土器

図18の6～15（図版17の6～15）に示した。主に頸部に凸帯を有する。凸帯部の付け方は、粘土帯を接合する際につまみ出してつくるもの（6）と、細かい粘土紐を貼り付けるもの（1）とがある。胎土には雲母を多量に含有するものが多い。器面調整は良くなされているが、やや硬度は劣る。

7は唯一、口縁部にリボン状の突起部をもつ例である。突起部の形態だけをみると、前述した字佐浜式土器の類例もあるが、肥厚部のつくりかたに差異があり、本項に分類した。

宇佐浜式土器

図19～22、(図版18～21)に示した。

器形としては、壺形と深鉢形土器の2種類が得られた。前者は1・2・6に示したが、圧倒的に深鉢形土器が多い。口縁部は山形(3～9)になるものと、平坦のものがある。

図20の9は口縁部にM字状の突起部を持つもので、微弱な有段部をもつ。破損のため突起部の全形はうかがえないが、山形の突起部をV字状に抉ってリボン状に表現している。シヌグ堂遺跡にも例をもつタイプである。素地に混和材は含まれない。胴部へタテ方向にナデの痕跡が認められる。焼成は良好、褐色を呈する。

口径の推定できるのは7点であり、最小6.6cm、最大23.6cmで、15～20cm程度の大きさが一般的にみられる。しかし、1は6.6cmとミニチュアサイズで、特別の用途がうかがわれる。

図20の4は扁平な粘土帯を貼り付けたものである。宇佐浜式に貼付文は一般的ではなく、稀である。素地は地元のもので、混和材として石英細粒を用いている。

室川上層式土器

図23の8～10(図版22の8～10)に示した3点である。9は口径11cmの小型の製品で、口縁部は大きく外反し、頸部から胴部へはほぼ直線状に移行する。3点ともに土器自体が軽く、多孔質で、器面はポーラス状を呈する。粘性の素地により作られ、混和材は用いられていない。焼成はやや悪く、脆い。器色は橙～黄褐色を呈する。

仲原式土器

図23の11～15、図24、(図版22の11～15、図版23)に示した。これらの土器は肥厚部が扁平化するがまだ有段部は意識して強調されるという段階のもので、いわゆる仲原式土器の範疇にあるものと思われる。

口縁部には山形を示すものもある(図23の11～14)。

図24の1は口径21.6cmの中型の深鉢形土器である。口縁部が肥厚しているというよりは、その名残を留めている程度で有段部は微弱である。焼成は悪く、脆弱な土器である。

非肥厚口縁土器

本タイプは口縁部が外反するものと、直行するものとに分けられる。

口縁部が外反するグループは図25、26の1～4(図版24、25の1～4)に示した。外反の度合いはそれ程強いものではない。口径はそれぞれ図25の3が10.4cm、4が12.4cm、5が18.2cm、6が17.4cm、7が9.2cmとなっている。

文様を有するものではなく、口縁部も平坦である。素地の作製はやや粗になされ、混和材として石灰岩・石英細粒が用いられる。全体に焼成はさほどよくなく、脆い感がある。器色は赤褐

色～橙褐色を呈する。

直行するグループは図26の5～11（図版25の5～11）に示した。

6は本タイプ唯一の山形口縁部である。素地に雲母を多量に含有するもので、口唇部の山は小さい。小破片のため詳細はわからないが、段状の山形を示す可能性もある。焼き締めが良く、器面調整も丁寧になされる堅敏な土器である。

その他の土器は素地・混和材・焼成・器面調整ともに前述の外反するタイプと同じである。

呉念工式十器

図26の13～15（図版25の13～15）に示した。いずれも頸部の破片である。文様は凸帯+側点の組み合せだけのもの（14）、間を沈線文でうめるもの（15）、沈線文+側点（13）の施文法がある。3点とも、さらさらした素地に雲母を含有し、焼き締めはそれほど良くない。色調は13・15が黒褐色、14が橙褐色を呈する。

その他の有文土器

図26の16～20、図27（図版25の16～20、図版26）に示した。

16は口縁部が方形に肥厚、その上に横捺刻文を施し、直下に沈線文を加える。一見、面繩内洞式に類似するが、小片のため断定できない。素地には大量の雲母を混入する。褐色を呈する焼き締めの良い、堅敏な土器である。

17～20は口縁～頸部の破片で、長頸壺形土器になるものと思われる。いずれも沈線文が施されるが、文様構成はわからない。4点とも素地には雲母を多量に含有する。

その他の沈線文の施される資料を図27に示したが、そのうち1・3は細隆帯文+沈線文の組合せになっている。

器形を窺える資料をみると、壺形が多い。

文様は羽状が多く、右軸羽文が目立つ。この文様は宇佐浜期の他の遺跡からも散見できる。素地に雲母が含まれる例が多い。

底 部

図28（図版27）に示した。内訳は尖底が8点、丸底3点、半底2点となっている。

小破片のため、十器のどの型式に付属するかは確定できなかったが、器面観察では宇佐浜式土器には尖底がつくと考えられる。

12は底径の小さな平底で室川式につくものであろう。

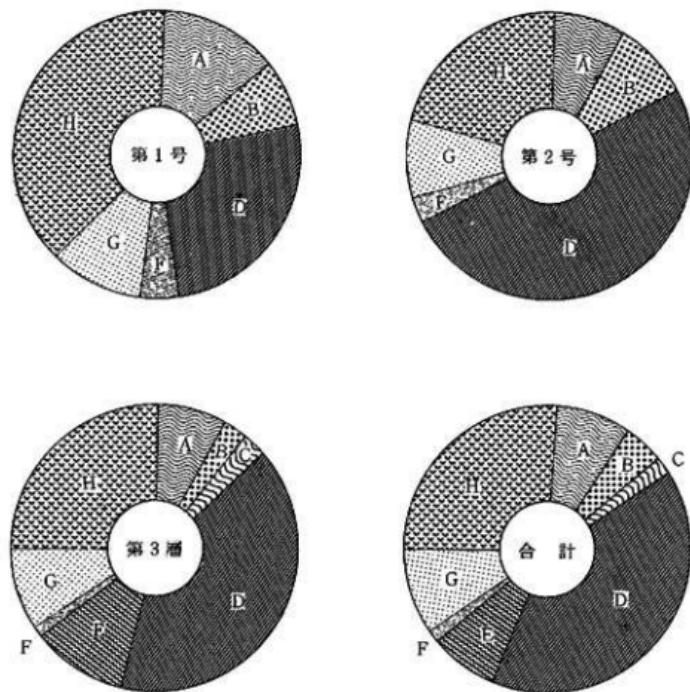
全体に成形は難である。器厚も5のよう薄いものや、3・13のごとく厚手のものもあるが、一般的には6～8mm程度の器厚をもつ。

表1 土器出土一覧表

型式 出土区	層序			造構		合計
	第1層	第2層	第3層	1号	2号	
カヤウチバンタ式			33	9	9	51
室川式土器			11	5	10	26
凸 蕃 文			12			12
宇佐浜式			169	17	57	243
仲原式			45			45
喜念I式			3	3	3	9
その他有文土器			41	7	10	58
無肥厚口縁	外 反		65	19	12	96
	直 行		37	6	12	55
	内 湾		2			2
無文胸部	1	42	5,691	584	1,285	7,603
底部	尖 底		12	1	5	18
	丸 底		7			7
	平 底		5	2		7
	不 明		6	2		8
合計	1	42	6,139	655	1,403	8,240

表2 無文胸部片集計表

分類 出土区	非・雲母	含・雲母	合計
1号	427	157	584
2号	1,216	69	1,285
1層	1	0	1
2層	42	0	42
3層	5,474	217	5,691
合計	7,160	443	7,603



A カヤウチバンタ式土器

E 仲原式土器

B 室川式土器

F 喜念I式土器

C 凸帯文土器

G その他有文土器

D 宇佐兵式土器

H 無肥厚口縁土器

図6 土器型式別比較表

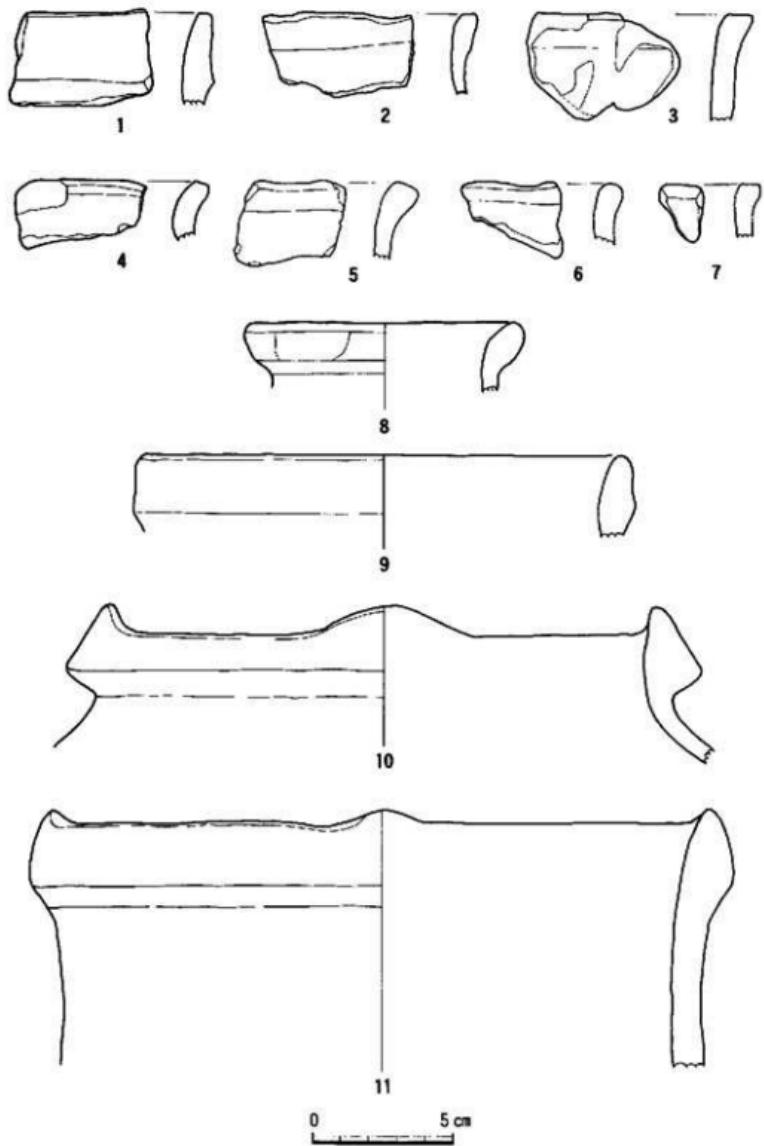


圖 7 第 1 号遺構出土土器

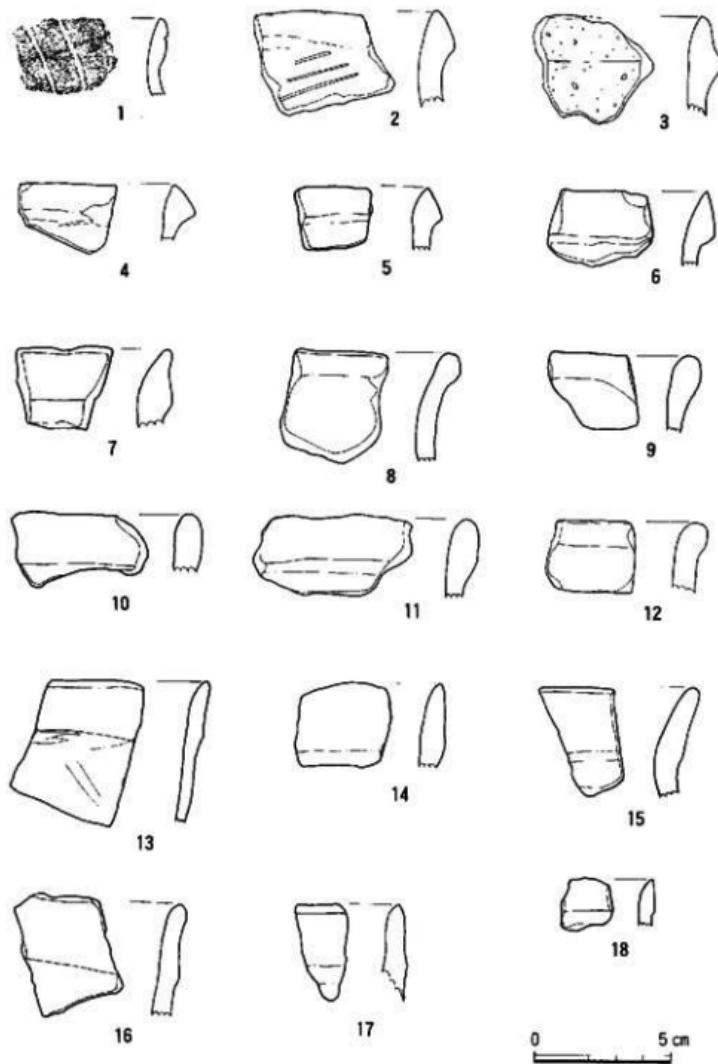


図8 第1号遺構出土土器

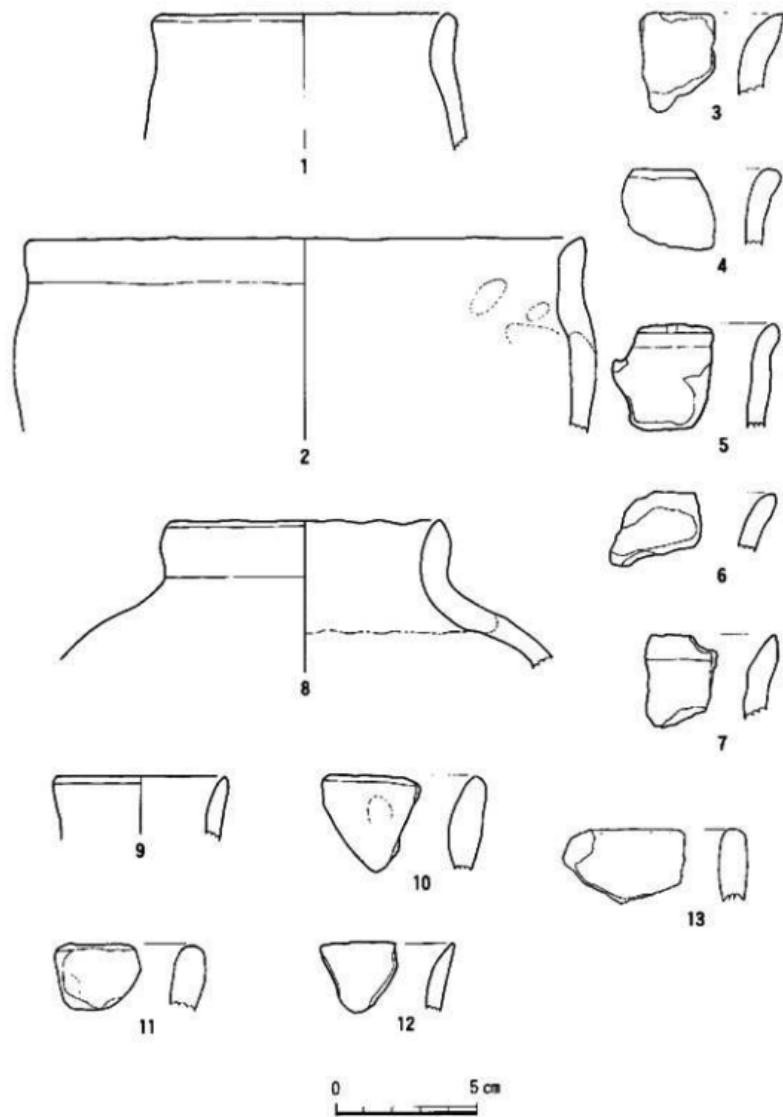


图9 第1号遗构出土土器

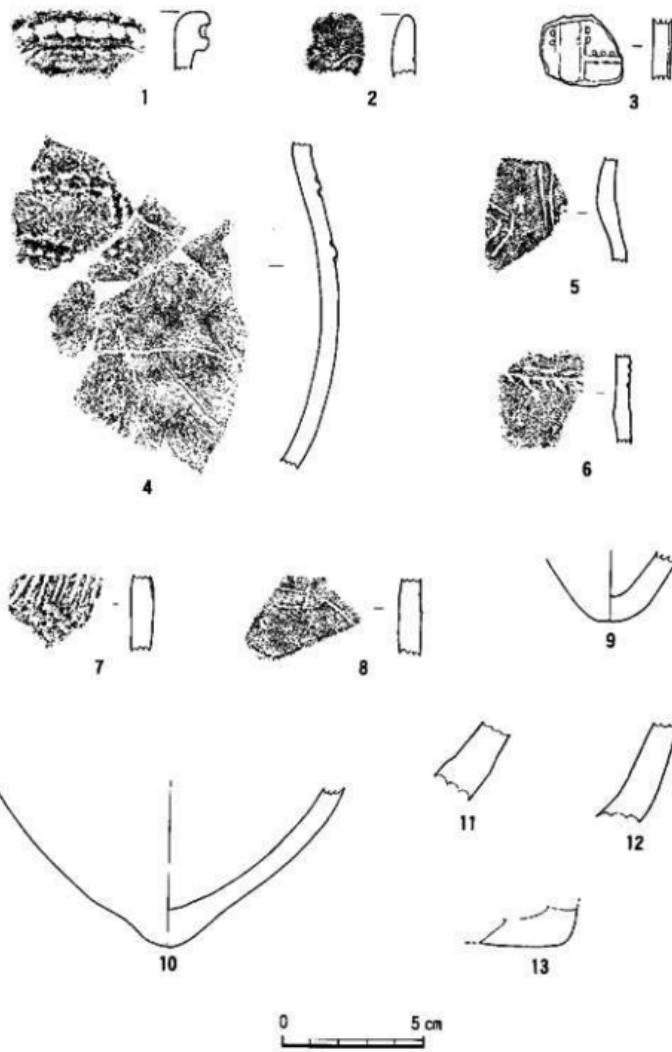


図10 第1号遺構出土土器

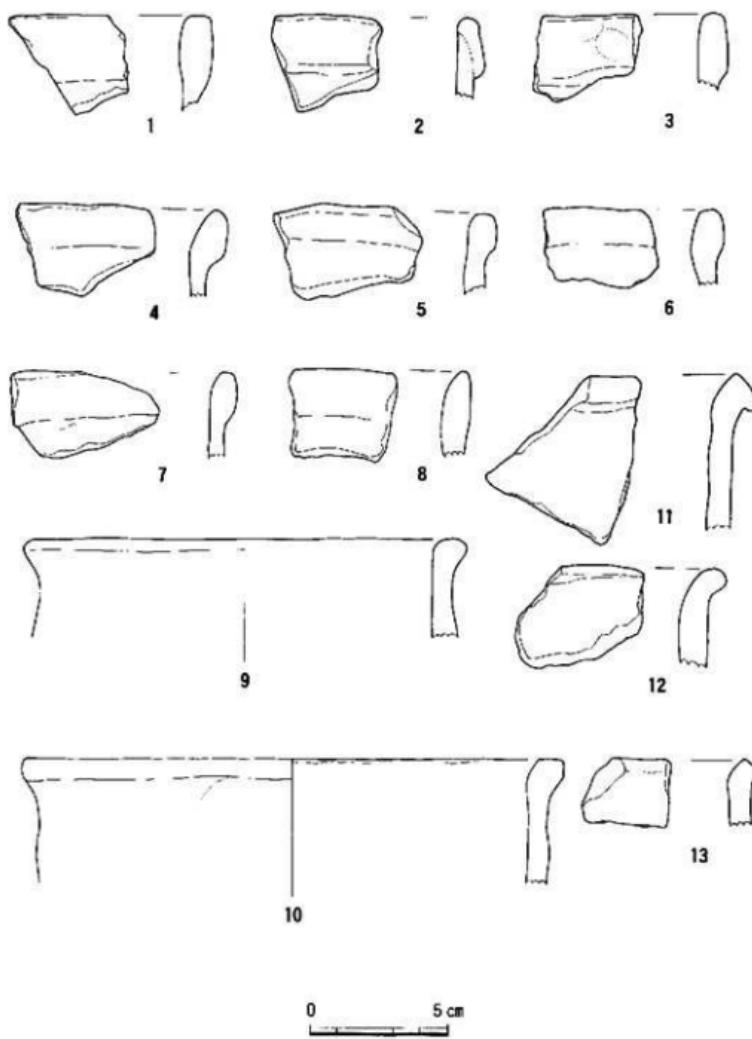


图11 第2号窑出土土器

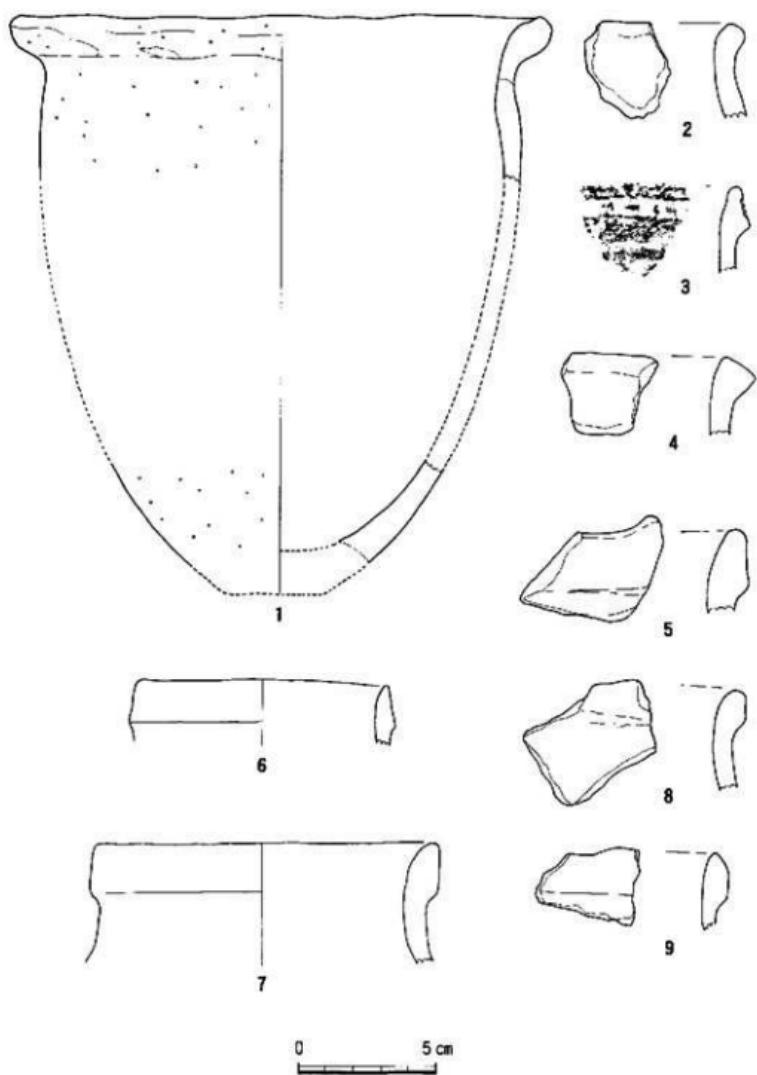


図12 第2号造構出土土器

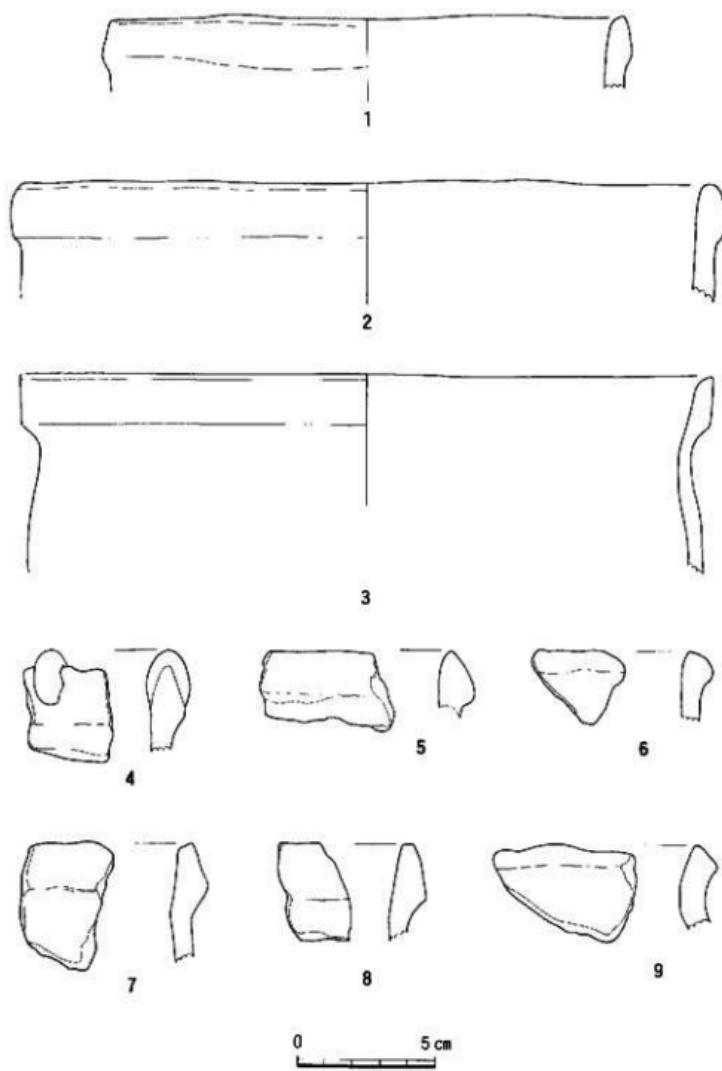


図13 第2号遺構出土土器

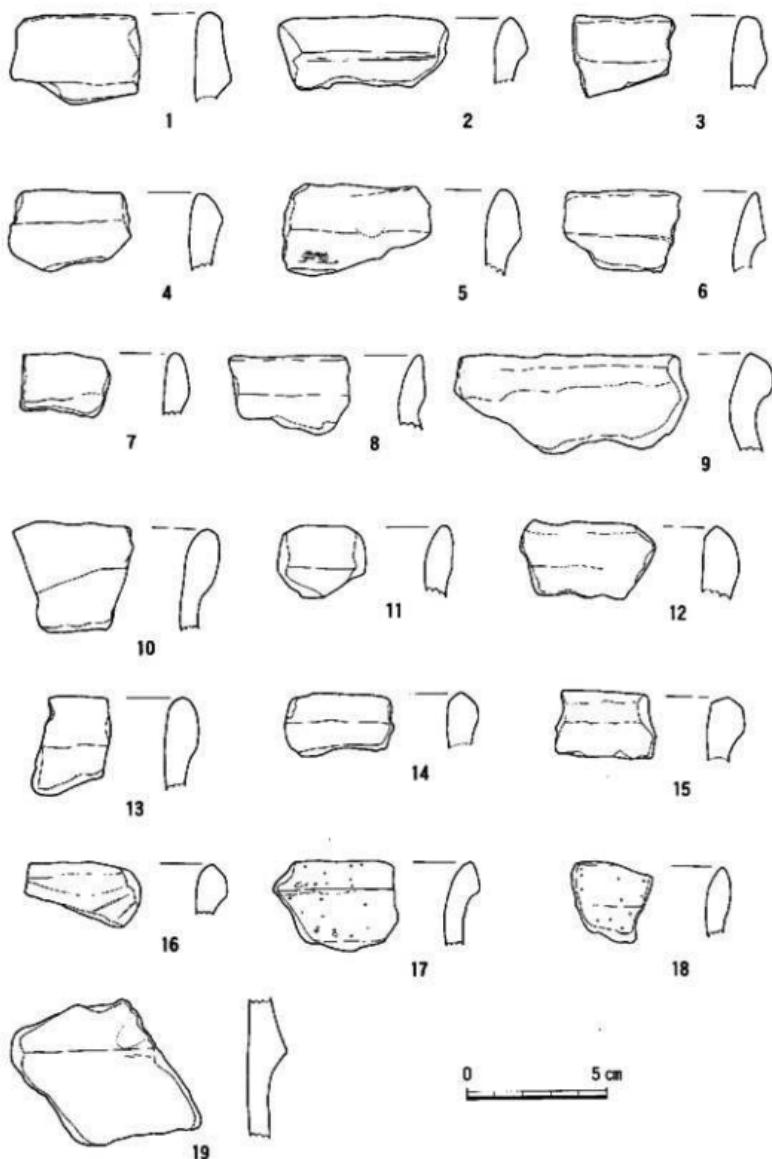


圖14 第2号遺構出土土器

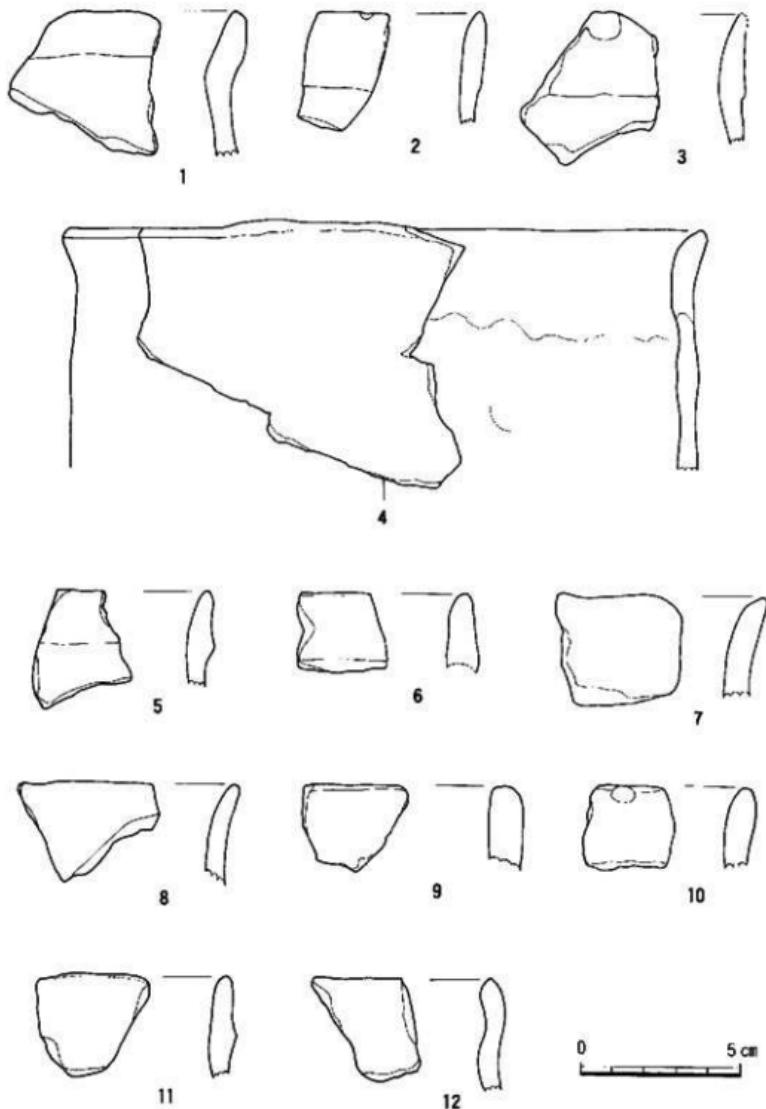


图15 第2号遗构出土土器

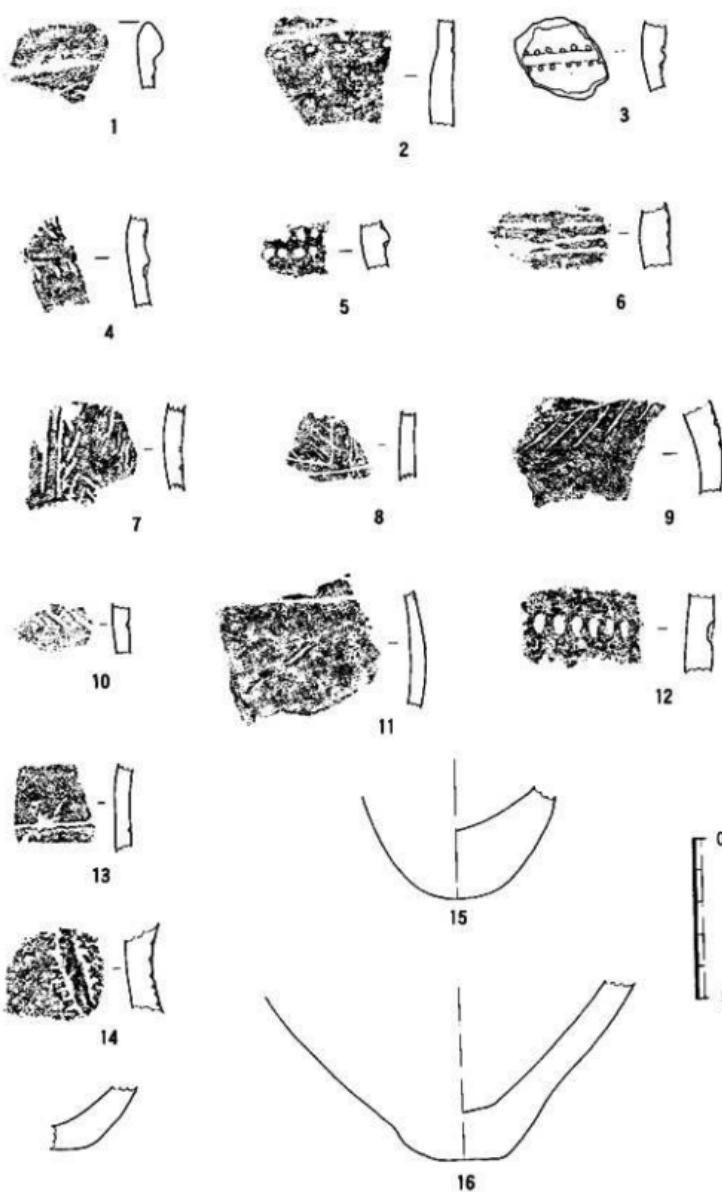


図16 第2号遺構出土土器

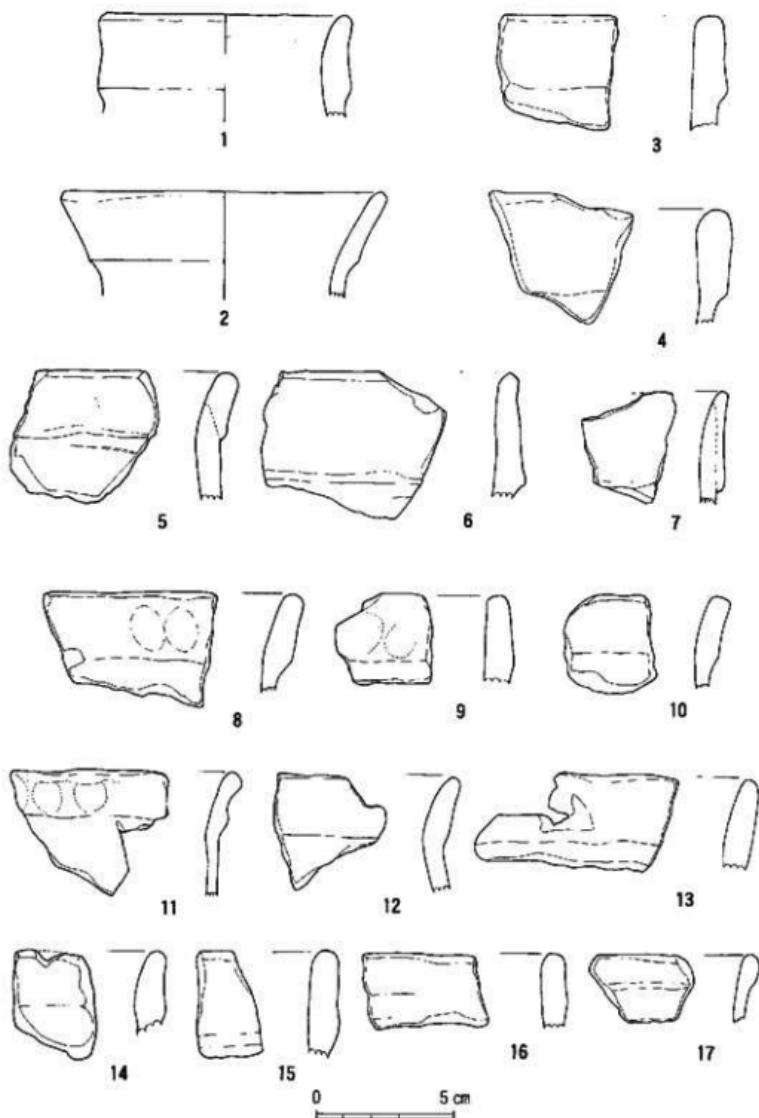


図17 第3層出土土器（カヤウチバンタ式土器）

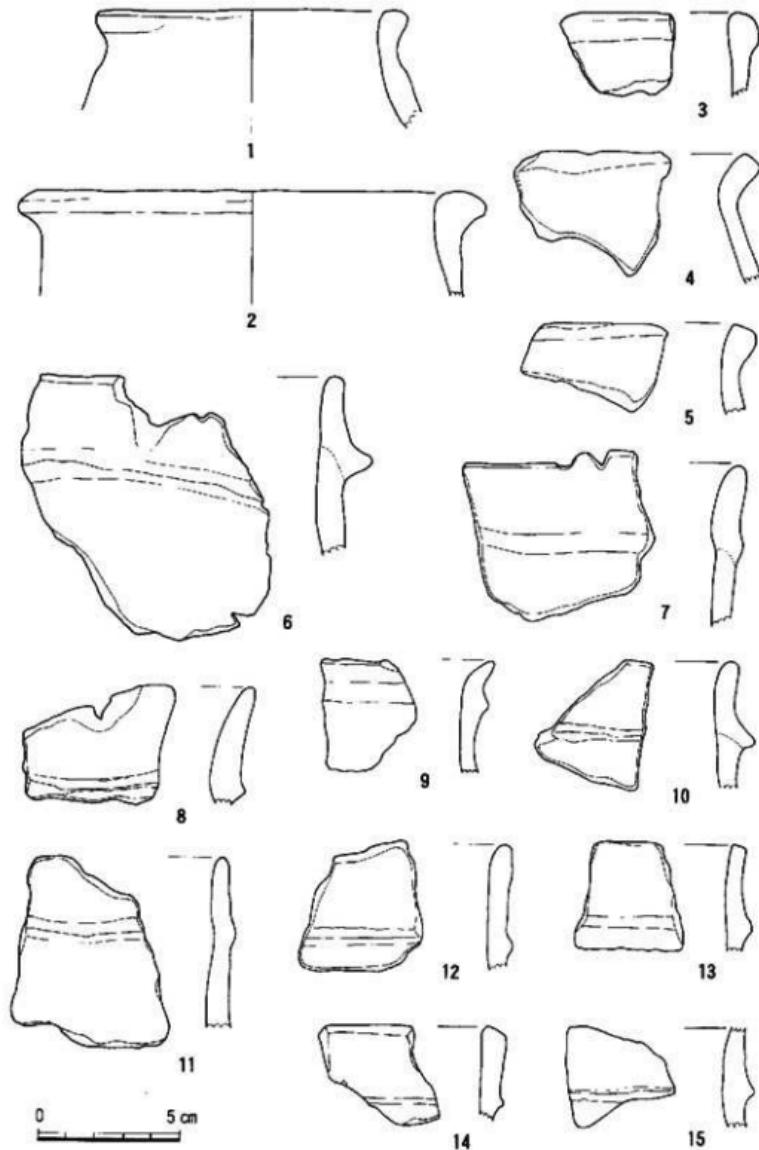


図18 第3層出土土器（室川式・凸蒂文土器）

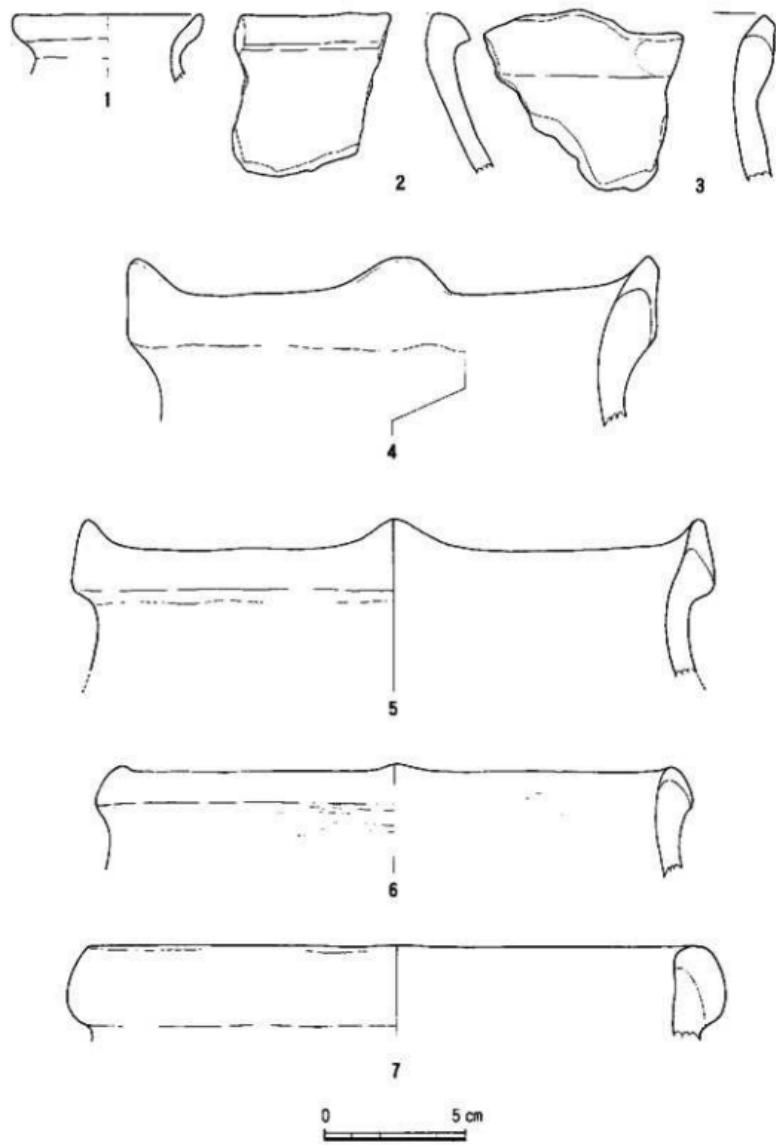


图19 第3层出土土器（李佐浜式土器）

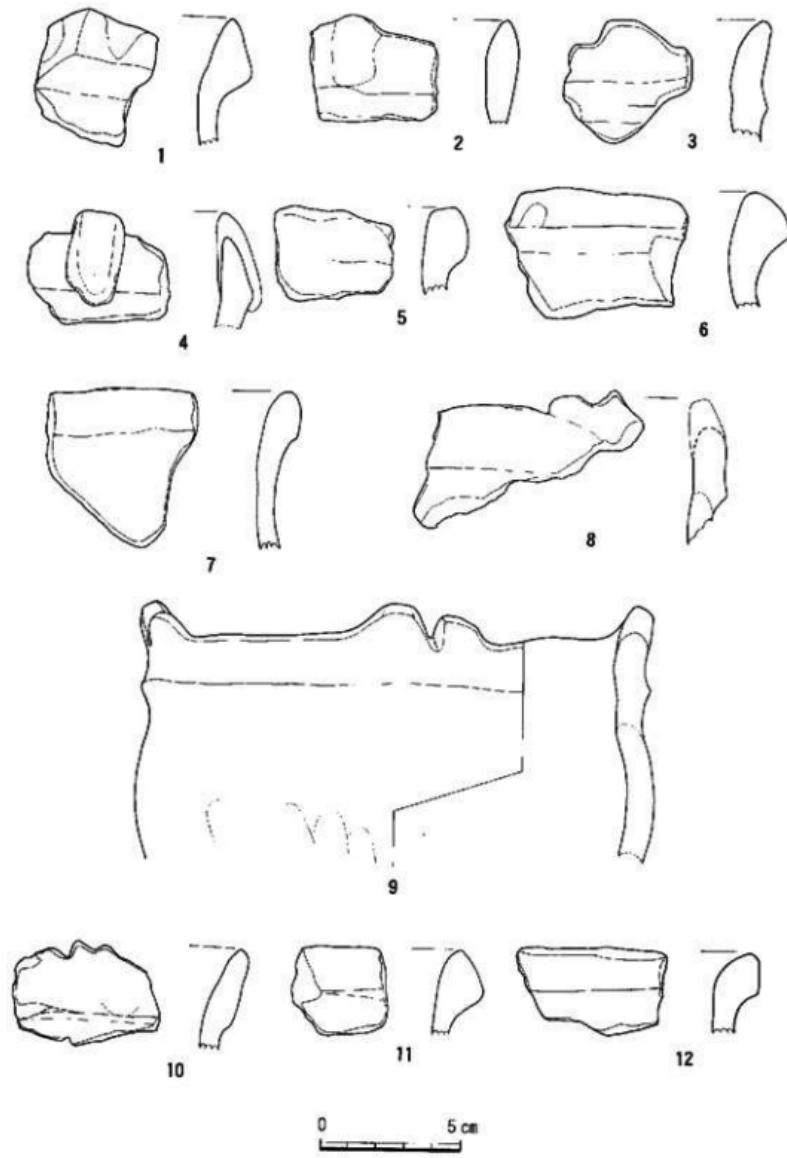


図20 第3層出土土器（宇佐浜式土器）

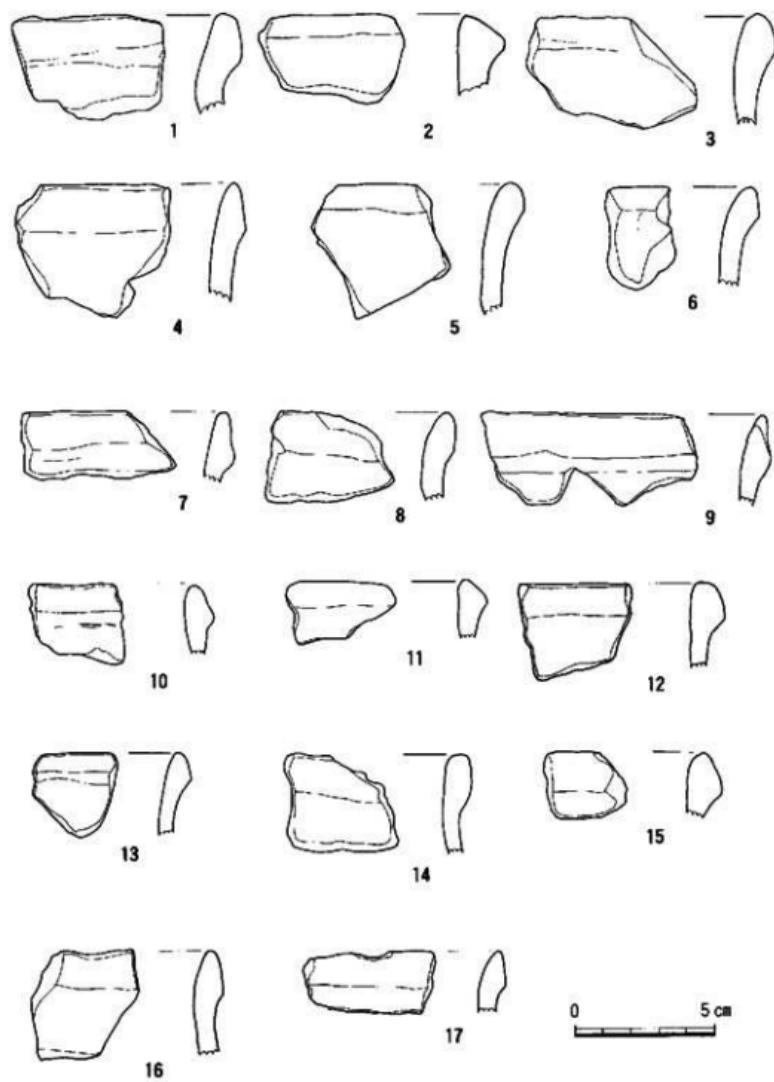


図21 第3層出土土器（宇佐浜式土器）

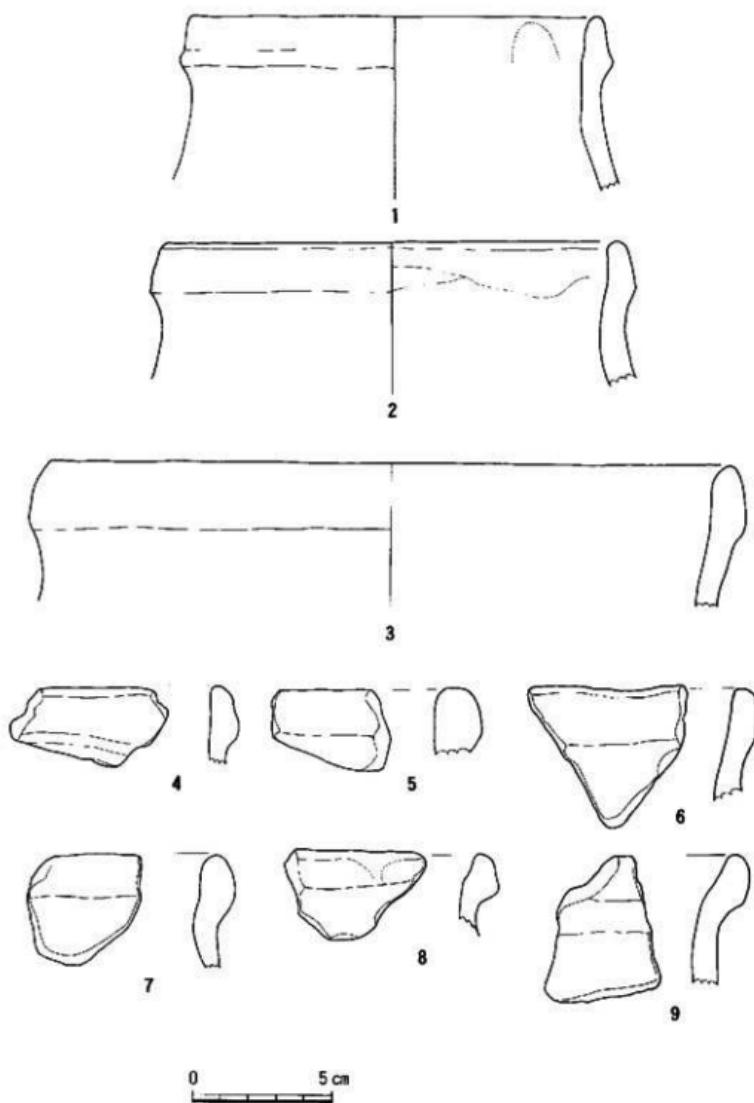
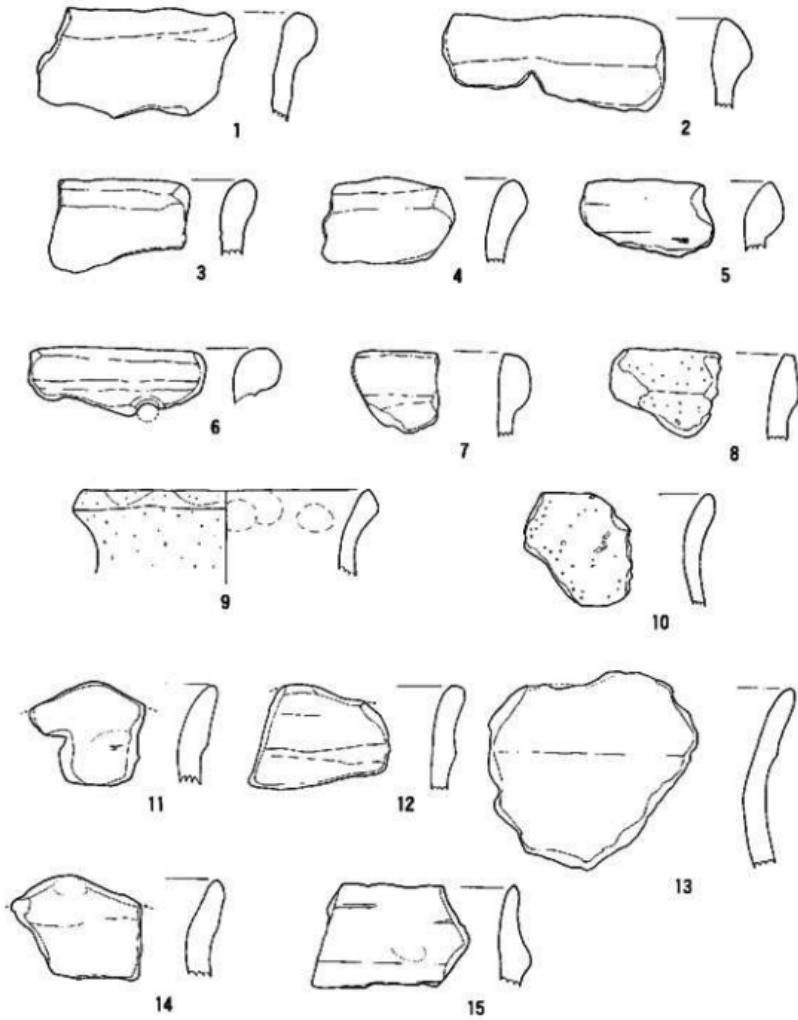


図22 第3層出土土器（宇佐浜式土器）



0 5 cm

図23 第3層出土土器（宇佐浜式・室川上層式・仲原式）

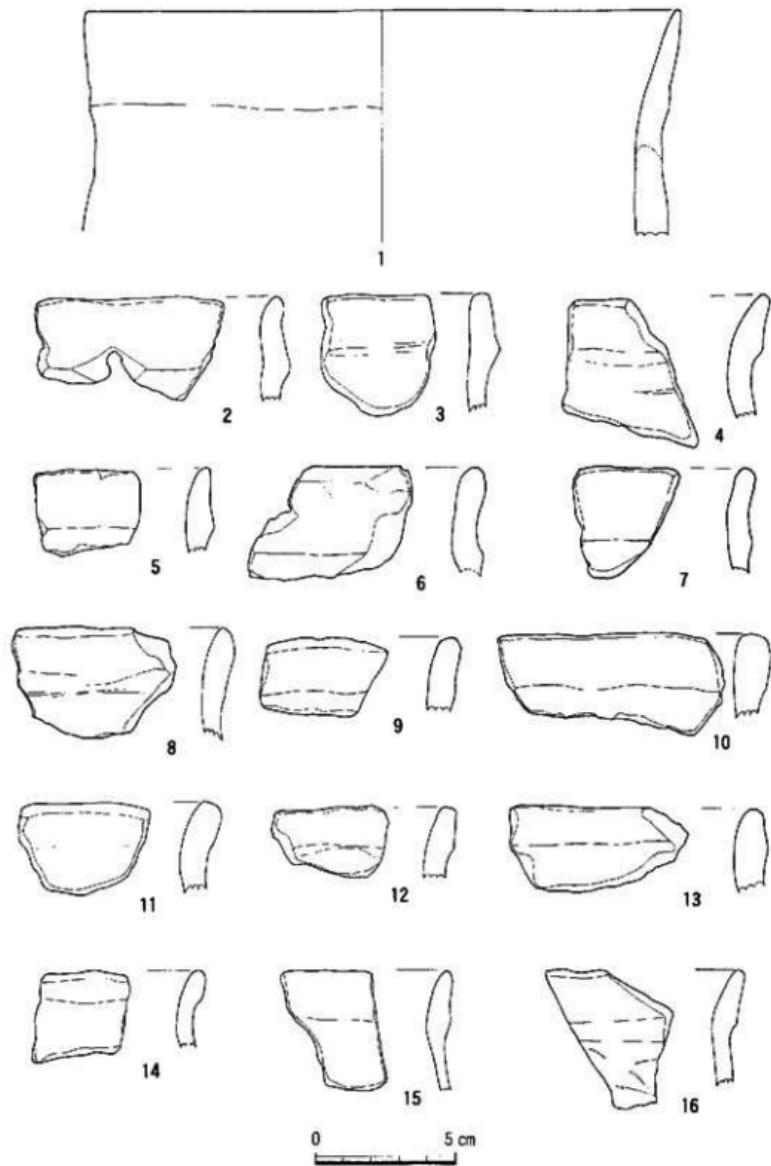


図24 第3層出土土器（仲原式土器）

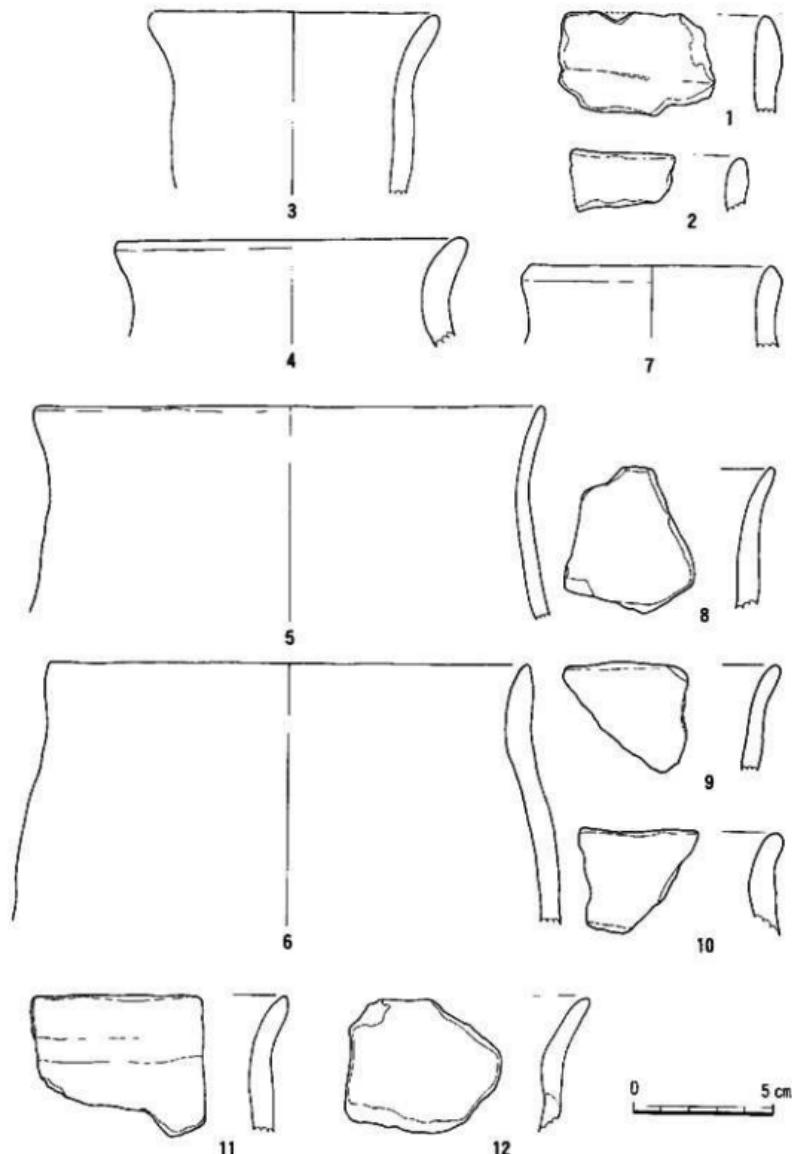


図25 第3層出土土器（非肥厚口縁土器）

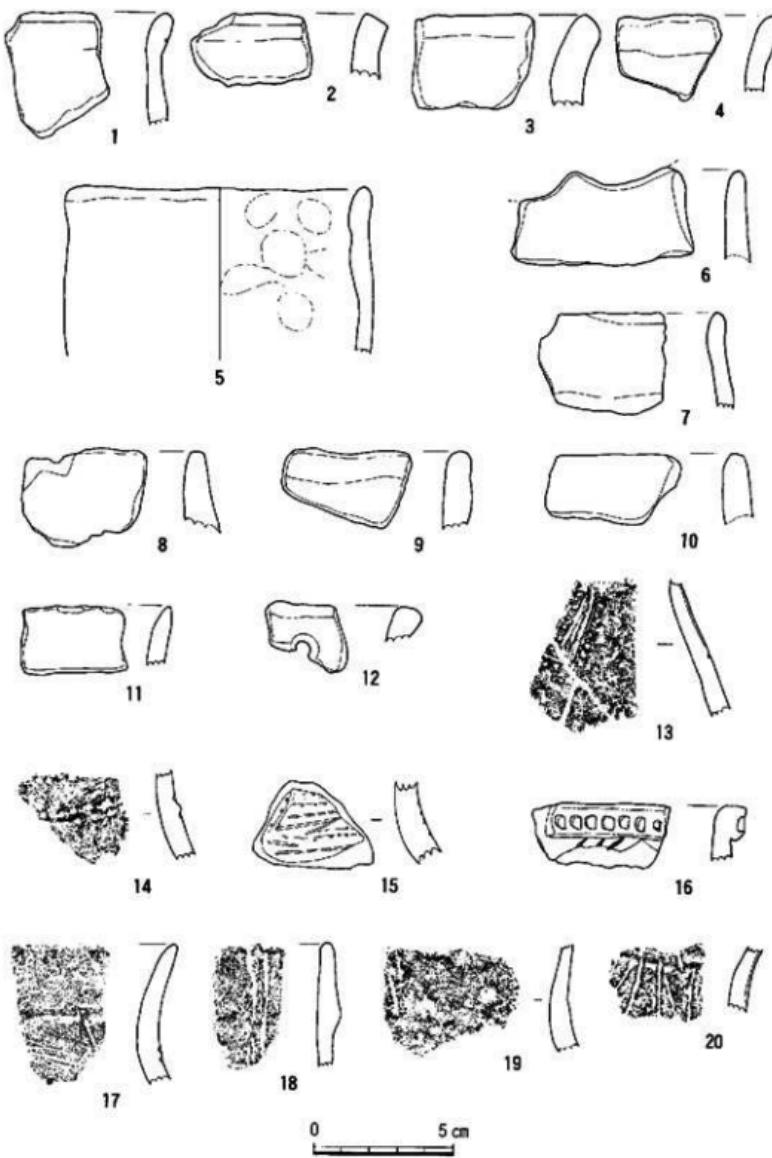


図26 第3層出土土器（非肥厚口縁・喜念I式・その他有文土器）

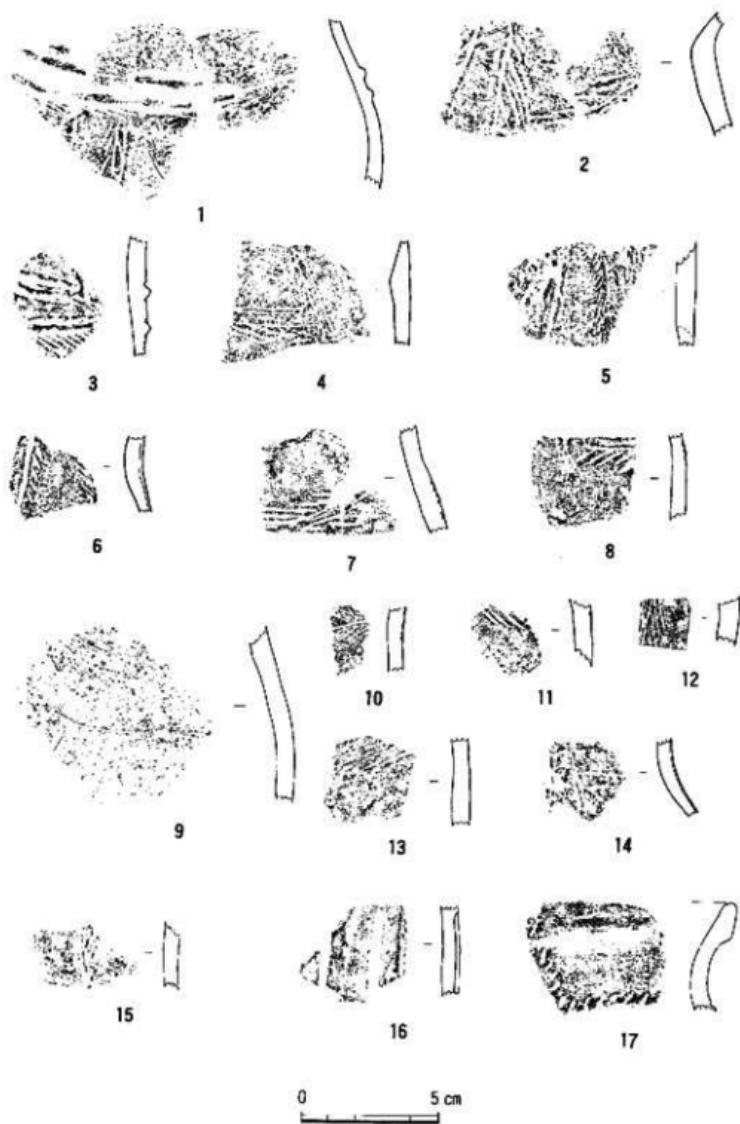


図27 第3層出土土器（その他の有文土器）

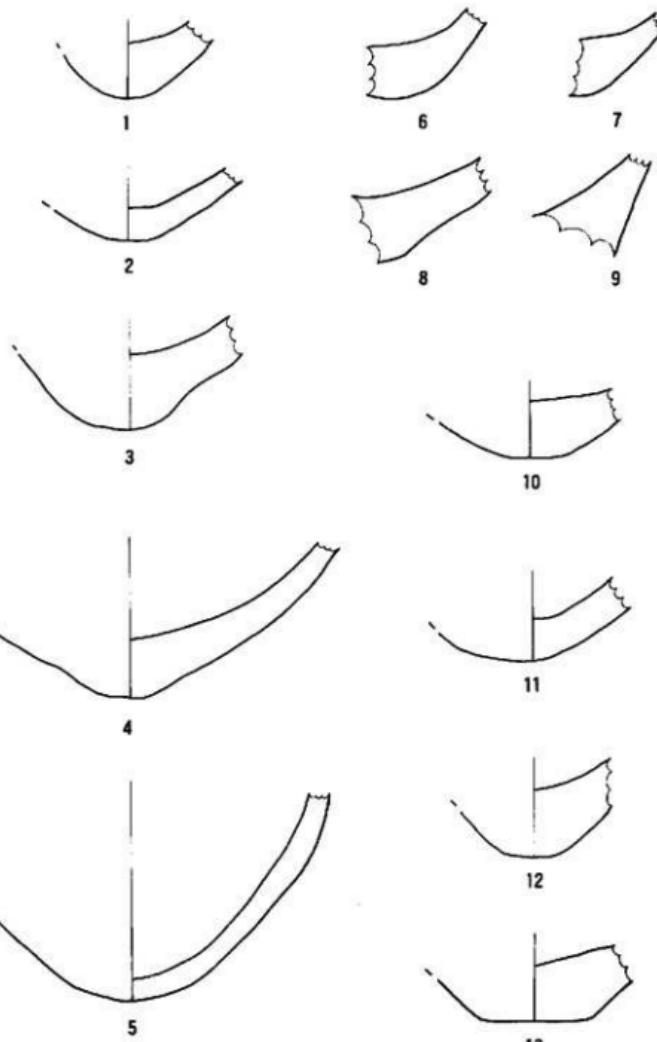


图28 第3层出土土器(底部)

(2) 石器

5次調査においては表面採集資料も含め29点の石器が得られた。その内訳は、石斧・たたき石・すり石・石皿となっている。今回の調査以外にも、畑の耕作や自然の擾乱により地表面に露出した際に採集された石器は多數あるものと思われる。

石斧は2点得られた。その内訳は小型の擦型製品が1点、大型製品が1点となっている。

たたき石は24点得られた。表面採集品3点を含むが、その他のものは全て第3層（遺構内14点含む）からの出土である。

すり石は1点出土、石皿は3点の出土である。以下、その特徴を観察表にして述べることにする。

石器観察一覧(1)

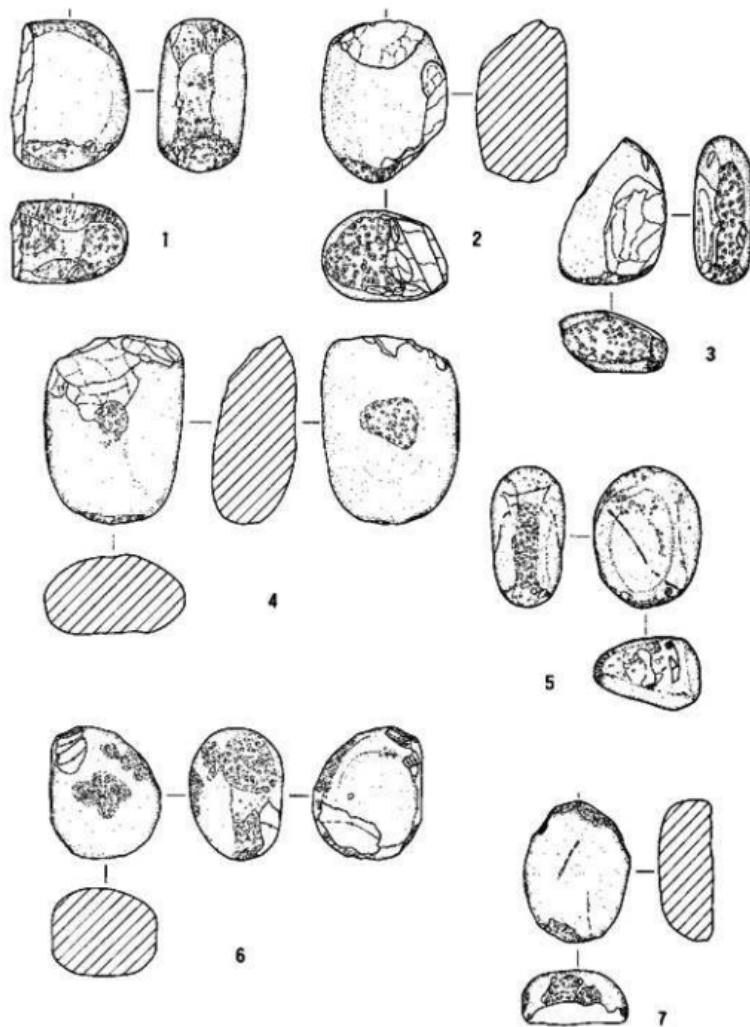
揮岡番号 図版番号	山土地区 出土層位	法量	cm g	器種	石質	観察事項
図29の1 図版28の 1	表面採集	12.7 × 7.4 × 2.7	465g	石 斧	緑色 片岩	完形品。大型で重量感のある両刃石斧である。表面には自然面が残り、もう一片は打削調整後研磨を実施して平坦にしているが、凹面にはそれが及んでいない。側面は一方は打削調整後研磨がなされているが、もう一方は打削調整後は放置されている。刃縁は直行しており刃こぼれも僅かに認められる。
図29の2 図版28の 2	1号遺構	7.0 × 4.6 × 1.8	95g	石 斧	斑柄岩	完形品。小型で擦形状を呈する全面磨製の精巧な製品である。頭部は敲打により少々の潰れが認められる。刃部は使用による刃こぼれは見当らないが、研磨痕が斜め方向に僅かに残存する。
図29の3 図版28の 3	表面採集	7.3 × 5.3 × 3.1	189g	す り 千 枚 石	緑色	頭部は破損。おそらく全面磨製の両刃石斧であったものをすり石に再利用したものであろう。旧刃部は磨耗し、弧状を示す。転用後の敲打痕は認められないが、これは研磨によって磨り消されたものであろう。
図29の4 図版28の 4	2号遺構 覆土	8.5 × 6.2 × 3.5	320g	た た き 石	変 輝 綠 岩	隅丸方形状を呈する製品で、石斧転用品と思われる。重量感のある石材を用いて作られている。表裏・両側面共に研磨面が残存する。たたき石及びすり石としての機能を窺わせる。



图29 石器

石器観察一覧(2)

種別番号 図版番号	出土地区 出土層位	法 量 cm g	器 種	石 質	観察事項
図29の5 図版28の5	表面採集	13.6×5.5 ×4.1 505g	た た き 石	砂 岩	平面形は長楕円状を呈し、原石の形状を留める。表裏・両側面に激しい敲打の際にできた凹みと抉りが明瞭に認められる。又、表裏面では磨面が一部に残存する。
図29の6 図版28の6	1号遺構	11.5×6.4 ×4.1 411g	た た き 石	砂 岩	平面楕円形で偏平な自然縁を使用。表裏面に敲打による凹みがあるが表面は特に著しい。又磨面も一部に認められ、両側面には敲打痕が残存する。
図30の1 図版29の1	表面採集	8.1×6.3 ×4.7 402g	す り 石	砂 岩	いわゆる石輪状を呈する。敲打痕及び研磨面は側面を一周し、敲打と研磨を繰り返し行ったことが窺える。表裏面はほぼ自然のままの状態であろう。
図30の2 図版29の2	1号遺構	8.7×6.8 ×4.9 422g	た た き 石	砂 岩	平面楕円形、重量感のある礫を使用。表裏面共、特に使用痕は認められない。上下側面のみに敲打痕が認められる。7と同様敲打と研磨を繰り返し、特に下端部は激しい敲打の為に相傷している。
図30の3 図版29の3	3層10~ 20cm	7.8×5.8 ×3.2 177g	た た き 石	砂 岩	斜め半分からの破損品である。平面は楕円形で偏平な縁を使用。残された表裏面には研磨の痕が認められる。側面には細かい敲打痕が密集しており、その使用頻度は高かったと思われる。
図30の4 図版29の4	2号遺構	10.1×7.4 ×4.5 507g	た た き 石	砂 岩	平面楕円形の河原石を使用。表裏面及び側面には敲打痕が僅かに残る。磨り石としての使用に供されていたようで、候ながら磨り面が残る。
図30の5 図版29の5	1号遺構	7.6×5.8 ×3.9 236g	た た き 石	砂 岩	原形のままの状態を残すもので、断面が略三角形を呈する。側面の狭い方に敲打痕は集中するが、その他は自然のままに放置される。
図30の6 図版29の6	2号遺構 覆土	7.1×5.9 ×5.1 321g	た た き 石	砂 岩	殆ど原形のままの状態を残す。敲打痕は上下・両側面に留めるが量的には多くない。小粒ながら重感のある製品である。
図30の7 図版29の7	2号遺構 覆土	7.6×5.7 ×2.9 189g	た た き 石	砂 岩	平面楕円形の扁平な河原石を使用。上下に敲打痕が認められ、それによって縁辺部の破損が進んでいる。磨痕も一部に認められる。
図31の1 図版30の1	2号遺構 3層20~ 30cm	10.2×5.8 ×4.7 447g	た た き 石	砂 岩	平面楕円形のやや丸みを帯びた河原石を使用。掌の中にすっぽりとおさまる、適度に重感もある製品である。上下・両側面に僅かに敲打痕が認められる。



0 10cm

図30 石器

石器観察一覧(3)

掲載番号 図版番号	出土地区 出土層位	法 量 cm g	器 種	石 質	観察事項
図31の2 図版30の2	1号遺構	17.5×13.5 × 7.4 2,910g	た た き 石	砂 岩	大型の楕円礫をそのまま使用。上下端及び両側面に敲打痕が認められる。また、側面には敲打後の磨り面も残る。
図31の3 図版30の3	3層40～ 50cm	8.8×9.0 × 1.3 155g	た た き 石	砂 岩	扁平で円形の円盤状を呈する。全体に磨耗しておらず自然の状態を示す。周縁の3か所に打削の痕が残る。
図31の4 図版30の4	2号遺構	7.7×9.5 × 4.2 330g	た た き 石	砂 岩	中央部付近で半分に折れている。扁平な河原石をそのまま使用。下端に僅かな敲打痕が認められる。
図31の5 図版30の5	2号遺構 (床着)	8.1×8.8 × 5.3 508g	た た き 石	砂 岩	4と同じく、中央付近でおれています。やや重厚な礫を用いているが、使用痕は下端のみに集中、他面におよばない。
図32の1 図版31の1	1号遺構	35.7×15.6 × 8.4 5,200g		石 砂 皿	凹みの中央付近で破損しているが、原形は略椭円形を呈していたと考えられ、なだらかで浅い凹みを持つ。その中央付近には直径7mm～1cm、深さ3～6mm程の円形の窪みがほぼ2列に並んで11個認められるが、破損部分も含めると更にその数は増えるものと思われる。窪みの持つ意味は不明。
図32の2 図版31の2	1号遺構	8.9×13.6 × 7.3 1,155g	石 英 斑 岩	石 英 斑 岩	中央部により近い破損品である。凹みは深く使用頻度も高いものであったろう。一側面には手なれによる磨耗が認められる。他の面は自然のまま放置される。
図32の3 図版31の3	3層10～ 20cm	15.3×8.5 × 5.6 615g	石 英 斑 岩	石 英 斑 岩	破損品である。磨り面は一面のみで、凹みは浅い。使用の痕跡もさほどではなく、石皿の中央部分より端の部分に近い箇所かと思われる。

以上今回出土した石器について概観してきたが、一般的に言えることは研磨や敲打に使用された磨石やたたき石が多いことである。石皿の出土とともに、このことは粉食を示す恰好の材料となろう。

石質としては石斧が緑色片岩・斑紋岩とやはり硬質の素材を使川、敲打器は砂岩が圧倒的である。砂岩は遺跡一帯で比較的容易に採集できる石材である。近くの河原で適当な石を拾い、そのまま敲打器として使用されたものであろう。

遺溝内より出土した石器は全体の19点中12点と約6割を占める。おそらく大半の遺物が遺溝中に埋蔵していたのが、自然の作用により擾乱を受けたものであろう。

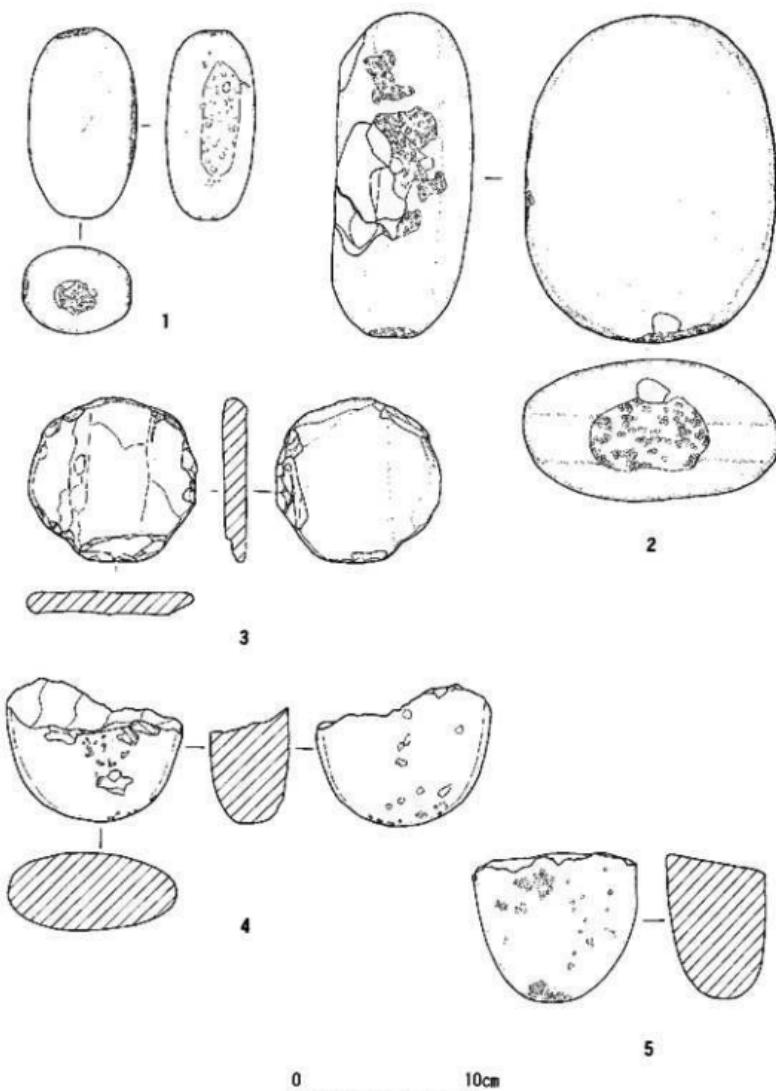
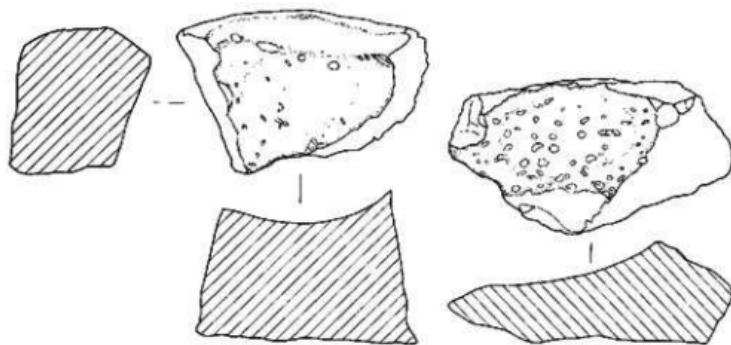
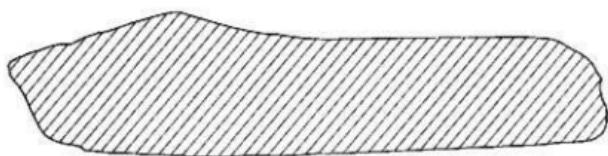
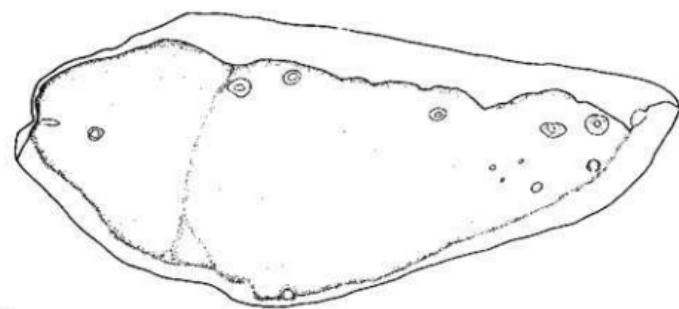


図31 石器



0 10cm

図32 石器

第Ⅳ章 ま と め

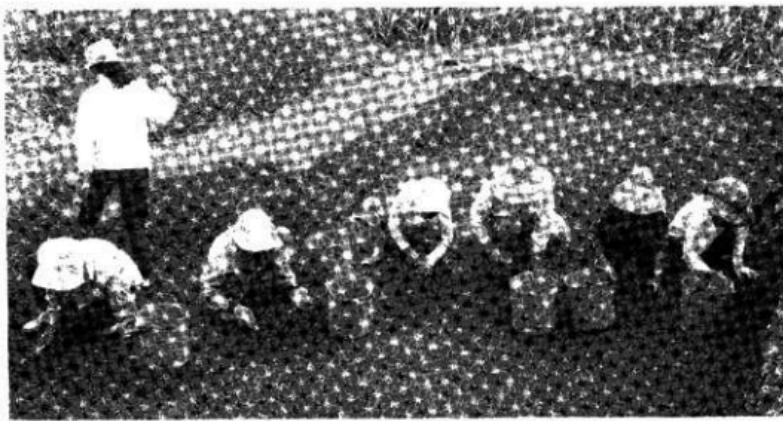
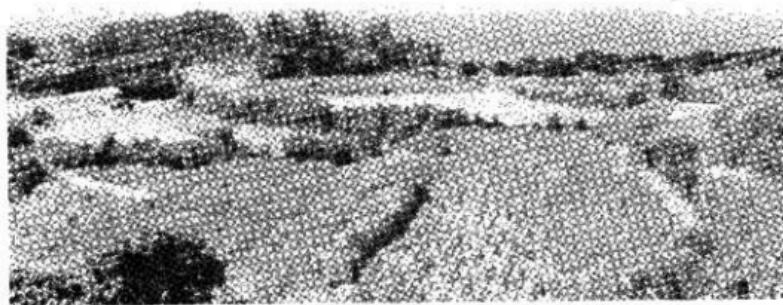
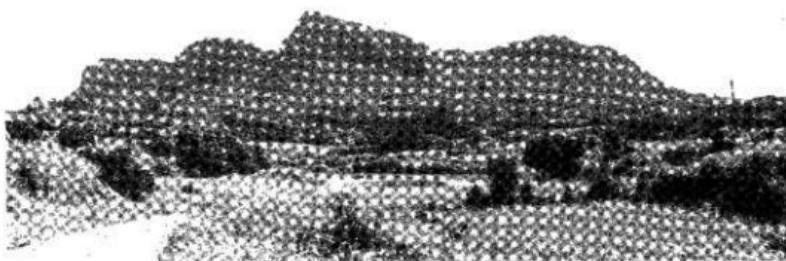
以上、今回の範囲確認調査によって、本遺跡から出土した遺構・遺物についてその概略を述べてきたわけであるが、ここで若干の所見を記したい。

遺構として確認できたのは2基である。いずれも隅丸方形状の石組遺構と思われるが、形状の把握ができたのは1基のみで、他の1基は遺構自体の掘り込みラインも確認できなかった。自然の風雨による土砂の流れ込みによる攪乱と思われる。遺跡の立地が傾斜する台地上の一角にあるため、その被害を被ったものであろう。

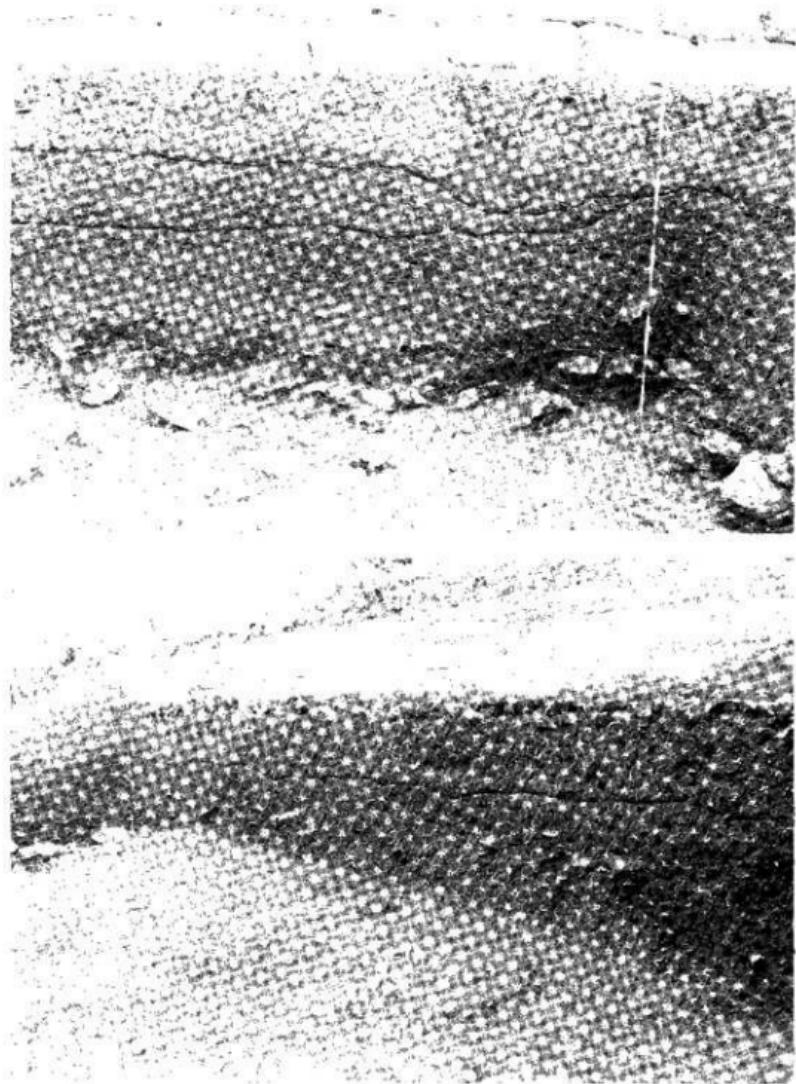
出土する遺物は、本遺跡が標識遺跡ともなっている宇佐浜式土器を主体とする。無文化のすんだ、口縁部の肥厚する一連の土器である。また、仲原式土器の共伴も目立つ存在である。仲原式土器は、一~四次の調査時の資料中にはそれ程の割合を占めるものではない。今回の調査において注目されるのは、前述の宇佐浜式土器にどのような時期差をもうけ得るかという点である。しかし、残念ながら、今回の調査では、包含層は一枚確認されたのみであり、層位的に上器型式の変遷はたどれずに終わった。今後の資料の追加を待ちたい。

宇佐浜遺跡は、南島先史時代における縄文から弥生時代の転換期の様相を示す代表的な遺跡である重要性から、1972年5月15日、本土復帰にともない国の史跡に指定された。しかし、その所在する国頭村辺戸区一帯には、大規模な土地改良事業が今後も展開されることになっている。遺跡の範囲を明確にし、埋蔵文化財の周知徹底をはかることが、即ち保存につながるという意図で、今回本報告をするものである。

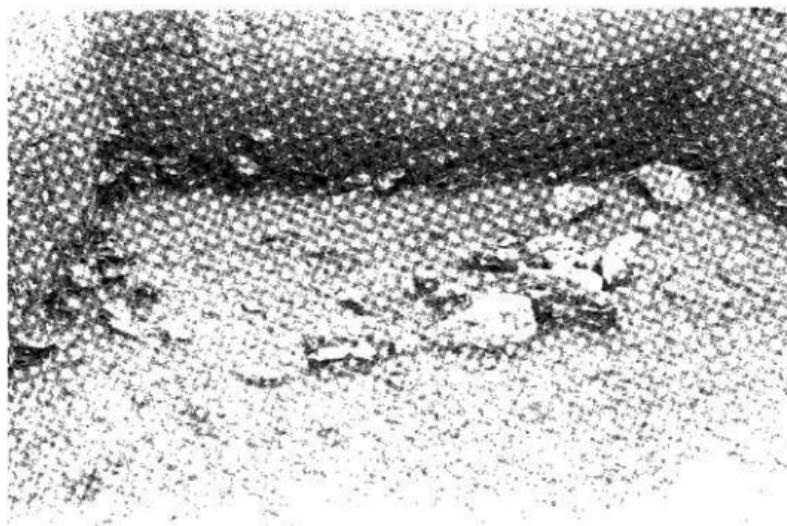
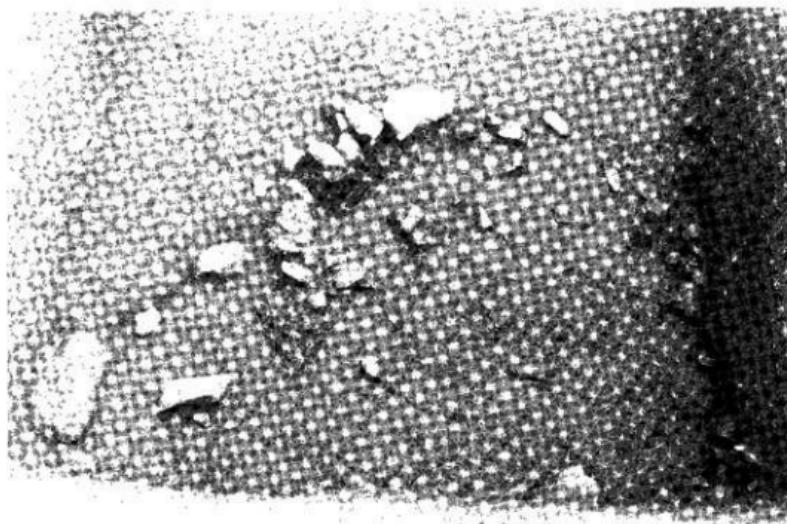
図 版



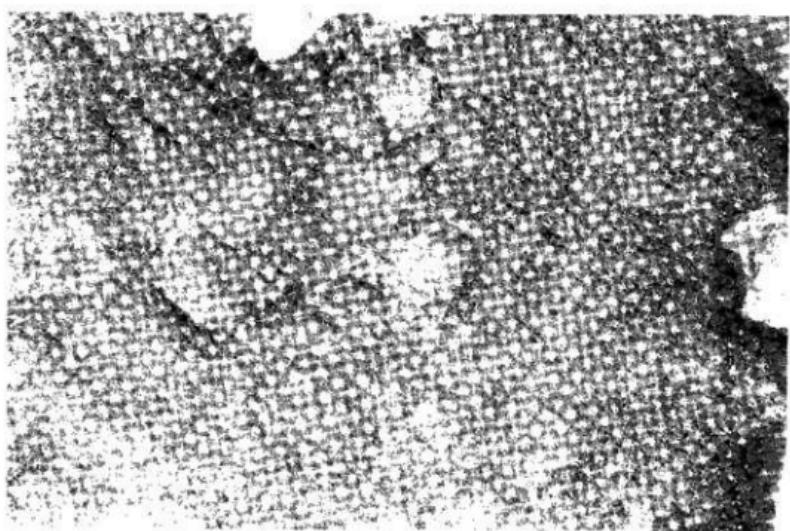
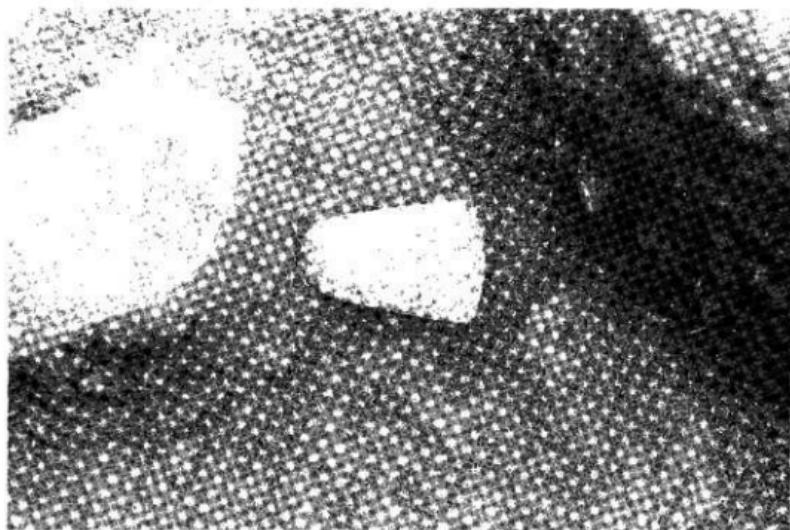
図版1 上：道跡から安須森を望む 中：道跡近景（南側から） 下：発掘状況



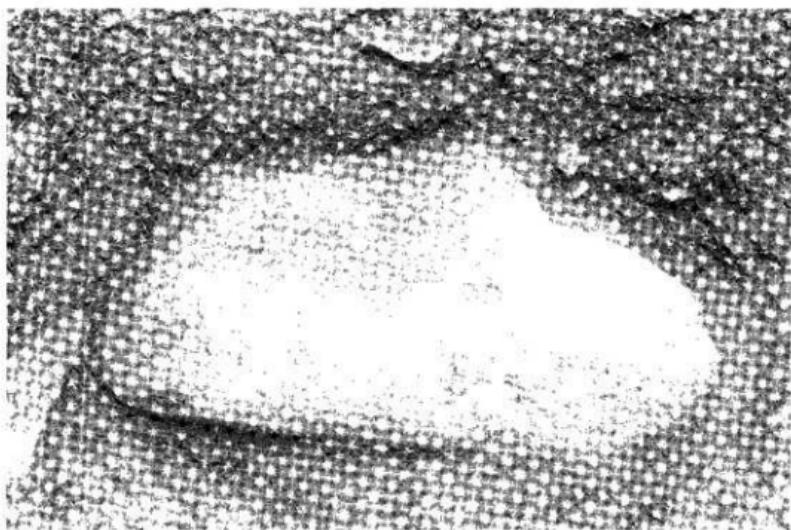
図版2 層序（上：東壁、下：西壁）



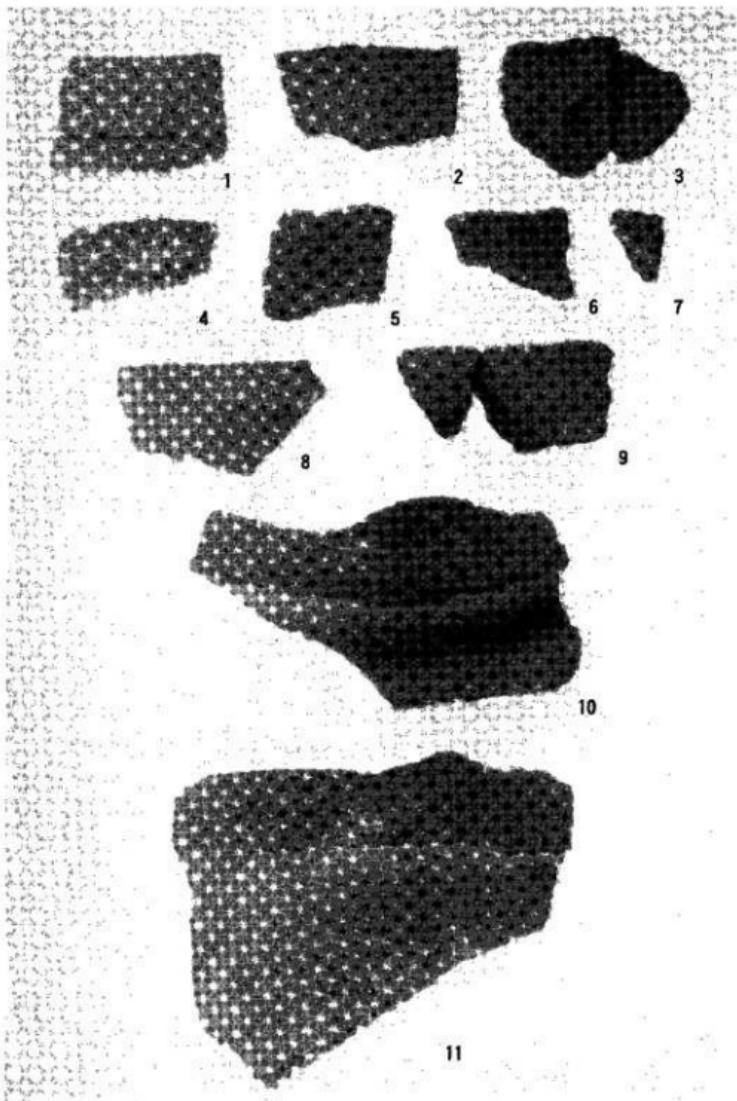
図版3 石組み遺構の検出状況



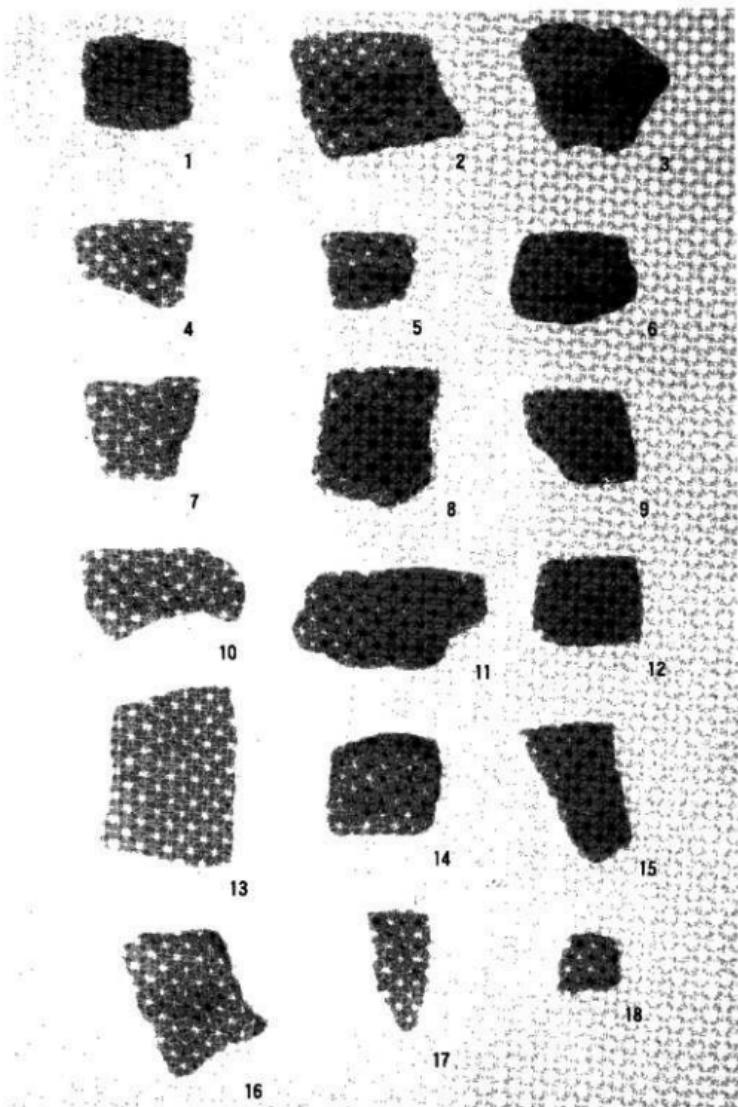
図版4 遺物の出土状況（上：石斧、下：土器と獸骨）



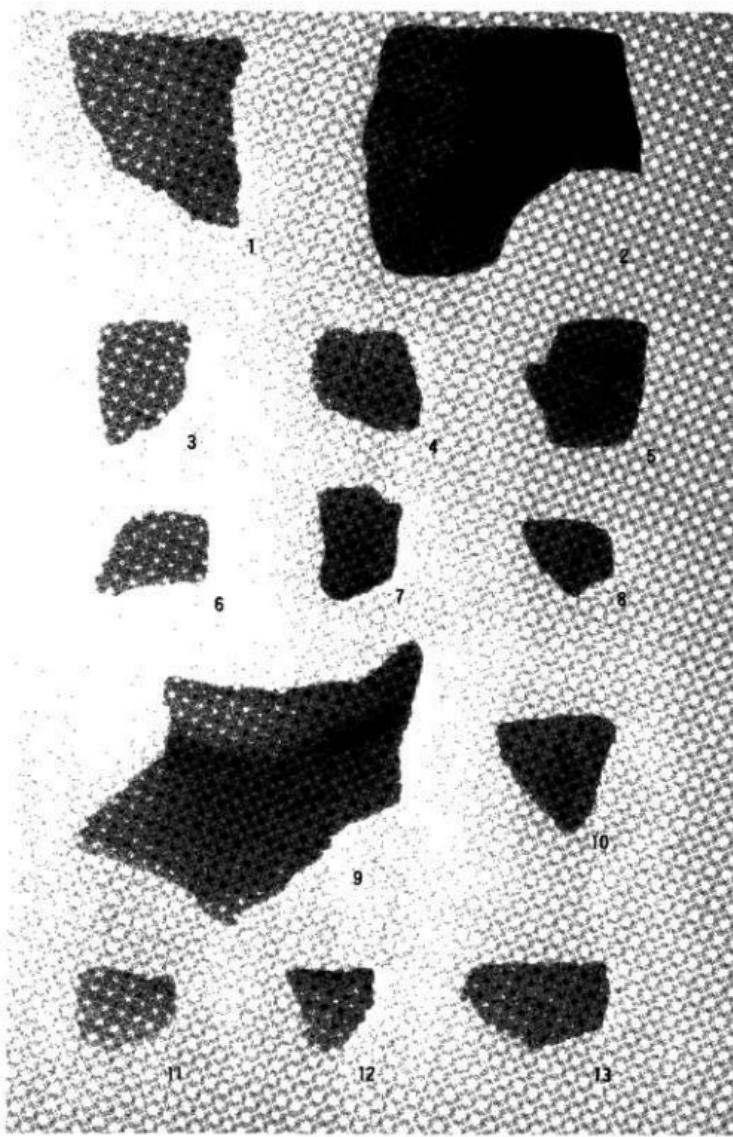
図版5 石皿の出土状況



図版6 第1号遺構出土土器



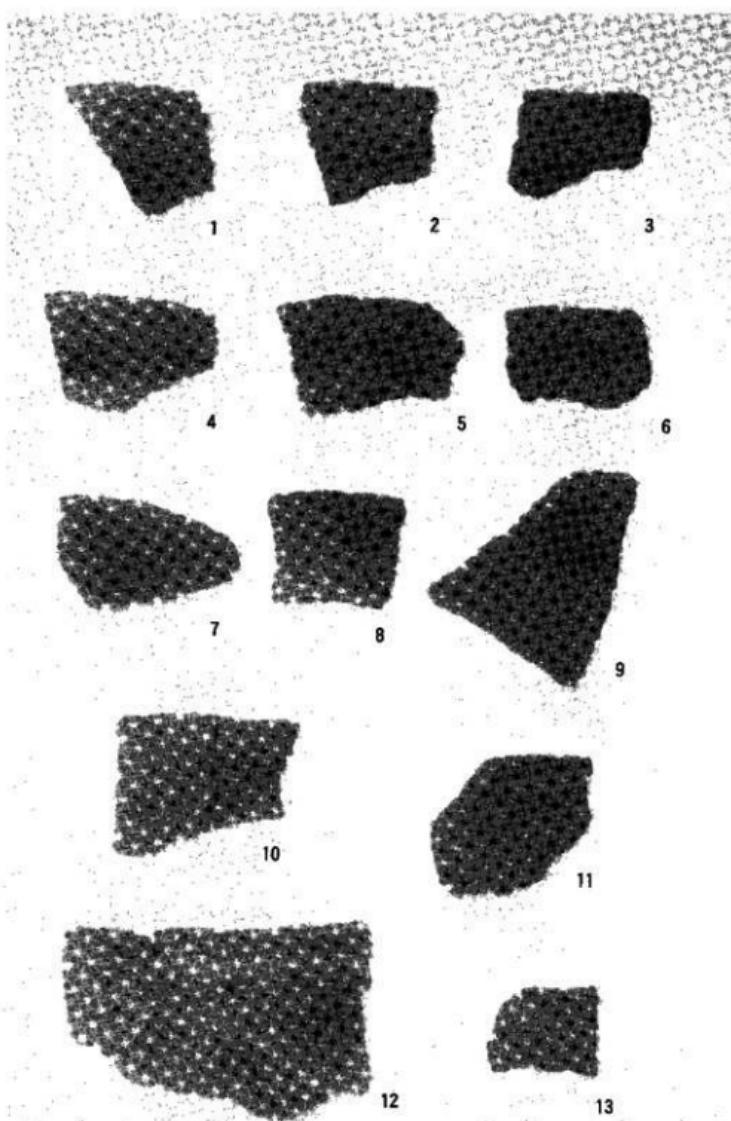
图版7 第1号遗構出土土器



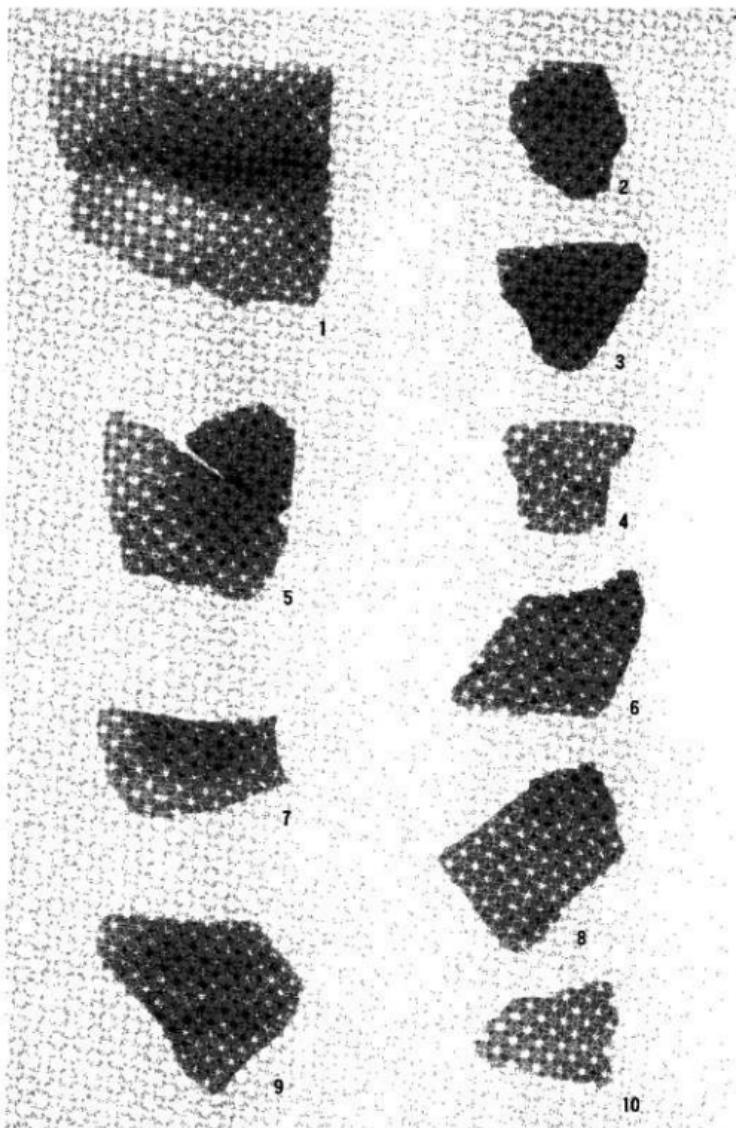
図版 8 第 1 号遺構出土土器



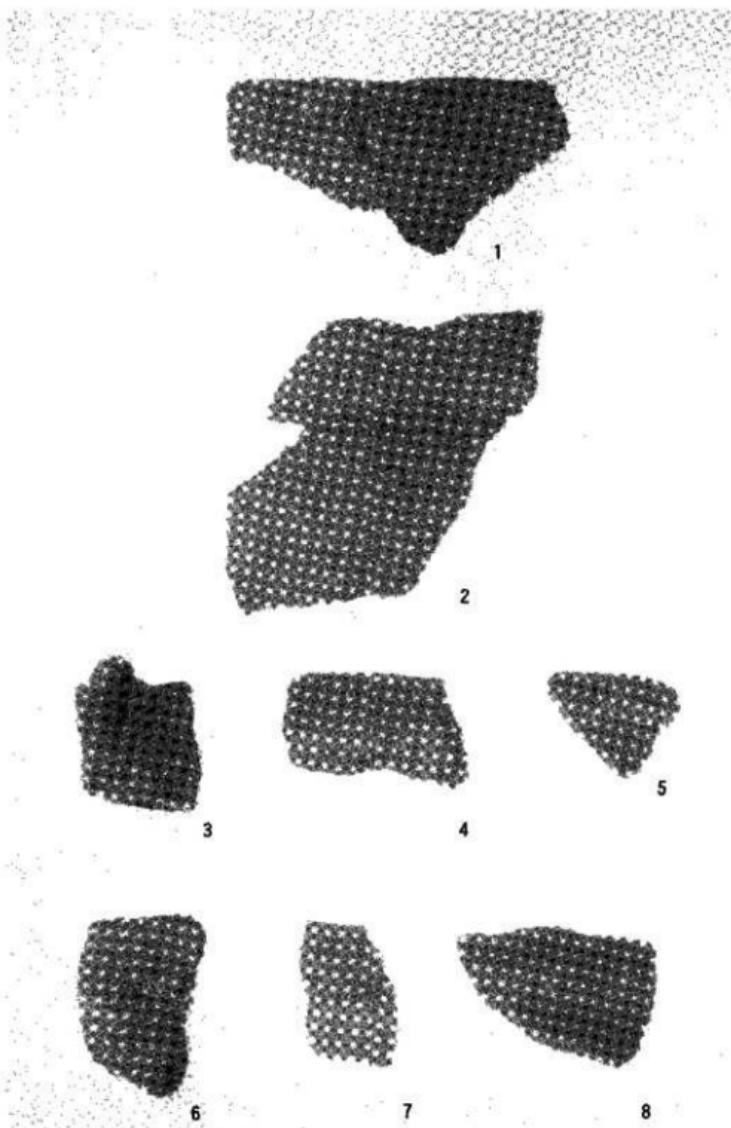
图版 9 第1号遗构出土土器



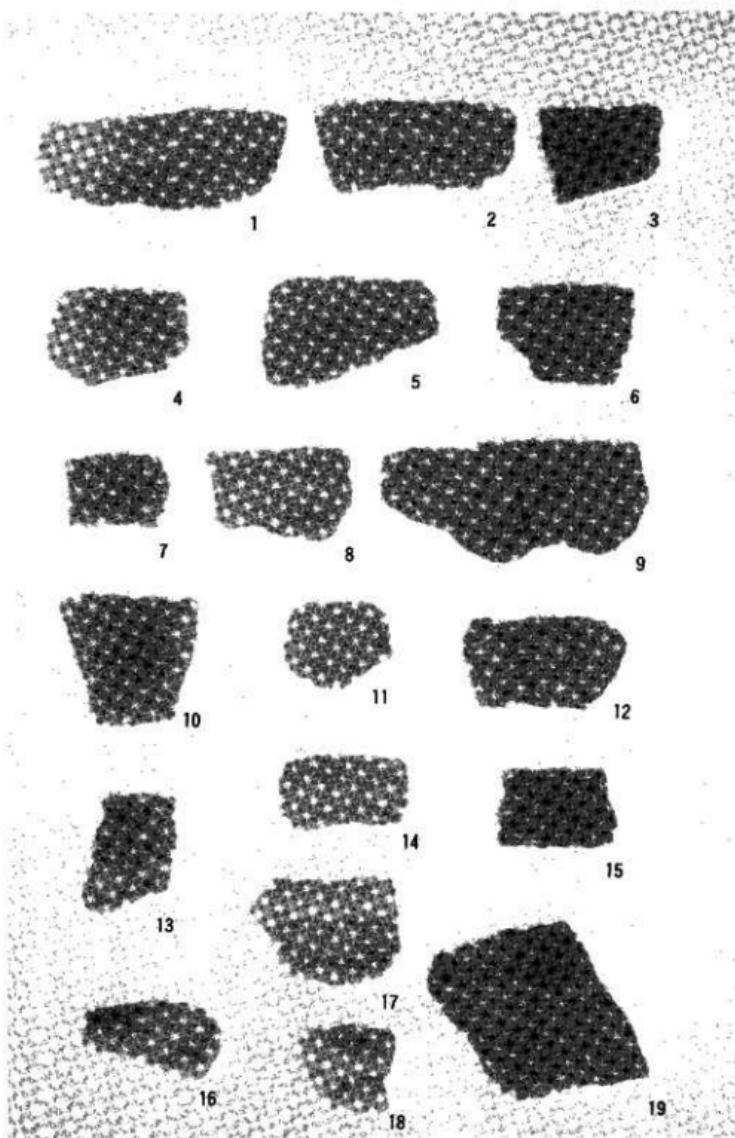
図版10 第2号遺構出土土器



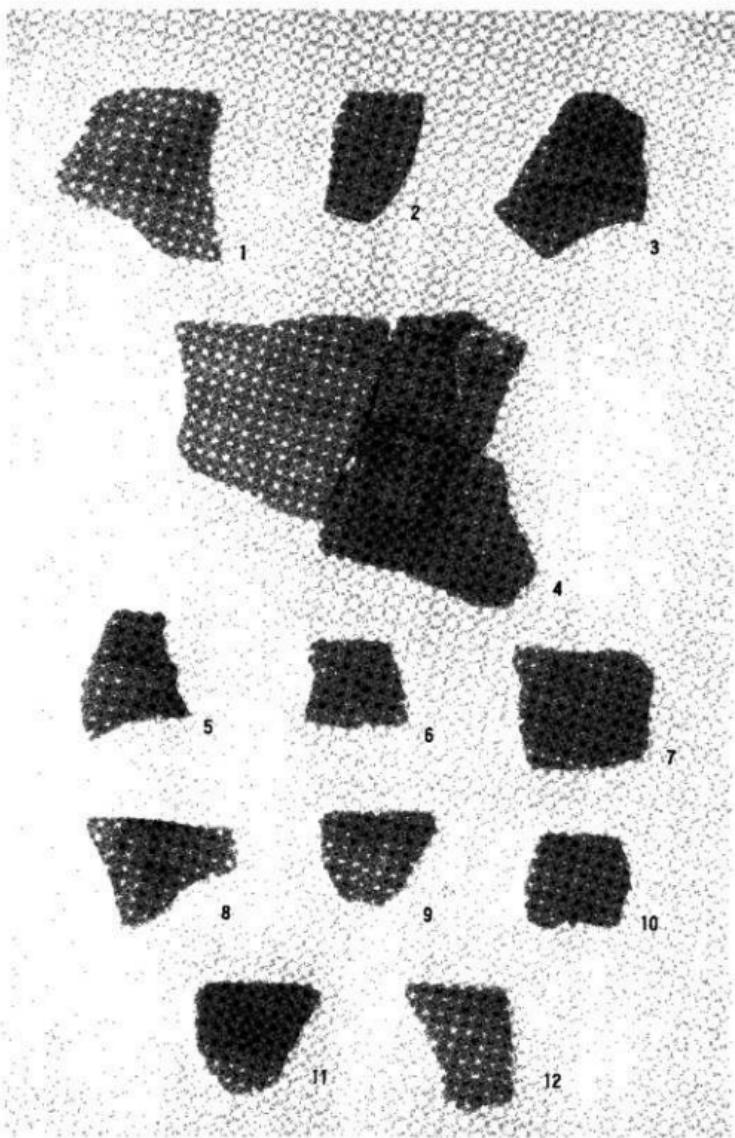
图版11 第2号遗構出土土器



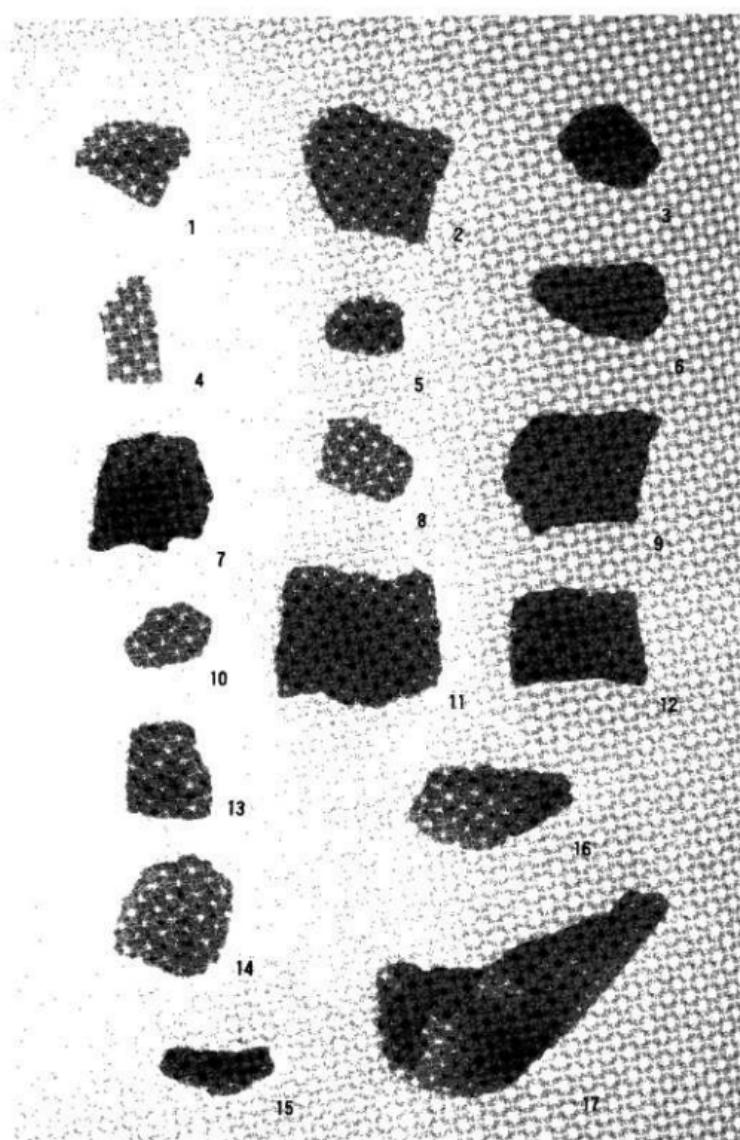
図版12 第2号遺構出土土器



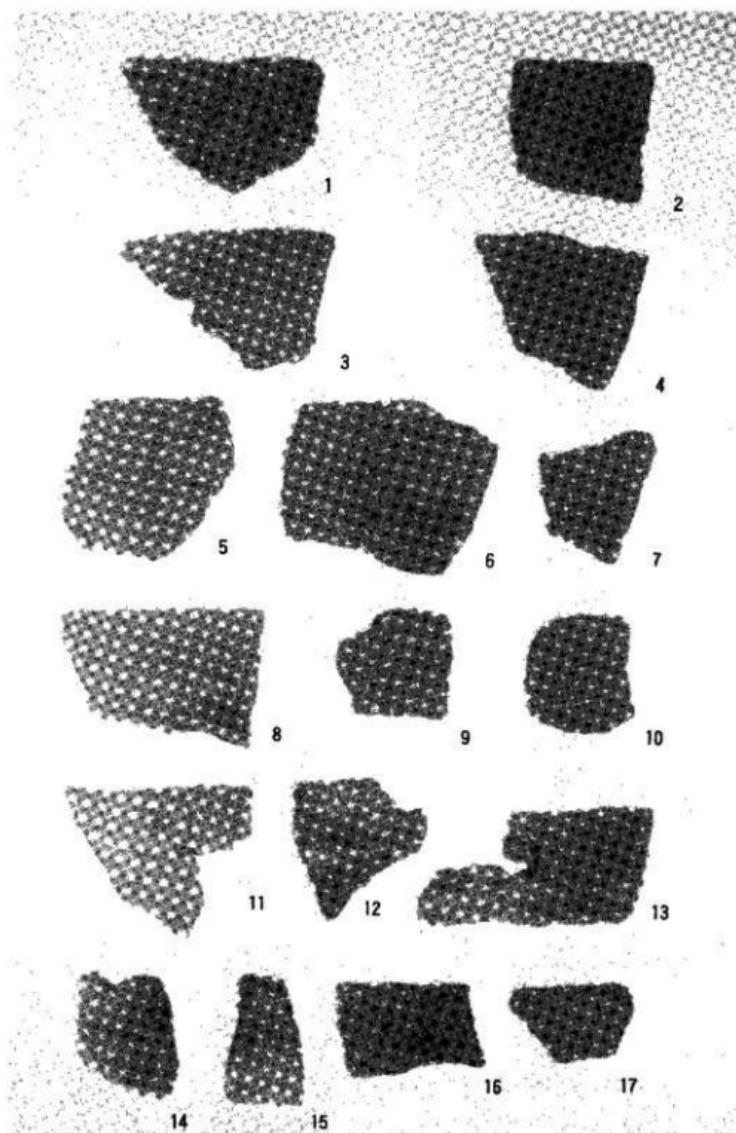
图版13 第2号遗構出土土器



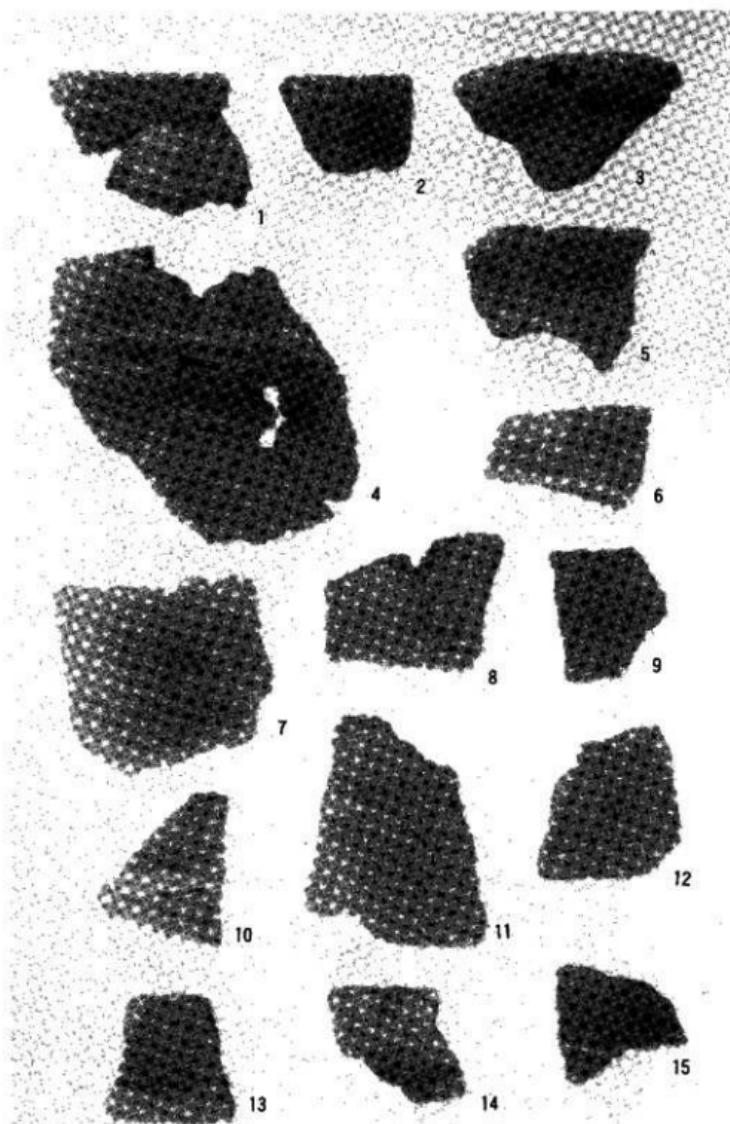
图版14 第2号造構出土土器



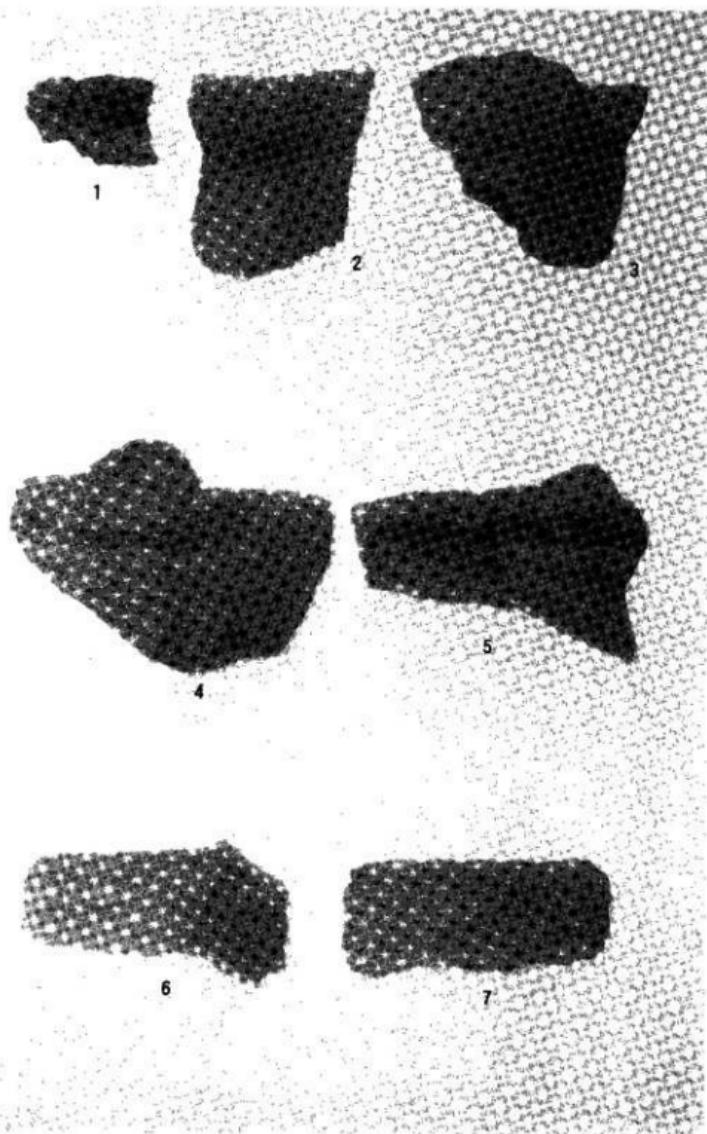
图版15 第2号遗物出土土器



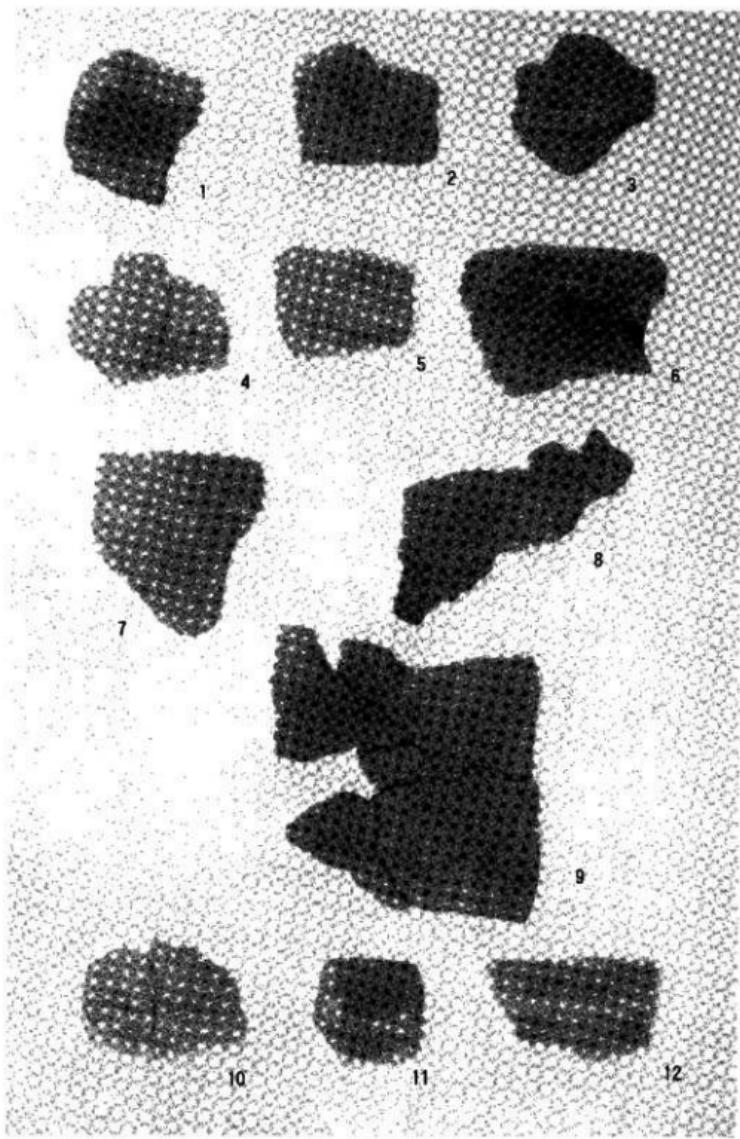
図版16 第3層出土土器



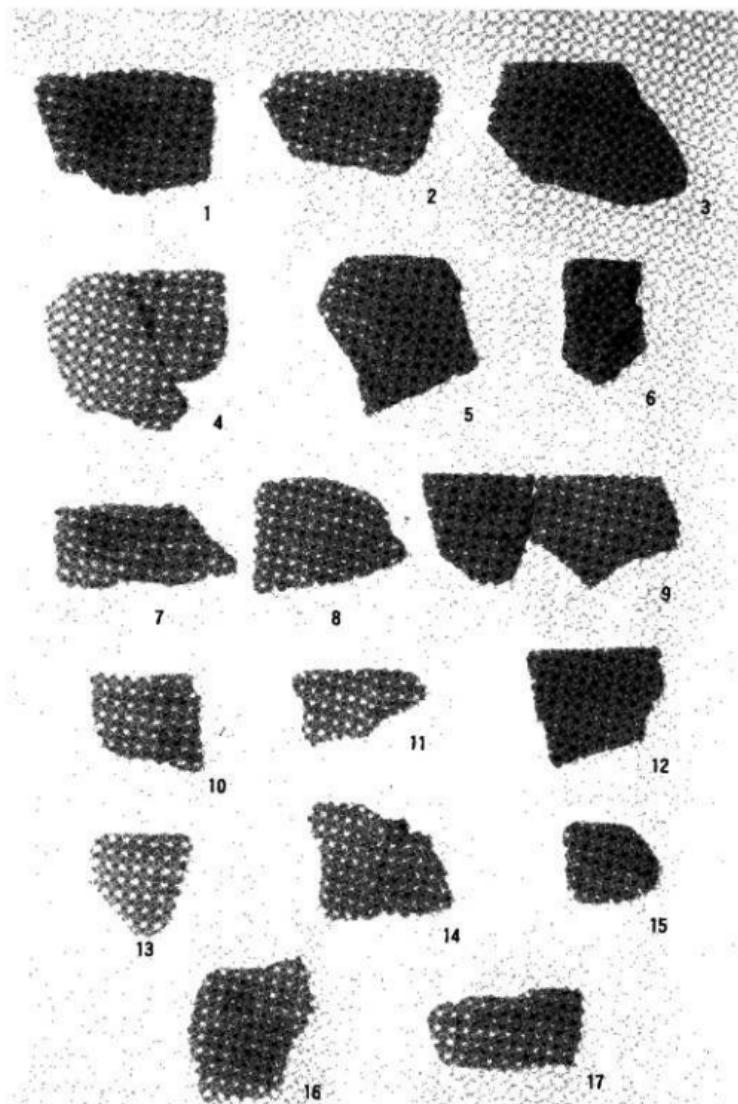
图版17 第3层出土土器



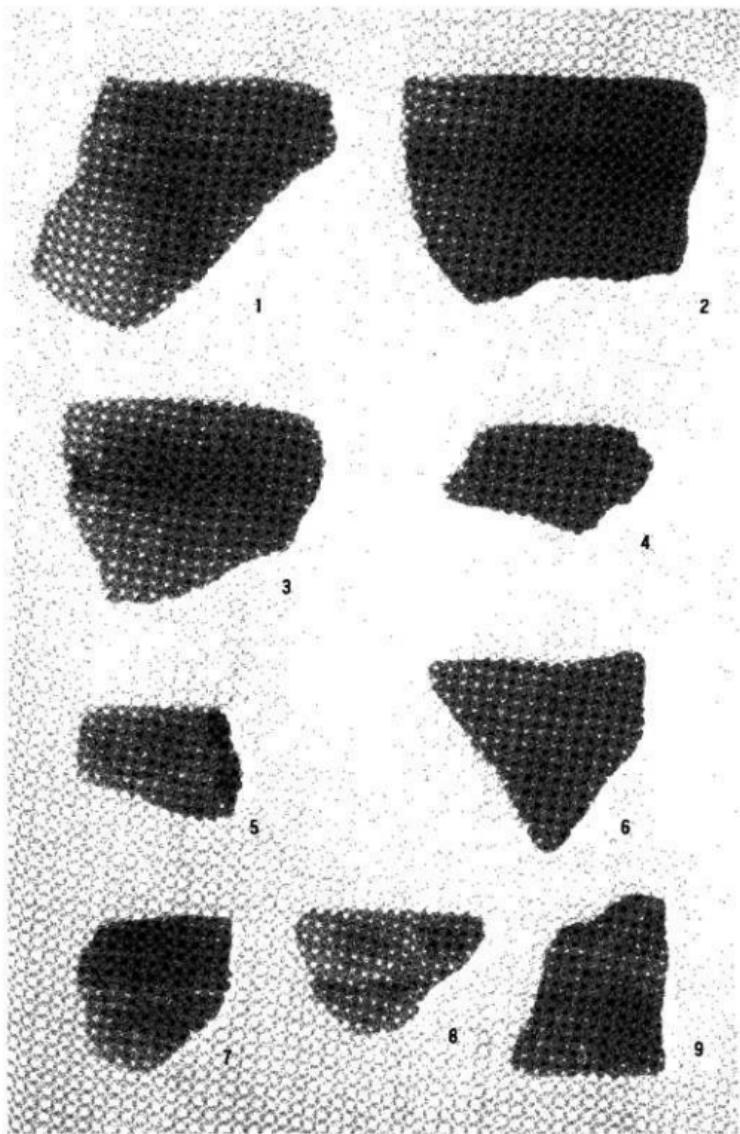
図版18 第3層出土土器



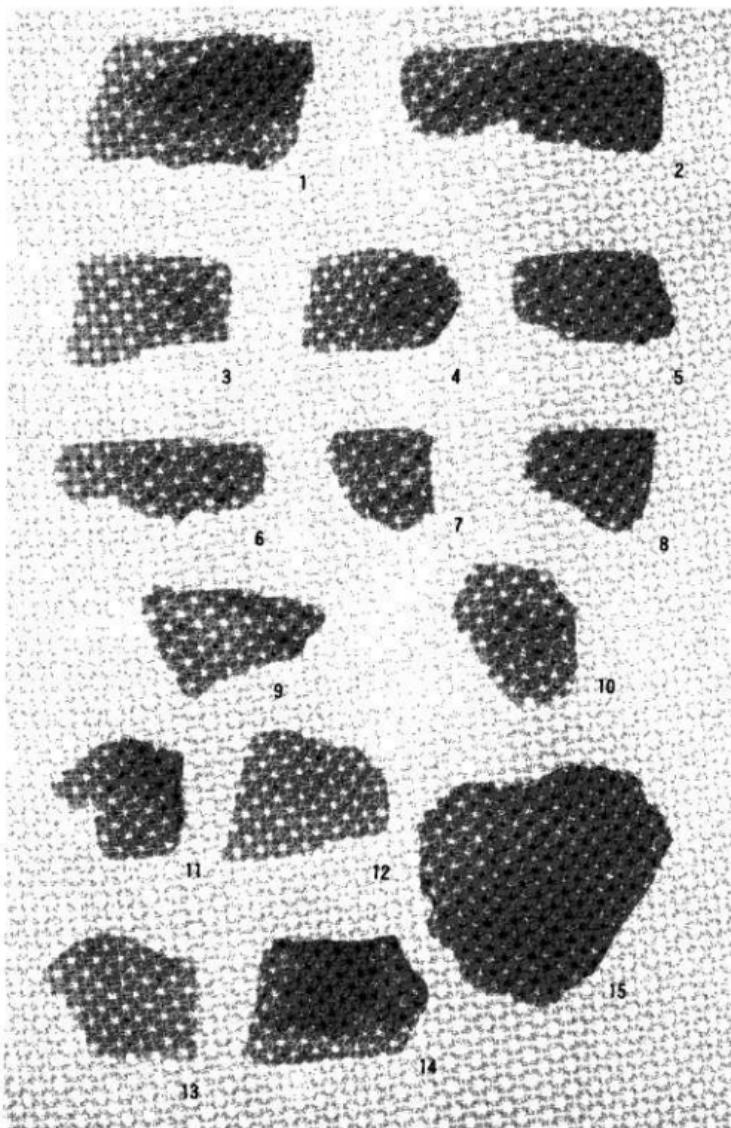
圖版19 第3層出土土器



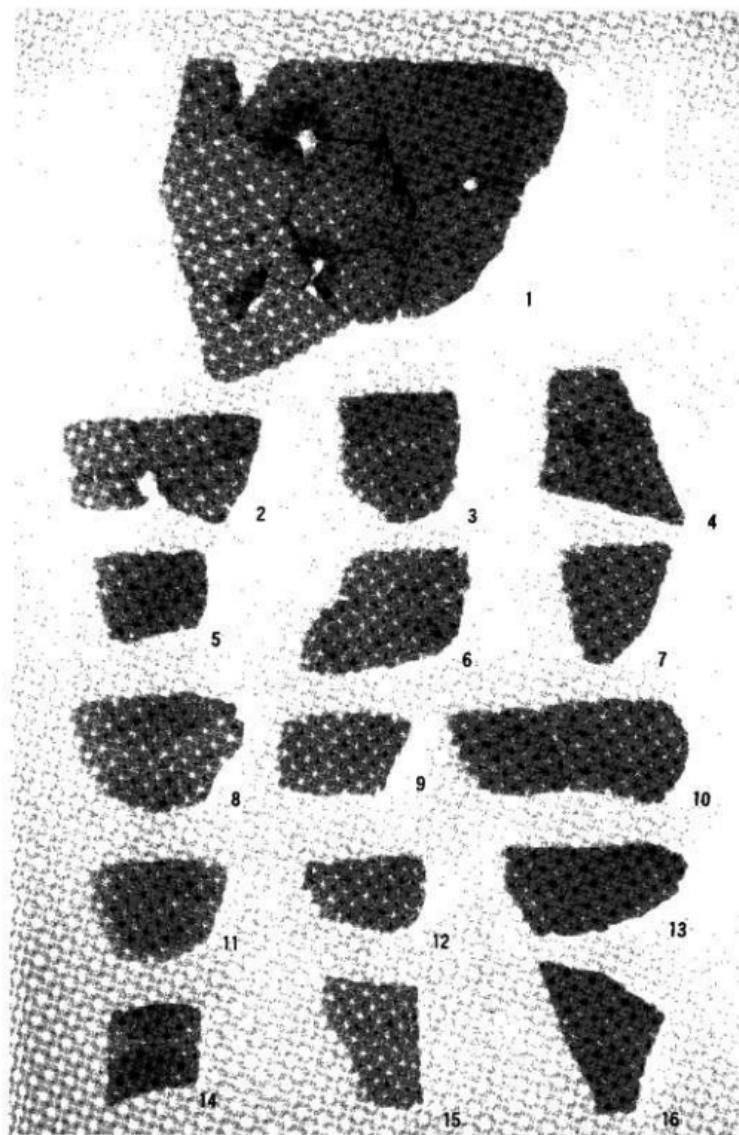
圖版20 第3層出土土器



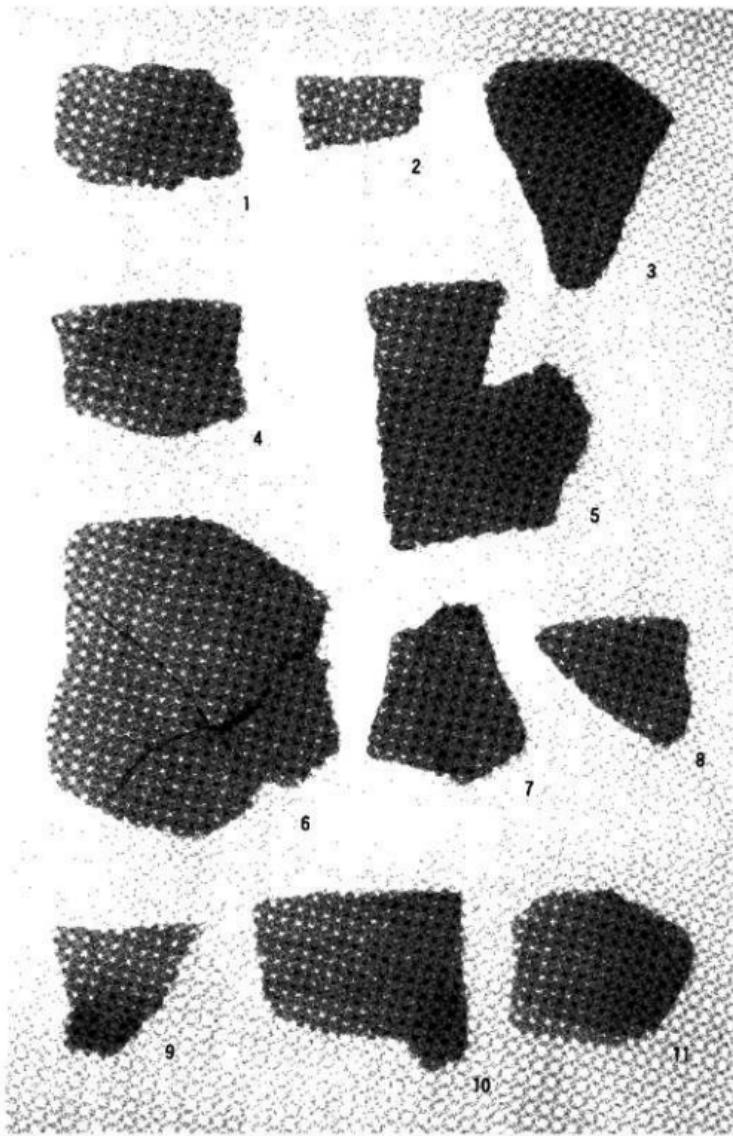
図版21 第3層出土土器



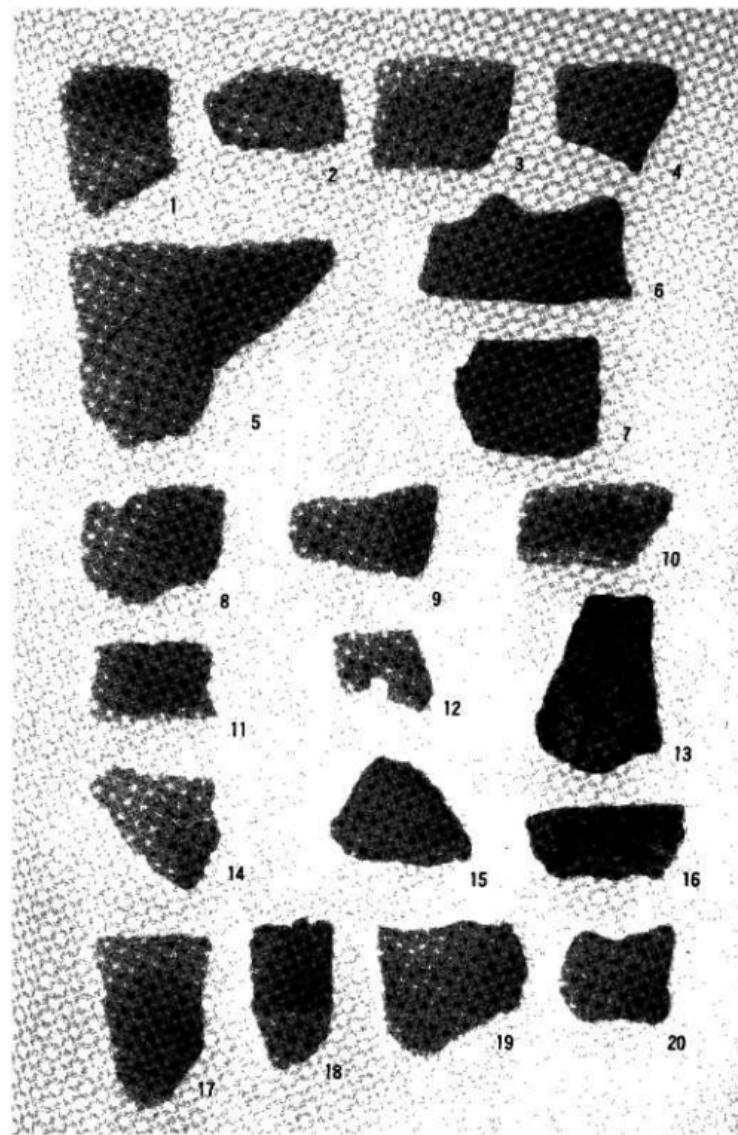
图版22 第3层出土土器



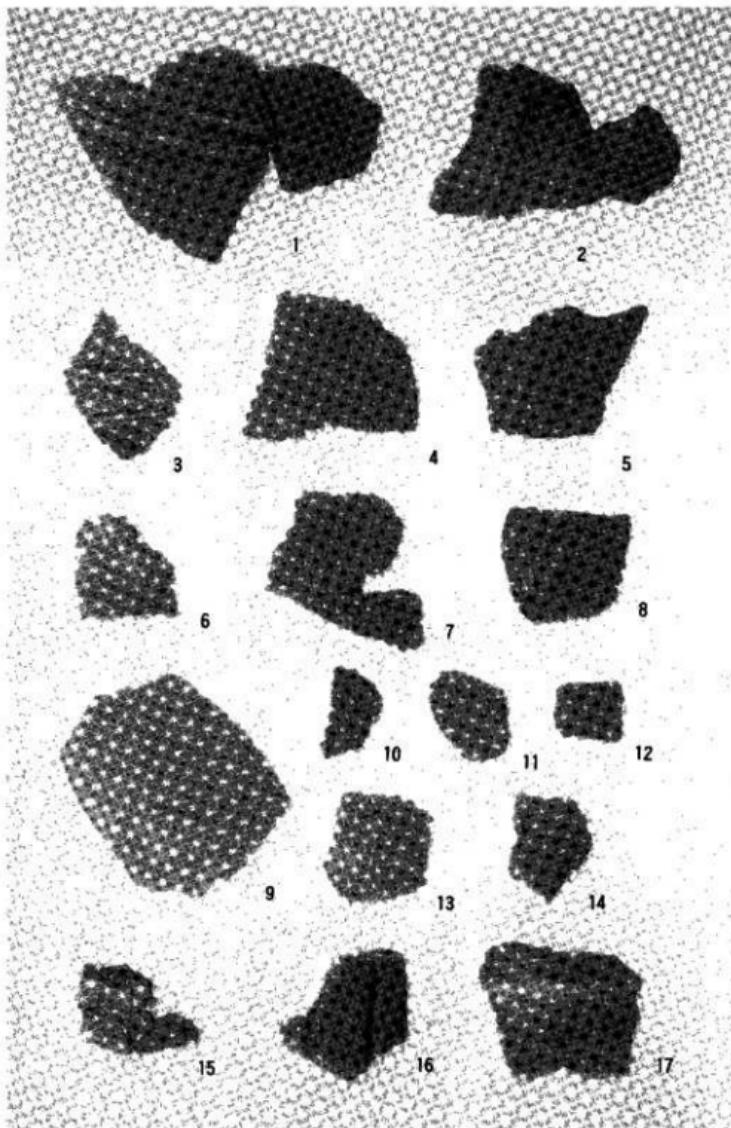
图版23 第3层出土土器



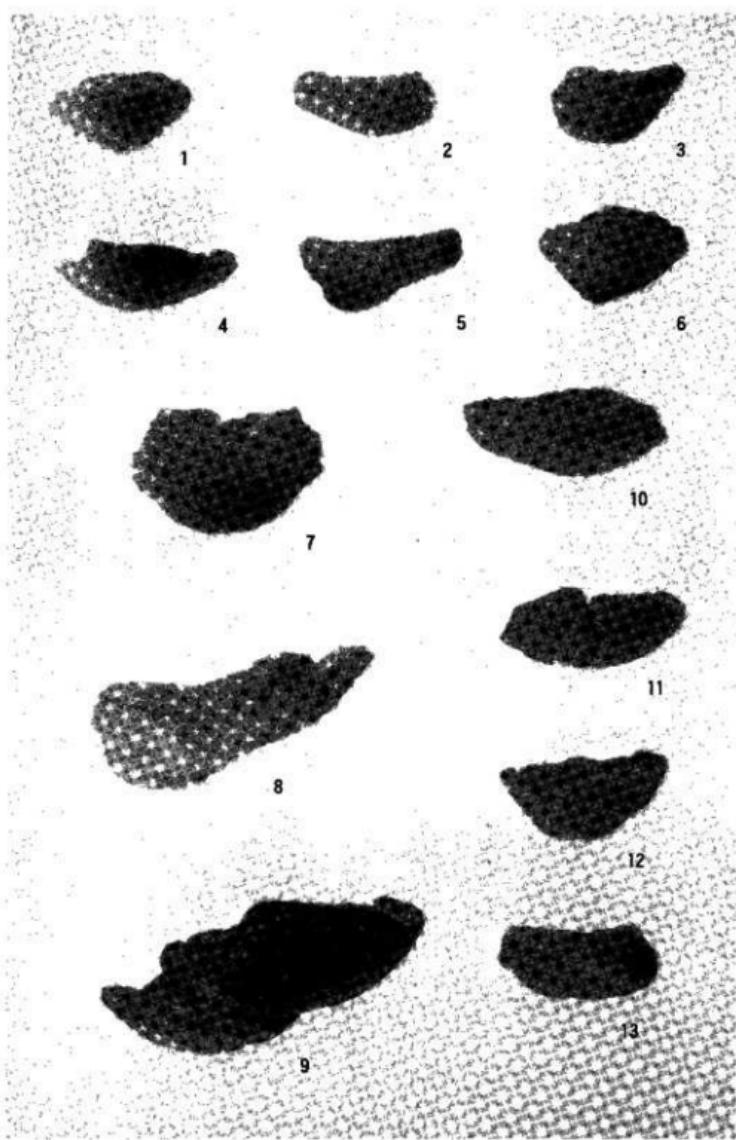
図版24 第3層出土土器



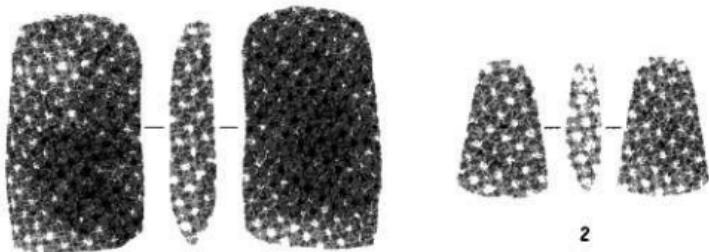
圖版25 第3層出土土器



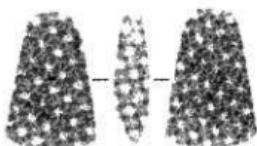
図版26 第3層出土土器



图版27 第3层出土土器



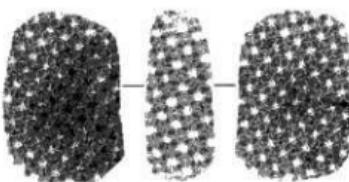
1



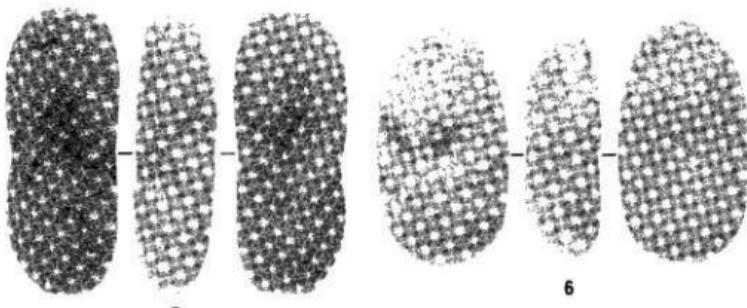
2



3



4

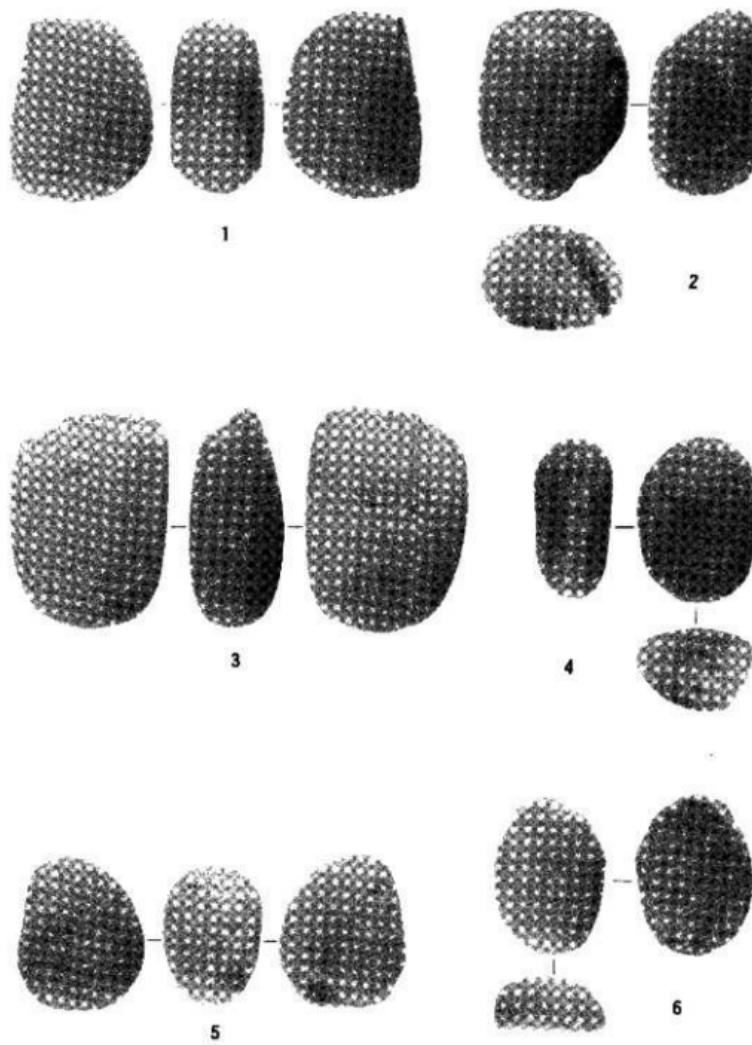


5

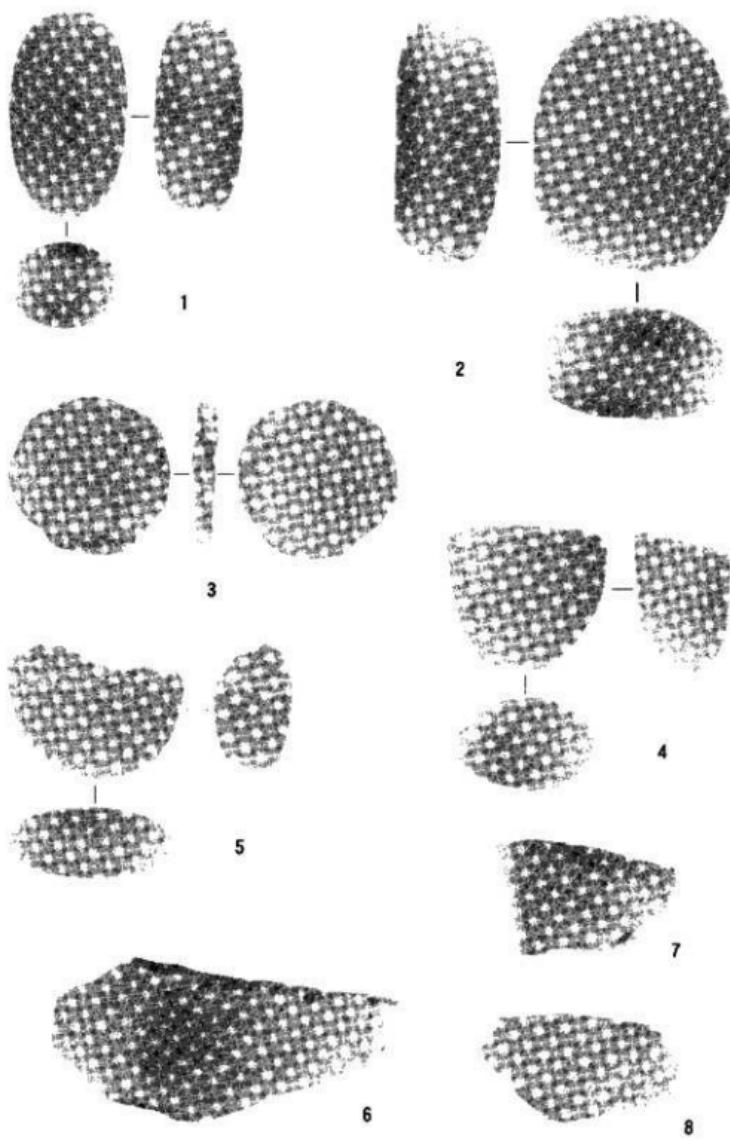


6

圖版28 石 器 (1)



図版29 石器 (2)



図版30 石器 (3)

沖縄県文化財調査報告書第93集

宇佐浜遺跡

発掘調査報告

1989年3月31日

編集 沖縄県教育庁文化課

発行 沖縄県教育委員会

那覇市旭町1番地

TEL.0988-66-2731

印刷 口二一印刷

浦添市宮城728

TEL.0988-77 3344
